第十八輯・第六號・昭和十年六月一日

大正六年九月十四日第三種郵便物認可 ・ 昭和十年五月二十五日印刷納本 ・ 昭和十年六月一日發行(每月一回一日發行)

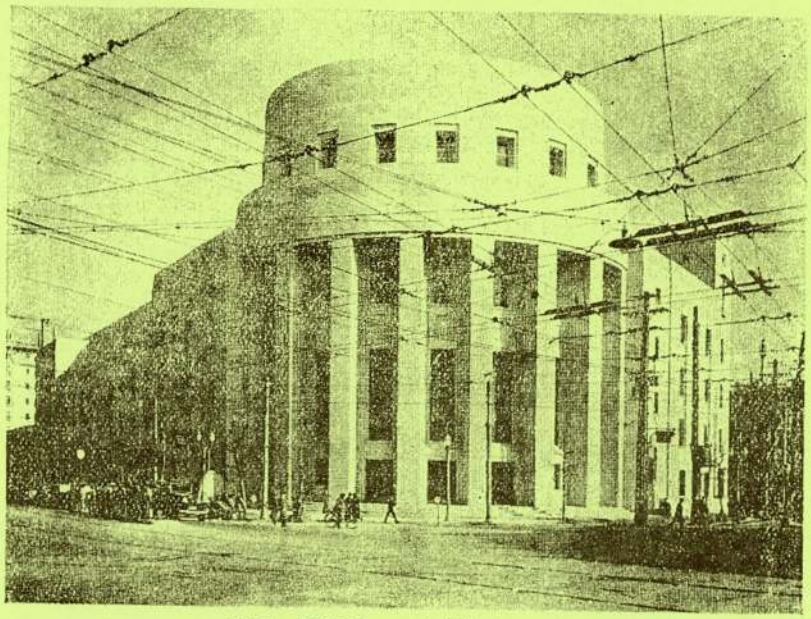
都市計畫

新建築研究

大阪株式取引所

京都・朝日會館

日本建築協會



寫眞ハ最近竣工ノ大阪株式取引所

弊店ハ 煖房工事 / 焼却爐 / ドアー 一式施工ノ光榮ニ浴セリ

設　計　長谷部竹腰建築事務所殿
施　工　大　林　組殿

三機工業株式會社大阪支店

大阪市北區中之島3丁目5番地（大阪三井ビル内）
電話土佐堀（44）8365(3) 1776. 3103
本　店　東京市麹町區有樂町（三信ビル内）
電話銀座（57）5140. 5941(9)
支　店　大連・名古屋・福岡
出張所　京城
派出員　新京・奉天・臺北・札幌・廣島
取扱店　三井物産株式會社各地支店出張所

（型錄贈呈）

〃建築學研究〃 最近二ケ年間内容目次

第 69 號

晝光照明測定圖表に就いて	伊東恒治
水平力分布に關して	瀧本義一
日本建築に現はれたる構造美	藤原義一
鐵骨構造新講(一)	棚橋諒
社會福利事業施設としてのHeimとその建築計畫に就いて (1)	澤島英太郎

第 70 號

建築架構の剛化に就いて	飯島猛夫
床の間に就いて	藤井厚二
日本封建社會に於ける建築生産	鈴木義孝
社會福利事業施設としてのHeimとその建築計畫に就いて (2)	澤島英太郎

第 71 號

基礎杭の耐力測定に關する疑點	竹腰健造
社會福利事業施設としてのHeimとその建築計畫に就いて (3)	澤島英太郎
鐵骨構造新講 (2)	棚橋諒
旅客停車場	吉田信武

資料·紹介

鐵筋コンクリート梁のスタラップの計算法	棚橋諒

第 72 號

鷹部屋博士の繰返し試索法の實用化に關する報告 (1)	棚橋諒 高橋慶夫
花肘木	天沼俊一

資料·紹介

傾斜·蹴上·踏面	横山尊雄
透水試驗に關するE. Suensonの報告	棚橋諒
歩道·階段·梯子	横山尊雄

第 73 號

材料の靱性による構造物の耐震的終極强度の高められに關して	棚橋諒
建築日本化の意義	藤原義一
方杖を有する架構の一解法	川上行敏
鷹部博士の繰返試索法の實用化に關する報告 (2)	棚橋諒 高橋慶夫

資料·紹介

暇と休養とに就いて	横山尊雄

第 74 號

パルテノン構圖論の展望 (1)	瀧澤眞弓
建築材料の光に對する反射率	伊東恒治

資料·紹介

各種型板硝子の室内晝光照度に及ぼす影響	太宰二郎
空襲に對する巴里防禦計畫案	森田慶一
都市の分散と防空	横山尊雄
好適な階段の構造とその實用的意義に就いての研究	横山尊雄

第 75 號

建築物の風荷重に關する新根據と設計風荷重	坂靜雄
パルテノン構圖論の展望 (2)	瀧澤眞弓
ペロポンネソスの旅 (1)	森田慶一
旅客停車場	吉田信武
視覺の生理光學的研究	太宰二郎

資料·紹介

正しく設備せよ	伊東恒治

第 76 號

鐵筋端碇着の效果に關する實驗	武内富雄
某建築の基礎工事進行中に逢着せる問題の處理につきて	竹腰健造
水平力を受くる高層架構の略算並びに近似計算につきて	棚橋諒
パルテノン構圖論展望 (3)	瀧澤眞弓
ペロポンネソスの旅 (2)	森田慶一
旅客停車場 (3)	吉田信武

建築と社會

第18輯第6號　昭和10年6月發行

新建築研究

大阪株式取引所・京都朝日會館

目　次

大阪株式取引所の設計計畫に就て……竹腰健造（25）
大阪株式取引所新市場の建物に就て……高橋榮治（27）
大株現場に於ける所感の二、三……作間日出生（33）
京都朝日會館……石川純一郎（35）
京都朝日會館の構造概說……青柳貞世（40）
大阪朝日新聞社京都支局の基礎工事に就て……芹生幹二（48）
〃大阪株式取引所〃の建築を語る……（52）
〃京都朝日會館〃の建築を語る……（64）

大阪株式取引所（寫眞）……（1）
京都朝日會館（寫眞）……（11）
國際新建築……（75）

收穫……天沼俊一（89）
アスファルトに關する研究會梗概……材料委員會（119）

會報……（120）



1. 外　観

大阪の經濟中心地である北濱２丁目堺筋と北濱との交叉點に位置する、株式取引所の市場として規模に於て、設備に於て東洋一を目指したものである

西北隅を正面として玄關を設け大柱を廻らし上に楕圓形の高塔を現時建築法規で許さるまで高めた・市場の屋根は外部からは割に低く見えるが間口の廣さが形を整へてゐる

鐵骨鐵筋混凝土造で外部總花崗石張・外觀は纖細華麗を避けて壯重雄大を念として意匠されてゐる・1 階出入口廻りは總てホワイト・ブロンズ製の豪華なものである、堺筋側の西南隅の一廓は北濱郵便局に使用されてゐる

建坪 1,022 坪、延坪 3,924 坪、外に吹抜 1,772 坪、工期 1 年11ヶ月を要した

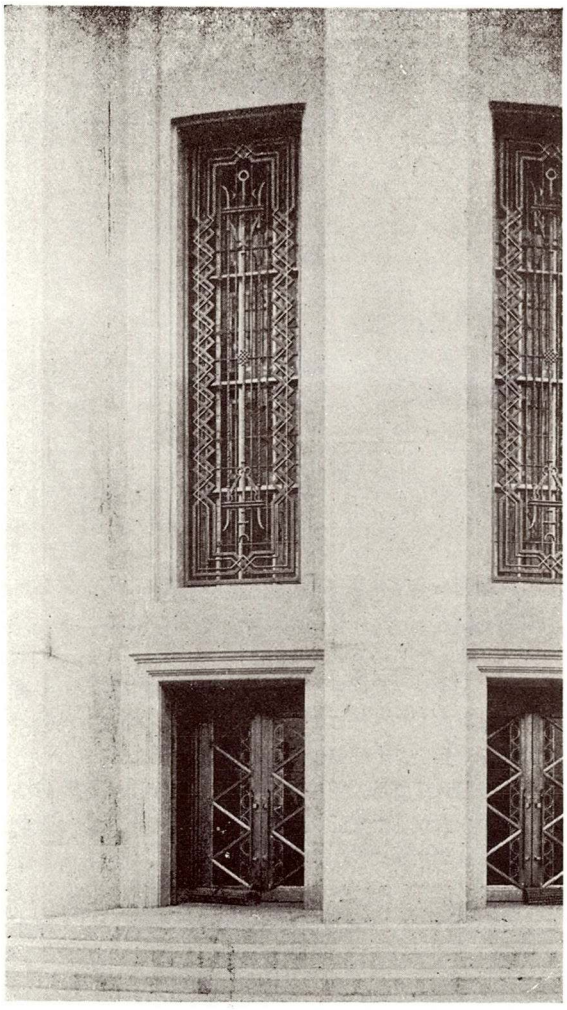
大阪株式取引所

設計施工　長谷部竹腰建築事務所　大林組



2. 竣工式當日夜景

白晳の偉容が暗黑の闇に北浜の一角に巍然として浮ぶ・正面の大柱、廣い横帶、楕圓の高塔、市場を蔽ふ本屋・經濟都市の大阪に一段と重みを加へる・殊に夜間中の島公園あたりからは流れる水に映つる貌は水都としても相應しい風景である



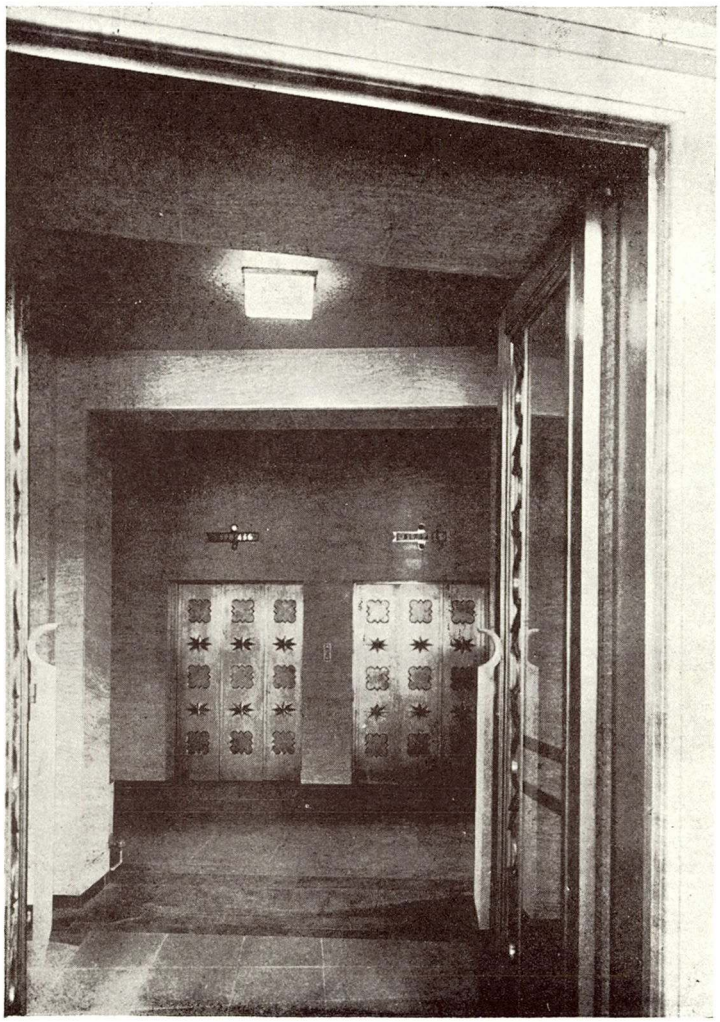
3. 正面玄關入口

上部には趣の異つた類のない面格子がありその内のサツシュには簡素なステインドグラスが嵌入されてある・下部の入口には外側に寫眞には見えぬが彫刻入りの引戸があつてその内側に硝子扉がある・兩方共にホワイト・ブロンズ製の豪壯なもので花崗石の太柱に對應してその存在を誇つてゐる



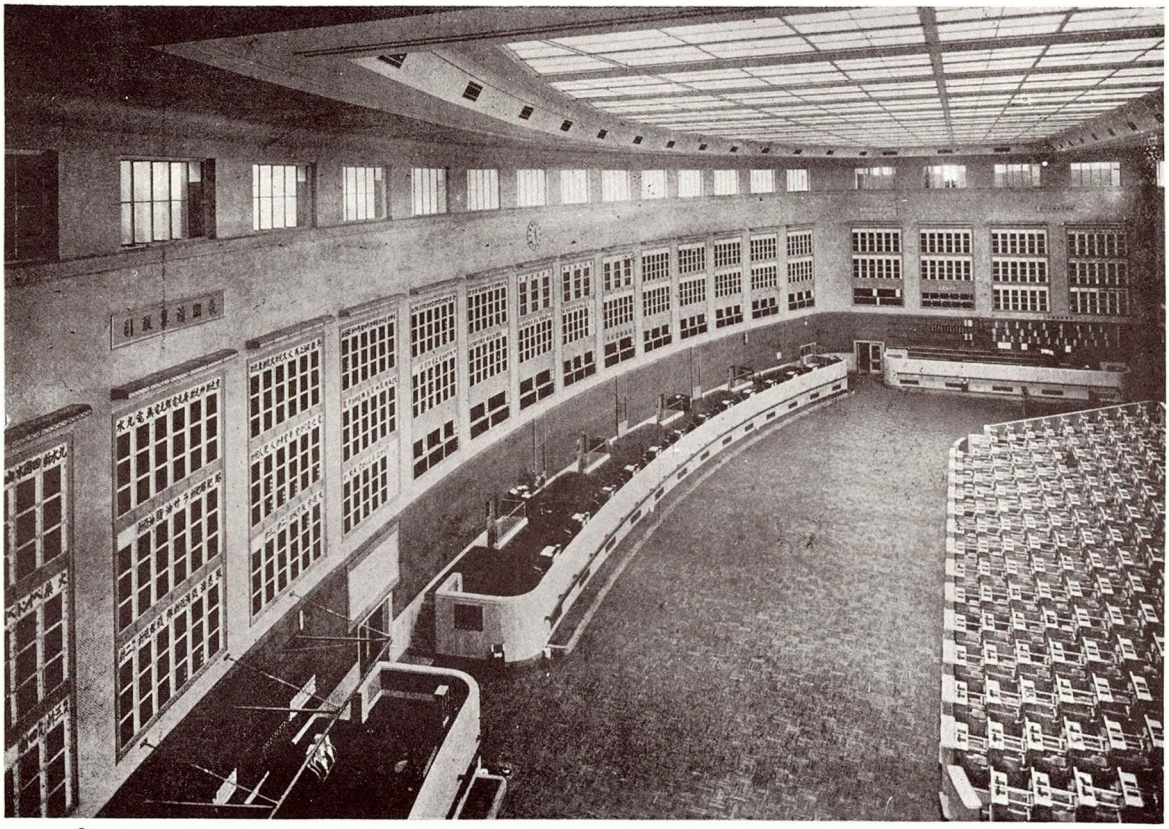
4, 正面大玄關廣間

正面扉を排して入れば小判形の廣間がある床には大理石の色異りのもので幾何模様を描いてある・壁には外國産の珍らしい銀茶色の波紋のある美しい大理石を貼つてある



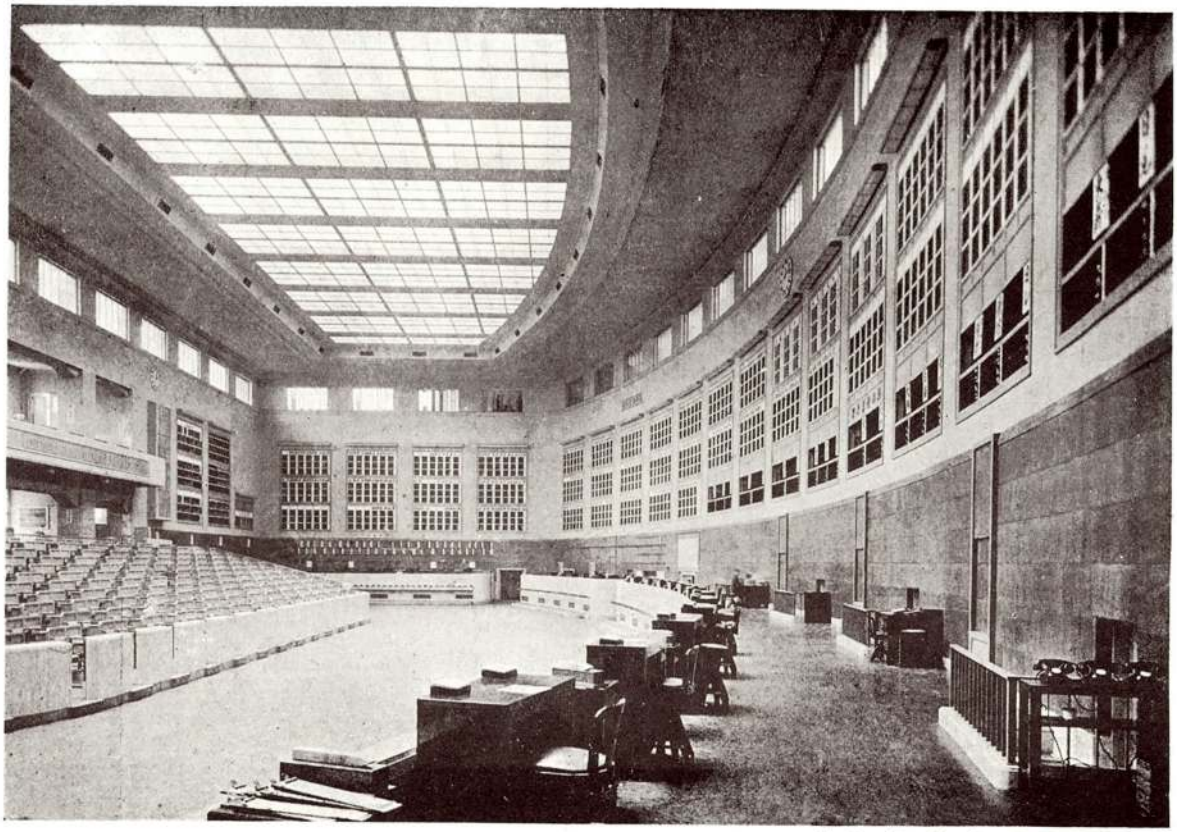
5, 昇降機廣間を望む

玄關廣間から昇降機廣間を眺むだ寫眞であつて、昇降機の扉はホロイト・ブロレズにアートブロンズを嵌れたるもの、壁は琉球勝連産大理石貼



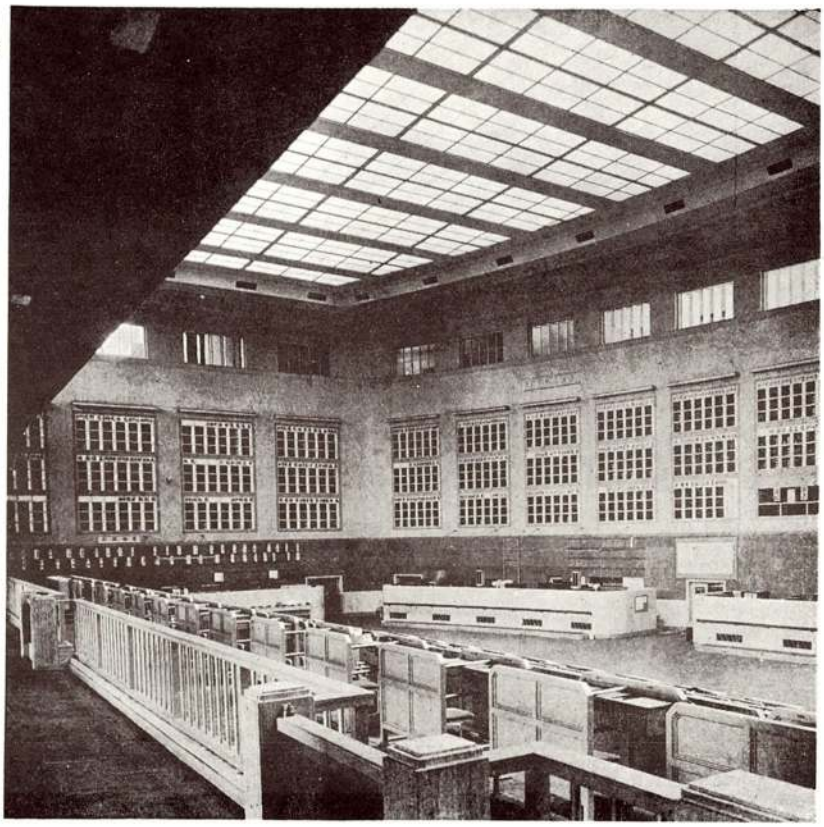
6. 市 場 內 部　（その 1）

立會場である、此は此の建物の中心であり、北濱街の心臟である
6 圖は實物取引高場の上部より見下せるもの、突當りが國債高場・その手前の横に長いのが短期取引高場、その前が長期取引高場になつてゐる・その上の方には各夫々の公定相場表示盤がある・右に電話席の一部が見える。7 圖は短期高場の端から前圖と反對の側から眺たもの正面が實物取引高場である・高場の上の机や擊柝盤等がうかがわれる
8 圖は電話席の後部の參觀席から市場內部を望むだもの
採光は主として天井櫛形窓と上部 4 階の 5 連窓とよりしてゐる・壁は音響を考慮に高梁穀を塗附けてある、高場後腰壁はオークベニア張、高場の前壁及電話席前横の壁は伊太利產トラバーチン、立會場の床はさくら材のブロック貼
冷煖房は櫛形の周圍の梁の横にある穴より吹下して高場下と電話席横から吸ふ
立會の機能、採光、及音響は苦心の甲斐あつて成功してゐる



7. 市 場 内 部 （その2）

8. 市 場 内 部
（その 3 ）



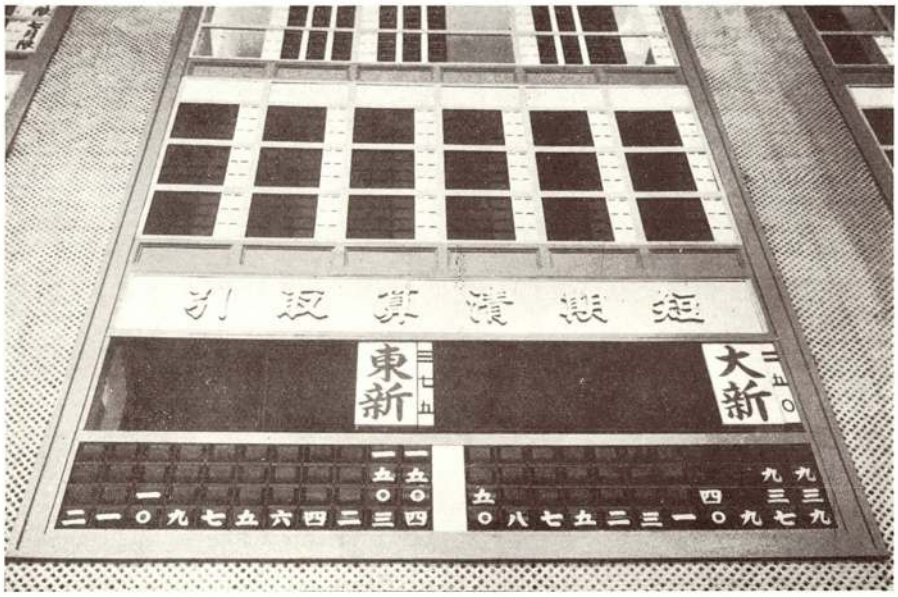


9. 電 話 席

市場機能の耳と口とに該當する・この電話は取引人の店との直通電話で相場報知、店からの注文等に使用される・個數502座席ある・3階にも擴張豫定の場所がある・電話席の後が參觀席になつてゐる

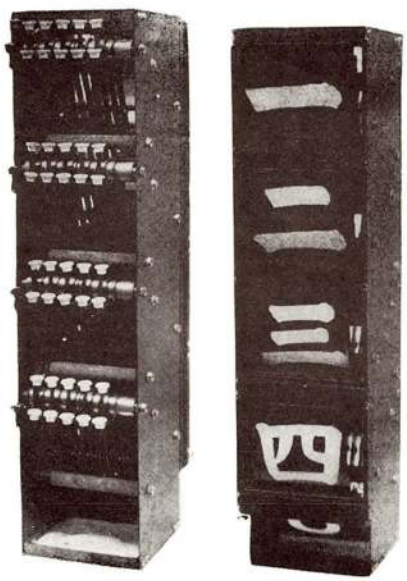
10. 相 場 表 示 場

下の方が短期取引、上の方が長期取引未だ銘柄も出てないが今では盛に利用されてゐる



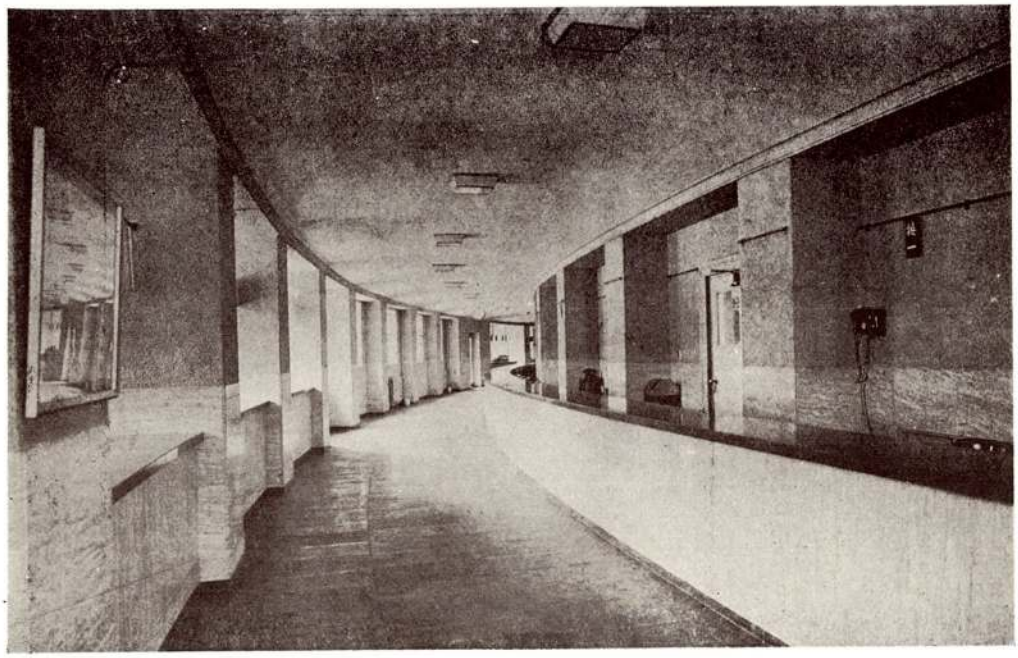


12. 押 釦 式 表 示 機



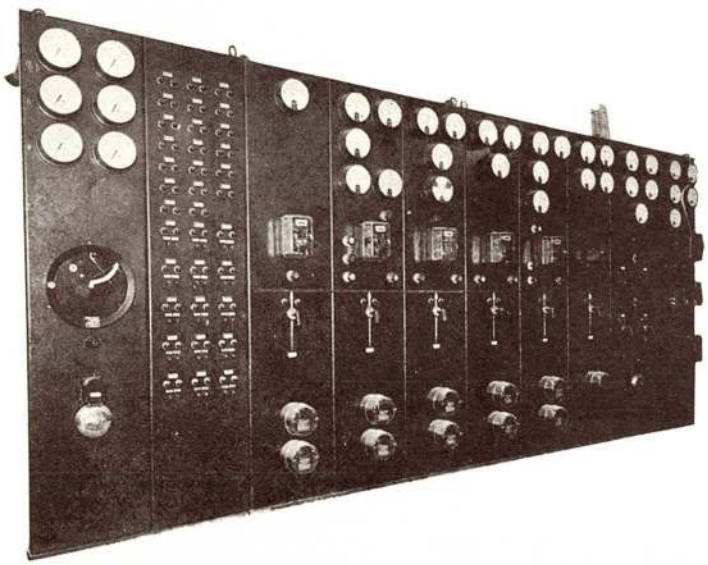
11. 相場表示機操作場

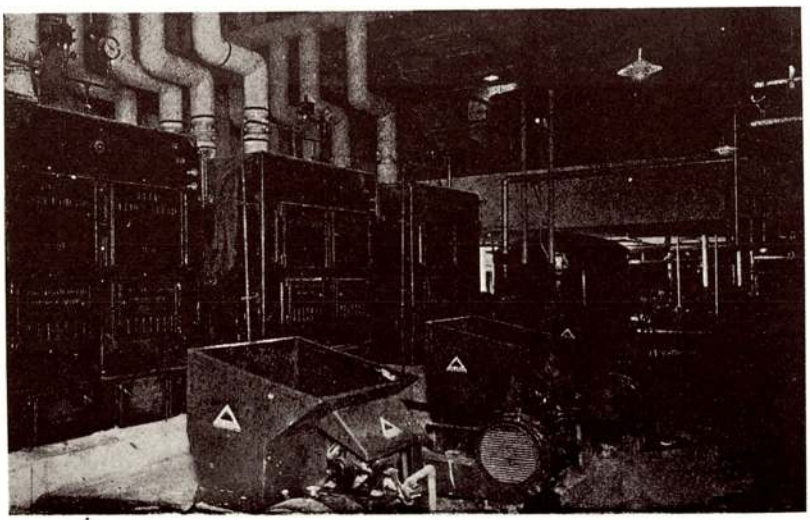
取引所では俗に札場といつてゐる・表示機には押釦式と差込式と二種あつて前者はタイプライタ式のキーを押して數字板を出す裝置で左の寫眞でその大要を想像し得やう短期取引の表示に用ひる、後者はカードを枠に差込むもの簡單にして要を得てゐる長期取引の表示に用ひる・共に後部より操作する・尙他に前面にカードを入れる式のものもある(實物取引の表示に使用してゐる)操作場は柵で仕切られた鐵骨造3段のギラレリーより成る



13. 判 取 場

立會場の外廊であつて、天井は丸みを帶び高粱穀塗ペンキ仕上、腰は琉球勝連産大理石、床は北米産花崗石に琉球産のとを混じて張る・立會場にて成立した取引を高場上にて所員の速記したものと取引員の帳簿と照合判取をなす場所で全部に亘り兩側にカウンターをめぐらす





14—15

下圖は地下2階の機械室を東方より、西に向つての寫眞で手前のが煖房ボイラーその向ふの中2階は豫備用及機械修理用に充てゝある・その下は各種ポンプ類及濾過タンクを納め、その奥は冷房關係に充ててある冷凍機が一寸見えてゐる・上圖は電氣室にあるワン・マン・コントロールのパネルである

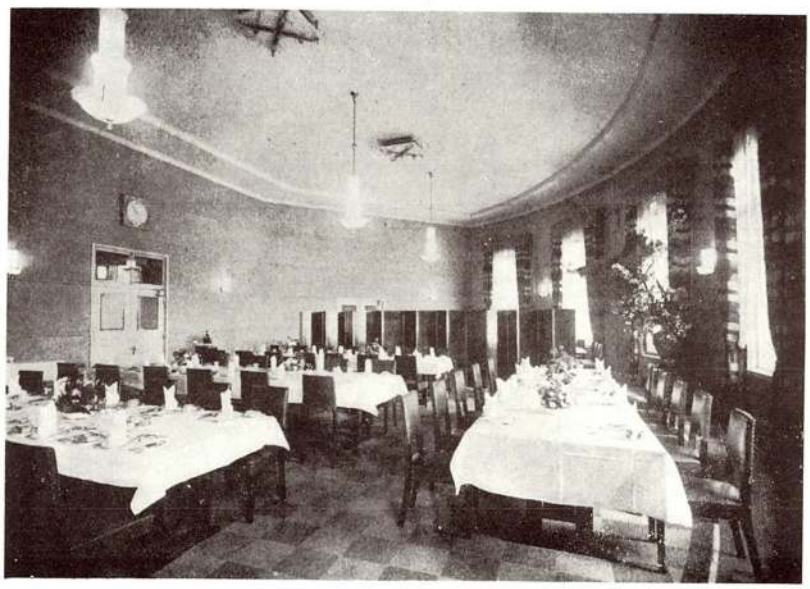


16. 貴賓室

第4階西南隅に位置してL型の部屋で控室と手洗所が附隨してゐる・壁には濱洲胡桃ベニアをアンテナ型に張る・床は寄木張、卓子椅子はウオルナット製

17. 會議室

第4階西北隅にあつて扇型をなしてゐる・壁は布張紐模様入、床はリノタイルを張る

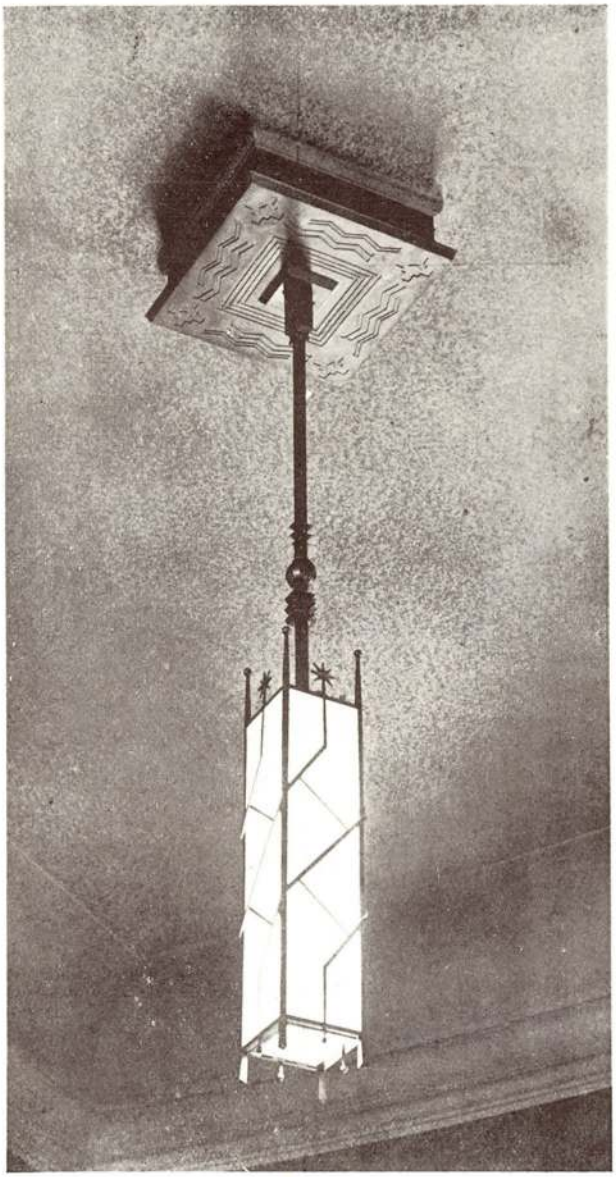




18



19



20

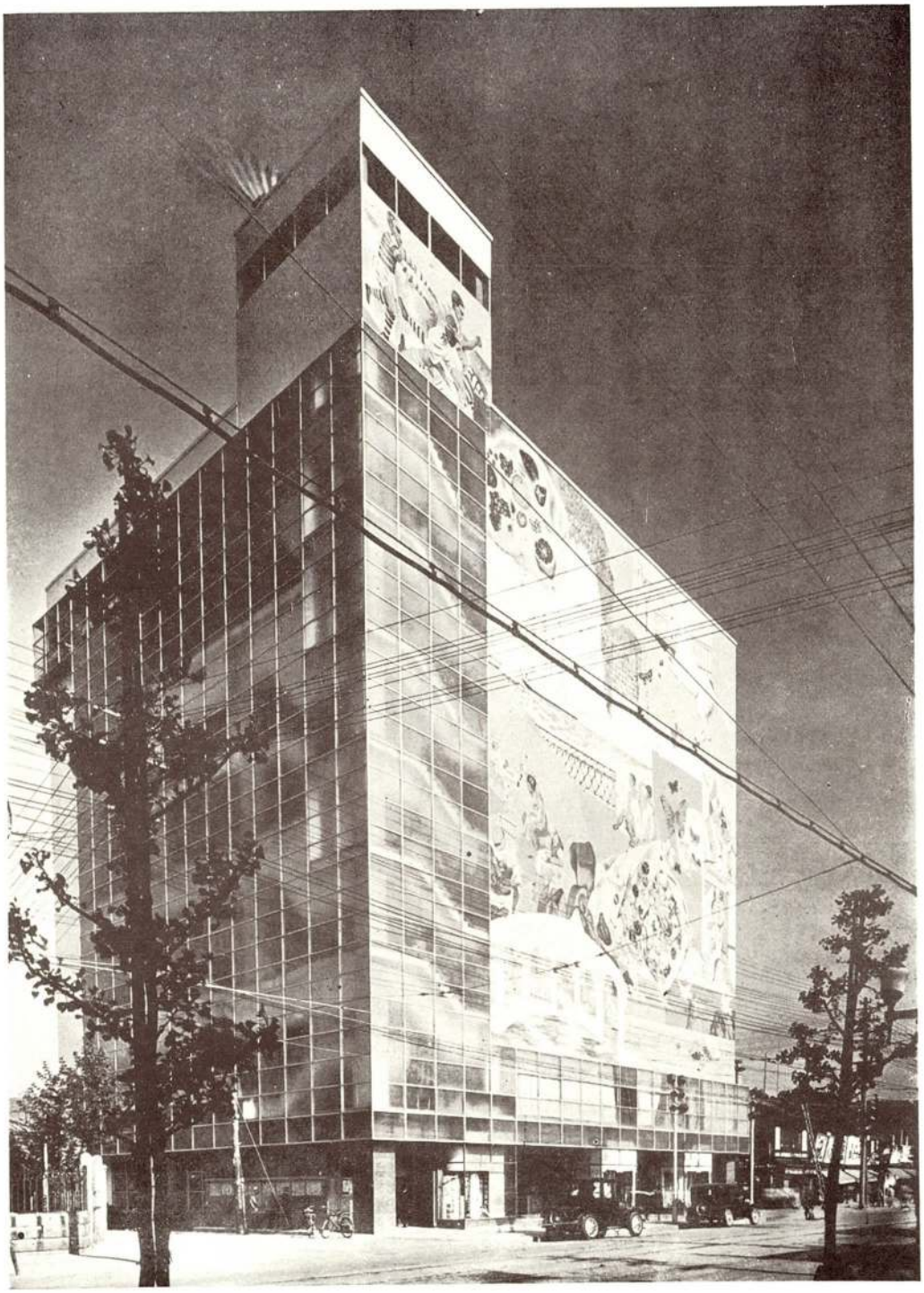
19~20, 照明器具

18圖は貴賓室の電燈硝子製

19圖は第6階大集會室の電燈に援冷房のパン・アウトレツトが附きあるもの

20圖第4階會議室の電燈及パン・アウトレツト

設計 長谷部竹腰建築事務所
施工 大林組



1. 外　　觀　　（西北隅より見る）

京都朝日會館（大阪朝日新聞社京都支局）

設計　石川純一郎氏
施工　竹中工務店



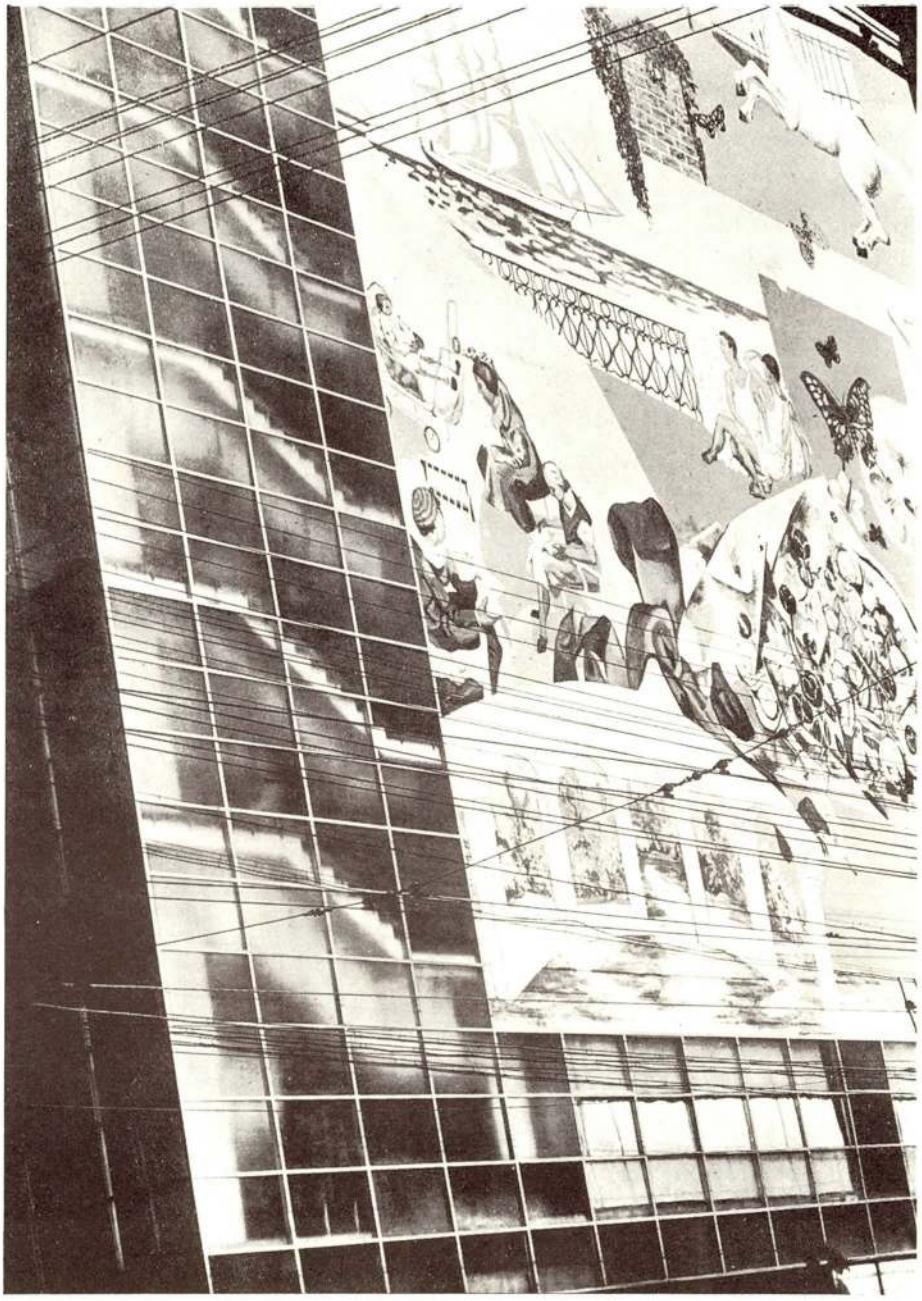
2. 外　觀　（西南隅より見る）

西面（河原町正面）及び南面の一部、壁畫面はモルタル仕上・その他の壁面1寸角白色モザイクタイル貼・ガラス壁面は3尺×5尺ワイヤーガラス嵌込スチールサッシュ・第1階廻り壁面はニッケルクローム銅板貼



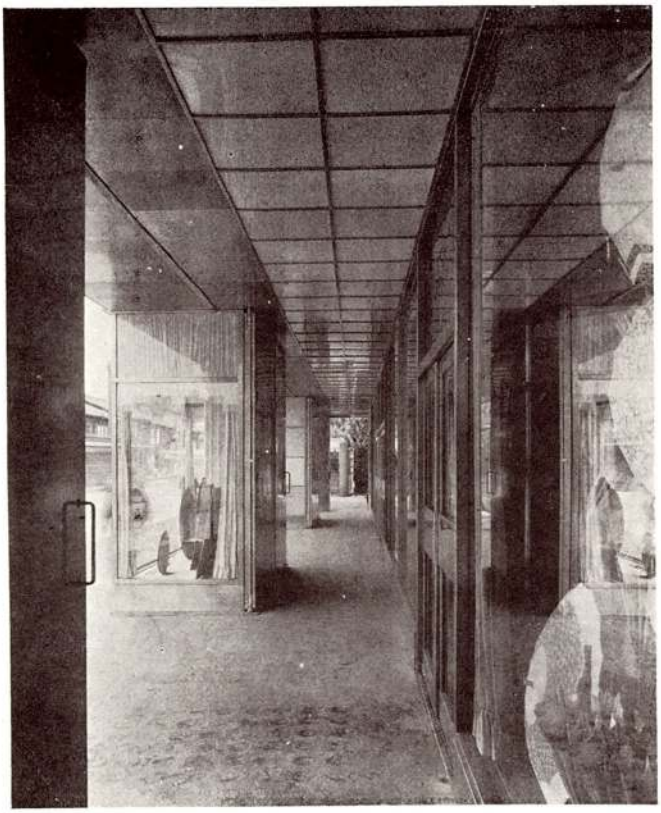
3. 屋上展望

正面塔屋は消防署用望樓・下部はエレベーター機械室屋根はガラス屋根・遙かに北山の連峰が並ぶ



4. 外 觀 詳 細

西北隅より見る・硝子壁面を透して階段室が見える・壁畵面はモルタル仕上の上にアルカリ止めを施し特製ペンキにて壁畵を描く・畵家は獨立美術展覽會の林重義、川口軌外、伊藤廉の三氏

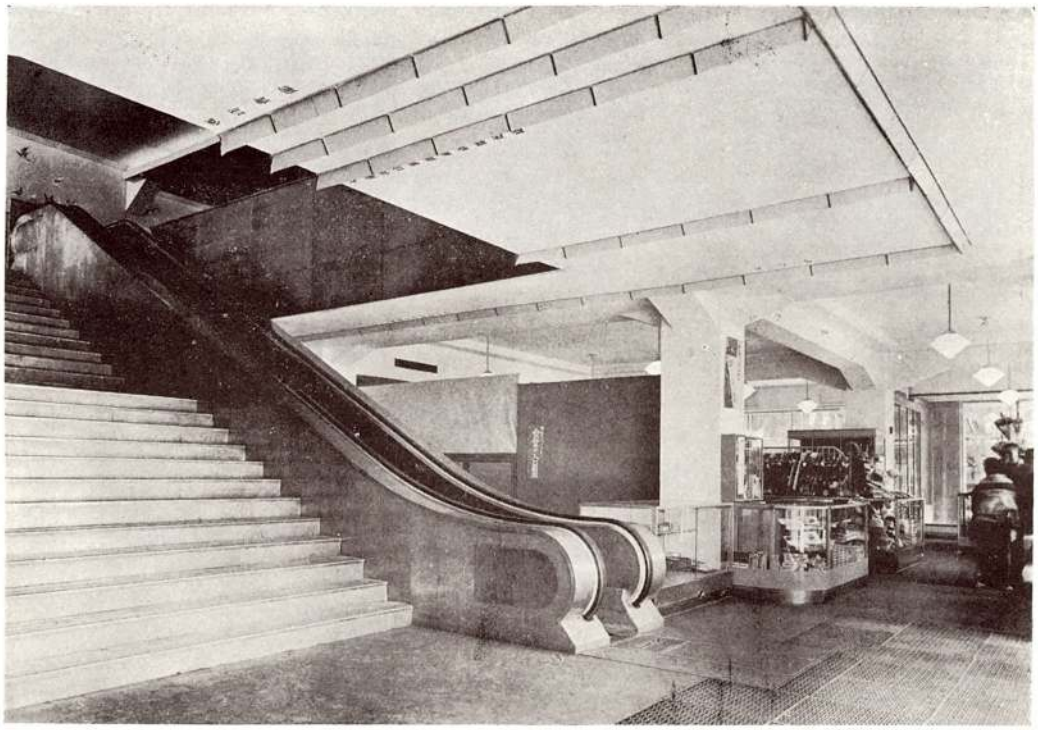


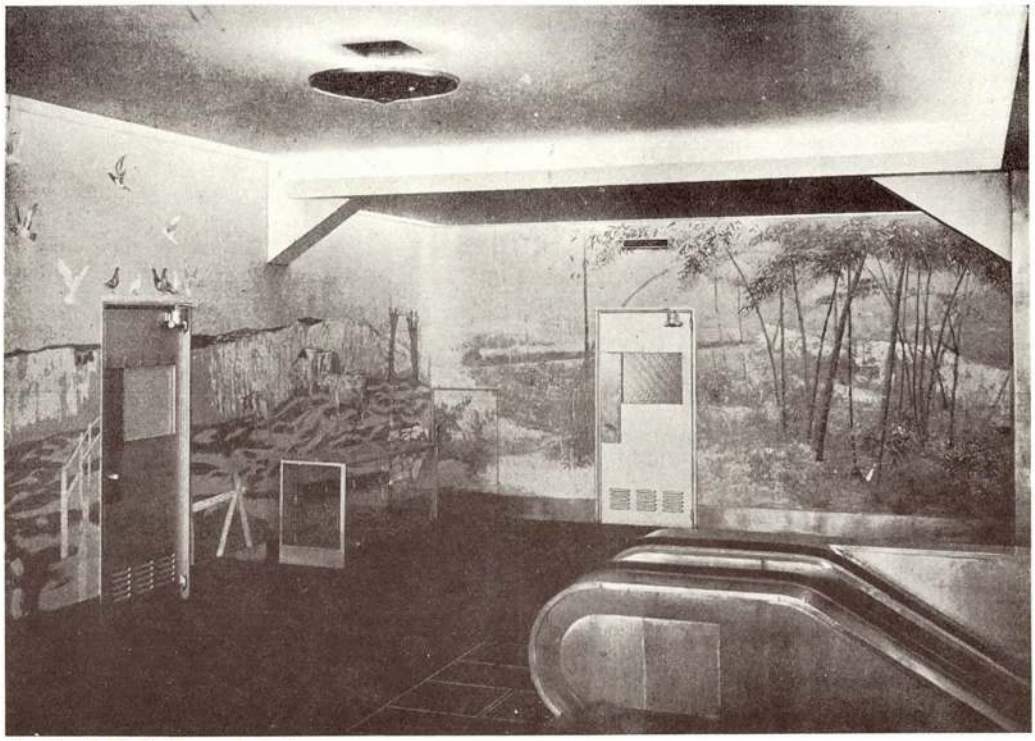
5. 庇下歩廊

河原町正面に於て1階壁面を3m後退せしめた・自然上階を支へる5本の獨立柱によつて〝庇下歩廊〟の形が生じた・5本の獨立柱の内中央3本はショーケースに利用した寫眞左の部分に並んで見える・右方の大型プレートグラス嵌込の面は專門大店の爲のショーウキンドー・天井は照明用硝子天井その他の部分はニツケルベニア板貼・床人造石研出仕上、全部にプリズムガラスを入れて地下室への採光を豊かにした

6. 玄關內部

巾14尺の正面大階段及びエスカレーターによつて2階バーラーに直ちに導かれる・階段踏面は上止溝付ホワイトブロンズ板貼、蹴込、手摺側壁及び一般壁面はニツケルクローム鋼板貼・床は一部靴泥拭用眞鍮製グリル敷、他は青色リノタイル敷・天井プラスター仕上ペンキ塗・照明器具はV型連續器具・寫眞右後方ショーケースの並ぶ所は專門大店陳列場





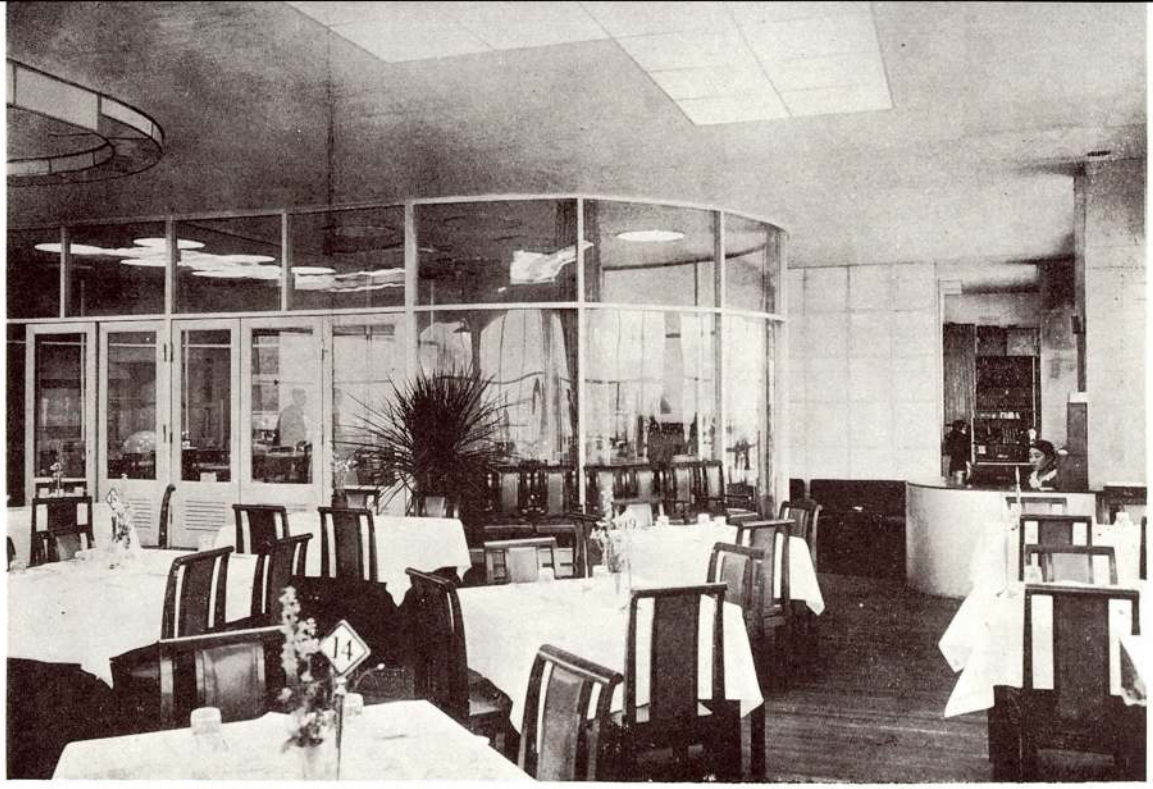
⬆ 7. 2階パーラー　その 1

エスカレーター下り口よりパーラー東南隅を見る・壁面はベニヤ板張の上にカンバス貼りとし壁畫を描く，正面壁畫は林重義氏作 ''竹ヤ蔓ヒ赤鳥'' を描いた日本畫的技巧のもの，左方の壁は伊藤廉氏作 ''高原''・二個の扉は化粧洗面室への出入口・床は青綠色ジヤスペ文様リノリユーム3尺×3尺貼合せ・壁畫面は天井内に埋蔵せる間接照明燈によつて照出せしむ・天井はプラスター仕上，その適當なる部分には葉型を利用して間接照明燈を設く・天井中央の円型金網盤は空氣調整装置用出口のパン・これは間接照明器具に使用してある

⬇ 8. 2階パーラー　その 2

パーラー東北隅より中央大階段，エスカレーターを越えてその西南隅を見る・獨立柱階段手摺壁及び一部壁巾木はニツケルクローム鋼板貼・向ふにソーダファウンテンのカウンターが見える・その右側の扉は新聞社通信室への出入口



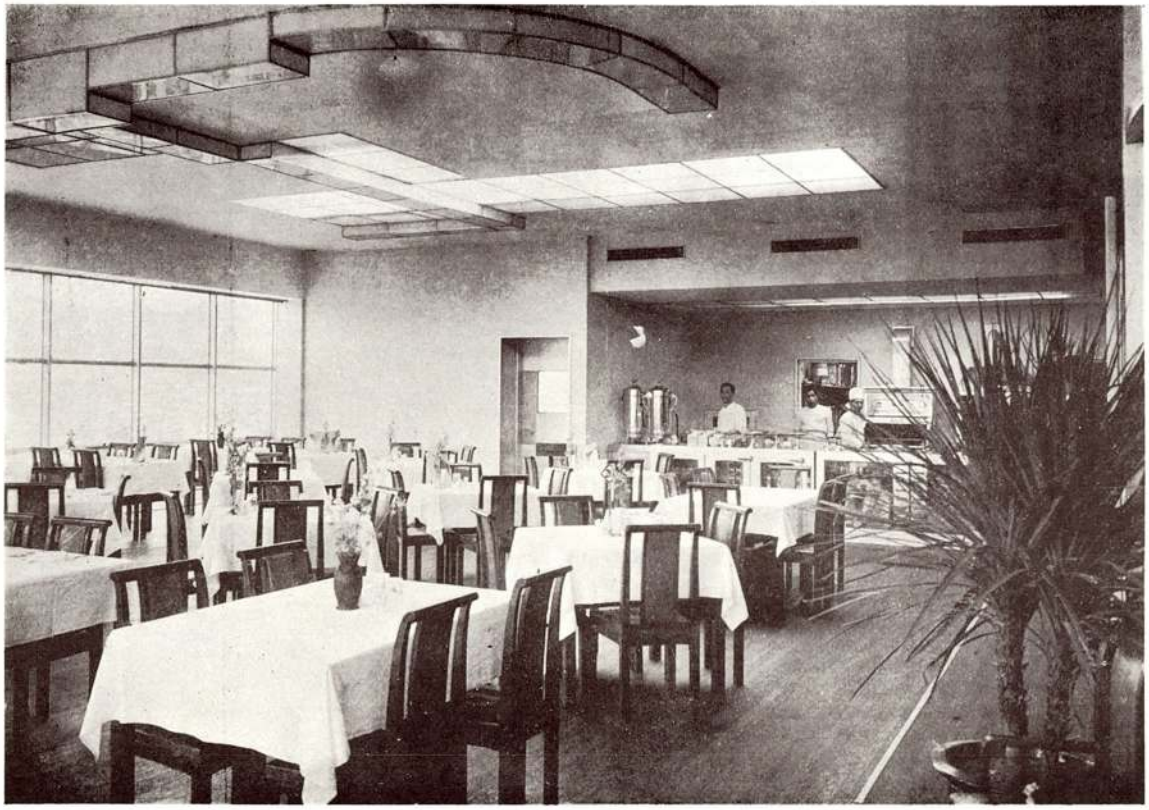


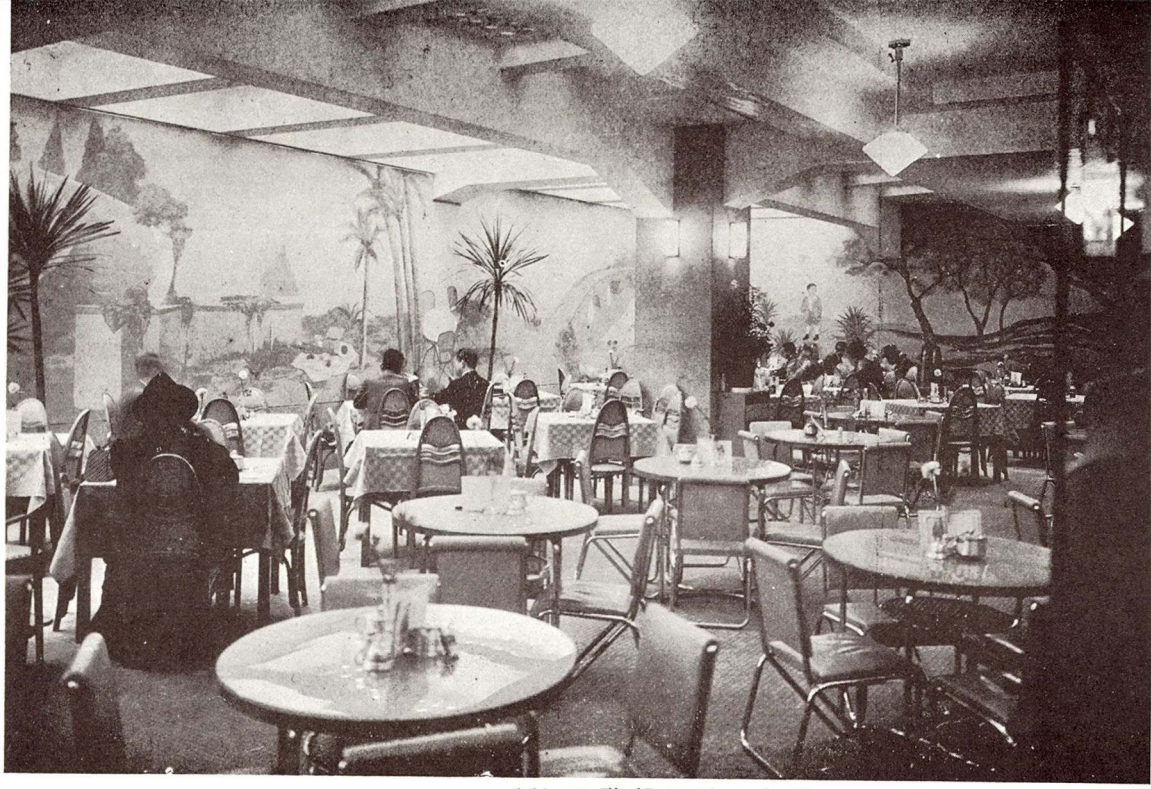
9. 食堂アラスカ（6 階） その 1

西北隅より食堂東南隅を見る・床檜材化粧床・天井和風漆紙(漉紙に青色素絹貼付) 2.5尺×2.5尺貼合せ・独立柱はステンレススチール貼・正面に見える半円形ガラス張の部分は食堂別室，衝子は腐蝕及びサンドブラスト文様

10. 食堂アラスカ（6 階） その 2

西北隅より食堂東南隅を見る・窩窪な方大型窓，プロテツクスガラス嵌込，東山及北山に續く山嶺水明の風光一望の下に展開されてゐる・天井照明光籠・桟子櫻材製 宋色ネナメル塗張



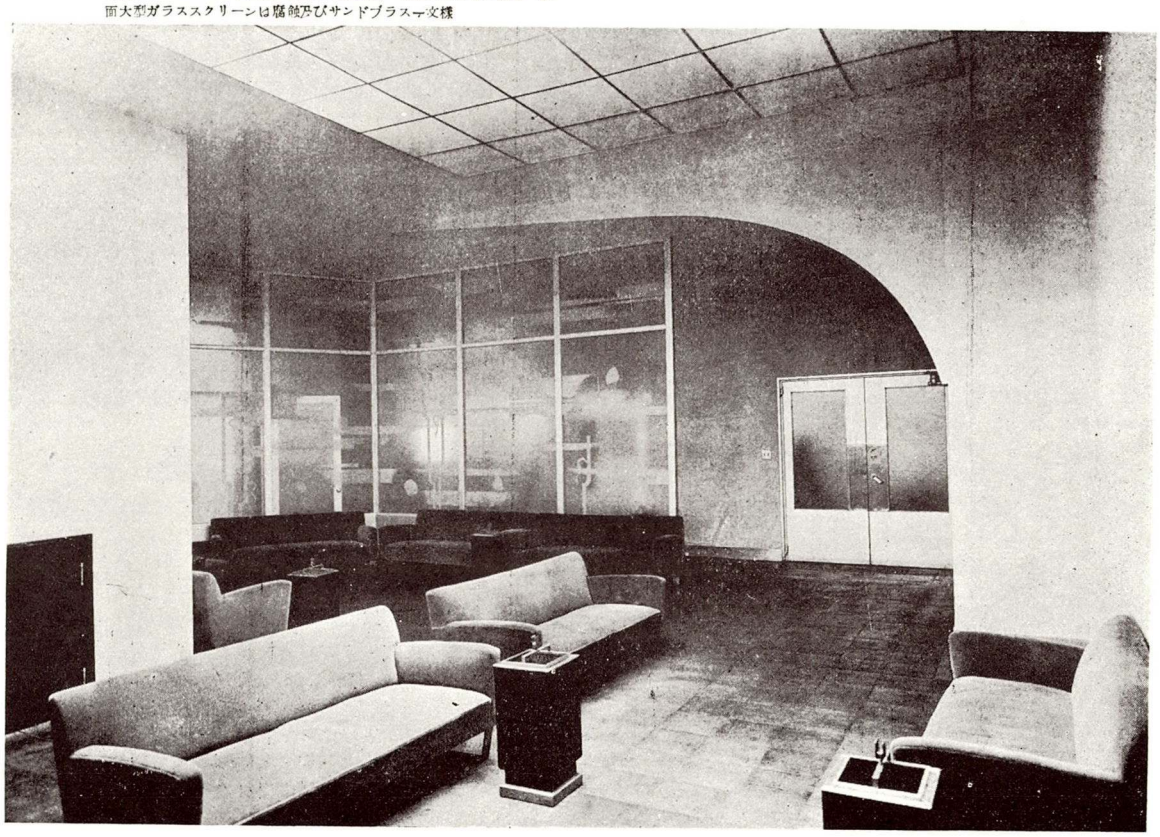


11. 地階朝日ビル食堂

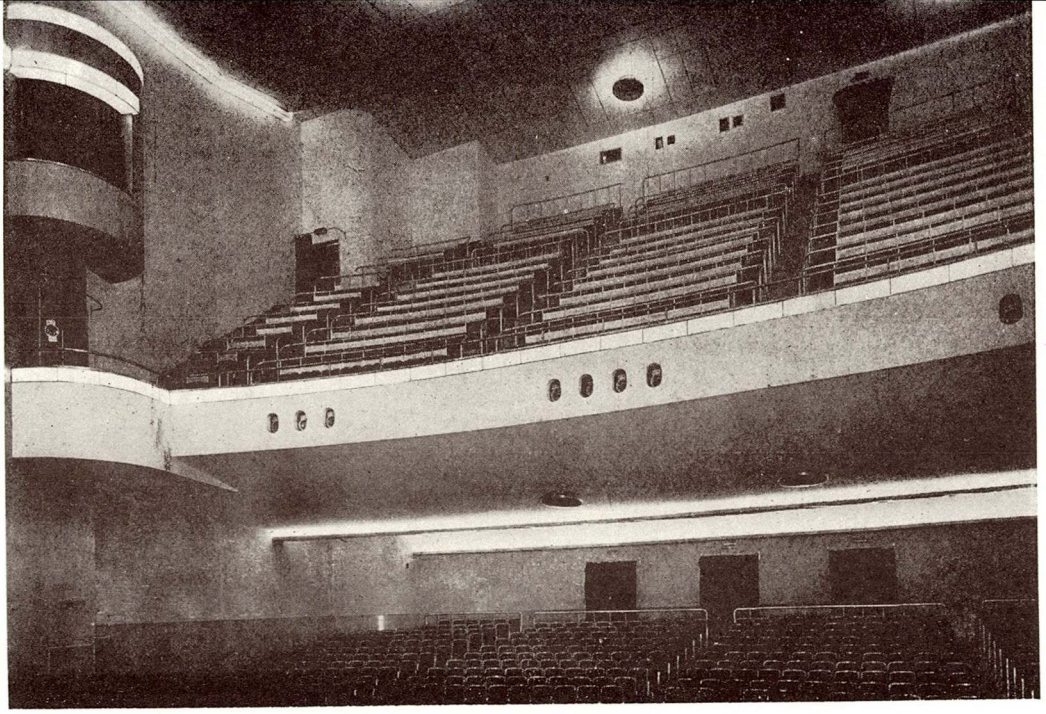
床淡緑色モザイクタイル貼・天井プラスターペンキ塗・壁(窓貫正面の部分)はカンバス貼壁画を描く・その他の壁及び腰立杜はテラゾーブロック貼・椅子前方パイプ椅子象牙色ラツカー革貼，後方曲木ローズ色ラツカー革貼・天井にはプリズムグラス嵌込人造上より採光す

12. 6階パーラー

公演場の為めの休憩室・床青色リノタイル貼・壁モルタル仕上の上に麻布貼ステンシルペンキ仕上・天井和風壁紙貼一部照明用ガラス天井・正面大型ガラススクリーンは腐蝕及びサンドブラスト文様

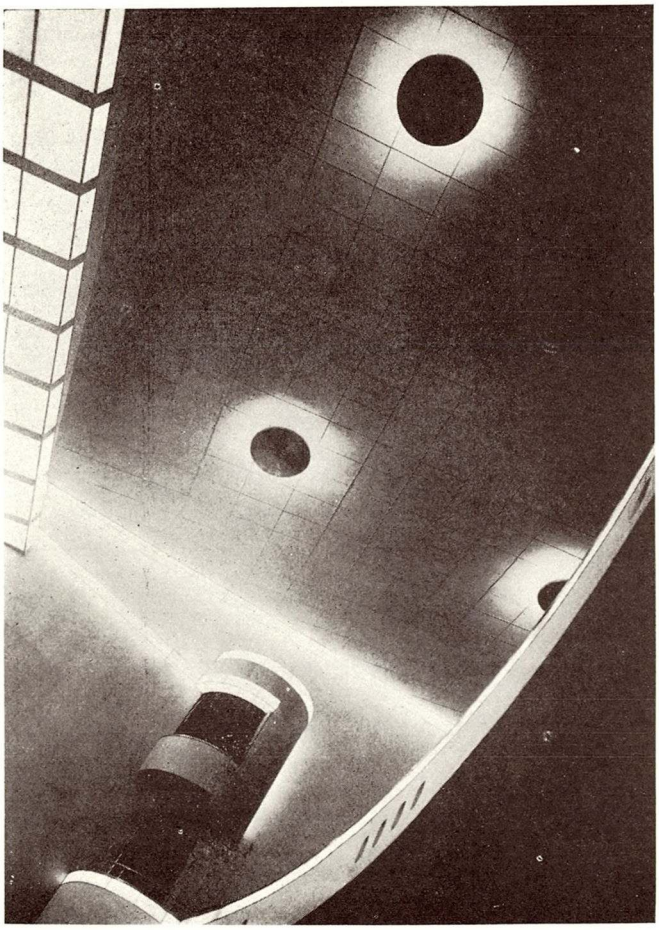


設計　石川純一郎氏
施工　竹中工務店



13. 公演場（第3～5階） その 1

舞臺より觀覽席を見る・天井フジテックス2尺×3尺貼銀色目地・壁舞臺に近き部分樺材大型ベニヤ板貼、後方プラスターペンキ塗・椅子暗朱色モケット貼・ギヤレリー下天井間接照明・大天井蛇腹、舞臺上部及びギヤレリー鼻光築・各天井の空氣調整用吹出し口のパンは間接照明器として兼用す・左方の突出半圓形の室はスポット室・最後壁の小開孔は映寫室窓及びスポット用窓・ギヤレリー鼻梢間小孔は固定プロデエクター・舞臺照明はボーダーライト3列、サスペンションライト、フットライト、サイドプロジエクター・發聲映畫設備はスーパーシンプレックス映寫機及びRCA フオトフオン發聲裝置・場内中繼放送の便を期しラジオ中繼室を設く・收容人員、階下700席、階上500席、補助席共1,500

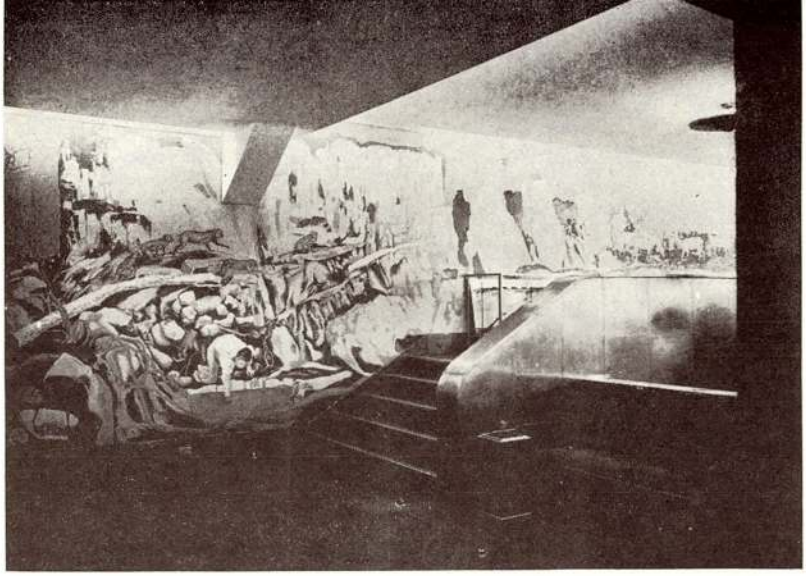


14. 公演場（第3～5階） その 2

天井仰觀・大天井及びギヤレリー天井の一部(右下部)が見える・左下部大型光築はプロセニアム上部照明・正面壁は樺材ベニヤ板羽目・半圓形突出はスポット室・天井圓形板は空氣調整裝置の空氣吹出口のパン兼間接照明器

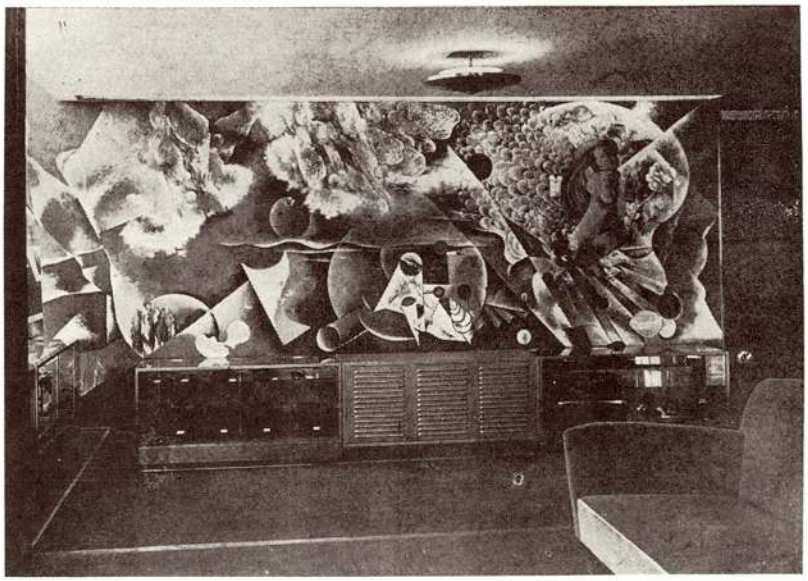
15. 2 階パーラー壁畵

高10尺巾 37.3尺・伊藤廉氏作・〃人間とラフな自然〃とを描いたもので、この面と相對する壁面には同じ作者の〃高原〃があつて好個の對稱をなしてゐる



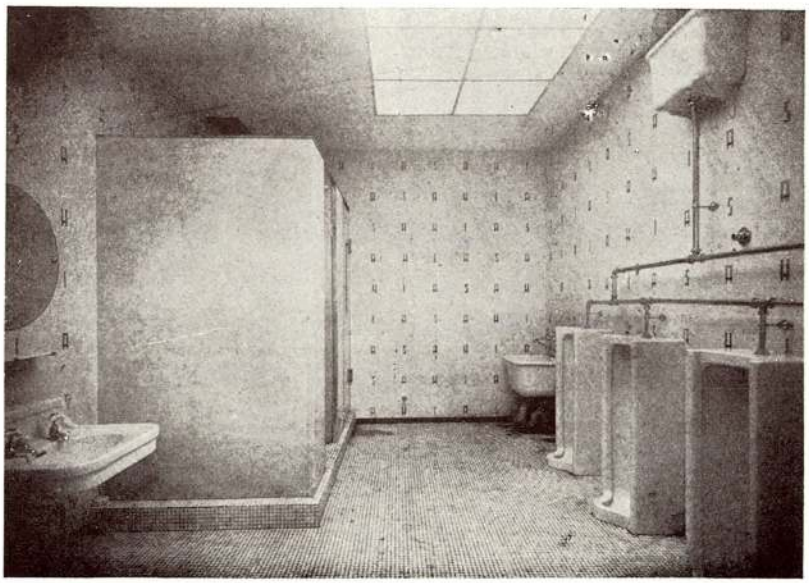
16. 2 階パーラー壁畵

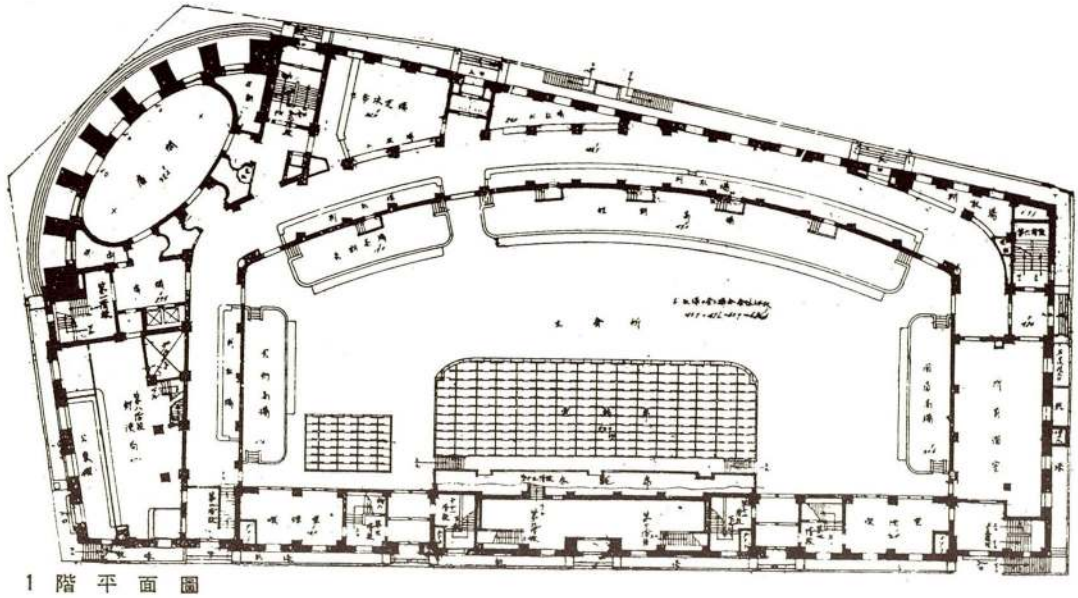
高 10.4尺巾 22.2尺・川口軌外氏作・ギリシヤ神話によるヴィーナスの誕生を聯想させる海の神秘をシンボルした多彩なる少女と貝殻の構成



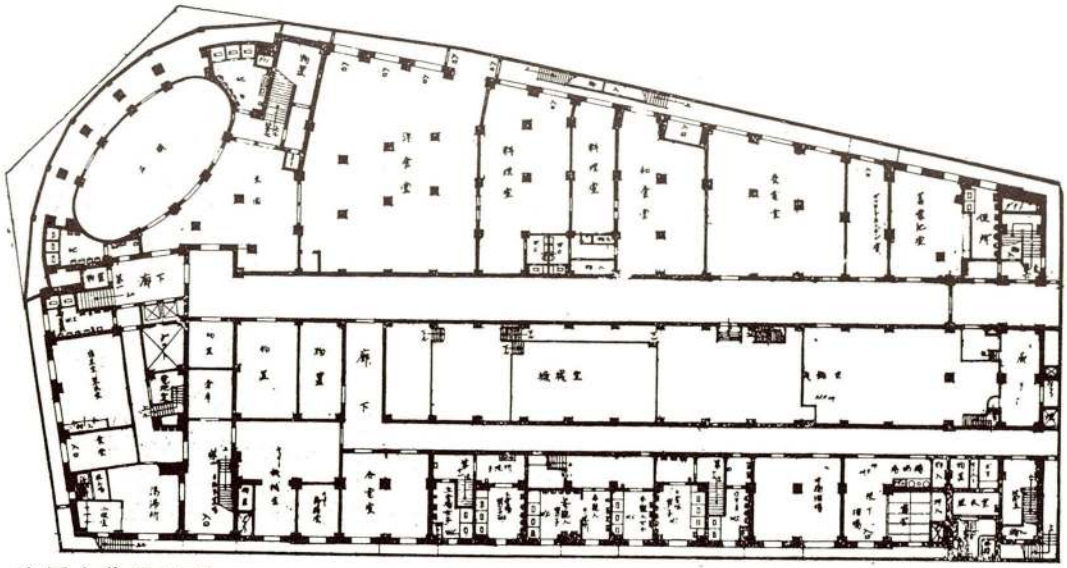
17. 便　所

床淡綠色モザイタイル敷・天井プラスター、一部頂光及び電燈照明用碍子天井・壁極小型モザイクタイル地白色、ASAHI 飛白文様・間仕切板淡灰色大理石

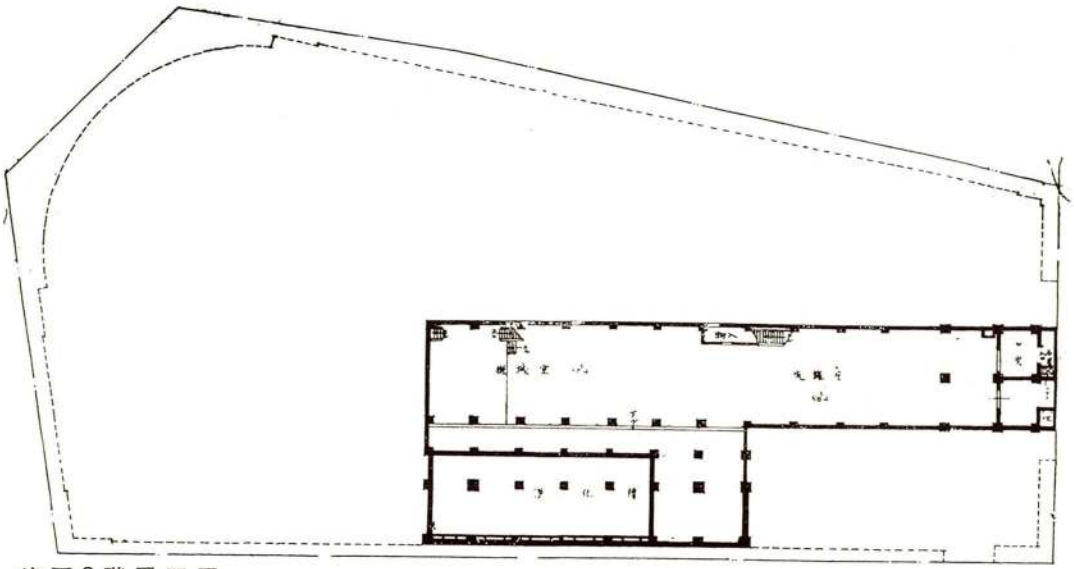




1 階 平 面 圖

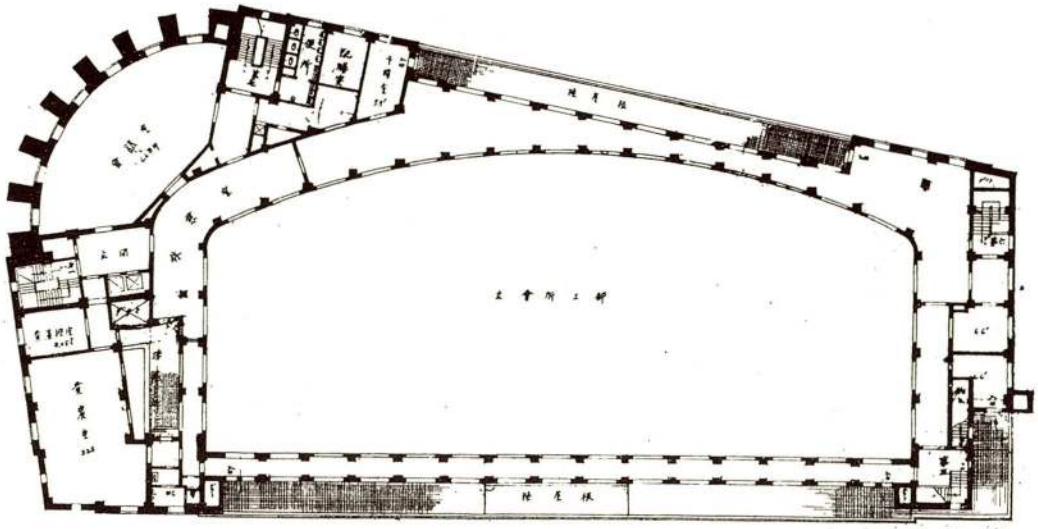


地下 1 階 平 面 圖

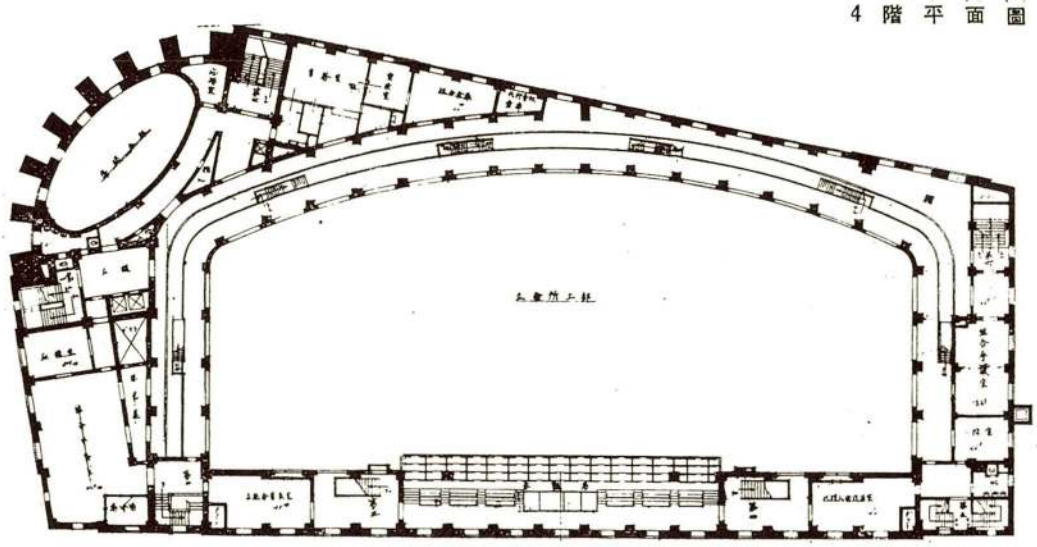


地下 2 階 平 面 圖

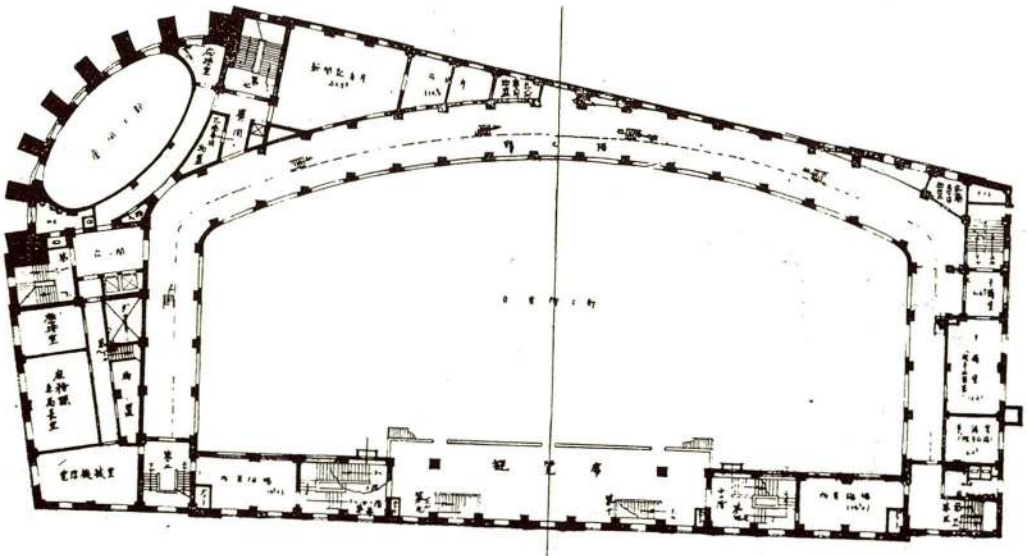
VI 20　大 阪 株 式 取 引 所



4 階 平 面 圖

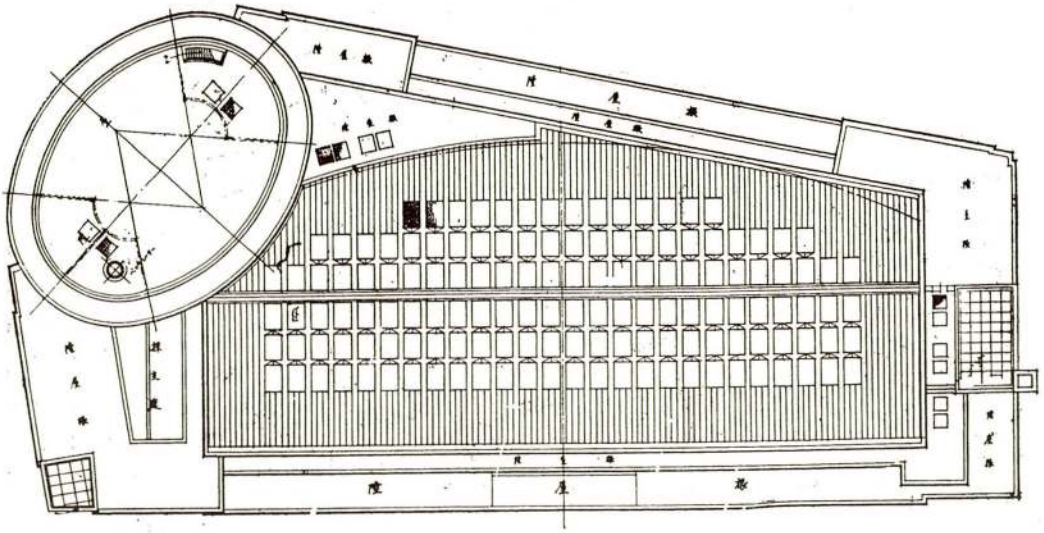


3 階 平 面 圖

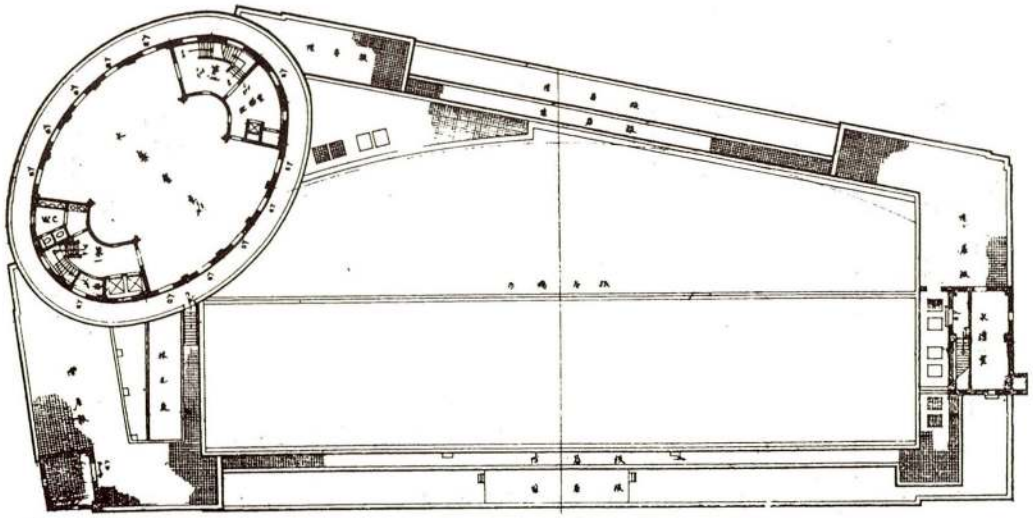


2 階 平 面 圖

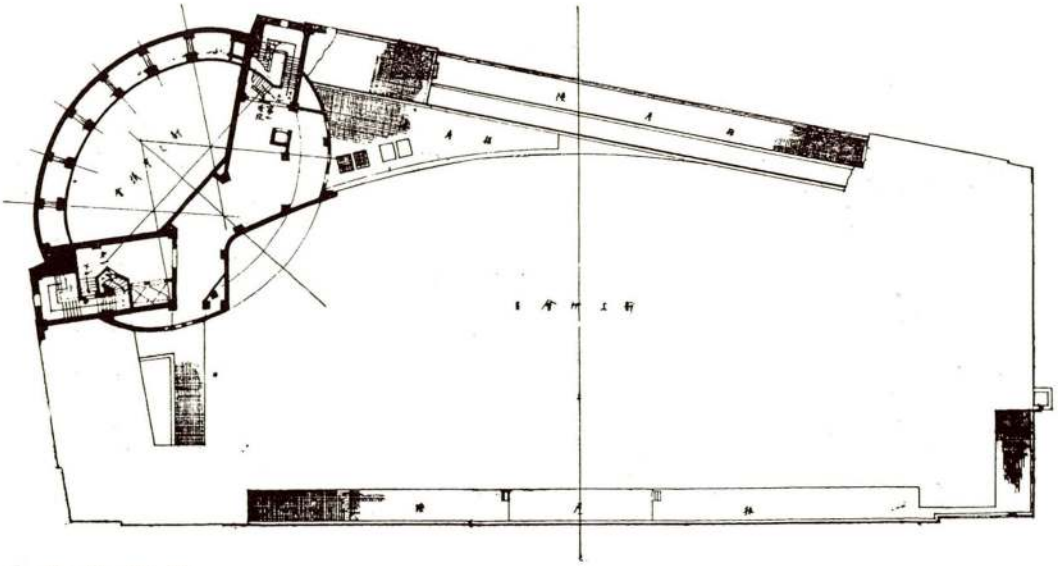
大 阪 株 式 取 引 所　21 VI



屋根平面圖



6階平面圖

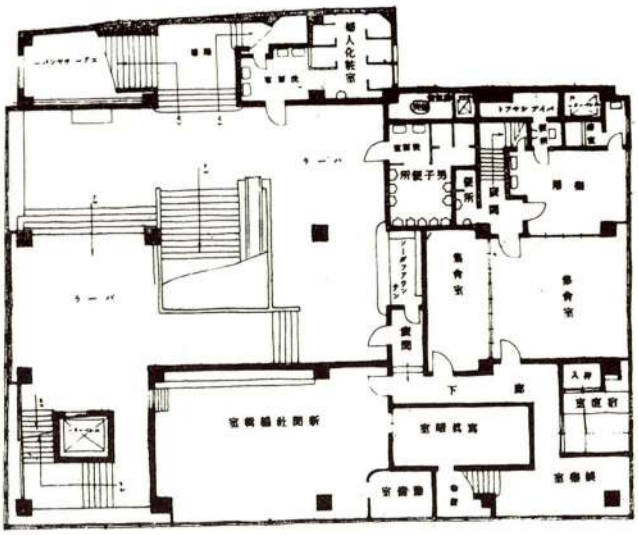


5階平面圖

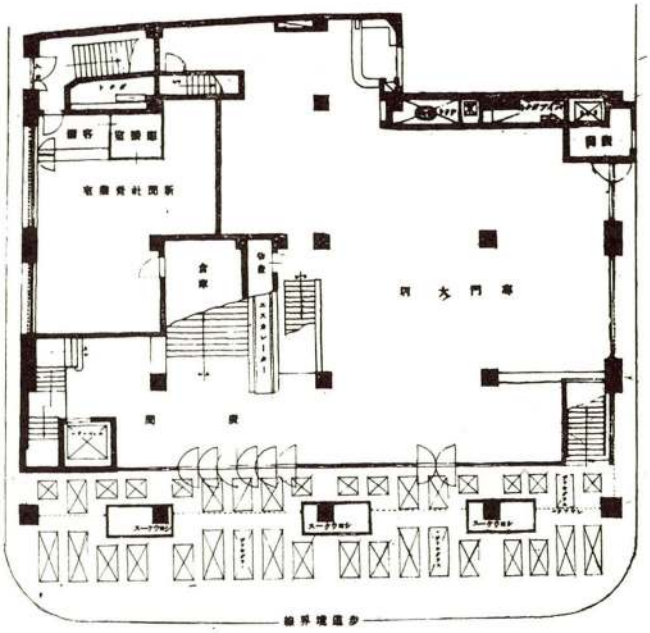
VI 22　大阪株式取引所

設計　長谷部竹腰建築事務所
施工　大林組

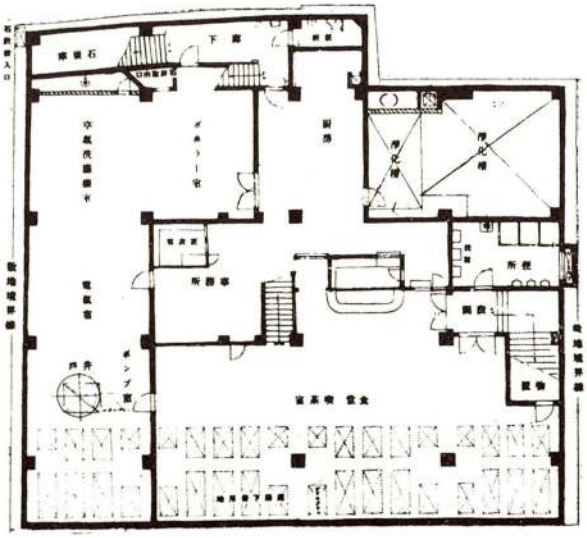
2階平面圖



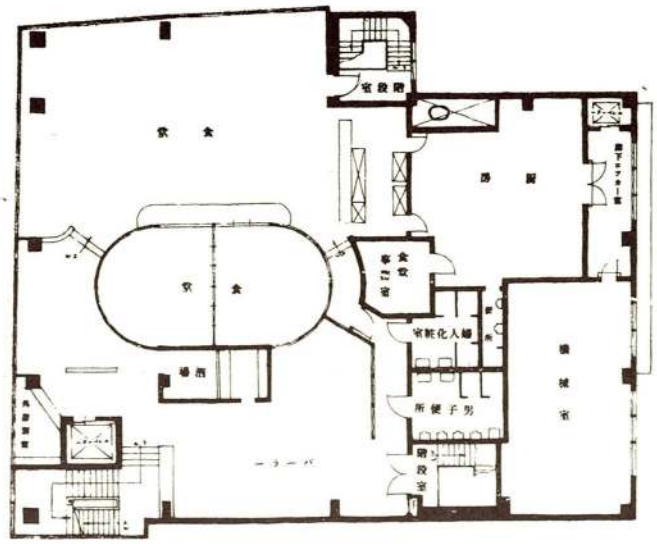
1階平面圖



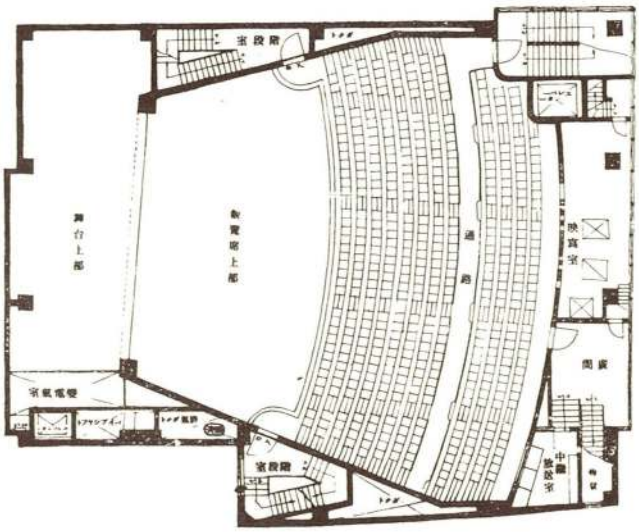
地階平面圖



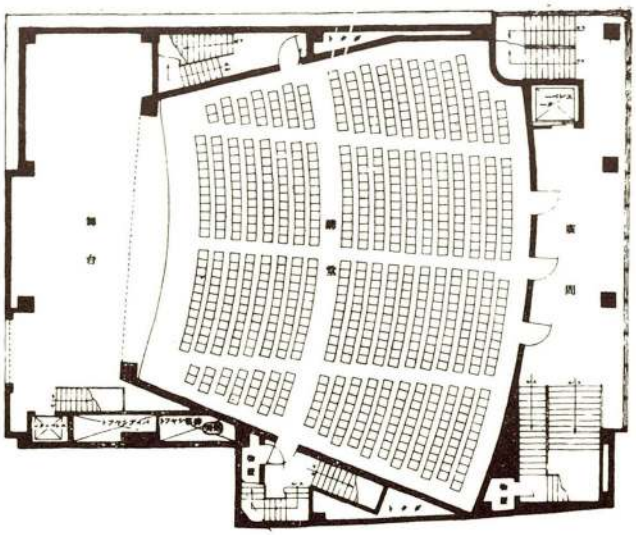
位置	京都市河原町三條上ル
敷地面積	672.9平方メートル
建坪	589.9 〃
延坪	3,689.6 〃
軒高	31メートル
消防署望樓頂端	37.4メートル
深さ	基礎下端迄 6.1メートル
構造	鐵骨鐵筋コンクリート造地階付6階建
竣工	昭和10年4月13日



6 階 平 面 圖



5 階 平 面 圖



3 階 平 面 圖

設計 石川純一郎氏
施工 竹中工務店

大阪株式取引所の設計計畫に就て

竹腰健造

大阪株式取引所の建築の設計に初めて鉛筆を持つてから二年半になる。堺筋のアカシヤの並木の梢に青い芽が崩えそめると同時に此間の苦心が酬ひられて華々しい落成式を擧げる運びとなつた。

難波橋の橋畔に聳え立つ白堊の殿堂を見て世の人は多く建築家のロマンチシズムを思ふだらう。尠くとも局外者の此建築に關する話題は其外貌とか規模とかに集中して居るやうだ。然し建築當事者として見ればそう云ふ話は深刻に響かない。此建物の中にて毎日幾千の人が最も眞劍に運命を賭して競つて居る、其日其日の成り行きによつて種々の運命の人が出來て行く現代マテリアリズムの縮圖が描き出されて居るのである。此マテリアリズムの縮圖を最も敏速に便利に描き出させる爲めに此建築が企圖されたのだ。だから市場自體の物質的價値が此建築の價値となるのであつて、此處に建築家としての苦心の最も大なるものが存して居るのである。

大阪株式取引所の建築に關しては十數年來其新築が期待せられ取引所としても數次に亘つて、種々の計畫を企圖せられたが、昭和7年實行の機愈々熟し其設計と工事の監督との依頼を受けたのであつた。

昭和8年4月には計畫案も決定し同月 18 日地鎭祭を擧行すると共に、殘存建物の取毀を初め翌月 25 日より一方取毀を進むると共に新築の工事に着手し、昭和 10 年 4 月 28 日の落成式までに約 1 ケ年と 11 ケ月の日子を費して居る。

此建築は我國商工業の中心地たる大阪の然も現代經濟機構の中樞をなす株式取引の市場の建築であつて、平面圖に於て示さるゝ如く市場を除けば他は極めて意味の輕き二、三の室を有するに過ぎない。

市場內の中心は何と云つても仲買人の電話席である。此電話席から長期に於ては二百數十種の株式の當限、中限、先限の寄付大引の建値、又短期に於ては刻々に移り行く出來値又國內各地の株式市場の建値、國債價額の變化、海外市況などを一眸の中に納められる樣に設計する事が必要である。市場で建築上最も注意を要するのは採光と音響とである。市場は明るい事が必要である、然し目をさす樣な方向から來る光線や標示された値札を見るに邪魔になる光線は禁物である。

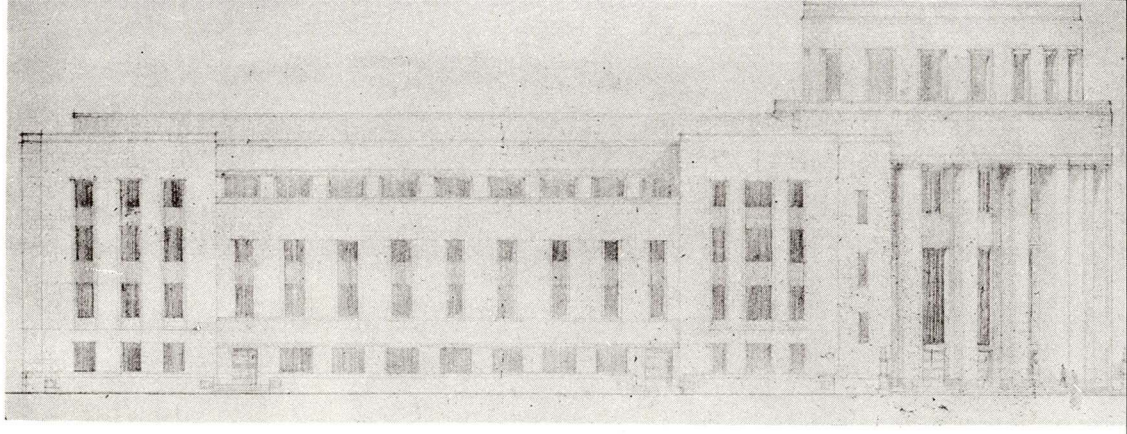
音響の點から云へば立會場の喧々囂々たる騷音は出來るだけ消さねばならぬ。然し高場の音は透徹せねばならぬ。前者の目的のためには周壁の大部分と天井とを吸音率の大なる

材料で被ひ、高塲の背面はベニアを使用して、サウンデイングボールドの役をさす方針を定めて進むだのであるが、幸に能く其目的を達し得たと思ふ。市塲内には毎日數千の頗る鋭敏なる感覺と頭腦を有する取引員又は其代理人があつて、非常なる緊張裡に市塲を使用されるのであるから建築使用上の些細の不便に對しても少しの容赦もされないのであるから殆ど市塲の實用上の價値のみが、建物全體の價値と建築の意義とを支配するものと云ふことが出來るのであつて、數百萬の工費も、輪奐の美も實用上の價値の前には何等の價値もないのである。此點に關しては、此建築を見る一般の建築家又は市塲關係外の者には、市塲當事者又は我々其建築の衝に當つたものと此建築に對する觀點、又は心持が少し異つて居る事と思ふ。此故を以て市塲の實用的効果が、此建築の第一義的價値であると云ふ事が出來ようと思ふ。

株式取引の市塲には普通の建築學的の成果を得る外に、株式取引としての機能を發揮するに必要な種々の機關を必要とするのである。其主なるものは刻々に變化し行く株式、國債等の建値を迅速に且つ確實に標示する裝置であつて、見方によつては此等の方法を考案する事は建築家の仕事ではないとも考へられるが、我國今日の現狀では此等の仕事をも建築家に期待されて居る。此等は其方法自體の考案が重要である事は勿論であるが、又一方可り建築の美術的表現とは距離のある俗なものを建築の裝飾と出來る丈調和融合せしむ成る事も必要である。又之れがためには凡そ建築家の仕事と緣の遠い株式市塲の取引方法から建値其他の標示され行く經路迄、充分に了解し、之れを消化して新たなる標示方法なり、技術的立塲から改善したものを進言する事の出來る程度迄株式を了解する事が必要なのである。建値の標示は取引所の機能中最も必要なるものであるが、通信設備、其他の掲示類にも取引所特有の種々の設備があつて、此等が充分なる機能を發揮する樣設計する事が此建築が第二に重點を置かるべき點である。

紐育ではウオール街にボタンウツドの古樹の蔭で仲買人が集つて取引をして居た時代ロンドンではチエンヂアレーのジョナサン、カフエーで株式の取引をして居た時代はまだ世界經濟の機構も、今日の如く整つて居なかつたが、19世紀の末葉からは經濟組織も複雜となり、株式取引所は經濟機構の中樞をなすに至り、其取引市塲の建築もゆるぎなき經濟機構の中樞たる事をも表徵する雄大にして壯重且品位あるものを要求する時代となつてきて、古樹の葉蔭やカフエーの酒樽の上に集つて居た時代とは大に異つて居る。此處に建築家が其ロマンチシズムを樂しむ僅かの世界が存在するが、此建築の重要性から考ふれば最後のものであらうか。

新市塲の規模は何分にも建築面積1千餘坪延坪 3900 餘坪、然も延坪の中 700 坪に近き部分は高さ頂部迄 70 尺を有する市塲を含むで居るのであつて、外部には 80000 平方尺の花崗石張を有し、加ふるに昭和9年の未曾有の風水害に際會したのであるから工期には可成りの無理があつた。然し幸に工事中1人の死者をも出さず期限内に完成し得た事は、一に大阪株式取引所の適當なる指導と請負者の努力との結果と見做さねばならぬ。



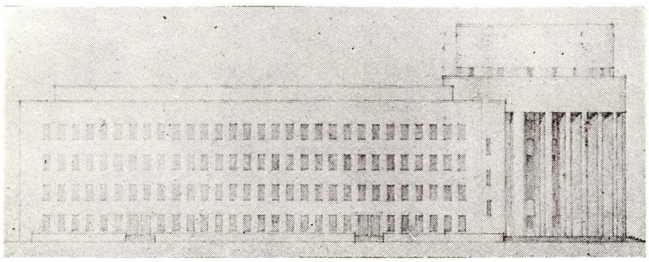
大阪株式取引所新市場の建物に就て

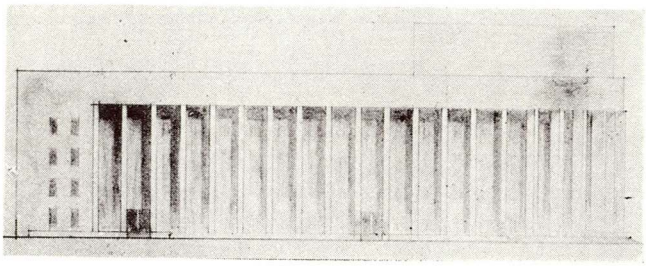
高　橋　榮　治

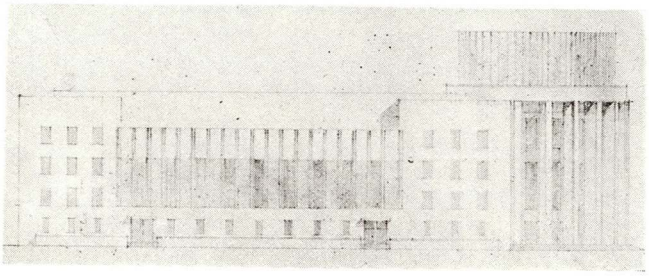
日本の經濟中樞の都市たる大阪が必然規模に於て、設備に於て總てに完備した大きい株式取引の市場を有せねばならぬのは明白であり而もその案が幾度か議せられつゝも容易に實施に至らなかつたのであつた。住友合資會社の工作部にその設計の依頼があつたのが昭和8年早々の事と記憶してゐる。即ち當時課長であつた竹腰健造氏が直ちに數案の平面圖を作製され、引續き立面圖をも大體作られ、各れも大株の當事者と議定されたのが大體現建物の骨子となつたのである。上揭のエレベーションが即ち其時のものである。他に2～3の參考立面圖案を揭げる、これは小生暇に描きたるもの。

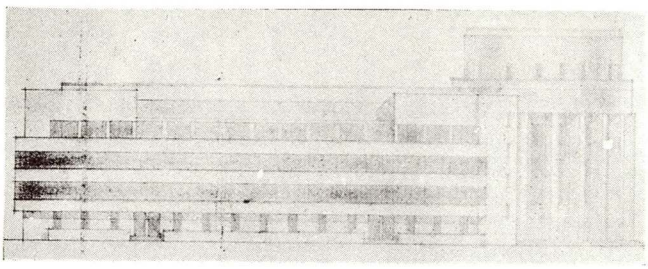
特に取引所としては苟も少しの浮華の氣をも許さない、沈重の中に世を率ゐ導くべく、豪壯なるを眼目として設計されたものである、其點重々しとの批評は甘んじて受け得ると思ふ、又北濱2丁目の交叉點は他の三方及附近には塔の如き細高なる建物が聳立するので此の建物は一層低き觀を與へるが市場としては充分な高さなのである、內外その細部共可なり厚重な感を與へるであらう、それ等は皆上記の理由によるものである。

（本文は30頁へ續く次頁には各地の株式取引市場を參考に揭げる）





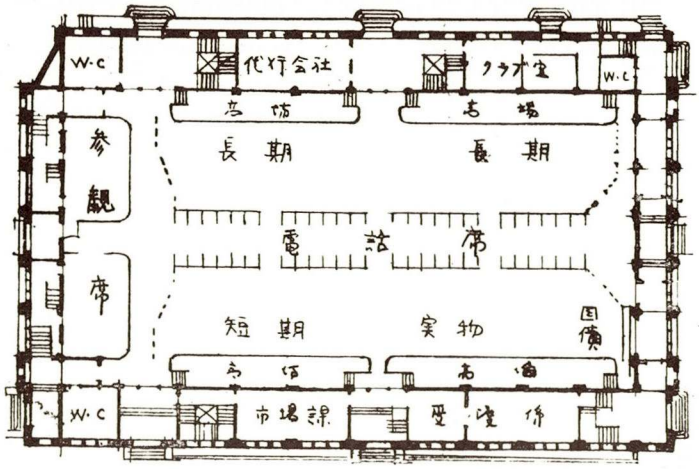






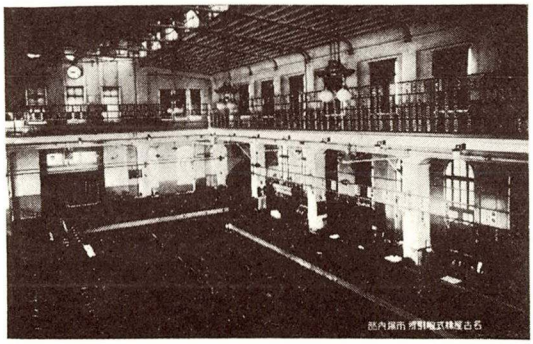
⬅ 東京株式取引所

市場は大正11年起工、震災で一時中止し竣工は昭和2年12月末日である、設計監督横河工務所、市場建坪914坪餘、長方形の平面長手二側に高場を取り一方に參觀席を設けてある、電話席は中央に一段低くしてある。これは立會係と電話係とは直接に信號せず傳令が傳票を以てする爲めである、採光、音響共完全とは云ひ難い、特に表示盤が建築的に扱はれてないのが目に付く、始めて大市場を建築したので幾分不充分の點の生じたのは蓋し止むを得ないであらう。



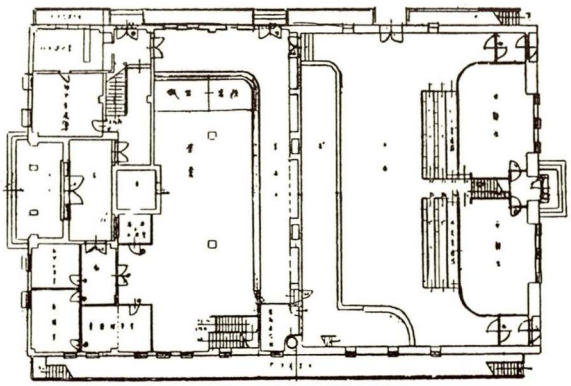
名古屋株式取引所

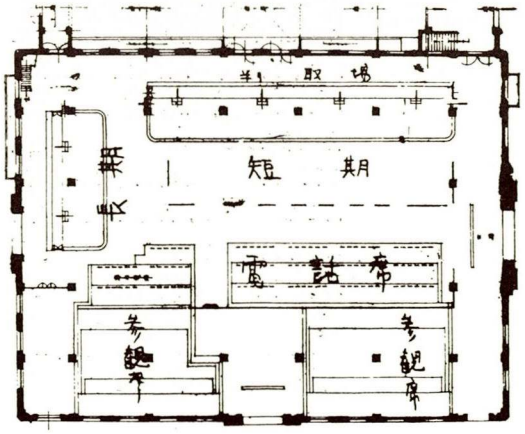
昭和2年1月起工昭和3年1月竣工、神保芳松氏設計、市場建坪87坪餘、此も大體長方形の平面で、短期長期の兩高場を直角に配置し電話は3段に高くなつて居る。取引の方法は大略大阪のそれに似てゐる、立會場と電話席との間に柵を設けてあるのは立會の渦が高場から離れて電話席に寄つて來るのを支へるためと聞いたが、大阪ではその憂がなかつた。表示方法は原始的であり且つその後に窓があるので見難いとの評で模様替の豫定だそうである。判取場は高場の眞後にある。市場の作用、機能を全然研究せずして設計せられた憾がある。



博多株式取引所

昭和8年6月起工、昭和9年1月末落成、實物は勿論寫眞も見てゐないので評は出來兼ねるが石本喜久治氏の設計なれば完全な出來榮であると信ずる、建坪130坪位らしく、L字型に高場を廻はし、電話席を3段に高めその後ろに參觀席をとる、大體名古屋のと似てリファインされた平面である。

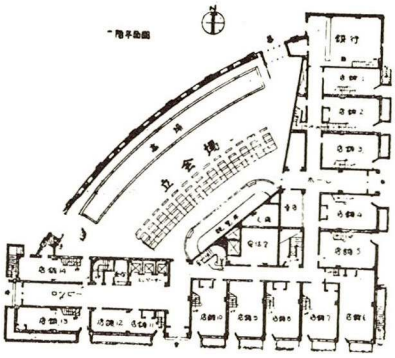


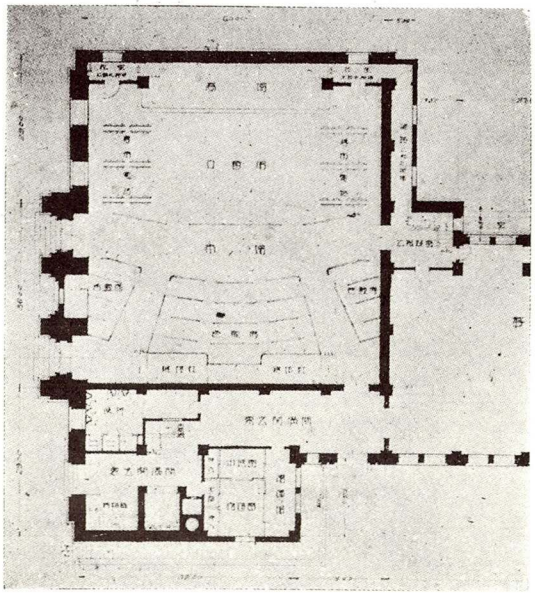


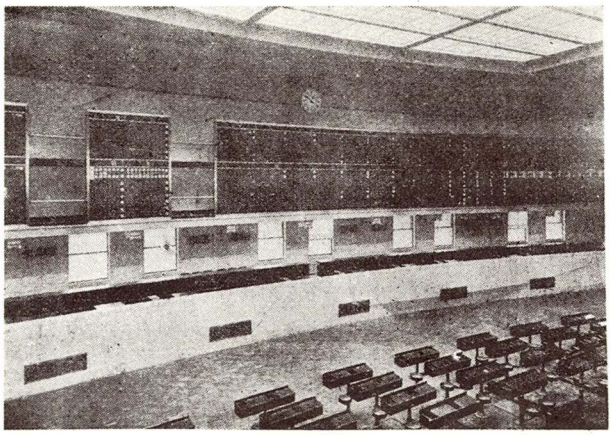


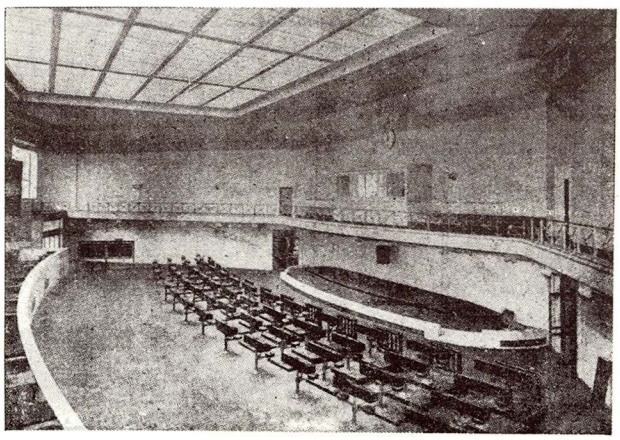
神戸株式取引所

昭和8年5月起工、昭和9年11月末竣工、平面圖に見る如くL字型の事務所の扇形の部分を市場に充て、高場、立會場、電話席、參觀席の順序に簡單に配置し高場の上に表示盤を置く。採光も充分、音響もよく、各部共に充分研究された完全なものである、且つ冷房の設備も完備してゐる、渡邊節氏設計









橫濱株式取引所

昭和3年3月起工、昭和4年8月落成、市場は事務所の一部に這入つてゐる、大體市場は110坪位か、高場が一方に、下が立會場、その兩側に柵を設けて電話が掛けてあり後部が參觀席。最も簡單な而も善く纏つた一例である、設計は出浦高介氏



平面の解說に移る。この建物の最重要部は市場である、他部は單なるその隷屬に過ぎない。市場は高場、立會場、電話席、札場、判取場、參觀席等より成り、それ等に附屬して喫煙室（立會人の休憩室）、所員控室がありo他に代行會社。組合事務所。組合員會。別に貴賓室、會議室、集會室等がある。

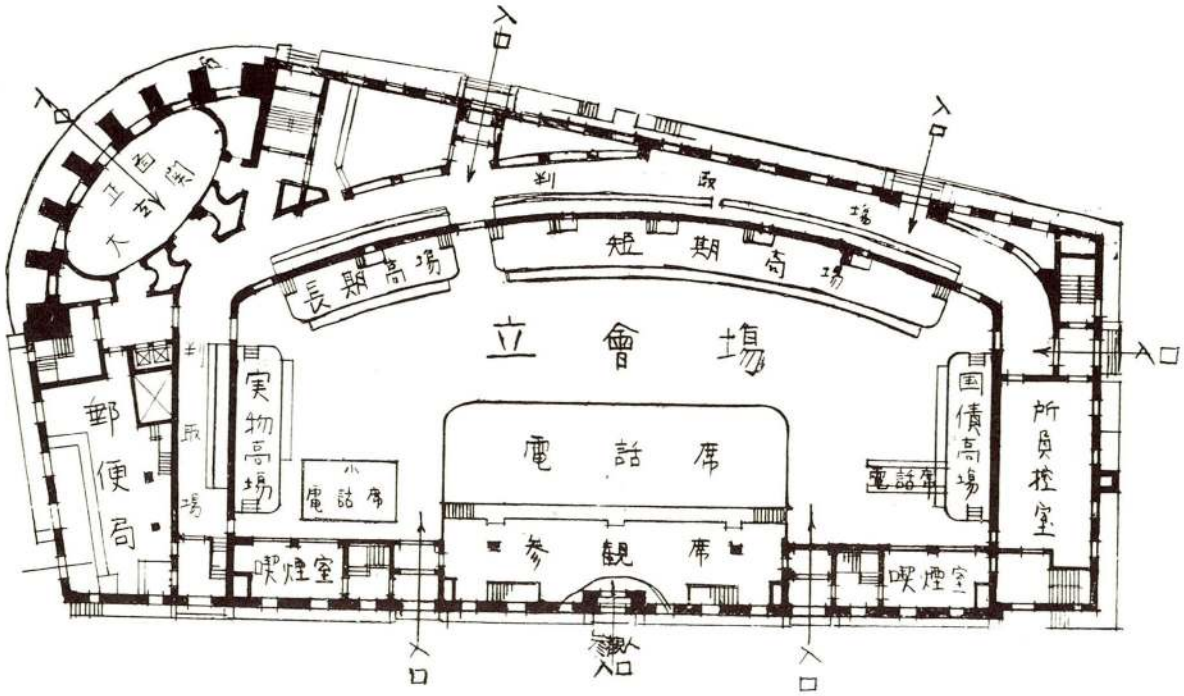
地下室には設備關係の諸室及守衛小使の部屋を置く。便所は1階に無く、市場の便所は全部地下に降ろしてある、これは市場を極度に擴げた結果であり又衛生上よりの考へも加味されてゐる。取引所關係以外に西南隅の一角を地下より2階まで、北濱の郵便局へ、地下室の一部を洋食和食の料理店へ貸されてゐる。

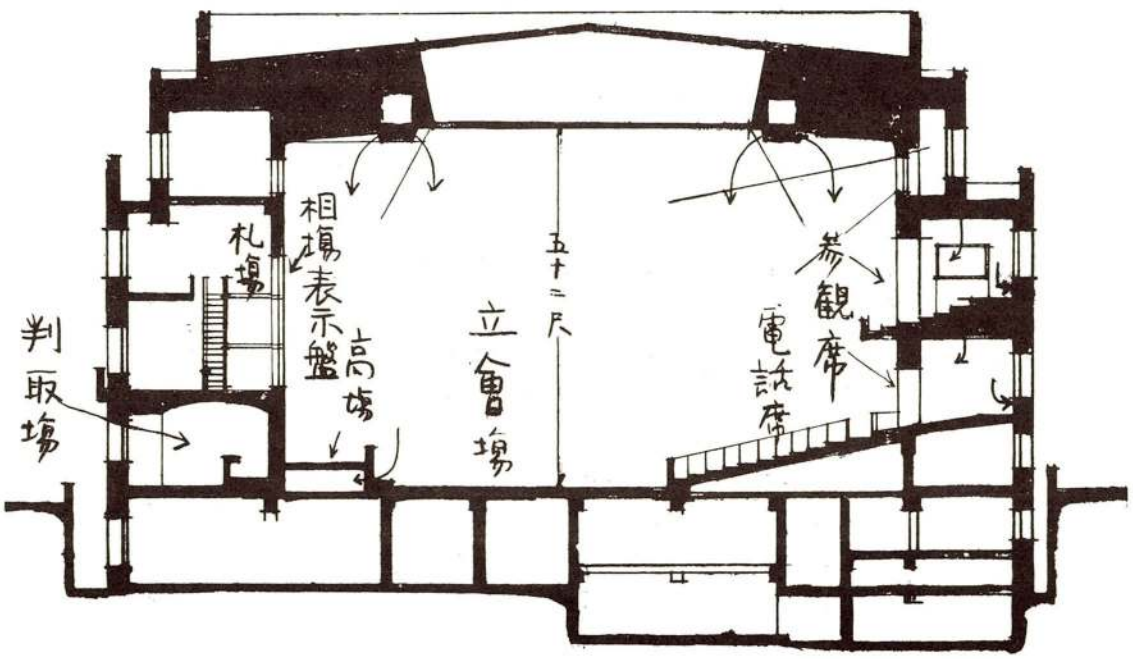
立會場の說明に入る。前頁に載せた各所の株式取引所の市場の平面と寫眞とを參照せられたい。博多、横濱、は無論名古屋、神戸程度までのものは面積が割りに小であるから高場、立會場、電話席、參觀席、札場とこの5者の關係比較的簡單に解決出來る。横濱、神戸等は可成よく處理されてある（博多のは見ないので批判し兼ねるが）然るに東京、大阪程度のものゝ如く尨大となると仲々困難となり且つ諸種の要求に矛盾が生じ來る。幸ひ當設計に當つては東京に數へらるゝ處も多々あつたが、東京と大阪とはその取引の內容も相違があり且又取引の方法慣習等も非常に違ふのでその平面に至つては全く別箇の觀を呈してゐる、特に公定相場表示機及同操作場と電話席とには苦心を要したが結果は幸ひ大變善かつた。平面を見るに、東京のは相對する長手の二側に高場をとり一方を參觀席とし、中央に一段低めて電話席をとり、高場の上に廊下を持出して札場としてゐる。そのギャレリー前に恰も芝居の看板の如く札を並べてあつて、建物の內部を不調和に蔽ひ隱す結果となつてゐる。當設計に際しては最初より竹腰氏の熱心なる研究とその異常なる獨創とよりして、總てが完全に建築的に解決せられ、市場として機能を充分に發揮せしむるに至つた。以下少しく簡單に說明して見やう。

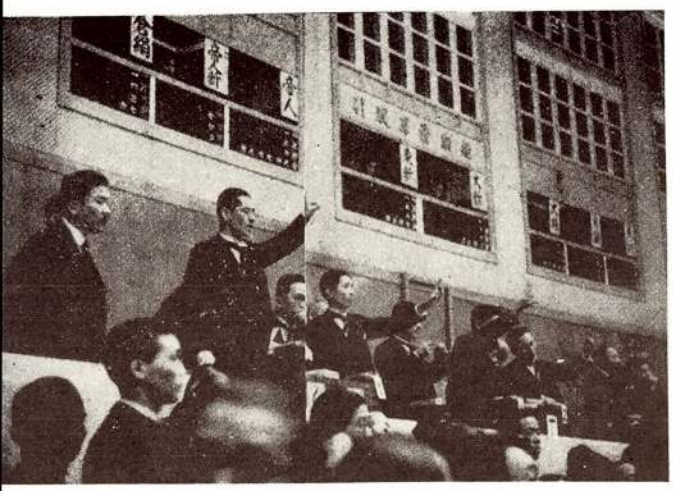
新市場は櫛形の平面を有して、三方に高場を繞らし、その櫛の齒にあたる側に電話席を設け、その後ろ及その階上に參觀席を取る。三方の高場の上には各その柱間のパネルに納めた表示盤がある各部の人が各所から總ての公定相場を見得ることが必要であるからである。

立會場に立會する人は即ち電話席の自己の電話線より通知を受けつゝ取引するから、電話席と完全に信號を交換し得べく又、高場及表示盤をもよく見得るの要ある。電話係は立會する人と表示盤を見る、參觀人は場內の空氣を察し立會及表示を見る、此等の諸關係は當市場では總て殆んど完全に解決せられてある。

採光は天井櫛形トップライトと第4階廊下の窓よりした。又曇天日の爲めにトップライトの屋根裏には多數の照明燈を入れた。音響には非常に苦心を要し最後まで心を痛めたが兩者共遺憾なき成功を納めた。又温濕度調整も完備し、市場としては大さに於て第1なるのみならずその機能を發揮せしむることに殆んど完璧に近しと信ずるのである、概要を略述したが尚圖、寫眞等に簡單に說明を附して置いたから參照願ひ度い。







表示盤

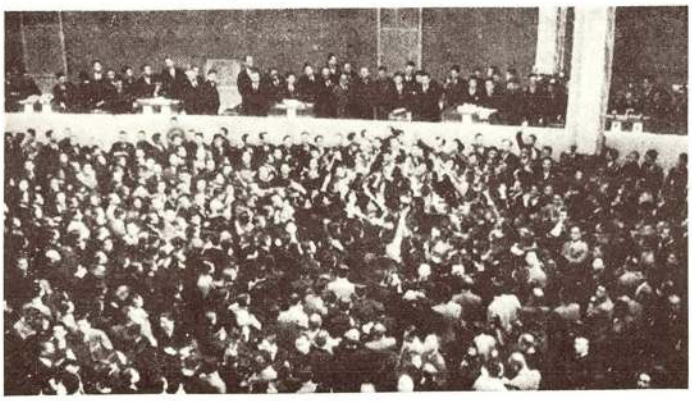
高　場



參　觀



電　話



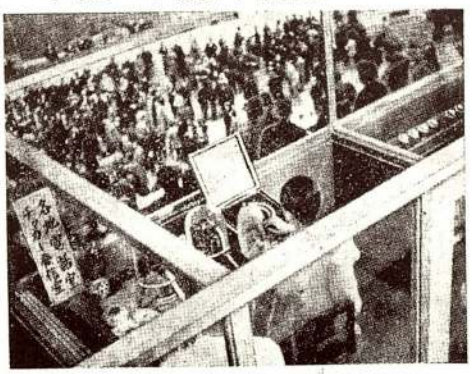
立　會

（朝日グラフ寫眞）

立會の實際の時の寫眞を掲げる、單にモンタージュ風に構成したのではなく大體關係を示すべく上下左右に貼付けて見た、幾分の了解の助けとならう、眞劍と興奮の立會に、眞摯と放心の參觀に。喜怒は宛ら水泡の水に浮べる如く世の大勢に押されて北濱街に析聲く。といふ樣を寫眞にしたものである。立會の寫眞は5月1日落成初立會のものであつて押木常務の折で大新が4月27日假市場最後の建値 97.30 圓から 100 圓になつた瞬時の興奮狀態の貌である。

3 階參觀席の一隅に立會興奮を馬耳東風に。靜かに各地取引所へ。チッカーへ、或は放送局へと相場を知らしつゝある人々の群れがある。

チツカーへ、各地へ、放送局へ



（大阪毎日新聞寫眞）

大株現場に於ける所感の二三

作間日出生

今回落成した大阪株式取引所の建築に就て何か書けとの話ですが、私としては之れと云ふ材料の持ち合せがありませぬ。只現場監督として感じた事を二三述べさせて頂きます。

其の一つは此春新大阪ホテルの號で池田會員が云はれた監督の名を指導者にする様にとの理想論がありましたが私も同感です。然し私は今一歩進んで監督者も指導者も請負人側にあるべきもので、施主側には只檢査員否檢收係が居て建物の出來上つた時、又は中途で工事費の支拂の際出來高の査定をする位に各請負者の信用が向上する事を望みます。今日でも稍々之れに近づいて居る所もありますが、近き將來には必ず實現する事と信じて居ます、然しながら之には請負人の信用が第一ですから、今日の如く徒らに競爭のみをなし、兎に角仕事を貰へば後は何とかなると云ふ主義の根絶する迄は駄目と思ひます。建築も云はゞ物品です、其の製作に當り買主から監督が付き切りで、釘一本迄干渉しなければならぬと云ふ事は誠に請負者即ち家屋製造業者の恥辱は勿論建築界の大恥辱と思ひます。之は只に請負者の罪計りではなく、施主は勿論設計者も大に反省しなければならぬと思ひます

其の二つは材料納入者に今少しく建築と云ふものを理解して頂きたい事です。そして早のみ込みと安請合を爲さゞる事です。今假りにタイルに就て述ぶれば、納入者はよく使用場所或は張方等を考へ、自家の製造能力を省み期限内に果して納入出來得るや否やを考へ形狀の如きも果して注文通りに出來得るや等の事を詳細に調べ、單價の如きも徒らに競爭を爲さず値段相當に請負ふ事とせられたし、然らざれば後に到りて期日には間に合はず、檢査を受くれば殆んど不合格となり、遂には工事の工程に支障を來し且自らも物質上は勿論信用上にも大損失を來す事となります。特に之等納入者の内には早く納入すれば檢査が嚴しいから、再三の督促を受け現場の狀態がせつぱつまつた潮時を見て一度にどつと納むれば仕方なしに使つて貰へる、と云ふ昔ながらの考へを有つて居る方が往々ある様に思はれます。或は其の考へでなくとも結果が斯くなつて居る事があります。之等は今少しく商道德と建築の如何なるものと云ふ事を理解して貰ひたいと思ひます。之とても納入者計りの罪ではなく注文者も能く製造能力、資力、技倆、品質、責任感等を考慮し只安ければと云ふ主義を改善して頂きたいと思ひます。

其の三は現場の立場に就て少し述べて見たいと思ひます。設計者が父なれば現場員は即ち母であります、母は其の子が生れる迄と云ふものは並大抵の心配ではありません、月日が滿ちて生れ落つれば其の子が一人前になる迄何から何迄世話をなし他人から後指を指さ

れはしないであらうか、父の名譽を毀損しはしないかと何時も心配して居る點は父同樣であります。然るに世間否建築家仲間でも現場を輕視するものが往々あります、今日では稍々理解して現場員を多少認める樣になりましたが昔は丸で無能視した時代がありました即ち監督者を立ちん坊とまで輕視したものです。

前述の如く設計者と現場員は父と母との關係にあり、其の出來上りたるものは父一人のものにもあらず、又母一人のものにもあらず二人が協力して作りたる子でなくてはなりません。昔の設計者は家鴨の如きもので唯卵を產み放し、之を鷄に孵化さし自分の子として自慢し都合の惡い所は鷄の責任としたものです、之は設計者計りを責めるのは筋道が違ふので現場員の素質が惡かつたのです否現場員も自ら立ちん坊に甘んじて向上心がなかつた點にも基因するのです。然るに今日では漸く現場員の存在を認められ重大なる責任を負はされて居ますから、吾々現場に立つものは所謂立ちん坊に甘んぜず、須らく技術を練磨し經驗を積み能く設計者の意圖を解し、母たる義務を遂行しなければならないと思ひます又設計に當らるゝ諸先生方も現場員は自分の妻である以上大に信賴出來る者を派遣し母たる義務を遂行するに充分の指導と援助とを與へ、常に精神的にも物質的にも力添へせられん事を希望致します。

株式會社 大阪株式取引所市場新築工事概要

位置　大阪市東區北濱二丁目一番地

工期　起工 昭和八年五月二十三日　竣工 昭和十年四月二十八日

敷地面積　一、二二五坪六一〇

建築面積　一、〇二二坪六一一

延坪　三、九二四坪一七八

内訳
- 第二地下階　二四四坪八四
- 第一地下階　九五四坪三一八
- 第一中二階　一、〇二五坪二六一
- 第二中二階　九九二坪四六一
- 第三階　四七〇坪一二〇七
- 第四階　四八〇坪三九七
- 第五階　一九九坪三四九
- 第六階　一三五坪四三九
- 屋階　二一八坪二七〇

市場　六九一坪八〇

外ニ、傘觀席、喫煙室、所員詰所等

階高　地上六階建、地下二階、塔屋、乾場付

建物高　正面圓塔部（新地盤線ヨリ）一〇二・〇尺

市場軒蛇腹（新地盤線ヨリ）七一・五尺

市場内部天井高　五二・〇尺

室割

地下第二階
- 設備関係諸機械室、浮化槽

地下第一階
- 電氣室、守衛室、便所、食堂、調理室
- 北濱郵便局（通路、倉庫、荷扱所、事務室、山場、荷場、荷扱所、電話室、判取場）附屬諸室、喫煙室

第一階
- 正面大玄關（事務室、相場表示板、北濱郵便局（事務室、相場表示板、問屋事務室、一般公衆便所、電話室、物置）
- 北濱郵便局（局長室、事務室、電信機室、物置）
- 特別傘觀席、大阪株式取引所取引員組合事務室、正副委員長室、應接室、會議室、倉庫）
- 大株代行株式會社一事務室、委役室、事務室）、大株代理人會役員室

第二階
- 大株代行株式會社一會役員室、會議室、倉庫

第三階
- 貴賓室、問屋室、會議室、休憩室、配膳室

第四階
- 物置、機械室、生命ヒ、配膳室

第五階
- 物置、材料機械室

第六階
- 物置、材料機械室

屋階

構造　鐵骨鐵筋混凝土造

外裝　花崗石張

内裝
- 正面大玄關　壁外面白大理石張、天井プラスター塗、床機械入大理石敷
- 立會場　壁天井仕上塗塗、腰上部ベニア板張、同下部大理石張、床優材ブロック敷
- 場内及電話處　壁大理石、電話處腰羽目張、床花崗石敷
- 刺戟場　壁キルクベンガラ塗、床花崗石敷
- 貴賓室及大集會室　壁ベニア板張、床寄木張、天井プラスターベンガラ塗、床リノタイル敷
- 會議室　壁布張ベンガラ塗、天井プラスターベンガラ塗、床リノタイル敷

設備工事

- 其他各室　壁天井プラスター塗、腰ベンキ塗、床リノリウム敷
- 各階玄關下　壁天井プラスター塗、腰ベンキ塗、床人造石塗研出
- 階段　壁天井人造石、天井プラスター塗、床花崗石敷
- 其他　壁天井プラスター塗、床ゼザイクタイル敷

相場表示（押釦式、差込式、自働電氣）、各種掲示板、居札

表示裝置

電燈設備　壁面照明九〇〇個、天井照明一、〇〇〇個、冷凍機用モーター四〇〇馬力一臺、高壓モーター七五馬力一臺、各所照明用モーター四〇〇馬力、中央監視盤、モーターサイレン一〇馬力、市場内電話交換臺一九六臺四三五馬力、中央監視盤、私設交換臺二九六臺、局線二六本、直通電話三五〇本、市外專用五本、非常電池四八個、電氣時計六五個、各所信號裝置、非常報知機、ヂッカー、消火ポンプ、消火栓二〇個、サイヤミーズコネクション二個、上水給水（水槽）、井水給水（ヘッダー）、ポンプ、砂丈機、濾過機、給湯ボイラー、冷却飲料水設備、各種衛生器具、洗ひ、浮化槽、製氷冷却機、蓄氷冷却機、蓄氷冷却機、給湯用低壓蒸汽鑵自働送炭裝置付、ストレーチタンク、エコノイン ヒーター、換氣用排風機、冷凍機三六馬一基、空氣洗滌機、送風機、ダクト

強電設備

弱電設備

衛生設備

燃料搬送設備

温濕度調整裝置

瓦斯設備

昇降機設備

其他

瓦斯湯沸器其他、客用昇降機二臺、荷扱用リフト二臺、石炭運用リフト一臺、深度二百五十尺二基

設計監督　株式會社 長谷部竹腰建築事務所

工事施工　株式會社 大林組

京　都　朝　日　會　館

石　川　純　一　郎

大阪朝日新聞社京都支局の新社屋を建築することに決まつて、その計畫に手をつけ初めたのは一昨々年であつた。

最初の計畫は、現在出來上つたものから見ると面積も半分以下、高さも 60 尺見當のものであつた。といふのは、最初に買ひ入れられた敷地が現敷地の南部、惠美須町に接する約八十坪ばかりのものに過ぎなかつたから。それにその當時は、新聞社の方々と雖も、今日の如き規模のものにしやうなどといふ考へは有つてゐられなかつただらうから無理もないところであつた。

それが其後相當急速に考へが發展して、隣地——即ち現敷地の北部、姉小路通に接する 130 坪ほどを新らしく買ひ足して、總坪數 210 餘坪、三方道路に接する今日の敷地となり、自然計畫も舊案と比しては非常に大きなものとなつて來た。

勿論この建物の主要な用途は、大朝社の支局たることなので、編輯局のための諸室、及び販賣店のための諸室を適當な位置に置くことは最初から考へられてゐた譯なのだが、それに續いてその上階に公演場を設けやうといふ意見が提出されて早くから決定を見てゐたしかしその他の場所——即ち 2 階に於ては編輯局に使用される殘餘の面積、1 階に於ては販賣店に使用される殘餘の面積、及び地下階に於ては設備用機械室其他に使用される殘餘の面積、それ等の利用に就ては色々な案が出され、中にはもし實現されてゐたらかなり面白かつたらうと思はれるものも少なからずあつたが、面積の關係や其他の關係で實現に至らず、結局現在の樣な利用方法に落ち着いて了つた。

又現在食堂となつてゐる第 6 階も、既に設計が出來、工事に着手してからその增築が決定せられ、その爲めエレベーターが是非とも必要といふことになつて來て、既に下部は工事にかゝつてゐた西北隅階段をかなり無理して變更を試み、やうやくエレベーターをつけたといふ樣な難問題にも逢着したり、又公演場も出來るだけ收容力を大きくする——先づ千五百人位を容れやうといふことから、3 階の全面積を觀覽席と舞臺とのみに提供して了はなければならない樣な勘定になつて、その爲めに公演場用のパーラーや便所といつた樣なものも、公演場の階にはとれず、1 階下へ下ろして第 2 階にとつたり、も一つ上へ上げて第 6 階にとつたり、ギヤレリーのふところを利用したりしなければならなくなつたり、又仕上に就ても外部壁畫下地の仕上げを如何にするか。鐵板でいくか、モルタル直接にやるかといふ樣な問題、又 1 階外部及玄關廻りに使用しやうとした特殊なニツケル・ベニ

ヤ鋼板（鋼板の表面に約その一割位の薄さの純ニツケル層をベニヤしたもの）の貼付方法加工方法等にも非常に研究されなければならない種々な困難な問題が生じて來た。このニツケル・ベニヤ鋼板は、製造會社の事情から大部分ニツケル・クローム鋼板に變更して了つて、たゞプロムナード天井張りとして使用したのみだつたが、このニツケル・クローム鋼板にしてもニツケル・ベニヤ鋼板ほどの困難な問題といふものはないわけなのだが、それでも隨分實際施工上では難かしい問題が出て來る。

又工事の終りの期間になつて、種々な事情から非常に急速に工事を完了しなければならなくなつて、隨分忙しい、少々無理とも思はれる程のスピードでやつたといふ樣に種々な困難な問題が關係者を相當惱まし續けたことは續けたわけだが、昨年春着工以來1年間、先づ無事に經過して今その竣工を見ることは兎に角喜びである。

◇

地圖を展げて見れば直ぐ判ることだが、この建物の位置は、新聞社支局として、又その附屬する公演場を有する會館として申分のないロケーションだと思ふ。

京都を南北に貫く大動脈河原町通りに面してゐる。歡樂の中心新京極は目と鼻の先である。京都と大阪と又は大津方面とを連絡する交通機關の起點も亦近い。等々いくらでもいゝ點が擧げられさうだ。

◇

敷地は正面河原町通に面し、兩側は惠美須町及び姉小路の通りに接する三方道路で、敷地全體に亘つて法定最高限度 31 メートル迄建築し得る都合のいゝ所である。たゞ單純な矩形でなく、東南隅で少々入り込んだところがあつて、この爲めにプランにはかなりな不利益が起つて來るので困る。

◇

平面とその諸室配置の模樣は、平面圖を見て頂けば瞭然するわけで、こゝでは重ねて云はない。

たゞ第1階に於て河原町通りに面する壁面は3メートル後退せしめてある。これはこの建物が公演場を有つてゐる關係上、劇場取締規則の精神に準じて、監督官廳の意見を容れたものなのだ。

この爲めに5本の獨立柱——內3本はショーケースに利用した——が殘つて來て、小プロムナードを形作り、又雨天の際等、巾の廣い庇の役目も果すといふ樣な風に、よし1階貸室面積を多少失つても結果に於ては面白くなつた。

◇

外觀は寫眞で御覽の通り極めて簡單な立方體で、窓の全くない大きなコンクリート壁面があり、又それに照應して極めて大きなガラス壁面がある。

屋上には煙突と2個の塔屋の尖起があり、その一つは消防署望樓に充てられる。

仕上げは壁畵の部分がモルタル仕上、極めて入念に出來るだけ平面に仕上げられたものだ。その他の部分は一寸角の白色小型タイル貼、1階廻りはニツケル・クローム鋼板貼である。

◇

内部各室仕上げは簡單に主なる部屋だけ擧げて置かう。

第1階正面玄關廻り——壁、ショーウヰンド、大型プレートガラス。枠鐵製ホワイトブロンジング仕上。

玄關床、眞鍮製靴拭格子金物敷、一部は青色リノタイル敷、壁はニツケル・クローム鋼板貼。天井プラスター、ペンキ塗。照明器具はV字型直付連續器具。

專門大店——床、リノタイル敷。天井プラスターペンキ塗。陳列ケース、枠は鐵製ホワイトブロンジング、台輪はアルミニユーム板卷。照明器具は算盤珠型パイプ・ペンダント

中央大階段——壁はニツケル・クローム鋼板貼、踏面は辷止溝付ホワイトブロンズ板敷蹴込はニツケル・クローム鋼板。

西北隅階段——踏面蹴込共青色リノタイル貼、兩端アルミニユーム金物押へ、手摺ホワイトブロンズパイプ及び手摺子、鐵製ブロンズ・スプレー仕上。

第2階パーラー——床、青綠色ジヤスペ文様リノリユーム三尺角貼合せ。壁、ベニヤ板下地カンバス貼、壁畵を描く。獨立柱及大階段手摺壁はニツケル・クローム鋼板貼。天井プラスターペンキ塗。照明は全部間接照明とし、壁畵面周圍天井に壁畵を照明する目的で穩閉照明樋を設け、又適當なる天井梁型側面にも間接照明用蛇腹を附した。各天井パネルにある空氣調整用吹出し口のバンにも電球を穩して間接照明器具に兼用した。

編輯室——天井及壁、フジテツクス貼。床、リノリユーム敷。照明は算盤球型パイプペンダント。

第3、4、5階パーラー——床、青色リノタイル敷、4階のみリノリユーム、朱・灰・青三色横縞に貼る。壁は麻布貼の上にペンキ・ステンシルタ様、天井プラスター仕上。照明は大型ボールのチユーブ・ペンダント。4階下り天井の部には小型直付グローブを配列す

公演場——後段記事中に

第6階食堂——外壁全面3尺×5尺プロテツクス・ガラス嵌込、その枠骨鐵製銀色ラツカー塗。床、樺板張、獨立柱、ニツケル・クローム鋼板貼。天井は襖紙3尺角貼合せ（銀紙の上に青色素絹透貼りのもの）。壁、麻布貼ペンキ仕上。照明天井光築。別室は壁に大型プレートグラスの腐蝕及びサンドブラスト文様入のものを用ひた楕圓形の部屋、壁天井は同前。

地下階喫茶室——床、淡綠色モザイクタイル貼。壁道路側はカンバス貼、壁畵を描く。其他の壁、テラゾー・ブロツク貼。カウンター廻り伊太利産大理石。天井プラスター、この天井面にはプリズム・グラス嵌込、人道面より採光する。

◇

設備は電燈・電話・動力・電氣時計設備、衛生設備、昇降機、消火設備等一般的諸設備は一通り具備してゐるが、殊に特筆しなければならないのは、空氣調整設備及びエスカレーターであらう。何れも京都としては最初の出現である。

空氣調整設備に於て、このビルの最も惠まれたる點はその量豐かにして、その溫度極めて低き地下水の、しかも極めて容易に利用せられ得る狀態に在ることであつて、これが爲め一般に冷房に必要な冷凍機を置かずに水のみで充分良好な條件——冬期 68°—50%、夏期80°—60%—— が得られる筈である。この設備は公演場は勿論、全館各室に及んでこの建物の保健性を高める。

◇

公演場はこの建物內容の大部分、第3階から第5階迄を占めてゐて、猶そのバーラーは第2階及び第6階にも伸びてゐる。

第3階は舞臺及び觀覽席に充て、ギヤラリーは第4階第5階に亘つてゐる。

その收容人員、オーケストラ・ストールに700席ギヤラリーに500席、補助席を合して1.500人を容れ得る。

舞臺は間口6.5間、奥行4間、プロセニアム高さ29尺、客席照明は、舞臺上部、兩側天井蛇腹部、ギヤラリー鼻等の光築を主とし、ギヤラリー天井は二條の間接照明用金屬樋函を通して間接照明とし、又大天井、ギヤラリー天井にある空氣調整用吹出し口のパンを利用して天井中央部に間接照明を施した。

舞臺照明はボーダーライト三列、サスペンションライト、フツトライトを設備し、又ギヤラリー鼻には九個のプロジエクターを左右のスポツト室にも各二基のスポツトライトを舞臺兩袖にもサイドプロジエクターを、又最後部映寫室からも必要に應じて直ちに使用し得るスポツトライトの準備が出來てゐる。

仕上は大天井フジテツクス貼、淡青色ペンキ塗とし、銀色目地棒を2尺×3尺の間に通した。壁はプロセニアムアーチ廻り及び前部左右壁面、スポツト室共、樺材大型ベニヤ板貼素地仕上とし、其他の壁面及びギヤラリー天井はプラスター仕上、ペンキ塗とした。床は淡綠色モルタル塗、通路は同色リノタイル貼である。

緞帳は金銀の横縞、椅子のクツシヨン及び脊張の布は暗朱色モケツトを使用した。

全體の形と色調とは極く簡素な明快なものをと志した。

この公演場に於ける座席數の床面積に對する割合は、一般のものよりかなり大きくなつてゐる。一般に座席一脚當りの所要面積は平均 0·25 坪、最小 0·2 坪、前後、最大 0·45 坪前後のものであるのに比して、こゝでは 0·15 坪といふ小さい數字になつて來てゐる。

この公演場の周圍外壁は全く窓を設けず、外部騷音の遮斷を企てた。又一般に云つても近代のオーデイトリウムで日光照明があることが寧ろ人工照明の自由な調整を妨げる結果

窓や天窓のあるオーデイトリウムも實際にはそれを遮閉して使用しないといふ實狀であるので、そんな意味をも含めて今度は全然廢して了つた。これも勿論完全な空氣調整裝置を有すればこそ出來ることではあるが。

◇

この窓のない壁面は外觀として見る時東南西の三面に亘つて非常に大きな面積を占有することになつて、この建物に一つの特殊な風貌を與へることになつた。

◇

この建物に於ける內外の壁畵、殊に外部壁面の壁畵は一つの特に擧ぐべきこの建物の特異な點であり、同時に相當問題にされそうな點であらうと思ふが、兎に角この200坪に垂んとする大壁畵も僅々二週間で描き上げねばならなかつたので、林・川口・伊藤三氏及びその助手十數氏の異常な精進を必要とした。

◇

この建物は建坪こそ大きいとは云へないがその延坪は1,100餘坪あり、その高さに於ても軒高102尺消防署望樓では124尺餘に及ぶ高層建築で、周圍の低い民家の間に聳え立たざるを得ない關係もあり、又大體京都そのものが千年の古都であるといふ關係もあり、その外觀並びに環境への調和に就ては我々全く無關心ではあり得なかつた。

しかし我々の技術的な藝術的な良心から、この建物には唐破風を附し、勾欄を附することは敢てしなかつた。この點傳統主義的な一部の人々からのお叱りは甘んじて受けなければなるまいと思つてゐる。

京都朝日會館構造概說

青柳貞世

建物の外貌を壁畵で飾つた、極めて異常な建築でありますが、之れがスケルトンには一般建築と特別相違する様な構造手法を用ひた處もありません。書けと云はるゝまゝに構造の概略を紹介して見ませう。

主體構造は鐵骨鐵筋コンクリート構造の所謂、耐震耐火構造であります。

地震々度は $\frac{1}{10}$ を規準として居ります。特に工費の節減と工期短縮との要求から應力を特別に負擔します外部架構と長徑間内部架構とには鐵骨を併用して其他の部分は純鐵筋コンクリート構造としました。

圖面で見られる様に敷地の關係から多邊形の平面計畫であり、且つ建物の用途が二階以下は普通の事務所建築、三階以上五階までは朝日會館と云ふ 1.500 名の收容人員を有する最大徑間 22.77m の公演場があり、更に六階には三階と同徑間同面積のホールが計畫されましたもので、之れが現在はレストラントに使用されて居ります。

かうした關係から架構體を取扱ふ上には相當面倒でありました。

即ち特に、平面計畫の關係から之等架體の荷重法が非對稱形となり、曲能率の算出、鐵骨の製圖、工作にも思はぬ手數を要しました。

基礎は地下 6.0m に其下端を置き、直接極めて堅固な砂利層に支持されて居ります。而して內部柱は獨立基礎とし、外部柱は全部連續した布地形として設計しました。それは外部柱の支持荷重が內部柱の、それに比較して、極めて大きく、且つ、外壁を支持するに最も好都合であるからであります。

地盤の耐壓支持力は毎平方米 30 瓲と假定して設計しましたが實際の支持力は此の數倍に相當するものと確信して居ります。又基礎の深さは京都市內で稀なものとの事でありますが、平均水位は地階床面上 45cm 程度でありますから、地階床面に働く水壓力は輕少であります。只水量が多い爲め施工中の困難を豫期して計畫すれば足りるものと信じます。

架構體の取扱は大體 slope deflection method を規準として、之れを各架構體に合理的に按配して解法を試みました。

六階は設計の當初ホールに使用する目的で硝子屋根を受ける最大徑間 22.77m のトラスの成を極度に縮める必要があり、下弦材をアーチ型に設計しました。

六階の床を受ける公演場天井の大梁は最大徑間 22.77m を Trussed girder としましたが、相當の荷重を受けますので、外部柱の負擔する曲能率を輕減する必要から Sub truss を一連宛配置しました。

五階四階の觀覽席は徑間 22.77m の方向に Main trussed girder 一連と Sub plate girder 一連とを架して、之れを支持させて居ります。次に載せてあります寫眞は此觀覽席を受くる大梁の建方中のものであります。徑間が 22.77m 程度の場合は、かうした觀覽席は Cantilever system で取扱ふよりも、兩端支持の Gidder system に據る方が合理的と筆者は信じて居ります。もつとも、此朝日會館の場合は控柱がありませんので、前者に據る事は不可能で後者即ち Girder system に據るより方法はありません。

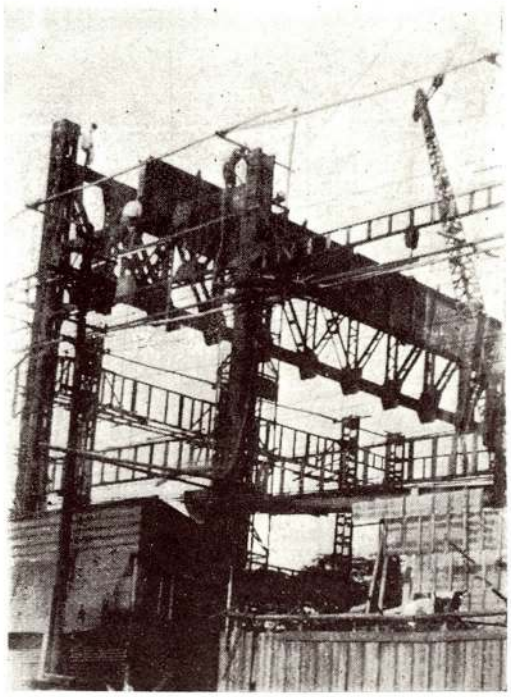
此 Main trussed Girder は成が 3.0m もありますし又徑間も 22.77m となりますので鐵骨建方作業中の橫撓と觀覽席勾配が、あまり急な爲めの水平分推力を考慮して、特に、Double web としました。

外部柱に使用した鐵骨の斷面は圖面でも見られる様に混凝土の密着と、梁鐵筋の貫通とを考慮しました。而して特に三階床面では外部柱の曲能率が大で、之れに連結する三階床梁の鐵筋のアンカーリングを考慮して、圖示してゐる様に鐵骨で補強して居ります。

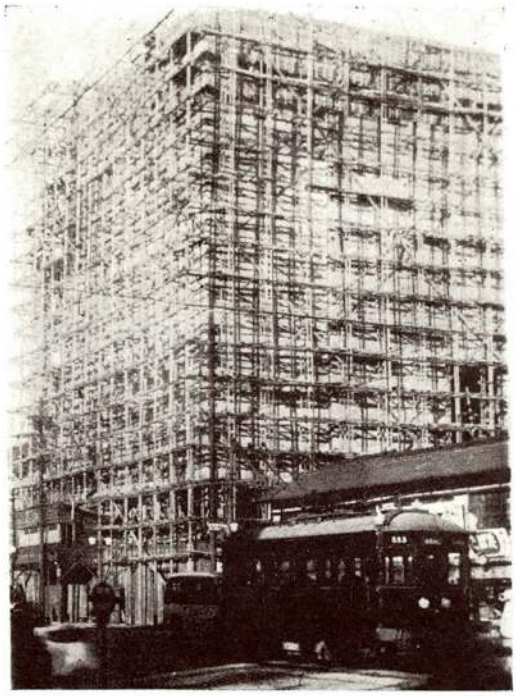
小梁の配置は煖房、換氣ダクト、エスカレーター、其他諸所に散在する階段等の關係から可成り混亂して居りますが、之れ以上整理する事は平面計畫が許さないでせう。然し出來得る限り One slab panel 式としました。其最大 panel は 6.363m×7.73m となつて居ります。

猶參考までに構造關係の數量を拔萃したのが次の表であります。

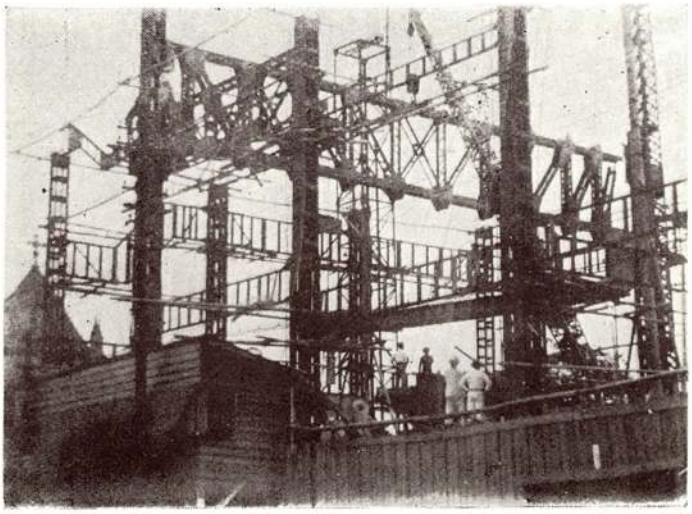
延坪	數量				延坪に對する割合				混凝土に對する割合		
	假枠	混凝土	鐵骨	鐵筋	假枠	混凝土	鐵骨	鐵筋	假枠	鐵骨	鐵筋
坪	面坪	立坪	瓲	瓲							
1,116	5,100	370	290	225	3,56	0.33	0.26	0.2	13.8	0.78	0.6



觀覽席大梁のエレクシヨシ

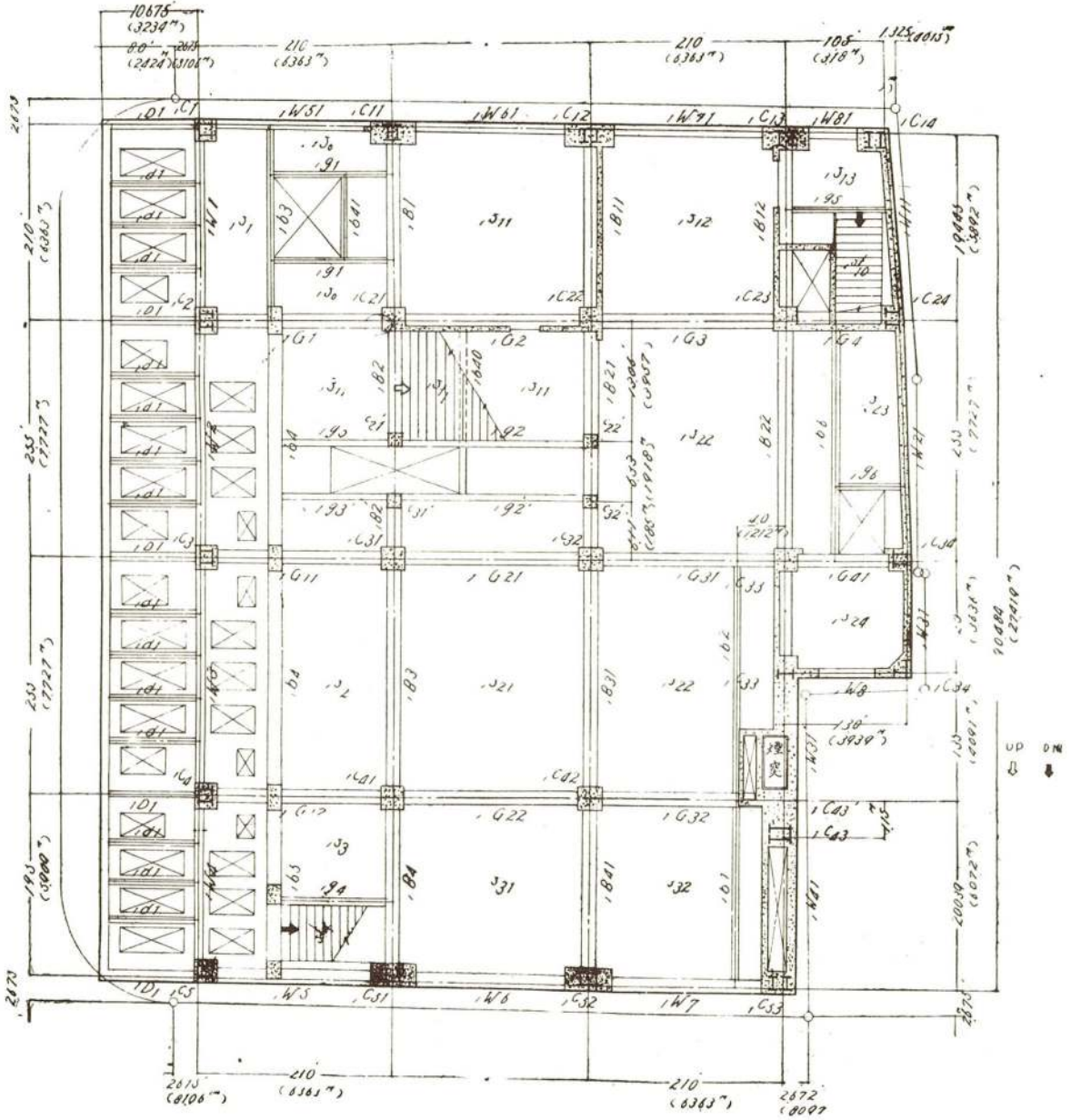


混凝土假枠及び足場



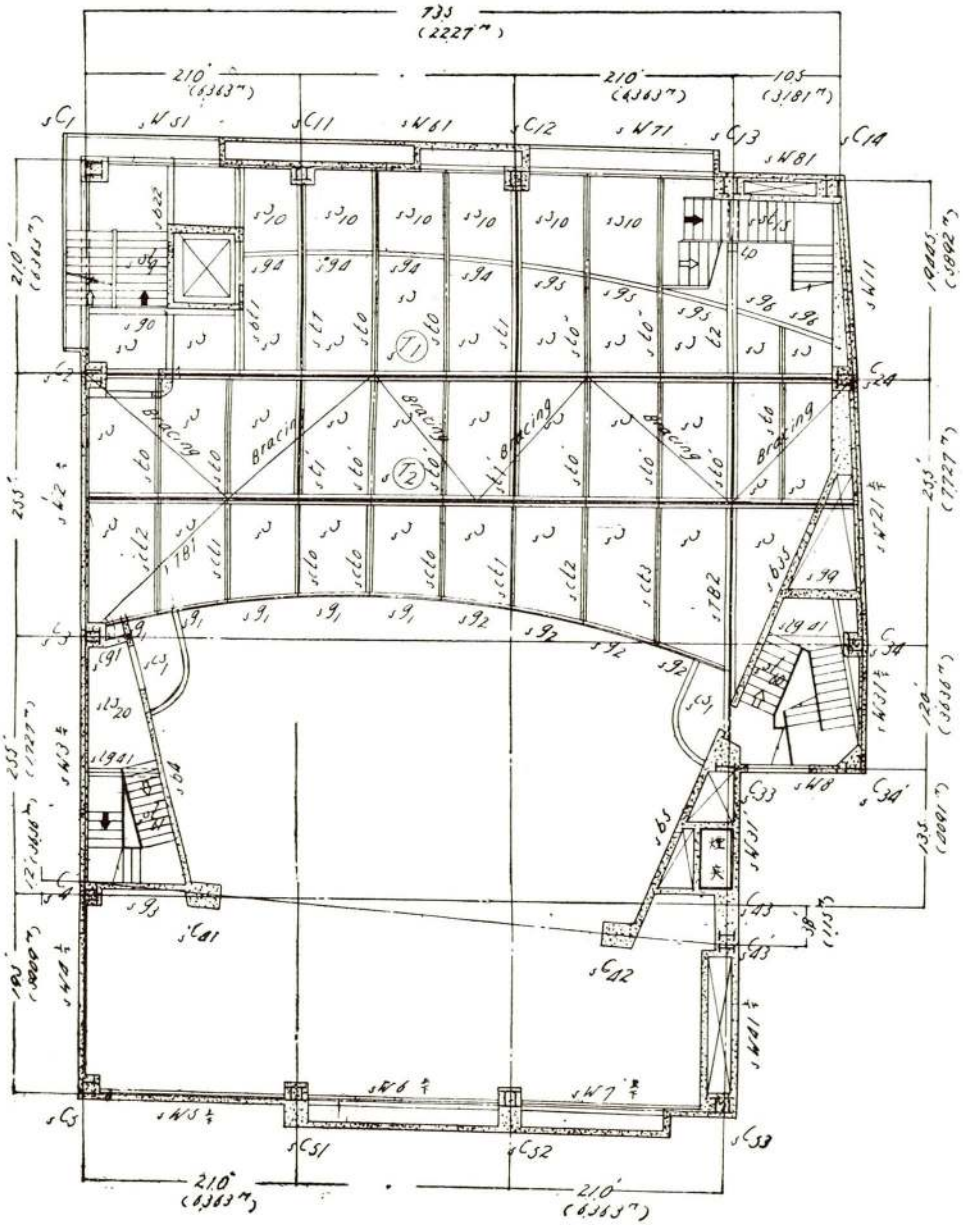
觀覽席大梁のエレクシヨン

1ST FLOOR



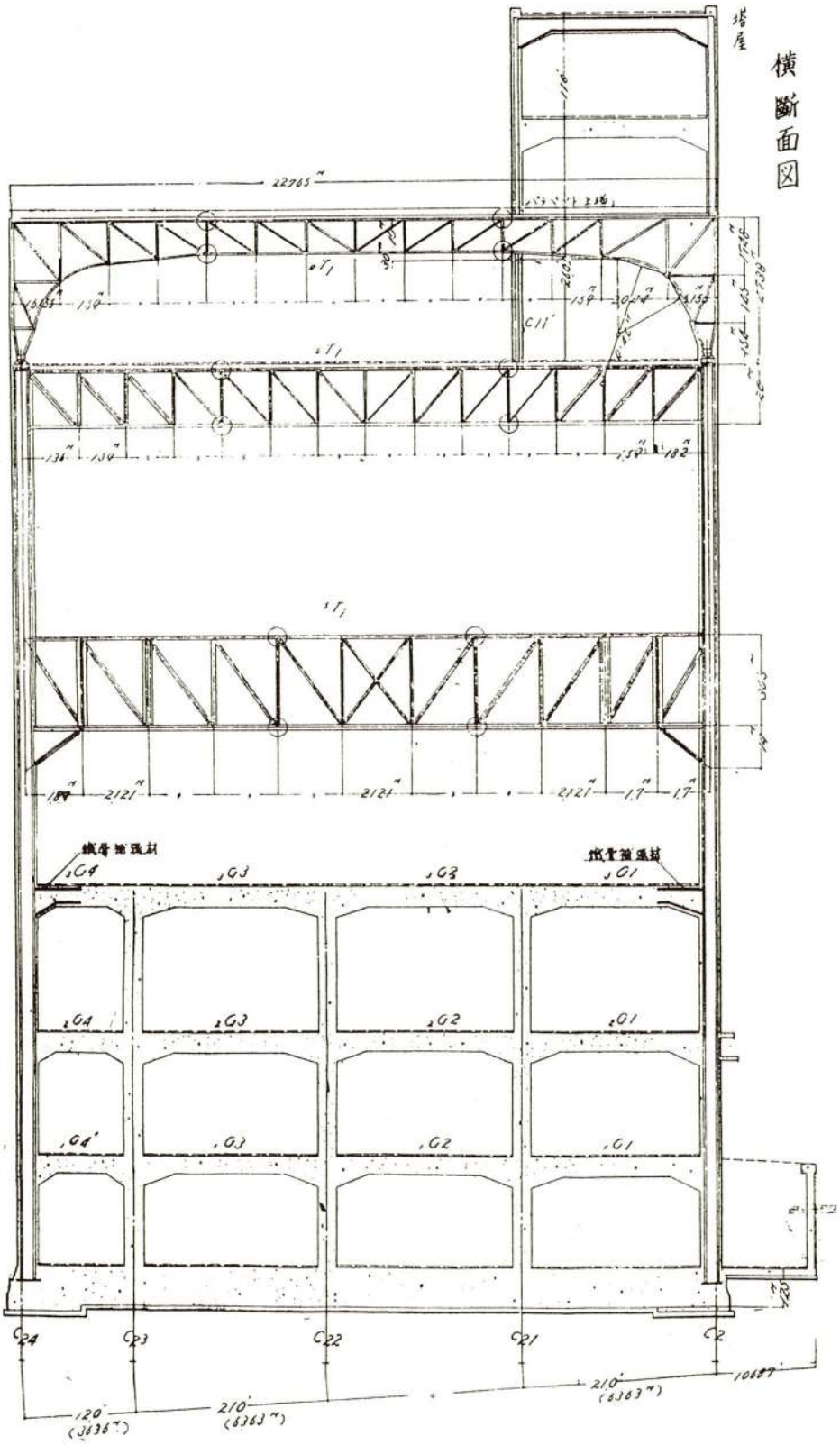
（京 都 朝 日 會 館）

5TH. FLooR.

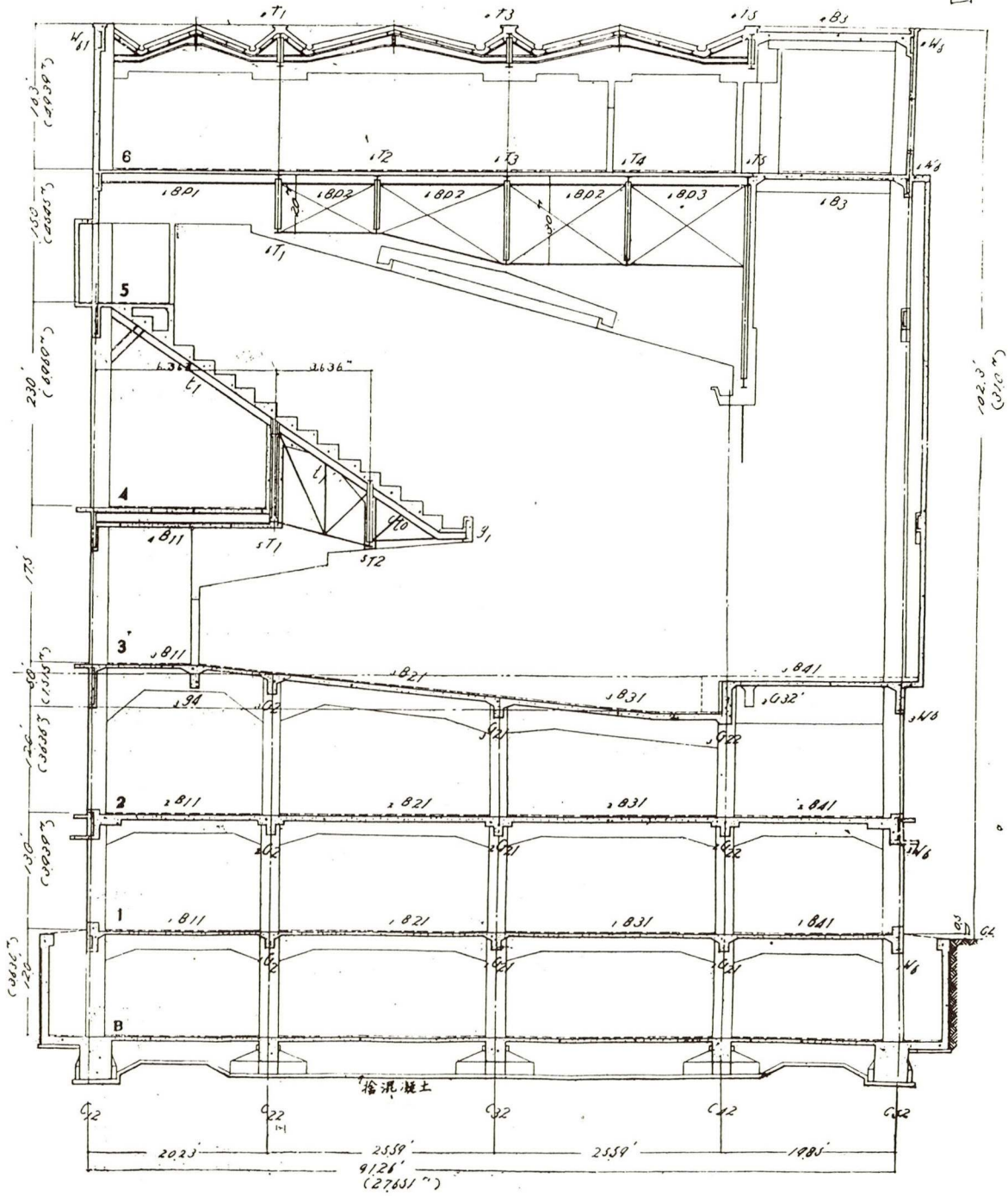

735
(2227m)
210'
(6363m)
210'
(6363m)
105'
(3181m)
C1
W51
C11
W61
C12
W71
C13
W81
C14
Bracing
C24
C34
C33
C43
C42
C41
C51
C52
C53
W5½
W6½
W7½
W4½
210'
(6363m)
210'
(6363m)

6TH. FLooR.




横断面図
塔屋
22765
C11
C24
C23
C22
C21
C2
210
(6363)
120
(3636)
10687

縦断面図


6
5
4
3
2
1
B
T1
T2
T3
T4
T5
B01
B02
B03
B1
B2
B3
B11
B21
B31
B41
G1
G2
G21
G22
G31
G32
G41
G42
G51
G52
G6
G7
G8
t1
g1
g2
g3
g4
g5
g6
g7
g8
g9
g10
3636
6.36
102.3'
(3120 m/m)
土捨場
2023
2559
2559
1985
9126'
(27651 m/m)

大阪朝日新聞社京都支局の基礎工事に就て

芹生幹二

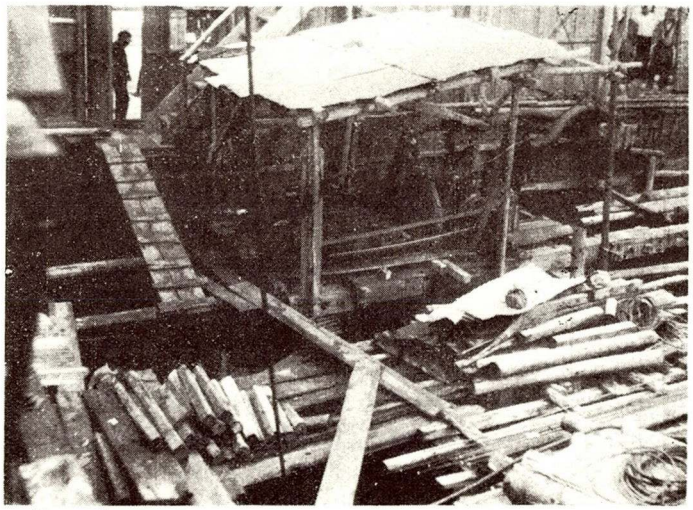
緒——排水——土留——根切捨土——鋪道下地下室工事——冷房井戸工事——防水工事——結

緒

河原町の稱ある此の邊の地質は地表土層下直ちに極めて深、砂利層が續いてゐる爲、非常に豊富な又冷徹な地下水が渤澎として流れゐるが故に、地下深く堀鑿して地下室を作る事は非常な困難が伴ふ。

排　　水

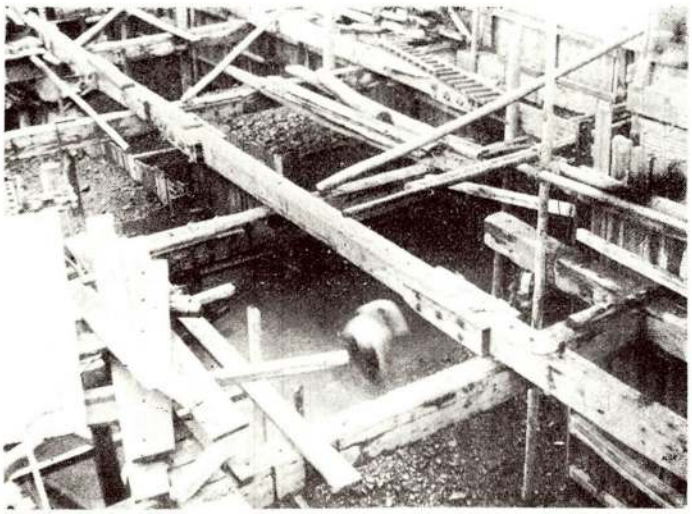
掘方、基礎下端迄 20 尺、底面積 200 坪、常水面 10 尺 5 寸、京都として此の場所に於ては特異なるものにして、その湧水量は量り知り難く排水作業は至難事とされてゐる。



排水作業

專門家は曰く「先づ加茂川の水を替へ切る決心を必要とす」と、茲に於て附近著名の建物を調査するに半地下室、或は基礎下端迄水中 2～3 尺程度のもの多く、湧水餘りにも多量の爲完全なる排水を爲す能はず、一部水中コンクリートにて施工せしを聞く。

經驗者の意見と尙充分なる調査とに依り、湧水量は約 100,000 石と假定、排水は 6 吋ヒユガルポンプ 15 馬力 6 臺、豫備 2 臺を設備すれば、先づ充分なりとの自信を得。之に要する排水溝は內徑尺 3 寸土管を 3 箇所車道下、市の大下水に直接連絡せり。工事用排水井戸は、井戸側木製、徑 3 尺、高さ 15 尺、を 4 箇所要所に配置して掘方の進むに從ひ沈下せしむ。又內徑 5 寸の捨土管を基礎捨コンクリート下端に縱橫に敷設し、地下湧水を此の假井戸に、完全に且容易に導き得らるゝ樣施工なしたり、假井戸 1 箇所に對して排水 6 吋パイプ 2 本を挿入、夫々自動スイツチを附し、モーターの加熱、ベルトの破

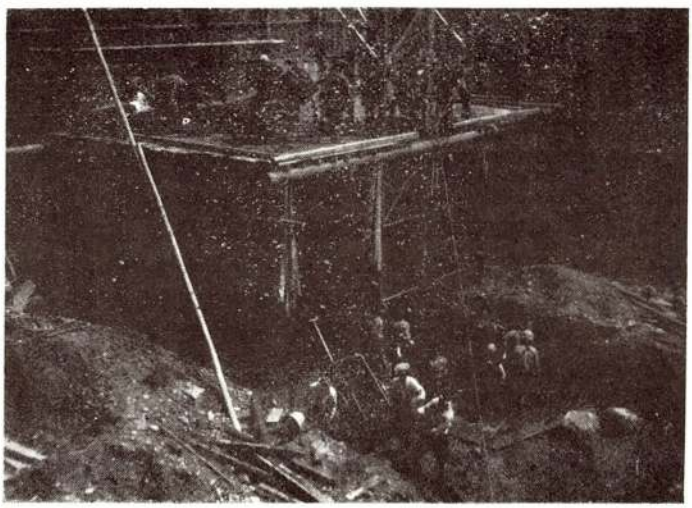


陸棚及根切作業

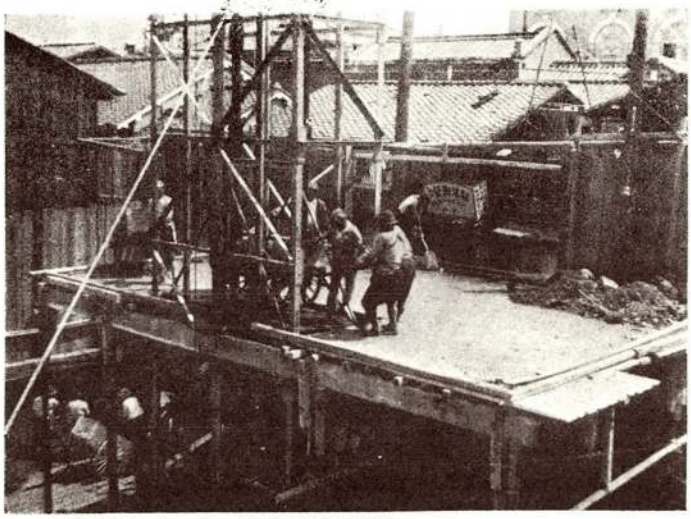
損、其の他種々なる故障を防ぐ爲に晝夜共ポンプ係員を置く、工事の爲に間斷なく排水する事に依り附近の井戸水の枯れるは必定。水質良き爲、一般住家には殆んど井戸あり、又井戸水を生命とする料理屋、旅館、湯屋、魚屋、等近隣に多し、此等特殊の家及共同井戸等にはパイプの打込み、繼足をなし苦情の餘り出ざる內に夫々適當の方法を講じぬ。工事の進渉するに從ひ井水の涸渇せるものは次第にその數を增し約4丁4方にも及びぬ、然し新聞殿堂として、此の工事に對しては町內は勿論、近隣の氣受もよく、格別の好意と難工事に對する同情とにて 5. 6. 7 の夏期を控へて、途中設計變更に依り、3 箇月に亘る繼續排水作業も無事好都合に終了せり。

土　　留

かゝる湧水量多き所にて地盤軟弱ならんか、排水作業に伴ふ土砂の排出、矢板足元及隙間より浸出する土砂の移動に因り、道路並に隣接地の沈下を防ぎ、施工するは容易ならざる事と考ふ。京都は地盤一般に强靱にして、可なりの工事にても適當の矩を附する事に依り土留作業を省略せる場合多く、只湧水に因る土砂の崩壞を防ぐ爲と、且安全なる意味に於て木矢板にて簡單なる土留作業をなす場合多し。本工事に於ては一般になされる如く50㎏レールを約 5 尺間に打込み、切梁は 35 角 2 尺 5 寸間に矢板は松材厚さ 1 寸 2 分巾 8 寸、を使用する事により土壓に對して充分なりき。陸棚は米松 12 吋角縱橫約 2 間毎に架渡し、兩端は同寸の腹起しに連絡なし、夾梁、ボールトを要所に締付け燧梁等は適當に配置せり、別に施工上變りたる事は無けれども、地盤堅固なる爲支柱打込は不可能なり。故に最初は長さ 1 間末口 5 寸丸太を假支柱となし、掘方の進むに從ひ 2 間丸太と取換へ支柱は陸棚の橫に建てボールトにて橫締となし、順次穴の位置を替へる事により陸棚



堀方及土揚作業



土揚用エレベーター及棚（根切作業）

を支へしめたり、故に荷重に對しては安全なれども陸棚の上部へ倒れざる様常に注意せり。側廻りレール打作業も地盤強固なる爲進渉せず長さ 25 尺もの、1 日に 7～8 本を打込みしのみ、最後の沈下 5 分內外にて、約 80 本のレール打の爲 150 貫の分銅の底部は凹型に變型せり。

根切捨土

A　根切掘方→トラツク積込み→斜面棧橋→場外搬出

B　根切掘方→地下肩引車→土揚用エレヴエター→土揚げ棚→トラツクに轉載

地下約 8 尺迄は水平移動に據る土砂搬出方法 A を採用、それ以下は斜面及敷地の關係上能率を考慮して垂直移動法 B に據り殘土搬出をなせり。當初工事を急ぎし爲土揚用エレヴエター 5′×10′×40′ 2 基、投光器 6 臺を設備して夜間も作業を繼續せり、最大能率 1 日 50 立坪平均 30 立坪の土砂を搬出する事を得たり。

鋪道下地下室工事

地下室掘方進行中前面鋪道下をも地下室に取入れる事となりたる爲め、主體工事と別箇に取扱ふ事とせり。2 階床版コンクリート打後車道と鋪道との界に 12 吋角木柱を 4 本建て、1 階の鐵骨柱と 4 本の梁木にて完全に結び付け、鋪道上の假事務所並びに市電サイドボール、送電用鐵柱の受方をも兼ねたり。次に掘方に伴ひ瓦斯水道管並びにケーブル等の支障埋設物の調査及び建物外移設の諸屆をなし、之等埋設管の將來沈下による故障の憂ひをなからしむる爲め、新設コンクリート外壁の適當なる箇所に鐵骨持送り金物を取付け置き新管を其の上に切替へ移設せり。尙鋪道床版には地下室への採光として、徑 6 吋丸型鐵枠付のデツキグラス約 2 千個を假枠上に 9 寸間に配置し、將來水漏れ等の憂ひをなからしめる爲め防水コンクリート打となし眞鍮目地棒入り、人造研出し仕上とせり。

冷房井戸工事

井戸側、鐵筋コンクリート造內徑 6 尺厚さ 6 寸、深さ水中 40 尺、湧水量約 10 萬石、水溫、華氏 56 度、用水量 1 晝夜 4 萬石。

近代建築設備工事の一として重要なる冷房設備の生命とも云ふべき水は此處に於いては些の心配もなく此の豐富清澄なる地下水を充分に使用する事により豫期以上の成績を擧げ得られ華氏58 度の冷徹な水溫は高價なる冷凍機の設備を不要となし、空氣洗滌裝置により場內の空氣を冷却洗滌し溫度 80 度濕度 60% を越えしめず、冬期も亦空氣洗滌加熱機により、溫度 68 度、濕度 50 % を降らざる快適空氣狀態を持續せしめ得られたり。

井戸側沈下作業

先づ水面まで掘方をなし、井戸側底部に一分厚鐵板斷面 V 型の沓金物を取付け、第1回高さ2間の井戸側コンクリートを現場打となし充分硬化したる後、内部の土砂を攪拌、浚渫なし、漸次沈下なさしむ。最初は1日平均4尺程沈下すれども、井戸側を打接ぎ上部に適當の荷重を架け沈下せしむるに周圍の摩擦と内部土砂の浚渫及取出も意の如くならざる爲、水中 30 尺位迄は1日平均尺5寸程度より沈下せず。工費平均尺當り材料手間共約50圓を費せり。湧水量多き故沈下作業は總て井戸側上部より、適當なる土揚げ工具にて作業なすものにして豫期せざる岩石等に突當らんか潜水夫を入れ除去作業をせざる可らず。

幸ひ無事好都合に垂直に沈下せる爲、將來近隣に大建築の計畫さるゝ場合と且又水位の減退とを考慮に入れ更に 10 尺增掘をなせり。此の場合井戸側の沈下は1日平均1尺未滿にして、6 吋揚水ポンプ3臺を同時に働かし、湧水量を檢査するに水中 15～16 尺より水位下らず湧水量豫想外に多く所期の目的を充2分に達す。

防　水　工　事

湧水多き地下室に於ては外防水は絕對不可能にして、内防水と云へども防水下地を充分に乾燥し得られず、故にアスファルト防水にては完全を期し難し。假に内防水にて爲さんか施工中ポンプの故障停電等の爲に折角の防水を無駄にする憂ひあるのみならず、防水押へコンクリート打の爲、室内の貴重なる、スペースを空費する缺點あり、故に防水コンクリート施工法に據れり。

防水劑は鑛物質にして塗繼可能なるロータスを使用せり。之が施工としてミキサー内にセメント容量の 20 分の 1（コンクリート、1 立坪に對し約 200 封度）を混入し常水面以下のコンクリート打繼ぎを避けるため連續コンクリート打作業をなせり。防水コンクリートの打繼ぎをなす場合は繼手を斫り、接觸面の不純物を除去したる後打繼ぎなせば可なり。

尙此の場合、安全なる意味に於て防水モルタルを繼手の箇所に使用せば充分なり。

本工事にては、床排水其他會所等は湧水の關係上、後より斫り施工し得ざる故充分なる計畫をなし、排水用として給水用内厚鐵管を床下に埋設し、周圍8寸厚コンクリートにて被覆、鐵管の將來腐蝕するとも、外部より水の浸入せざる樣考慮す。便所床等の配管特に多き箇所は2重床版となしたり。

鐵筋及び結束線等の防水コンクリートに完全に被覆されざる場合は、其の周りより毛細管現象により、水氣を呼ぶ虞れあり故に假枠締付用セパレーター等はコンクリート打の際注意して除去又は突落す樣なしたり。斯くする事により問題の地下室も普通セメントを使用せる防水コンクリート打により成功せり。要は注意と入念なる施工法に在る樣に思はる。

結

幾多の前例なき内容を有つ京都隨一の高層深層建築も全員の協力により全工事を通じて無事故にて期間内に目出度完成せるは誠に天佑とも云ふべく神の加護の、特に厚かりしは勿論なれども新聞社の事業とその懿德の、然らしむるものと深く信じ、山紫水明の古都に建つ此の新聞殿堂の永久に榮あらん事を祈る次第である。



〝大阪株式取引所〟の建築を語る

（五十音順）

石田信夫氏（大林組取締役 営業部長）

今林彦太郎氏（大林組理事 設計部長）

岡野衛士氏（大阪株式取引所 市場課長）

葛野壯一郎氏（葛野建築事務所長）

河合貞一郎氏（大林組営業部次長）

作間日出生氏（長谷部竹腰建築事務所 大株現場主任）

境正一氏（大林組大株現場主任）

竹腰健造氏（長谷部竹腰建築事務所 常務取締役）

東畑謙三氏（東畑建築事務所長）

中澤誠一郎氏（大阪府建築課長）

波江悌夫氏（波江建築事務所長）

岡田孝男　島田良藏　新名種夫

昭和10年5月9日
於 朝日ビル本みやけ

新名——今晩は日本建築協會の主催で、新らしく出來ました取引所の建築について皆樣の御高見を伺ひたいと存じまして、お忙がしい處をお願ひ致しました處多數お出で下さいまして有難う御座いました、これから座談會に移りますが、葛野先生に司會をして頂きまして、みな樣の御批評をお聞かせ頂きたいと思ひます。

葛野——私に司會せよといふことでありますから甚だ僭越でありますが、御命令に從ひましてお話を取纏める役目を致します、一體私は常に思ひますが、日本の現狀で、建築物の正しい批判がないといふことが一つの缺點ではあるまいか建物に對してどうも批判といふものが缺けては居はしないか、公平にこれをやることは、建築を向上する所以で非常に大切なことであらうと思ひます、今晩はどちらかと申しますと、取引所の建築に御關係の方々が多數で、第三者といふ立場にある方は極く少數のやうでありますが兎に角おやりになつた方々にしましても又何か御計畫中或は又御施行中種々御考になつた點も多々あることゝ思ひますし、その邊忌憚なくお話を願へば大變結構だと思ひます。又第三者の立場で御出席になつて居る方もあるやうであります、その方々にも腹藏なく御意見等を拜聽するやうに出來ましたら之亦結構だと思ひます、如何でせう、先づ緒を竹腰さんに一つ、何から何つていゝか判らぬが、一つ緒を何かお願ひしたいと思ひますが。

竹腰——それでは、今度出來ました株式取引所建築の設計に當りました私から大體の經過、建物の施設について極一般のお話を致したいと思ひます、取引所建築といふものは日本では今相當に大きいものでは東京市場があります、外國には昔から有名なロンドンのローヤルストツクエキチエンジ、パリのブルース、紐育ウオールス、スツリートのストツクエキチエンヂ等があるのでありますが、外國のものは取引の方法が全然違ふ、稍似通つたのが東京の取引所でありますこの設計を初て委囑された時に私共感じましたことは、取引所の機能といふものが一體どういふものであるか、私共は大體取引所の方と同じ位の取引の方法、取引所の機能について研究し智識を有たなければいかぬといふ考を持つたのでありまして、こゝに居られる市場課長の岡野さんによく聞き、又東京の市場なんかよく見せて頂きまして、さうして大體に於て之なら設計に着手出來ると云ふ自信を漸くにして得られましたさうしてぽつぽつ設計にかゝつて見ました處が解つたやうでなかなか解らない、入つて見れば入つて見る程非常に六ケ敷い、それで設計の最後の頃になつて、やつと取引の方法又取引所がどういふ機能を有つて居りどういふ機關が必要であるかと云ことが解つて來たのであります。設計當時は私共まだ住友に居つたのでありますが、住友といふ處は大變やかましい處であつて、取引所の近所を餘りうろうろして居ると睨まれちやいかぬ、睨まれなくても餘り近寄つて、立會つて居る處を見たりするのもといふやうな處から遠慮をして居つたのでありますが、まア併しさういふことを云つて居ちや出來ないからと思つて充分に見せて頂き研究もし現在の取引所の計畫が始つたのであります、初めの計畫は、前理事長の濱崎さんの御意嚮として割合に小さかつたんです、處が、取引所の他の幹部の方々が將來30年40年の先のことを思ふと、どうしてもさういふ小さなものではいけない、出來る丈大きなものにして置かなげればいけないといふお考で次第に計畫が大きくなり、今日の規模になつたのであります。大體取引所の建物は東京の取引所などを見ましても、市場といふものが、特殊の建築として必要です他に取引所の事務所の建築が必要なのであります、東京市場で見ますと正面の一番いゝ處は事務所の建築が占めて居て、市場はその裏にあります、それから外國の方ではローヤルストツクエキチエンヂ、パリーのブールスも市場が主になつて居ます、又紐育のエキチエンヂは非常に高い建物の上になつて居ます、諸所の市場を見て廻つて痛切に感じたことは建築家に取引の方法、それから株値の表示方法といふやうなことを理解することが非常に困難であると云ふ事でありまして今日まで建つて居るものを見ますと、建築家は建物を建てる、建物が建つたその後で株式取引所として必要な機關である株値の表示、その他の必要なものを後から大體くつ着けられる、といふことになつて居た樣であります。次第に研究して行きますと大阪株式取引所でも、東京でも取引所の要求されて居る株値段表示は非常な

量でありまして、建築家は建築、取引所は表示といふやうなことにして居ると出來上つたものは雜然とした纏りのないものになりはしないかかういふ心配があつたものですから、表示すべきものを充分に相談もし研究もしてそれを建築的に入れてしまつて、場内が雜然とすることを防ぐ事が設計上必要なことゝ感じて、大體さういふ方針で進んだのであります。それから第2に光線の問題でありますが、御承知のやうに株式取引所で立會をやつて居る間は取引員は非常に過敏になつて居つて、暗いといふことは禁物で、どうかして出來る丈明くしたいのであります。又種々の株の表示、參觀席といふやうな要求も入れて、尙且明いもの、大きなホールとなる事が必要であります。それから第3に音響の問題ですが、これは非常に六ケ敷い問題で、普通の劇場だとかオーデイトリアムとかのものを直接應用することは出來難い、それはどういふ譯かと申しますと、立會場に立つて居る人は一番多い時には 2,000 人以上にはなるだらうし、非常時には熱狂して喧騒を極める、この騒音全部の反響を出來る丈吸收してしまはなければならない、さういふ事のある一方には同時に今度は高場に居つて立會を進めて居られる人の擊折の響、又は發聲とは出來る丈響かせなければならぬ、この事は音響の方からいふと、非常に矛盾するのでありますが、これはどういふ風に解決したらいゝかといふことには、非常に苦心したのであります。大體方針として立會場の喧騒音は壁に吸取らせ、又天井にも出來る丈吸取らせる、それから高場に居られる取引所の方の擊折其他はその後の方に板でも張つてこれをサウンヂングボールドの樣な働きをさせて前に反響させる、大體かういふプリンシプルで進んで行つたのであります。併し建物としましては音響の方から云ひますと、天井が高いといふことは非常に悪いのでありまして、天井が低い程間違ひが少い、處が取引所からはなるだけ天井を高くして呉れといふ注文があり現在は52尺あります、又光線の方から云ふと、トップライトをとると市場が明くなりますが硝子に音が反響してレゾナンスが起りはしないかといふ懸念があり非常に心配しました、これは大變冒險ではあつたんですけれどもトップライトを或る程度迄とつて見やうと云ふ事にしました。それから市場で一番中樞となるのは電話席であつて、電話席に各仲買人の司令部がある譯です、その司令部に座つて居つて、殆ど世界中の商況、株界の動きを一目見てさうして作戰をするのが、その建前なんでありますが、御承知のやうな廣い處で一所に電話席がある、それで、短期の値が變る、長期の値が出る、東京短期、國債の値が變る、實物の値が變る、又海外市況といふやうなものを一目で振返らずに見られるやうなことにしなければならぬのでありますが、是れは設計上非常な困難な事であります、その結果大株の方でも種々と研究されまして、假市場を造られてそれについて研究されたのでありますが、其結果現在のやうな形を採られたのであります、此目的の爲にはどうしても少し橢圓にした方が見よくなります、一ケ所を中心にして見るのに便利になる、處が偶々土地の恰好が非常に不規則でありまして、さう云ふ風に曲げるのに大變便利に出來て居つたものですからこの不規則だつたといふ土地の形が却つて取引所の爲には或はよかつたんではないかと思つて居ります、これ丈が大體設計の重點で御座います、その他に取引所として種々の習慣があつて、高場は北から南に向いてはいけないといふやうなことがあり又立會場の上の方に階を設けるといふやうなこともよくない、之等のことを綜合して現在の取引所の設計が出來たのであります。初めは玄關を入つた處は圓形であつたのですが、立會場を廣く廣くといふことで段々と押出されて丸いのが段々潰れて來て楕圓形になつたのであります私共は楕圓と思つてますが、最近の新聞を見ると小判形と命名されて面喰つて居るのでありまして、ものもとりやうで楕圓も小判にも見えるなと思つて居ります、(笑聲)その後は設計も進んで工事に着手したのでありますが、工事については直接現場の主任である方、又施工者側の現場の方その他の方々がお話になることゝ思ひますが、私は最後に、初め計畫したことが出來上つた後にどうであつたかといふことについてお話したいと思ひます、一體一番心配して居つた電話席から一目にして全部を見るといふことはこれは相當に効果を納め得たかと思つて居ります、それから俗といつては甚だ失禮でありま

すけれども、餘り美術的でない株値の表示を建築のトリートメントの中に整理したといふことも今日他の市場に見るが如き雜然たるものがないといふことを以て相當の成果を納めた事と私は自信して居るのであります。それから光線の方でありますが、これも初めは大體クリアストーリライト丈でいゝと思つて居たのでありますが、今日のやうなトップライトをとつて見ますと却つてトップライトをやつてよかつたんぢやないかと考へられて、明さの點については充分滿足の結果を得たと思つて居ります、それから音響の點でありますが、これは一つのプリンシプルで以てずつと進んで來た、相當までは行けると自信を有つて居ましたが、天井を硝子にしたことゝ、天井が高過ぎたことの爲に、心の一隅には多少不安が伴つて居つたのでありますがこれも非常に滿足な結果を得て實際ぶつかつた方から聞いて見ますと、非難が少しもないと云ふ事でして又實際反響もありませぬ、又高場の方の聲も割合通るやうであります、最後に私はこの建築中で一番心配したことがあるのでありますが、それは4月の26日であります、愈々本市場の建築も大體出來上つたので、初めて取引員の方に使つて貰ふ爲め假立會をして見やうといふ事になりました、この日は不安な顏をして居つて引目を感じさしてはいかぬと思つて、皆大きな顏をして居りましたけれども、前の晩から非常に心配をして居つたのであります。何故かといふと、この建物は200萬以上の金を使つて2ケ年苦心して出來上つたのでありますが、要するに問題は市場を造つたのでありまして、この市場が使ふに不便だとか、音響が惡いとか札の出具合が惡いとか、電話席が都合が惡いとか、光線が惡いとか、さういふ風なことを云はれたとなると、2ケ年の苦心も巨額の建築費もけし飛んでしまふのでありまして、如何に設備が立派でも、外觀が立派であつても何にもならない、云はゞ26日には試驗をされることになつたのであります、この日は私も非常に心配をして居つたのであります、殊にその日の試驗官といふのは 2,000人からの仲買人の代理人が主なるものでありまして、これらの人といふものは非常に神經過敏であつて、一寸したことでも、非常に氣になる、我々が大したことではないと思ふことでも非常に氣になる方々が多いのであります。それから取引所の方々も、殆ど第六感で仕事をして居られるのでありますから、理窟なしに何となく具合が惡いといふやうなことでもあると餘程それが氣になるらしい、さうして實際惡いと云ひ出したら待てしばしがなく、直ぐ替へてやり直すといふやうなことになつて居ります。實はこの取引所の建築中この日の前晩と、その日の午前程私は心配したことはなかつたのであります、假立會の時は理事長、理事が揃はれ、普通と同じやうな立會をされたのであります。普通と同じばかりではなく、何しろ初めての假立會といふので、不斷出て來られない代理人の方も全部出て來られ、約 2,000人近い方々が入られたのを見ると流石に廣い立會場も殆ど一杯で、これぢやとても私は初から狹くて駄目だろうと思つたんですが後で聞いて見ますと、あゝいふことは非常時のことで、あれ丈の人は常は出ないといふ話で稍々安心したのであります。その時の結果は私が豫期した以上によかつた、1.2お話はありましたけれどもこれは設備してあつたものをお使ひにならなかつた爲に起つたことでありまして、あれならば先づ滿點だといふやうなお褒めの辭を賜つて、2年の苦心が酬ひられ大にその晩はよく眠られたといふやうな次第であります。工事も風水害に災されまして、可なり苦心をし工期も延びて居ます愈々開業式の日が迫つて居るに拘らず掃除など遲れて居りました外部の方はこの點ばかり心配されましたけれども、私はこれは自信を有つて居りました、施行をされて居るのが大林さんのことですから、期日までには完全に出來るものと自信をして居りました、その點についての苦心よりは25日の夜、26日の朝の心配といふものは一通りではなかつたのであります、大體設計及その効果についての話はこれで終りたいと思ひますが、最後に大林組の現場主任境君の熱心と努力が非常のものであつたことをつけ加えておきます。

葛野——如何でせう、岡野さん何か……

岡野——大株市場を建築しまするについては、その計畫は隨分昔からあつたんで御座いますけれども、種々の事情から延々になつて居りまして漸く前理事長の濱崎さんの時に具體化したやう

な次第であります、その前の時には昭和2年であつたと思ひますが、前々理事長の時代にあの敷地に下をビルデイングにしまして、5階以上を市場にするといふ計畫の下に相當大規模の計畫が立てられたんですが、エレヴエーターを用ひるといふことはどうしてもいけないと云ふのでその點で中絶致しました、それから昭和6年でありますが、濱崎理事長の時に愈々建築をやらうといふことになりまして、計畫を進めたのであります、その時先づ第一に規模をどうするかといふことが一番問題になりました、種々昔からの取引所の建物、敷地の變遷といふやうなものを歷史的に調べて見ますと、明治27年にはその以前は一寸記錄が御座いませぬが、明治27年には市場が93坪であつたんです、それから32年に、日清戰後の財界の膨脹で建增しましたのが194坪あつた、それから10年後日露戰後に矢張りそれで狹くなりまして305坪になつて居ります、それから大正11年に現在行はれて居つた短期取引が出來まして、市場が狹くなつたんで從來の建物を潰して24坪ばかり廣げ329坪になつたのであります、それからずつと最近まで來て居つたのでありますが、この經過を見て見ますと、明治27年から最近までに約3倍餘になつて居ります、40年間に3倍ばかり增へて居ります、これでゆきますと、小さい計畫では10年先にとても狹くなるといふことからですね、あの敷地の最大限度まで市場を造らうといふ計畫になりました、今日出來上りました結果によりますと敷地は 1,225 坪御座いますが、その內建坪1,022坪、尙その內市場が立會場として691坪、その他の參觀席、それから一般參觀席と特別參觀席とありますが、參觀席と貴賓室などを合しますとそれらのものが218坪、これで、實際市場として見る處が910坪になつて居ります、これは前の市場の約3倍といふことになつて居ります、これなればこれから30年位經ちましても大丈夫やつて行ける、40年後でも大丈夫行けるだらうといふ見込を有つて居りました次第であります、斯樣に致しまして、あの敷地の最大限度まで使ふといふ處から、竹腰さんの方にお願ひ致しまして、種々計畫を樹てゝ頂きましたんですが、先刻も竹腰さんから仰言つたやうに建物の品位如何といふやうな點から、玄關なども丸くおとりになつて、相當廣くおとりになつて居つたのでありますけれども、最大限度まで市場に使ふ、只外部の電車通りの音響さへ防げればいゝ、他の室は犧牲にしても構はないといふ處から、出來る丈市場の爲に計畫を擴げて頂きまして、あの建物としては最大限度まで市場をとつて頂いた次第であります、その次は建物と致しまして、私共の考へて居りましたものは、あの敷地は恰度難波橋の向ひになつて居ります交叉點であります關係上非常に目立つ處になると思ひまして、さういふ處から外觀も出來れば一目してこれが大株だ、これが取引所の建物であるといふことが判るやうに一つ特色を有つた建物にして頂きたいといふ希望を有つて居つたのであります、處が出來上りました結果は圖面なり模型なりでも想像は致して居りましたけれども、出來ました結果は私共が想像して居りました以上に堂々たる立派な建物である、實の處私は素人で建築のことは解りませぬけれどもなかなか立派だといふ風に考へて居ります、それから市場と致しましては明い實用的の市場であるといふことが一つの私共の希望でありましてこの點は出來上りました結果によりましても外からの光線が充分にとつてあり、餘程曇天でない限り電燈を用ひないでもやれるといふ自信を有つて居ります、それから便利な市場といふ點に於きましては、種々私の方の勝手な希望を申上げて竹腰さんの方を隨分苦めたんで御座いますが、出來上りました結果については非常に結構のやうに思ひます。この今の市場を建てます前に假りに臨時立會場として假市場を建てましたので約300坪の敷地、建坪270坪ばかりのものを建てゝ頂いたのでありますが、これを一つ試驗臺にして新市場を考へやうといふ處から假市場を建てる時に於きまして、種々新規な方法を施したのでありますが、これが一つの基礎となりまして、非常にいゝ結果になつたやうに思ひます、これで先づ高場及立會場それから電話席とこの三つの關係が非常に都合よく出來て居ります、全國にない便利な市場になつて居ると思ひます、先程市場を御覽下さいました時一寸申上げましたが立會場と電話席の連絡としまして非常にうまくやつて居ります、あの電話席から自由に立會をする人と合圖が出來るといふの

は恐らく大阪の市場が最初ではないかと思つて居ります、極度に敏速に取引をするといふ處から現在の立會場と電話席の連絡といふことはあれ以上の方法を考へることは困難であらうと思ひます、今度の市場の特色としましては、立會場なり高場なりを楕圓形に致しまして、市場のどの一點に立ちましても、市場全體が一目の内に目に入る、何處でも見えるといふ點が、非常に新らしい試みでありました、昔は大株に於きましても直線式の市場でありましたが、ずつと眞直になつて居るものですから、端々がさつぱり判らないといふ欠點がありましたが、楕圓形となつて居るといふと、端から端までずつと見透すことが出來るといふ長所があります、これは市場として新らしい試みでありますが、結果に於きましては非常によかつたと思ひます、それから通信設備でありますが、電話はこれからの市場と致しましては最も活用さるべきものであると考へまして、その數をあの市場としては出來る限り殖やしたのであります、總數は席と致しまして、541 席設けて居ります、これは從來の大株の電話に比較しまして2倍半になつて居ります、恐らくこれ丈の電話を收容して居る處は稀であらうと思つて居ります、それから高低相場の表示裝置のことであります、俗にこれを高場と申して居りますが、昔は決定値段を現はしますのに漆塗の札に胡粉を以て値段を書いて居つた、それは字の上からも非常に醜いばかりではない、胡粉の爲に健康上も非常によくないといふ處から、それを今度種々研究致しました結果押ボタンにして表示し、それから差込式表示機、それから尙各部屋に電氣裝置による處の自動表示機といふ三つの方法を採用致しまして、札の表示としては恐らく日本は勿論世界にも稀な方法だらうと考へて居ります、これも最初は隨分懸念致しまして、果してあの表示機でうまく相場が表示出來るかどうか、市場が混亂した場合にうまく處理出來るかといふ危惧も抱いたのでありますが、先程竹腰さんが申されたやうに去る4月26日の立會豫行演習に於きまして、平時の數倍の取引狀態を示したのでありますけれども、完全にこれを消化することが出來ました、うまく表示することが出來たのであります、私共まア安心致しましたやうな次第であります、それから音響の點で御座いますが、これは何分毎日 3,000 近くの人が入りますので從來の市場は雜音が多かつたのでありますが、今度の市場に於きましては、非常にうまくなりました、雜音は一つもない、高場が非常に徹底するといふ結果を來しました、この點は非常にうまく行つたと思つて居ります、要するに私共の考へて居りました市場といふのは與へられた面積の範圍内に最大の能力、最高の能率を發揮することが出來るやうな市場にしたいといふ考を有つて居つた譯でありますが、幸に、竹腰さんの研究と作間さんなり境さんなりの御努力によりまして非常に結構な市場となりまして、喜んで居る次第であります。取引所の局に當りますものは理事長、重役を初め係員一同種々内部の諸設備について苦心を重ねました、1 枚のカード1本の電線にも悉くあゝでもないかうでもないと研究を致しました、その結果が漸くまアあゝいふ風にして頂きました。例へばサイレンの如きも、これは市場開始の合圖のサイレンでありますが、あの音を出すについても餘程苦心を致しました、一般のサイレンが恰度甲子園の野球のサイレン見たやうに最初はブーと弱く成つて段々强くなりますが、終にはスイッチを切るとヒユーと終になる程小さくなつて來ます、あれは終りになつて下るので私共としましては面白くない、矢張り恰度相場のやうに最初はブーと上つて來つてそれから下つては面白くない上つた處でパツと止まるやうにしなければならぬ、そこで力强く止つてくれなければ困るといふので、伊吹製作所に數回參りまして、試驗を致しました、向うでも種々と研究をしまして、音が上つた處でぱつと止る裝置をして呉れました、それで非常に好評を博して居る次第であります、さういふ風に僅かなことでも非常に苦心を拂ひました結果、非常にうまく行つたやうに考へて居ります。

葛野——敷地は今度廣くなつた譯ですか、前の敷地ですか

岡野——前の敷地です、恰度交叉點から假市場の境の處までで、あそこには市場と事務室と兩方あつて、事務室は交叉點の處で、赤煉瓦であつた、あれが事務室だつたんです、それを全部潰してしまつて全部を市場にした、敷地はあれ丈

です。

竹腰——あの工事にかゝります時に、確かあれは片岡さんの處でお建てになつたんでしたね、郵便局と一緒に。

葛野——さうださうだ。

竹腰——あれはエピソードになりますが、あれを壞すにすゞ壞れるものと思つてかゝつたんですが、これがなかなか壞すに骨が折れ、これが爲に餘想外の日數を費しました。

今林——電車側ですか。

竹腰——西北です、西側です、郵便局と貸事務所になつて居つた。

波江——あれは大正 5～6 年でしたかね。

今林——もつと古いです。

境——大正２年。

今林——赤煉瓦でせう、浪花亭の方の。

岡野——あれは一番東側ですが、西側の方です、大正２年か３年です。

波江——柱間が大きいのは３間位でせう、壁は薄いのではいかぬといふので、厚いのにした。

葛野——作間さんどうです、現場として。

作間——私は只竹腰さんの命に從つてやつた丈で何も苦心といふことはありませぬ、只現場係として自分は殆ど銀行ばかりやつて居つたものですから、取引所といふ性質が充分判らぬのでその點は一寸困りましたけれども、やつて居る内に段々と判つて來ましたので、まアまア命令に從つて後を仕上げた丈でありまして、別にこれといふことはありませぬでした、只あれ丈の工事をやりますのに普通今までの記憶によりますと、先づ延人員 30,000 乃至 40,000 人位に 1 人位の犧牲者がよくありますけれども、約 160,000 170,000 に近い延人員を使ひましたけれども1人も犧牲者はなかつたといふことは取引所の方に對してもまア非常に緣喜がよかつたと喜んで居る次第であります、その他大林さんの方で非常に御努力下さつたことを喜んで居ります。

葛野——犧牲者が出ちや大變取引所で具合が惡いでせう、現場の天井から落ちたとか何とかいふのはどうも相場の方にも影響しませう。

作間——墜ちるのはおちましたけれども死なかつた、不思議に怪我はしましたけれども、これは駄目だなと思つたのが皆助つた。

岡野——その代り濱崎前理事長が１人で。

葛野——1 人で死なれたんですか。

岡野——落成を見ずに死なれたのは非常に殘念でした。

葛野——惜しかつたですね。

竹腰——まア珍らしいです、あれ丈の工事で１人も犧牲者のないのは。

作間——普通なら 4～5 人は出ます。

波江——經費全額どれ位ですか。

竹腰——1,800,000圓

葛野——境さんどうです現場の方から。

境——石田さんやつて下さい。

葛野——どつちでも結構です。

石田——あれ丈の大建築を私もやり上げたことについては竹腰さんなり作間さんの努力と御指導といふことに對して非常に感謝して居る譯であります、大體のアウトラインについては自信も有つて居りましたが、主なる事務的の方面は河合君がやる、現場は境君がやつて居つたので細かいことは兩君からお話もありませうが、私は材料買付のお話をしませう、一寸波江さんから工費のお話が出ましたが、最初昭和８年５月 5 日にこの基礎の根伐工事を13萬餘圓先に頂きました、基礎工事も急ぎましたので私の方でこれは約18萬圓一寸切れて居ります、18萬圓程で決めて頂きました、その内９年の１月25日になつて、工事を願ひましたが、これは少しごたごたしまして、最初全體の金高が約 182 萬圓と 187 萬圓と二樣に提出致しました處が、どうもこれ丈の金がない直轄事業にしやう、終に直營でやらうといふことで、結局主體工事を83萬６千圓程で契約しました。それからまア直營委託工事とでも申しますか、これが23萬圓程あつて、結局私の方でやりましたのは 140 萬圓一寸切れる位になつて居ります、その他に今申上げました鐵骨電氣雜作の一部、床の一部、金物の一部分といふものは直營でやられました、只私の方で非常に困つたことがありますが、それは直營工事が多かつた爲に大變に現場の工事として連絡が取り難く、これが工事の進行に多少の影響はあつたかとも思つて居ります。

竹腰——建築工事の内、今石田さんのお話のやうに 140 萬圓になつて居りますが、20～30萬圓は私の方でつまり全部見積なんか決めて、さうしてそれに手數料を出して大林さんにやつて貰ふ

ました。

石田——それが今の直營委託工事といふ奴。

波江——さうすると煖房、衛生、換氣設備などは直營ですか。

竹腰——それに建築仕上は殆ど直營です。

石田——それだから今申上げます直營が多過ぎた

竹腰——ドアの金物類、床も皆直營工事です。

葛野——仕上に屬するものだね。

石田——聞けば直營にするのが必ずしも本旨ぢやなかつたらしい、豫算の關係でやつたらしいんです。

竹腰——豫算と見積額とに差があり直營ならば出來る自信があつたからです。

葛野——どんな風な。

竹腰——總て大林さんにやつて頂いたのですがそうも行かない、住友ビルも半分以上直營です、大株以上です。

葛野——總てその方針ぢやないか。

竹腰——大理石の工事も全部直營です、住友ビルが矢張り同樣で大林の河合さん御存じでせうが私は記憶して居りませぬが矢張り800萬圓の內300～400萬圓が大林さんの請負だつたと思ひますが。

河合——半額以上さうです。

竹腰——あの時に歩合を差上げなかつたと思ふ、大株の方は多少色をつけてあげた。

葛野——初めから決定し難いといふことは多分ありませう。

石田——鐵骨直營の問題では竹腰さんに叱られましたからね。

竹腰——あれは濱崎さんの力です。

葛野——どうぞ境さん現場の方の

境——別に申すこともありませぬけれども、風水害の關係上尻無川にあつた材料4萬5千の內3萬8千ばかりは全部水浸りになり、これに油がこてこてつきました。

波江——それは石ですか。

境——石です。

葛野——あの御影石ですか。

境——そうです。石のことについては副社長がやかましく云ひまして、仕上が出來次第カセイン糊で養生してありました。これを下小屋に入れよといふのですが、4萬といふ石を下小屋に入れますと、とても廣い土地が要る、そんな土地はありません。

葛野——風水害の前に買つたんですか。

境——そうです全部風水害でやられたので、石は泥をかぶつてあともかたもありません、どろどろになつて居ります、下小屋はありませぬし、それで第一紙をはがして洗はねばならぬ、その紙がなかなかめくれぬです。

波江——けれども養生をして居つたんで大分助かつたんぢやないか。

境——裏から透つて居ます、潮の方はすつと來てすぐ引いたんですからそれは湯をかけますと取れます、毎日洗屋を8人、それから仲仕を15～16人入れました、それから油を取りますのにはエーテルや種々の藥を使ひました、一番よいのは湯にして釜の中に入れて煮ることですが、石が澤山でそんなことをして居つたら、1年位はかゝります、とてもいけませぬので、本社の重役も種々心配をしました、それで藥でいかうと毎日現場から出張して藥をかけまして、それが初めは眞つ黑になる、それから又他の藥で5回か7回洗ひますとそれでまア淡くなる、淡くなつたと思ふと、それが赤くなる、又それを他の藥でおとす、さういふやうにしまして、9月から3月頃までやりました、それですから今に一寸黑い處が出て居りますれども。

波江——それ程手の要つた石は他にありますまい

境——これも半歲程しましたら同じやうになりますから。

竹腰——初めの設計ではあれは人造石でといふことでありました、處が大株の方で石でやれと云ふ事になり弱りましたが、その時うつかりしてお引受けしたんですけれど、考へて見ますと、約10萬平方尺になる石が此期限で一體出來るかと考へたんです、引請けたものはやらなければならぬ、人造石でやれば無論3分の1の期間で出來るが困難な事と思ひました、諸所で研究し河合さんにも相談しましたが、これは出來ませぬ、今迄に10萬平方尺の石を、それ丈の期間に使つた例がないと云はれる、それを大變無理をして頂いたやうです、それから帳場の方も11ケ所に決めましたが、實際とつたのは10ケ所でした、それで愈々かかつたんです、北木島では石工が四國から來るのですが、石を出して居つても、盆になると皆歸つてしまふ、さうして2

月位來ない、盆が來るまでに石を集めてしまはなければならぬ、大林さんの方でも非常に苦心をされましたが、全部は出來なかつたやうです風水害の時には潮がかぶつたのですが、これ丈のものを全部取替へやうかといふことも考へて見たんです、併し何しろ30何萬に近い金額のものを取替へてしまふといふことは國家的に見ても考へなければならぬし、又それ丈の石を集めやうといつてもとても六ケ敷いし、それを取替へるとして大林さんに負擔して頂くことも無論いけないし、全然こつちの費用でやらなければならぬが、これも大變です、これは請負の方も一つ災難と諦めて貰ひ、使ふ方も辛抱すべきであつて見樣によつては未曾有の風水害の記念になつていゝぢやないかといふので、そのまゝ使ふことにしたんです、中には今も境君のお話のやうに油の滲込んだ分は400噸ばかりありました。

境——全部平氣で棄てたんです、特に副社長は石がやかましいものですから。

竹腰——私等の心配して居たより以上心配して喧ましく云つて居られたんです、今の處出來上つたものを見ますといふと、水害にかかつて居なかつたらもう少し冴えて居つたらうと思ひますが、私等から見ますといふと、併し思つたよりは綺麗です。

境——人造石だと思つたといふ人があります。

葛野——實際あれ丈全部御影石を使ふといふことは一寸考へられないことで、恐らく短期にそれ丈の注文を受けるといふことは近頃ないことでせう。

竹腰——注文を受ける前にあれ丈のものをあの期間に使つたことがないから出來ぬだらうといふのでした。

葛野——而も悉くが癖のあるものになつて居るから、カーヴがあつて1個々々普通の組合をするやうな風に簡單に行かない。

河合——それと石の厚みが3寸乃至4寸、あれが仕事の上で非常に無理だつたらしい。

岡田——機械挽ですか。

河合——いゝえ6寸位の厚さに兩面を仕上げ中に穴をあけて矢板を入れて2枚に割つたのです。

竹腰——割つた面に澤山穴のあとがあるものですからモルタルのつきがいゝ樣です。

（この時座長葛野氏中座す）

作間——相當大きな石、2尺3～4寸から5尺近いのを3寸乃至4寸の厚さにするのが非常に手間どりました。

竹腰——あゝいふ方法をとつたのは初めてゞすか

河合——大規模にやつたのは初めてゞす。

波江——アメリカでは御影石が軟かいものだから矢張り機械挽で3寸位になつて居ります。

河合——市岡に相當專門にやつて居る工場がありますが、それは1日に挽き得る能力が200位で何しろ10萬近いものですから期間がとても合はぬそれから張る方のお話でしたが、工事を急ぐので、セメントはベロセメントを使ひまして凝結させる爲に苦心致しました。

波江——大理石の方は。

竹腰——大理石の玄關の分は珍らしい石です、あれは昨年の何時でしたかね。

新名——去年の5月頃でした、雉が鳴いて居つた6月でしたかね。

竹腰——5月末です、恰度その時分は私はホテルをやつて居りました、新名さんと2人でしたねホテルの會館の方のオニツクスをベニヤ見たやうな張り方にするのに石がとれるとかとれぬとかいふことで、來て呉れといふので新名さんと2人で矢橋へ行きました其時、大株の方をやつて居りましたから、何かいゝ石はないかと探して居つた處があの石の小さなのがあつたんですこれはいゝなアといつた處が、これはなかなか使ひ樣が六ケ敷いのでお顧客さんがないといふやうな話です。話を聞いて見ると、伊太利からとれさうです。それで持つて歸つてよく調べて多分こつちの思ふやうにとれるだらうと云ふので、それから使ふことにしたんです、貼つて見た處が、非常によく艶の出る石で、一寸かういふ艶の出るのは他と釣合がとれぬやうに思つた程です。

新名——あれは見本丈でお決めになつて石屋がとつたんですか。

竹腰——石を取寄せて見た處が、あれ丈1周する大さを1つの石からとれる事が判りました、縞がずつと繼がつて居ます。

波江——葛野さんが中座されたので、私に代理をといふことですが、これで建築に直接關係のお方の話は濟みました、今度は第三者の方の立場

から中澤さん一つお話を。

中澤——私はまだ見て居なかつたので見せてもらふつもりで別段何も考へて居なかつたんですが今日は種々の案内をして頂きまして、兎に角初めて聞く世界に入つたやうで、取引所の組織といひますか、さういふ風なものに第一吃驚したやうな譯です、竹腰さんから取引所といふもののアウトラインに對して御苦心になつた點を拜聽致しました、私は將來の建築に對してどう考へて行けばよいか迷ふ次第です、あそこに立派なものが建つて見ますと、その他の建物が何だかスケールが違ふやうな感じがしまして、一寸奇妙な感がする、例へば平常は何とも感じて居ない三越の建物なども取引所の新らしい建物から受ける感じと比較して見ますと、非常に違つた感じがするんです、私は直接取引所の建物についてゞはないですけれども將來の都市建築の意匠といふやうなものを考へられる時に問題になるといふ氣がしたのであります。

岡田——中澤さんのお話で建築のスケールと云ふことが出ましたが取引所とその近所のビルデイングとを比較するとスケールの違ふのが特に目立ちますね、丁度東京では帝國ホテルとその近くの建物それから大阪では中央電話局とその隣りの阪大病院及商工會議所などの間にスケールの相違があるのを氣にして居ましたが見なれるとあまり氣にならぬ樣になりました。今度の取引所も初めて圖が取れた所はハツとしました。

波江——建築物法によつて拘束を受けたところはありませんか、例へば道路の東及南の端の方のセットバック等について。

竹腰——これは思つたより容易でした、それはどういふ理かといふと、恰度光線のとり具合でセットバックしなければならぬやうな處に法令の規定があつたりして、その點では規則の方が設計を助けて呉れたやうな形になつて居ます、あれは厄介で困るなと思ふこともありますが逆にこれを利用するとですね、御承知のやうに北側などはあれは光線のとり具合で自然にあゝなつて來る、一寸如何にもあれを見ると規則であゝなつたやうに見えるが、規則も利用すれば却つていゝぢやないかと思ひます。

波江——紐育なんかでもさうですね、規則を利用してセットバックし却つて面白い形をとつて居るやうですね。

東畑——人造石で初めはやる筈であつたのを人造石が變つて御影石になつたのですか。

竹腰——人造石でも石でもどつちでもいゝ、石の値を下げる爲に人造石の方を使ふ事にして居たのです。

東畑——最初は人造石ばかりの意匠だとすると石に變つた爲に何か意匠上に變えられた所はありませんか。

竹腰——初めは人造石程度のものを考へて居られた、處が實物を見れば模造品よりいゝに決つて居ますので皆後から騎虎の勢で石になつてしまつたんですが、人造石は石のイミテーションですから設計には變りはない、多少厚さの差があり又石では一寸細工の仕難いやうな處でも人造石なら細かい彫刻が出來るといふやうなこともあるかも知れませぬが、求めるエフエクトの點は大體は變らないと思ひます、初めは取引所といふものはモダンで、ハイカラで氣の利いたものを要求されるんぢやないかと實は思つて居つたんです、尖端を行く所ですから、處が取引所の方は、取引所で相當建築の趣味を有つて居るといふ人も取引所といふものは商工都市の中樞であるから威風堂々たる建築でなければならぬ倫敦のストツクエキチエンヂを見ても兎も角も商工業の中樞を表現する威風堂々たるものであるとかう云はれて私は一寸意外に感じたんです成程考へて見ればさういふ譯です。それから威容を現はすといふやうな考へで進んで行つたんです、それで小さなデコレーションは止めてしまつて、全物で多少繊細な手法を見せる事にしました。

島田——正面の軒天井に丸いものがついて居りますね、飾りが

竹腰——あれは飾りではありませぬので、石を釣上げてあるんです、石は張つてはありますけれども用心の爲に皆釣つてある、そのボールトの頭は隱してあるんです、6本とらうと思つたんですけれども力が充分ありますから、1つの石に4本とつてあります。

今林——それでは、昔の話を1つやりませう、先刻岡野さんからお話がありましたけれども、昭和2年頃に前々理事長の上畠さんが、初めてあそこに改築をやるといふ案をお樹てになりまし

て、兎に角まア取引所の案といふものを一つ圖面にしたいからお前一つ取引所の方々のお伴をして重要な市場を見て歩いてざつとした圖面でもいゝからこしらへて見ろといふやうな話がありました、それから皆様のお供して名古屋、東京と見て廻りました、その時に感じましたのは比較的に名古屋市場が良い、これはほんのバラックで御座いまして、永久的のものではないんで、一寸見た處が極めて貧弱なものでありましたが、名古屋の市場がよいと思ひました。

竹腰——それは昭和2年ですか、東京の取引所は出來て居つたんですか。

今林——出來て居りました、その時は尤も私も駈出しですから、勿論取引所の機能とか、何とかいふことは呑込めて居ない、何をやつて居るのか唯ざわざわやつて居るんで、一寸説明を聞いても解らぬです、解りませぬが、兎に角小さい乍らに整頓して居る、粗末乍らに相當機能を發揮して居る、兎に角大阪の市場よりも餘程この出來がいゝなと思ひました、家は小さいですけれども採光なんかも極めて簡單に又充分に出來て居ます、電話席なんかも今の大阪市場と比べては問題になりませぬが、兎に角その當時の大阪市場なんかといふと失禮ですが、とても見られた様ぢやなかつた、それなどから見ますと、兎に角整然として居ります、それで東京に行つたら、東京の市場は非常にお金もかけ立派な設計屋さんがおやりになつたので、嘸かし立派なものだらうと思つて東京に行つた、處が行つて見て意外に感じましたのは、今でも覺えて居りますが、兎に角大きいのは大きいです、高さも此方より確か高い筈です。

竹腰——いや今はこつちが高い。

今林——兎に角非常に高く感じたんです、それから立會をして居る處を見ますと、兎に角非常に反響がひどい、わんわんいつてとてもよくこんな處で毎日我々が考へると非常に重大な仕事をよく間違なくやつて行けるものだと感心しました、それから御覽になつた方は御承知でせうがルネツサンスの玄關の中にあるやうな、あゝいふ柱、内部もあゝいふスタイルでやつて居る、さうして電話席のこと、札掛場などといふことは殆ど考へてない様ですね、場合によりますと札が飛んで墜ちるのがある、昔のは御承知でありませうが針金かなんか横に渡して、これに一寸ひつかけるもので、あわてゝかけたりすると一寸外れることがある、それが立會場の方に墜ちて來ることがある、それは危かしいことがしてある、それが危險だといふので何でもその前に鋼を張つてあつたやうです、さうでしたね、何か金鋼のやうなものが何處かに張つてありました、落ちたら危いといふので。

岡野——下に張つてあります。

今林——それで、さういふ建築ぢや困つたものだと思つたのです。

岡野——東京も後では差込式になつて居ります。

今林——それから兎に角諸所を見て廻つて、勿論判らぬものですから大部分は教へて頂いたり何かして、やつとまア、プランが出來ました、恰度その當時確かクリーブランドだつたかと思ひますが、取引所が一番上にある。

波江——ロスアンゼルスぢやないか。

岡野——紐育の棉花取引所です。

今林——恰度プランをやつて居る最中にアメリカの雜誌にそのプランやら寫眞が出て居たので、これは面白いこれで行かうぢやないか、これをやつて見やうといふ譯で、兎に角案ですから頗る無責任といふとおかしいですが、兎に角案ですから種々やつて見ろといふのでやつたのですエレヴエーターを12臺位にして一遍に何人位運べるか計算して大丈夫行ける、一つどうですかういふ案でといふた處が、御承知のやうにあそこの老人は勢力がある、さういふ人の考を聞くと、第一エレヴエーターで行くなんてもつての外だ、若し停電でもあつたら商賣が出來ぬといふやうなことで、一部の賛成者がありましたけれども兎に角これはいかぬ、澤山の人が賛成しても、例へ一部にでも批難のあるやうなのはいかぬといふので、それからやり直しましたが、東京なんかと比べて敷地が非常に窮窟で、第一場所がありませぬ、長さはありますが、何とかして高い大きなものを一つやらうぢやないか、幸に道路を、今の假市場のある處、あれを遊ばして置いては勿體ない、あそこをこちらの方と連絡さして、一緒に使ふ案をやらう、恐らく2階位なら昇つても差支あるまい、エレヴエーターなり段々で2階に昇る、2階位なら辛抱しやうぢやないか、向うとことらを、うまくつなげる

か知らんといふので、これは相當或程度まで話が進んだ、それでその爲に今の假市場と今度の新館との間のあの道、あれを廢道にして、あの上に家をとり込まふといふので、これは一つ建築課長の内意を聞いて見やうといふので、前の課長です、かういふ案で、あの道を廢道にしたらいかんかといつた處が、それはいけるかも知れぬといふので、兎に角先決問題は廢道にある廢道に出來るかどうか市の方に交渉して見よといふので、これは岡野さんにも大分足を運んで頂きました、兎に角市會を通したんです、あれを廢道にするといふのを。

竹腰——その問題で困つて居るんです。

今林——兎に角市會では廢道にする、廢道にはするが、條件として、今の交叉點の處を或程度後退しろ、又廢道の方の土地は買つて呉れ、又交叉點の處で後退した土地は無償で市に寄附しろといふやうな話だつたと思ひますが、兎に角成立したので道の上をまたがつて2階で二つの敷地を連絡し、今のよりうんと廣い市場案をやつた、これは面白いといふので、その案は相當皆樣の支持を得たと思つて居ります。

岡野——大分あの案には賛成して居りました。

今林——兎に角あの當時は相當素晴らしい考で、確か私の聞いて居る處では取引所は5,000,000圓位の建築費をかけるといふことを理事會か或はどういひますか、あそこの決議でお決めになつたことがあります。それからもつと大きな案は矢張り東西とも使つて、市場をもつと上に上げて非常に大きな坪數のものであつた、場合によつたらもう1,000,000圓位はよろしい、6,000,000圓位だつたら構はぬからすぐにやらうぢやないかといふことでした、上畠さんは今から考へて見ると非常に太つ腹であつたやうに思つて居るんです。これは實に痛快な案だと思つて樂しんで居つたんですが、それは實現に至らずに理事長が更迭されてまア現在のやうなものが出來たわけです、それで前々理事長の時分にどういふやうな案があつたかといふことを關係者として喋つた譯です。

竹腰——今林さんのお話は非常に面白く聞いたんです、先づ最初今林さんは名古屋の取引所を御覽になつて、その次に東京といふお話になりました、私は夫れを逆に行つて東京を先に見て歸りに名古屋に寄つたのですそれで東京で見たことは、これは建築をやつた人と取引所の設備をやつた人とは全然別だ、これぢやいかぬといふ感じを第一に有ちました、それからあの時困つて居られたのは高場が南北に向合ひ、それで電話席は眞中にある、電話席から右の方の見える人は左が判らない、左の人は右が判らないといふやうな狀態です、それで右の方の札と同じものを左に出してある、左に出て居る札を又同じく右の方に出してある、つまり二重にやつて居られる、それから音響の方も大分反響して居つた、これは私は天井の硝子の爲だと思ひます、必ずしもさうではないかも知れないが、それから今お話があつたやうにルネツサンスの非常に立派な建築も、取引所の方ではそれに札をかけて見えぬやうになつて居る、頗る俗にかけて居られる、これなんぞはやつてもやり甲斐がないと思ひました、その代りに名古屋は、建物はバラツクでありますが、兎も角機能はこつちの方がいゝ、これは貴方と同感でした。

波江——私は片岡さんの處で、恰度建築物法の出る前に許可をとつて置かうといふので計畫を樹てたことがあります、その時は今の假市場の處で、下を市場にして、上を事務所にするといふのだつた。

今林——その案も見ました。

波江——こつちを全部市場にして上の方を仲買人の事務所にしやうといふので、今の建築法規の一杯の計畫を樹てたんです。

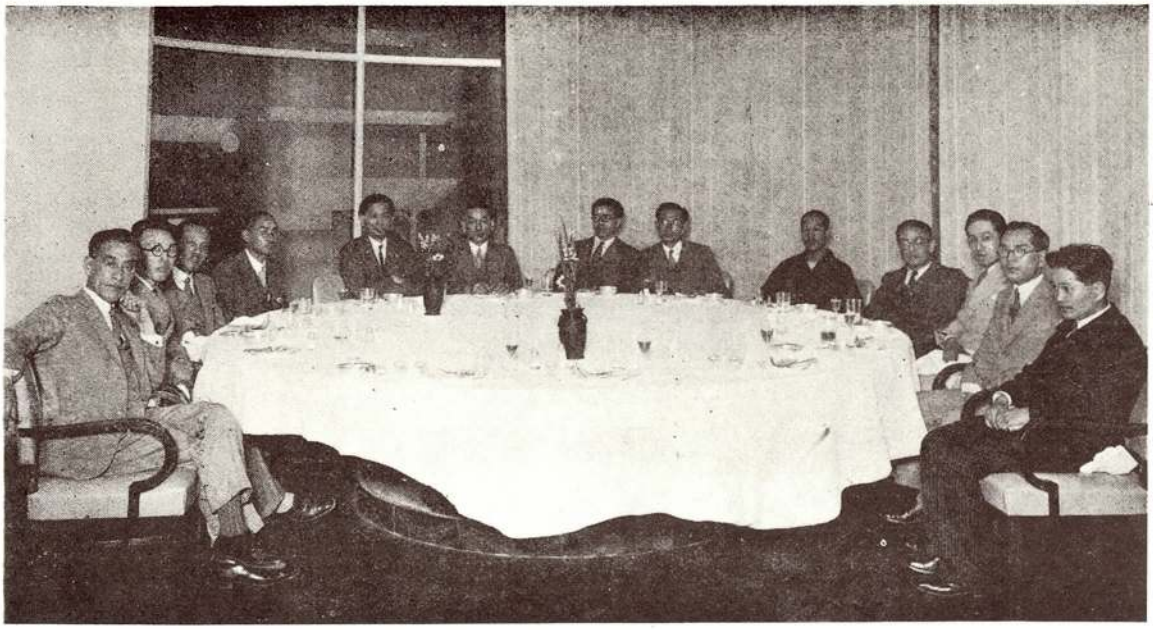
岡田——外國のはあれより大きいんぢやないですか。

竹腰——紐育のカールマーケツトが稍々近い大さから云つたら今度建增して大きいが。

岡野——紐育とこちらでは單位が違ひます、こちらは10株單位、紐育は100株です、ですからこちらも100株單位にすれば10倍の取引が出來ます。

波江——大體時間が盡きたやうですから、新名さん何か御意見はありませぬか、別に御座いませぬければ本日の座談會はお忙がしい處をわざわざお出で下すつて種々有難う御座いました、速記はこれ位に切上げまして、後で一つ御自由に

新名——どうも有益なお話を頂きまして有難う御座いました。



〝京都・朝日會館〟の建築を語る

（五十音順）

石川純一郎氏（竹中工務店 朝日會館設計）　川口軌外氏（洋畫家 朝日會館壁畫制作）

鹿子木孟郎氏（洋畫家）　小早川彦一氏（朝日ビルヂング 取締役支配人）

芹生幹二氏（竹中工務店 朝日會館現場主任）　武田五一氏（工學博士本會副會長）

林重義氏（洋畫家 朝日會館壁畫制作）　古塚正治氏（神戸高等工業學校講師）

本野精吾氏（京都高等工藝學校教授）　山脇友三郎氏（竹中工務店支配人）

岡田孝男　島田良馨　新名種夫

昭和10年5月10日
於 京都朝日會館

新名——それでは一寸御挨拶を申上げます。今晩は此度出來ました此の朝日新聞社京都支局のビルに就きまして、皆樣の御意見を伺ひたいと思ひまして、お出でを願ひましたところ、御多忙中に拘りませず、御出席下さいまして、有難う存じます。其の上今晩はビルヂングの小早川さんが此の會場のことに就きまして、何から何までですつかり御心配下さいまして、協會の側と致しまして、非常に恐縮に存じて居る次第であります。

此處には此の建物の計畫に當られました小早川さんはじめ、石川さん、山脇さん、芦生さんなどの設計や施工に關係された方々及び川口さん、林さんなどの壁畫の製作に當られた方々も皆お出でを戴いて居りますので、それぞれのお立場に於ける御苦心談なり御經驗談をお話し願ひまして、協會から出して居ります「建築と社會」誌上に載せたいと考へて居ります。

是から武田先生に司會をお願ひしまして、座談會に移りたいと思ひます。どうか御腹藏なく御意見をお述べ下さいますれば、幸に存じますどうぞよろしく。

武田——それでは僭越ですが、年長の故を以て私が司會を致します。此の座談會は皆技術者ばかりが集つて居るのでありまして、普通世間で謂ふ先輩とか後輩とか云ふやうな意味のあるものでなく、謂はゞ同僚同輩と云つたやうな立場に於て一つ御腹藏なくお話を願ひたいのであります。

實は過日此處で朝日新聞關係の者だけの會合がありましたので、私が意見を述べますと、重なりますから、差控へまして、皆さんにお話を願ひたいと思ひます、先づ石川さん、御迷惑でせうけれども、どうぞ——

新名——是は府廳の方を通すのに大變だつたんではありませぬか。

石川——さう云ふことはありませぬが、其の方は私共より小早川さんあたりが宜いでせう。

小早川　其の方は餘り面倒はありませぬでした唯繪と色のことに就て、殆ど必要が無かつたに拘らず、こちらから進んで諒解を求めたやうなことがありました。

武田——さうですか、建築上のことに就ては、さう問題はなかつたのですか。

小早川——殆どありませぬでしたね。

武田——高さなんぞで何か問題はなかつたのですか。

石川——唯消防署の方だけが、建築物法ぢやないですけれども、實は 1,500 人も入る講堂がある爲に、どうでも 5 メートル後退する規定があるのです。けれども單に普通の講堂と云ふ見解で、其の目的から云つて、1 階だけ後退すれば宜い譯ですから、1 階だけ 5 メートル後退して上は 3 メートル後退したのです。

武田——風致地區の點は

石川——それはズッと向ふです。

武田——此處からどの位離れて居りますか——加茂川の沿岸から 100 メートル位までが風致地區ですが。

石川——高瀬川の所だらうと思ひます。

小早川——風致問題になつたことと云へば、今一寸申上げた色のことですなア、白はいかぬと云ふのです。

武田——それは風致でなしに、何か非常時と云ふ關係ですか。

小早川——白いと云ふことが非常時に關係があると云ふ譯でないですね。

武田　京都市では謂はば全體が風致地區と云ふ譯ですから、いかぬと云ふのですか、又白がいけないのに、どうして通して呉れたのですか。

小早川——白ぢやないのです、乳白色で、一寸色が着いて居るのです。

岡田——どう云ふ色が宜いと云ふのですか。

小早川——矢張りクリーム色とか黃色がかつたものを要求して居ります。前警察部長が、唯御自分の感じからでしたか、白色よりも他の色が宜くはないか、成るべく白色は避けて呉れぬかと云ふやうな注文であつたのです、ところが、其の注文に應じて拵えたのが御覽の通りのものだつたので、是は白ぢやないか——イヤ白ぢやないのですと云ふやうな譯で、本當の白いものと比べて見た結果、如何にも白くないなアと云ふことになつたのです(一同哄笑)本當に白いものが惡いと云ふことであれば、是は問題です、取締法規の上では建物の色が惡いと云ふことは一寸言へない、餘り白い高い建物が建つことは京都市全體としてどんなものだらうと云ふ根本的の意味です。

武田——石川君に御苦心の所を。

石川——苦心をしたやうな顔はしてゐるけれども實は餘り苦心はしなかつたのです、マア狹い所に盛澤山だと云ふことが一寸苦勞と云へば苦勞でしたね、大體斯う云ふ狹い所に是だけ收容力のあるものを拵えるのが無理なんです。

武田——プランは何遍位で決りましたか、何度もおやりになつたのでせうね。

石川　（小早川氏に）隨分前でしたね、初は60坪位の所で何でも2度位やりましたね。

小早川——さうですなア、それから隣を買ひましてね、3回位やりましたか、下へ自動車を通したりする案がありましたり、數回やつて居りますね。

武田——工事が始つてからも變更がありましたでせうね。

石川——それは此の前小早川さんが言つて居られた通り初から斯うならうと豫想した人は一人も無かつたのです。

新名——此の壁に繪をお畫きになつたのは初めからの案なんですか。

小早川——それは大體初めから考へて居つたのです、結局斯う云ふ大きなブラインドの所が出來るのですからね。

古塚——僕はブラインドの部分も面白いと思ふて居りますが

小早川——さうですね、それも亦一つの行き方ですね。

古塚——ブラインドではいけないと云ふやうな注意でもあつたのですか。

小早川——それは全然ありませぬ。唯廣い面があると、樂書でもして見やうと云ふのが人間の本能と云ふやうなものですなア。

古塚——廣告としては宜しいですね。

小早川　是は別に廣告ではないのです。

古塚——併し此處に朝日ビルが在ると云ふ大きな意味でね。

武田——さう云ふことにもなる。

小早川——壁畫に就て言ひますと、京都府の建築課當局の考は、相談を受けなかつたら、何事も言ふことは出來ないのだ、幸に進んで相談を受けたので、宜いとか惡いとか云ふことも言へるのだと云ふことでしたが、最初に相談を持掛けました時に、各方面の人々が集つて、大分議論がありましてね、それは誰も取締規則の上からいけないと云ふのでなく、唯やるべきかどうか宜いか惡いかと云ふので、種々意見がありましたが、結局宜いぢやないかと云ふ判定の方が多く、即座にやり給へと云ふことに決りました。其の後警察部長が更りましてから、愈々林さんなどに下繪を畫いて戴いて、大體こんなものでと云ふことで、參考に持つて行きました時に、再びどうだらうなアと云ふ議論が又起りました但し是は廣告ではないのだからと云ふやうなことでね、取締規則の上からいけないと云ふのではない、唯非常に大きい面であるから、其の表現の內容に就て出來るだけ穩當なものにせよと云ふことでありまして、こちらも林さんなどからも種々意見を述べて戴き、相當向ふの要求を容れて、變へても頂きましたので、是だつたら洵に結構だ、幸ひ斯うして相談を受けたと云ふことを當局として非常に多としますと云ふやうなことを言つて居りました。で、廣告と云ふ意味が現れたら、それはいけないのですが廣告と云ふことが朝日新聞の廣告と云ふことだつたらそれは兎に角大きな高い建物自體が已に廣告の意味になるのですから、廣告と云ふ範圍を其處まで擴めたら知らぬこと、普通の所謂廣告とは意味が違ふと云ふやうな解釋の仕方だつたと覺えて居ります。

武田——デザインを始めてから何年か分りませぬか。

林——數年ですかね。

小早川——そんなことはない、全體のデザインを始めてから1年半です。

武田——古塚君何か御意見はありませぬか。

古塚——外部のモザイク・タイルの貼り方は非常に上手になりましたね、最初來た時に裏からズツと見て來たのですが、あの大きな面に對して大變綺麗にやつてあります。

小早川——それは芹生君が非常に綿密に細かい所まで能く注意して呉れました。

芹生——マア早い目早い目に注意を與へましてねその上職人が良かつたのです、殆ど東京と大阪方面の職人がしたのです。

古塚——惡いと思つたのは外部の金屬を貼つたのが赤錆が出てゐる所がある、大阪の朝日ビルのやうな大きな壁でもあんなに綺麗に貼れてゐる

のに、此處のは汚い。

芥生——大阪のはヘヤー・ラインを入れて居るだけで、それともう一つまだ磨きが足りないのです。

古塚——兎に角あれは大阪のより汚い感じがします。

芥生——それは合せがございませぬから、さう見えますけれども、仕事自體としては向ふより良いのです。

小早川——ステンレス・スチールとしては日本全國で最高級ださうです。我々の方で特別に拵えさしたのですが、川崎造船所で非常に良いものを拵えたので、大阪で使ふて居るものよりも良いのですけれども、特に仕事を非常に急いだのです、よくあんなに仕事が出來たと思ふ程です兎に角急いでやりましたので、出來上りに就ては誰も滿足はしてゐないのです。

古塚——それから先程見せて戴いたのですが、眺望所の硝子ですね、あれが外側に割れておつこちたらどうだらうと思ひます。早速網でも掛けやうと言つて居られましたが。

小早川——あのサッシュは失敗です、あれは間違つて持つて參りましてね、出來上ると直ぐに、替へやうと思つて、今別に注文を出して居ります。もう聽て出來て來る筈ですが、ちやんと網入にしてしまふのです。

古塚——さうせぬと、如何にも危險だと云ふ感じが致します、面が大きいですから、割れたらね

小早川——普通の風では落ちませぬけれども、風をうんと受けるだらうと思ひますから、少し強い風の時には危險だらうと思ひます。

武田——今ぢや使はない譯ですな。

小早川——今は使つて居りませぬ、市役所で消防の屯所を拵えて、それが出來上ると同時に是が使はれるのです。

武田——壁面の繪ですがね、見ながら歩くと、人にぶツ突かりさうだし、立止つて見ると、おつこつて來さうでね、私は數回此の前を通つて居りますが、まだ本當にはつきり見極めてゐないのです。斯うして寫眞にして見ると、はつきり見えますがね、僕が先年ベルリンに行つた時は地下鐵道のステーションなども相當綺麗にタイルを貼つて居つた、ところが、此の頃新しく出來るものは飾りも何も無い、唯色だけでやつて居る。ドイツは此の頃金が無いからでせうが、併し驛なんかに飾をしても見て歩くものはないと言ふことにも一面の眞理がありますね、餘り雜沓する所にさう云ふ複雜なものをやると、却て交通の混雜を來す危險もあると思ひます。

古塚——もう些つと路幅が廣いと可いのですがね半分位上を見ると、危い氣がします、上が見たいのですが。

武田——又見えるやうに燈りが點けてありますからね。

林——時々來て見ますけれども、餘り立止つて見て居る人は無いやうですよ、又こう云ふものがポコツと出來て、斯う云ふ風なものに心を向けて居る人は何となく懸念に思はれるかも知れませぬけれども、あれは慣れてしまつたら、何でもなくなるのでないかと思ひます。

武田——突然だから、おかしく思ふのですね。

林——しよつちう通る人はおかしくなくなると思ふのです。

武田——通る人は見ますよ、近所の人はさうでせうけれども、他所から來た人は見ますよ。

林——ズツと通つて見ても、餘り人群りのしたのを見たことがないですよ。

古塚——是が初て出來ました時、新聞に大きく出て居りましたね、其の時に或素人の方から、是は大きな建物と云ふ感じはなしに、玩具みたやうな感じがしますが、此の頃の新しい建物はあゝ云ふやうにするのですかと尋ねられたのです私も實は返答に困つて、成程さう云へば、玩具みたやうですねと言つたのですが。

武田——玩具が引繰返へされたと云ふ感じだね、又それが可いのかも知れない、今日四條の大橋から此方を見たら、非常に好い感じだつた、空に白い所があつて、其處に繪の形は解らぬが、色の塊りのある工合が非常に面白い、其の點は可いけれども、京都としてはどうかと思ふ、京都と云ふことを考へなければ非常に可いのですけれども、それだけが問題です。

新名——寫眞を見ると、玩具と云ふ感じがありますが、實物を見ると、決してさうでないですね

武田——玩具でも可いと思ひます。それは必ずしも惡くないのですから。

古塚——斯う云ふ例があるでせうか。

武田——幾らもあります、イタリー邊りにね。

古塚――イタリー邊りのは感じが違ひますでせう

武田――モザイクでやるやうな所がね。

林 ――外部では油繪の繪具で畫いたら駄目なんです。油繪の繪具は水に濡れたり、陽に照らされたりすると、非常に弱いので、どうしてもペンキでやらなくちやいけなかつたのです、それを出來るだけペンキ繪にならぬやうにやらうと云ふので、別にあゝ云ふ繪具を造つて貰つて、苦心したのです、當り前のペンキでやつたら、全く看板のやうなものになります。

古塚――繪は結局内部のものらしいですね、内部の方は如何にも落着があつて、好い感じです。外のものは今日よく見たのですが、非常に佳いとは思はれなかつたのですなア。

武田――あれはどの位保つでせう。

小早川 ―3 年は優に保たうと思ひます。あれは日本ペイントに頼んだのですが、向ふでは特に造つたと云つて居るのです、向ふの技師連中が擧つてやつたと云ふので、日本ペイントでは 3 年以上 5 年は保つと確言して居ります。

武田 ――あれは矢張り漆喰の上に塗つてあるのですか。

林 モルタルの上です、非常に苦心でした。

古塚――モルタルを平に塗るのが大變だつたでせう。

芹生――夜分は投光機で一方光線にしてやりました、左官が50人程かゝりまして、朝から夜の12時までやつたのですが、一方光線にすれば、小さいむらも能く見えます。

武田――何んで塗つたのです、鏝ですか。

芹生 ――鏝ですね、鏝でムラを全部除けるのですさうして何回も何回も押へて、研ぎ出すやうに塗つて居ります、大きな定規を使ひまして、鏝で押へ付け、一方光線でやりましたから、ムラは殆どありませぬ。

武田 ― 岡田君、何かありませぬか、ありさうぢやないですか――本野君、君はどうですか。

本野――出來て大分になるので氣が抜けてしまつてね。

芹生 ― 此處の地下室は一番難工事でしてね、最初の計畫は23尺でしたが、常水面が10尺5寸の所でしてね、それから下は水が幾ら替へても替へ切れない程で、6 インチのポンプ 8 臺で 1 晝夜20萬石程水を替へて工事をしたのです。此の近くには地下室らしい地下室のある建物はありませぬので、全部統計を取りまして、どの地下室はポンプを何臺使つたかと云ふことを調べ上げたのですが、殆ど水中コンクリートでやつたと云ふ位です。

武田 ――京都ガスはどうです。

芹生 ― あれは10尺で、是が23尺です、種々協議しまして、それを20尺まで地下室を淺くして、辛うじてやりました。

武田 ――防水はどうです。

芹生 ― 防水はロータスを使ひまして、コンクリートを打ちます折に、ミキサーの中にセメント 1 立坪にロータス 200 ポンドを一緒に入れて完全に水を替へて硬化した時にポンプを外しました。

新名――それだけですか、其の上に防水モルタルが塗つてあるのですか。

芹生 ― それだけの仕上です。

武田 地下室と云ふものは殆どそれに過ぎないのですね。

芹生――普通の防水でやつて居りますと、必ず失敗して居ります、アスファルトで完全に水を止めることが出來ないのです。セメント防水では若し豆板や何かが出來ますと、其處だけ急結で止めることが出來ますが、普通の防水でやりますと、押へとか何とか種々な點でスペースを取られますから……

武田 ――コンクリートは殆ど急結でした譯でありませぬか。

芹生――普通のもので

武田 ― 200 ポンドは非常に多いですなア。

芹生――それは普通の調合です。

武田――建築の方で何かお話がありますればどうぞ

島田――新日本主義的新興形式と云ふことがございましたが、之は外壁に繪が無いものとしたらどう云ふ所を其の特長として見たら宜しうございますか。

石川――それは今月の 4 日に週刊朝日に載せる爲の同じ座談會があつたのです。其の時きつとこいつを聽かれるに違ひないと思ふて、最初に指名されたのを宜いことにして新日本主義の説明をやつたのです、ところが、後で司會をやつて居つた新聞社の人に座談會と云ふものは、あ

んなに四角四面になつて理窟のダンビラを振舞はすものではないと云つて叱られたのです。今の御質問に答へると又それになるのですが。

武田——けれども、仕掛けられれ喧嘩は受けなければならないね。

本野——あれで宜いのですよ、それではつきり解つた。

武田——實際窓が無かつたら、壁になるより外仕方がない。

古塚——今の質問はさうでない、油繪が無かつたら。

島田——油繪が無かつたら、どう云ふ所を特長として見たら宜いのですかと云ふのです、窓とは關係なしにと繪のことです。

山脇——繪のことと、新日本主義とは別でないですか。

新名——繪があるから新日本主義と言ふわけではないのですから。

石川——實際、話は樂屋落になりますけれども、繪描きさんにも新日本主義を吹込んで置けば宜かつたのですけれども、繪の方は新日本主義かどうか分らない。

山脇　繪描きさんにお尋ねしたいのですが、何かお畫きになる經緯と云ひますか、含蓄と云ひますか、さう云ふものがあつてお畫きになつたのですか、或は新聞社から斯う云ふ御注文があつたので、急に斯んなものが宜かうらとお考へになつてお畫きになつたのですか、私は素人として、繪其のものとしては綺麗だとかどうとか云ふことが解るだけですが、之には何か含蓄とでも云ふものがあるのでせうか。

林——イエ、あれだけ大きな外壁に何か一つのテーマを以て畫いた繪だと、繪其のものとしては何か新聞社をシンボライズするやうなものになる譯ですが、さう云ふことは迚も難しいことでありますし、マアどつちかと云ふと、そんな意味を有たせないで、詰り何のテーマもないと云ふことの方が繪を作るのに宜いのでないか——一番初め私に頼まれた時分には何か一つのものにしなくちやならぬと思ふて居りましたけれども、段々内側の壁も殖えて來るし、結局川口君と伊藤君と3人でやることにしたのですが、其の場合にあの壁を縦に3つに割つて、其處へ色々なものを畫くと云ふ風にすることも之亦おかしなもので、マア繪描として色々な個性を有つて居る人間が寄合世帶みたやうな風にやるのには結局こんなことにでもしなくては仕樣がないだらうと云ふやうなことになつて、やつたやうな次第なんです。繪其のものに就ては何の意味もなく、唯あれだけのブランクの所を色の塊で裝飾したと云ふだけの話なんです。

武田　一色の塊の配置に就ては相當御苦心になつたのでせうね。

林——さうです、大體一番初のコンポジションを作つたのは、私の家に川口君と伊藤君と3人集りましたね、あれだけのプランを畫用紙に畫いて先づ大體の色別けを一番先にやつて見たのですこつちへ斯う云ふ色を使つたら、こゝには斯う云ふ色を置かなくちやならぬと云ふ風に、色の繋りだけを初に考へて、其の中へそれに適當するやうな畫を入れて行つた譯です。何しろ大きなもので、迚も細かい仕事をして行つては駄目だし、遠方から見て、見えるのは、唯色の塊だけだらうと云ふ風に解釋して、あゝ云ふ風にやつて行つた譯なんです。

武田——何日位要かりましたですか。

林——外の壁へ畫き始めて12日間で、非常に速いのです、是も困つにことの原因で、直さうと思ふたら、まだまだやらなければならぬ所があるのですけれど、足場を早く除られてしまつたので、どうにもならなかつたのです。

新名——筆は何をお使ひになつたのです、大きなものですか。

林——2尺位の繪筆を別に拵えさせまして、ペンキも初は普通の看板屋さんなどに手傳つて貰つたら、慣れて居つて宜いだらうと言ふことになつたのですけれども、こつちが下繪を與へても京極の看板みたやうに畫かれても、どうにもならぬからと云ふので、結局私等がやつて居る獨立美術研究所の人達とか獨立展に入選して居る繪描きさん達に特に來て貰つて、詰りペンキ塗としては素人だけれども、繪の方では幾分かこつちの氣持が解つて呉れると云ふ人にやつて貰つたのです。其の爲にペンキも普通のにちやにちやした糸を引くやうなペンキでなく幾分油繪の繪具に近いやうな、さつくりしたペンキを造つて貰つたと云ふやうな譯です。

武田——ペンキの上に何か塗つてありますか。

林——イヤ塗つてありませぬ。

武田——山脇さん、此の仕事をやられるに就て何かあなた方の方の御苦心はありませぬでしたか

山脇——御承知の通り、私共の方は昔から永年のお出入先のことで、今度　一仕事やらして戴くに就きましても、本社のおやりになることは、假令それが多少難かしいことでも、出來る出來ぬは別問題として、何でも彼でも無條件で進んでやらなければならぬと云ふことになりますので、相當努力はして居りますが、別に苦心談と云ふ風なものはありませぬ、マア石川さんが設計者でありますし、又小早川さんも新聞社の方ではありますが、澤山建築をおやりになつた關係上よく解つて居られますので、主として小早川さんと石川さんが店の者以上に苦心して下さいまして、我々としましては唯店の者がよく働いて呉れるかどうかと云ふ事の苦心だけで、格別之と云ふて申上げる程のことはありませぬ。

武田——怪我人は無かつたのですか。

山脇——ございませぬ。

新名——何しろ今日まで出來上りを御覽にならなかつたと云ふのですから、餘程安心して居られたですね（一同哄笑）

武田——小早川さん、妙なことを伺ひますがね、是丈けの繪を畫くと云ふことは一體誰が考へられたのですか。

小早川　實はね、山脇さんのお話もありましたが、僕は卑下する譯ではないですけれども、唯こうした仕事に十年ばかり當つて居りますだけで、建築のこは些ツとも解らないのです。それで名前を出したくはないだらうと思ひますが私の方の村山氏が非常に建築に趣味を有つて居られて、よく解りますので、石川さんと考へ方や何かゞ非常に能く一致する——と云ふより、或は石川さんがリードしたのかも知れませぬが兎に角よく一致して居りまして、さう云ふやうな所から、誰言ふとなしに、斯う云ふ廣い壁面になるのだから、之に何か畫かしたら面白いぢやないか——ウムそれは面白からうと云ふやうなことで、林さんは豫てお馴染みでしたから、御相談をして見たところが、それは非常に面白い、一つやつて見やうと云ふことになりましたが、非常に大きいものであるし、種々異つたものゝある方が面白いだらうと云ふので、更に林さんと御相談して、伊藤さんと川口さんにも御一緒にやつて貰ふことにしたら尚ほ一層宜いだろうと云ふやうなことで、お3人に協同でやつて戴くことになつたのでありまして、實は別に誰言ふとなしに中途からさう云ふことになつたのです。

武田　斯う云ふことをやると、よく競爭者が出て、俺にやらして呉れと云ふことになるものですが、さう云ふことは一切なかつたのですか。

小早川——それはこちらから林さんに一番初に御相談を掛けましてね、林さんと今申したやうな方々と協同してやつて戴くことになつたので、其の他の何方にも御相談した譯ではありませぬそれは私等の存じ申上げて居る範圍が狹かつたと云ふ點もあるかも知れませぬが。

石川——斯うした會館にしやうと云ふ案も、本設計の時には決つてゐましたけれども、考の順序から言ふたら、之も途中からですね、同じことなら、こんな風になるのが面白いぢやないかと云ふやうなことになつてしまつたのです。

武田　之をやつて居る最中に京都の風致問題なんと云ふことは餘り考の中にはいらなかつたのですか。

小早川——イヤそれは隨分問題になつたのです。是は私自身よりも、石川さんが大分苦心をせられて、我々も其の間に在つて相當考へてゐた譯なんです。

（この時鹿子木氏出席）

武田——鹿子木君、後入で何だが、實は此の建築に對して建築家の方なり美術家の方とに腹藏のない感想を話して貰つてゐるのだがね、君の意見のある所を一寸。

鹿子木　マア非常に新式なるものだと云ふ感じが一番に起つて來ますね、それと同時に斯う云ふ風な平面の非常に多い建築をやられることは大に畫家を奬勵される所以であつて、大變結構だと思ふたのですが、もう少し畫家に譯山の日にちを與へ、製作をさして貰つたら非常に宜かつたらうと思ふのです、元來建築をやつて、それに繪を畫くと云ふ場合は、何時でも速く畫かなければならぬので、繪かきは非常に弱つて居る譯です。だから、今後は畫家にもつと時間を餘計に與へ報酬もうんと出して、成べく骨折つ

たものを畵かすやうに建築家の方にお願ひしたいと思うて居ります。

林——それは有難うございました。

鹿子木 — 家の形なんぞは非常に新式であつて、私は時代の要求に副ふて居るやうに思ふのです唯古い頭から見て、斯う云ふものが突然此の河原町の三條に出來たと云ふので、大分攻撃される聲も聞いては居りますが、私は左まで攻撃す程のことでもないやうに思ふのです。實は僕も下加茂の糺の森の側に4階建の家を建てたところが、蔭では隨分批難を受けて、甚しきに至ると、僕の家の前を通つて居る人が、斯んなものを斯んな所に建てゝ、よく風致問題が起らずに濟んだものだなアと云ふやうなことを言つて居るのを聽いて、私は非常に憤慨したのですが、今此の建築に對してさう云ふことを言つて居るのは、恰度15年前に僕の家を批評されて居つたのと同じやうなことでないかと思ふのです、マア是位のことしか一寸僕には言ふことはありませぬなア。

武田——もう少し具體的な、細論的なことはないでせうか、若し君がやつたとしたら、どう云ふ風なことをしますか。

鹿子木——繪の方ですか — 繪の方なら、もつと日にちを與へて貰ひ、費用もしつかり出して貰つたら、あんな大きな鳥なんぞはやめて、あの鳥を十位に割つた小さな鳥を畵き、魚ももう少し小さく畵いて、鳥の上に魚が居るのは一寸不似合だから、鳥の方を上にやつて、魚の方を下にやつたらと、斯んなことを思ひますね(笑聲)

武田——どうですか林さん。

林 —鹿子木さんは私の直接の先生で、私は何を言はれても降參の方です。

武田——併し我々の方から見ると、鳥の上に金魚のある方が面白いと思ふのだね、魚が下の方にあつては面白くない、ナチユラリストの考から行けば、重いものが沈んで輕いものが上に行くのが本當だが、場合に依つては輕いものが下に行つて面白いのでないか、斯う考へてはいけませぬか(笑聲)

鹿子木——さうですね、それも一つの考へ方ですね、それから色が何だか落着かぬとか云ふやうな批評を能く聞きますが、私は色は年代が經つと、もう少し落着いて來ると思ふのです、今後壁畵などを畵く場合には矢張り出來る限り形の方を尊重して、色は此の位の色を着けて置いたら、年代が經てば、恰度宜いやうになると云ふ心持で畵いて置いて差支なからうと思ひます。外の方は現在より寧ろ時代が經つて變色して來たら、もつと佳くなつて來ると云ふ考を有つて居るのです。

林——あれでも畵いた當時より大分色が變つて來てゐます。

川口——大分落着いて來たよ。

武田——川口さん、あの繪に對して世間で種々なことを言ふのに對して、畵家として何か言ふことはありませぬか、隨分氣になつて居られるでせう。

川口——ハア隨分種々なことが氣になつて居るのです、マア京都の繪仲間では可なり佳いと云ふ人もあれば、又一寸惡い評判も聞いて居ります併し僕達はあの構圖とか或は色に對してはさう失敗だとは思はないのです、それは自分が畵いたから、さうなるのかも知れませぬが、又原畵は壁面が大きいものですから、うんと淡くする積りでやつたのですが、もつと濃いのです、非常に淡くした積りでしたが、壁面が廣いものですから、畵いてゐる中に大變濃くなつて來るので、淡く淡くとやりまして、全部原畵より5分の1位に淡くなつて居ります、僕達は原畵を餘程淡くした積りですが、畵いて見て、隨分離れた方から見てみるのに、まだどうも濃いやうな樣子なんです、それでも餘程淡めたのですが、愈々足場を除つて見ますと、猶ほ少し濃いなアと云ふ氣もするのです。マア日和の都合で割合に調子好く見える時もありますし、光線の都合でまだ一寸濃く見えるのです。それから成べく凹凸の無いやうな一つの壁面と云ふことを考へて畵いた積りなんですけれども、色の配合は林君がさつき言つたやうに、赤色とか薄桃色とか薄青色とかを巧く配合する積りで、相談してやつたのですが、其の方は後で見ても、さう大して失敗のやうにも思はないのです、併しもう少し足場を除つたり、外したり出來れば、非常に都合が好かつたと思ふのです、足場が可なり高いので、下から見ても繪が見えない、どうしても1町位離れて見なければならぬので、降りたり昇つたり、往復するのに隨分時間を取られま

した。可なり遠い所から見ないと、光線がある時には足場の影が映つて居りますから、淡いか濃いか、なかなか解らないのです、それで赤い所とか、薄青い所とか下塗を先やつて置いて、其の中へ調子を合はして畫いて行つたのですが初め足場が20何段ありまして、上から畫いて行つては、毎日2～3段づゝ下ろして行つたのですが、兎に角馬の首だけでも二段位あつて、人の丈より一寸高いのです、それで1番上で畫いて居りますと、何を畫いて居るのか解らない、又上と下との調子がどうしても解らない、それで大きいものですから、兎に角下へ降りて遠くから見なくちやならぬ、さう云ふ譯で、部分的の仕上に於てもまだ不滿な所は隨分あるのですけれども、何しろ先程申す通り畫き初めから12日間で足場を除られてしまつたので、どうにもならぬのです。

武田——それは同情したいですなア。

林——實は直したい所は何程でもあるのです、それで先程も叅に乘つて降りるかと言はれたのですけれども、一寸あれは怖いやうな氣がしましてね（笑聲）足場があると、今川口君が言ひましたやうに、馬などは三段以上もあつて、迚も能く見ることは出來ないのです。それも普通の職人方だつたら、足場に慣れて居られるから、一枚位の足場でやられるかも知れぬので、さうすると幾分見よいのですけれども、僕は大事な息子さん達を動員してやつたので、怪我でもして貰つたら大變だと、それが一番氣になつて、足場を成べく廣く造つて貰つたので、上と下との連絡が巧く付かない、足場を除いてしまつてから、あゝと云ふやうなもので、實を言ふと、もう少し淡い氣持で畫いて置いたら宜かつたのです。

古塚——武田先生、パルテノンなどのはどうしたのです。

武田——それは一寸此の間も言つたのですが、あの建築はブラマンテが建てたので、ブラマンテと壁畫を畫いたミケランジエロとは仲が惡かつた、其の時の記錄に依ると、173 段の足場を造つて、寢轉んで畫いたものらしい、ところが、初め足場がぐらぐらして、危くて畫けないものだから、ミケランジエロがもつと足場をしつかりしたものにして呉れと言ふと、ブラマンテが金が無いと言つて斷つたので、遂々ミケランジエロが怒つて歸つてしまつた、そこでブラマンテが3度ばかり行つて、どうかやつて呉れと言つて賴んだ結果、足場をもつとしつかりしたものにしたら畫いてやらうと云ふ條件で、やつとこさと又出て來て畫いたと云ふことです、それから正面の壁畫ですが、其の時に足場はしつかりして居つても、結局ミケランジエロは其の爲に眼を惡くして、濟んでから1年ばかり靜養したと云ふことが書いてあります、眼を惡くするものと見えますね。

林——油繪でなく、ペンキですから、尙ほ畫き惡くかつたのです、而も12日間と云ふのですからね。

武田——あれなんぞは3年も要かつて居ります。

林——それは特殊なもので斯う云ふ記錄は無いだらうと思ひます。超スピードです。

武田——之まであゝ云ふものをおやりになつたことがあるのですか。

林——それはありませぬしね、大體あれだけ大きな壁面と云ふものは世界にも先例が無いかも知れませぬ。べたのあれだけ大きな壁面をどう云ふ風に扱ふかと云ふことに就ては大分3人で苦心したのですけれども、先程申したやうに、あれを1つのモーテイヴにすると云ふことは出來ないし、さうしたところが、あれだけ大きなものは難しいので、結局切らにや仕方がなかつたのです。

古塚——繪具の濃淡のお話が出てゐましたが、濃いとか淡いとか云ふ問題は、寧ろ濃い方が引立つのぢやないですか。

川口——私等の初の計畫では、全體が銀灰色に見えて、其の中にポツポツと色があると云ふやうなことにしたかつたのです、それがやつて見たら、濃くなつてしまつたのです。繪が濃くなると、建築は安つぽくなるだらうと思ひます、僕達はどうしても建築の大きな面と云ふものを考へなければならぬので、繪が中心にならぬやうに、繪は成べく建築の方に副ふて行かう、副ふて行かうとして、淡くしたのですけれど。

武田——それは淡い方が宜いですよ。

古塚——先生、矢張り壁面が1つの面に見えなくてはいけませぬか。

武田——凹凸があつては困ります、それは壁畫に

於て非常な禁物です、それで先程川口さんが言はれたやうに成べく繪が中心にならぬやうと云ふのが壁畵の本質だらうと思ひます、色と云ふても餘りいろいろな色を着けない方が宜いのです、第一部屋の中でも建築の壁面だと云ふことを第一に置かなければならぬ、繪を本位には置けないのです。

新名——部屋の中のは、あれは普通の繪具ですか

林——あれはルフランの上等の油繪具です。

古塚——室内の淡いやつは力が無いやうに見えますね。

林——私の所のが淡いのですけれども、あれはねまだ三分位しか出來てないのです、彼處だけ齒が抜けて居るやうになつて居りますけれども、恰度開館式のあつた日から私が病氣になつて、其の後ちよつとも畵けなかつたのです、あれは此の月の末か來月の初か、最近に取掛かりますから、もう些つとはつきりしたものになつて、他の壁とうまく繋がるだらうと思ふのです。

鹿子木——地下室の壁畵は大變面白く出來て居ると思ひます。

新名——まだ其處までお考へになつて居るかどうか知りませぬが、外部の壁をお塗替へになるやうな場合のことをお考へになつて居りませぬかまだ大分先の話ですけれど。

小早川——まだ別に何も考へて居りませぬ。

新名——何れ汚れて來ると塗替へなければならぬでせう。

小早川——マア3年か5年の壽命であれが剝げて來るだらうと思ひますが、どうすれば宜いものですか、其の時にですね。

鹿子木——却て少し剝げて來た方が味が出て來はしないか、私はさう思うて居る。

新名——それがね、建築が新しいものでなかつたら、それでも宜いと思ふのですが。

鹿子木——イヤ斯う云ふ建築では、今畵いてあるのが少しさびが着て來ると、確に佳いだらうと思ひます。

武田——さびも少し着くのは宜いだらうけれど、ひどく着くと困る。

鹿子木——それはは3年や5年は大丈夫で、10年も經つたら少し古くなり過ぎるかも知れぬが、それは其の時になつて、又何か考へたら宜い、私は或は50年も續けて置いて案外佳いかも知れぬと思ふのです。

新名——モザイクだとかステンレスとか云ふものは、しよつちう光らして居るのに、繪の部分だけが古くなるのは少しどうか知らんと思ふのです。

武田——少し無遠慮な言ひ分かも知れませぬが、10年も經つたら、あれは畵かれた方が厭になるだらうと思ひますがね。

林——イヤ今でも餘り好かぬのです（一同哄笑）それがね、自分で直すべき所は判つて居るのですから、谷に乘るだけの勇氣が出れば、直したら宜いと思ひますが、谷に乘ると云ふのは試驗的にでもやつて見なければ、ぶらぶらして、一寸畵いたら、くるツと廻つたりしては困りますがね。

武田——イヤ釣足場があるですよ、釣足場は非常に樂なんです。

林——隨分怖いものですよ。

武田——手摺が附いて居りましてね、橋のやうにブランと上り下りするのですから、些つとも怖いことはない、それは今でも譯なく出來ますしお畵きになるには迚も宜いのですけれども、通る人が怪我しはしないかと思ひます。面白いなと思つて、見てゐると、電車が來たり、自動車が來たりして。

林——さうですか、さうすると夜中に畵かなければならぬ(笑聲)

武田——さうしなくても、前に一寸構ひでもしましてね、さうしてお畵きになれば、幸に窓が無いのですから、出來ますわね。

鹿子木——併し兎に角高い所へ上つて、繪を畵くなんと云ふことは大變ですよ、よく高い建物の壁に沿ふて鐵の踏段の附いてゐる所がありますね、曾てあれを私が登り掛けて、2間昇ると、もう迚もそれより上には行かれないので、建築家はなかなか勇敢だ、斯んな所を平氣で昇られるのかと思ひましたが、繪かきなどはあの鐵の梯子を2間も昇つたら、それより上には迚も怖くて行けないですよ。

武田——ロダンが矢張り若い時にはやらされたものらしい、足場の上でこつこつやたつと云ふことが記錄にあります、西洋の奴は隨分やるものと思ふのだが、日本の畵家は大體アトリエの中ばかりでやつて居られるから、鹿子木君のやう

なことを言ふのだらうね。

新名——足場の上で繪を畫いてゐて、後ろにおつこちるやうな氣持はしませぬか、後ろに寄りたいと思ふたりして。

林——夢中に後ろに寄つたら、困るので、恰度腰の當る所へ手摺をやつておきました。

武田——足場の巾は何間位あつたのです。

林——半間以上ありましたね。

石川——4 尺以上ありました。

武田——畫面から幾ら位離れられるのですか。

林——5 尺位離れられます。

古塚　一さうすると、可なり後へ戻れますね。

林——けれども、何も解らないのです。

川口——下繪がちやんと出來て居りますが、下が解らないのです。

林——普通の藏の高さ程で、下の屋根に聞へる位のものですが、それが10分の 1 の下繪です。

武田——それは下が見えないから、畫かれたのですか。

林——寧ろ下が見えないやうにしたのです、先の命の問題でね、なんぼ落ちても 3 段位しか落ちぬと云ふやうにして貰つたのです、詰り 3 段位でキチツと壁にひツつくやうに足場を造つて貰つたので、上と下との連絡が付かなかつた譯です。

武田——ペンキはバケツか何かに容れられたのですか。

林——イヤ皆パレツトで。

武田——隨分大きなパレツトが要りませうなア。

芹生——足場を除るのには隨分苦心をしました。12日までに完成して、城を明け渡すのには、先づ事務所の上に載つて居る 100 尺の足場を取毀はさなければならぬのですが、8 日まで繪の方でお使ひになつて、1 日に其の 8 分板がベター面に載つて居る 100 尺の足場を除つてしまはうと云ふので、隨分苦心しました。

武田——足場がくツついて居ると、繪は畫けないでせう。

林——それで段々下ろして行つたのです。

川口——ですから、上へ持つて行つたり、下へ持つて行つたり繰返しました。

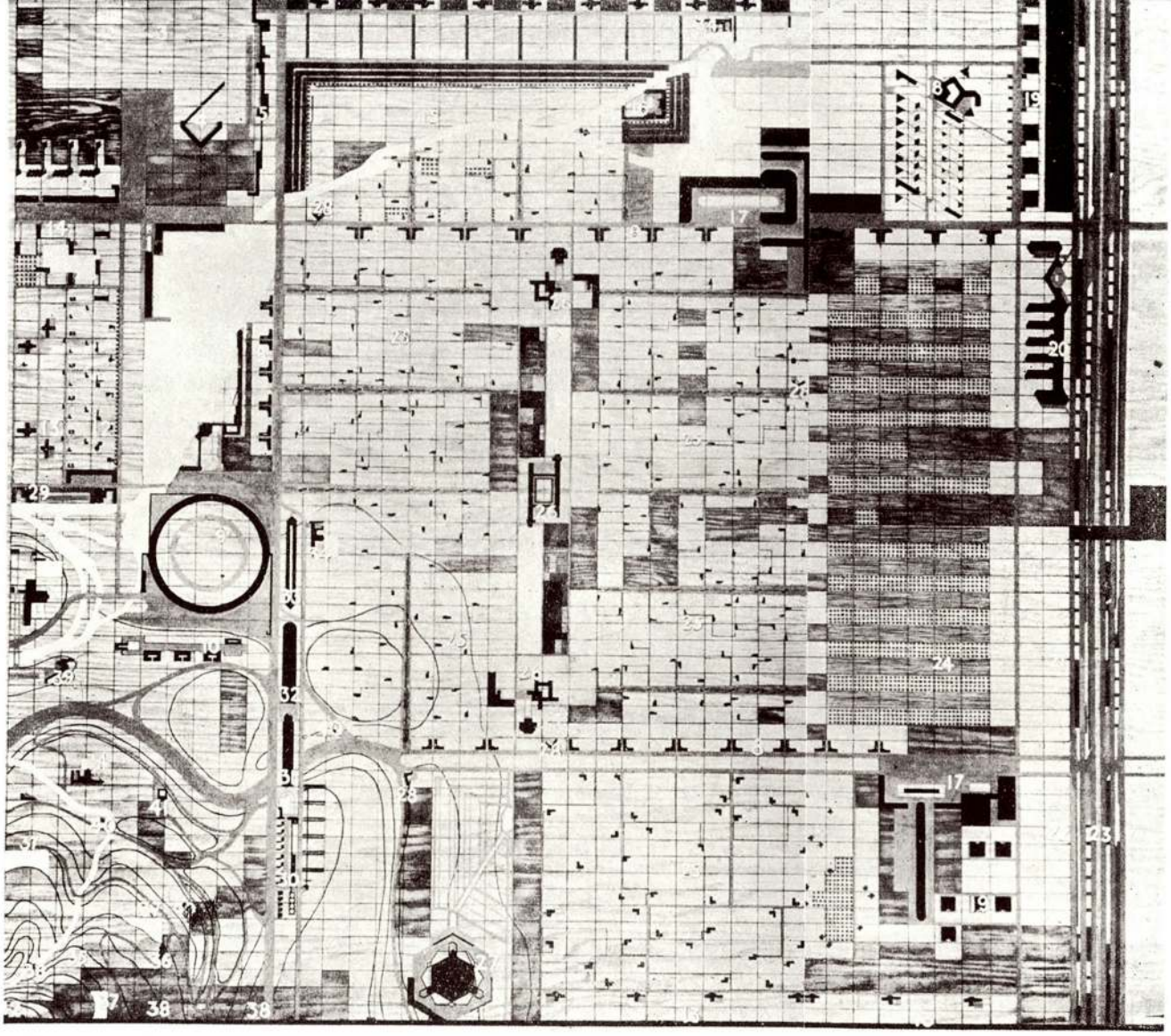
武田——バラスが繪に當つても駄目になりませう

林——あれは隨分うまくやつて戴いて、そんな所は無かつたのです。

芹生——交通が頻繁な所で、1 日でばらしましたから、隨分心配しましたね。

武田——大體お話も何つたやうですし、餘り遲くなりましては大阪へお歸りになる方は御迷惑でせうから、此の邊で會を閉ぢることに致します

新名——どうも有難うございました。



平　面　圖

「社會を形成する各單位の分散とその建築的合理化」を目的として、建築家フランク・ロイド・ライトに依つて提唱せられた理想社會の試案である。

小農場、小工場、小住宅、小規模の學校並に小さな研究室等の群落を表した模型は、アリゾナのシャンドラーに於ける冬の集會の際に、ライト氏及びタリーシンの彼の弟子達に依つて製作されたものである。

この模型は本年4月15日から5月15日まで、國立美術工藝聯盟の主催の下に、ニューヨークのロックフエラー・センターに於ける工藝美術展覽會に陳列された筈である。

上圖の平面に就て

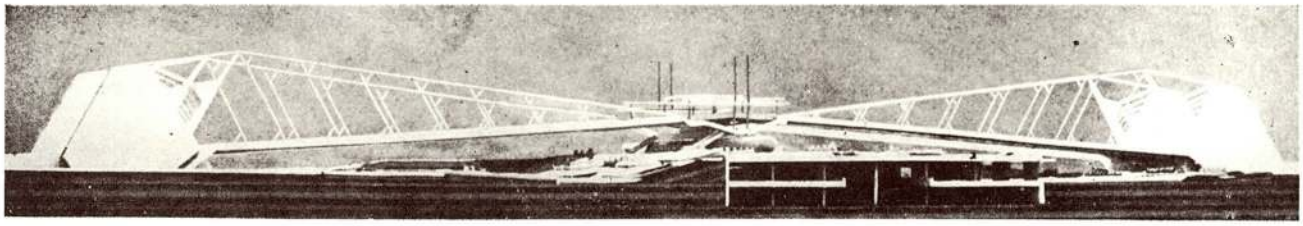
1　州廳——管理部
2　エヤローター——郵便集配所及管理部
3　打毬場
4　野球場
5　倶樂部
6　湖水及小川
7　技術者及州建築家詰所
8　專門家詰所
9　スタデイアム
10　ホテル
11　療養所
12　小製作所
13　小農場の單位
14　集合住宅
15　公園
16　音樂演奏場
17　商品陳列場
18　自動車庫
19　階上に住宅を有する小工場
20　集團工場
21　エヤローター・サービス
22　エヤローター工場
23　交通大動脈(今日の鐵道に相當す)
24　葡萄園及果樹園
25　住宅
26　學校



全　景　模　型

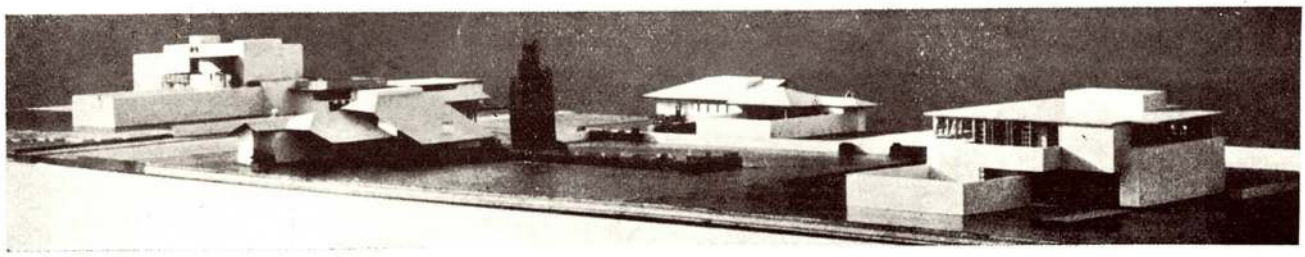
27　寺院——納骨堂及墓地
28　近隣の訪客應待所
29　浴場及化粧室
30　科學上並に農學上の研究所
31　植物園
32　動物園
33　水族館
34　高級邸宅
35　タリーシン
36　高級住宅
37　水源池
38　山小屋
39　カントリー・クラブ
40　集合住宅
41　兒童の爲めの小規模の小學校
42　自動車目標

（Architectural Record誌より　新　名　種　夫）

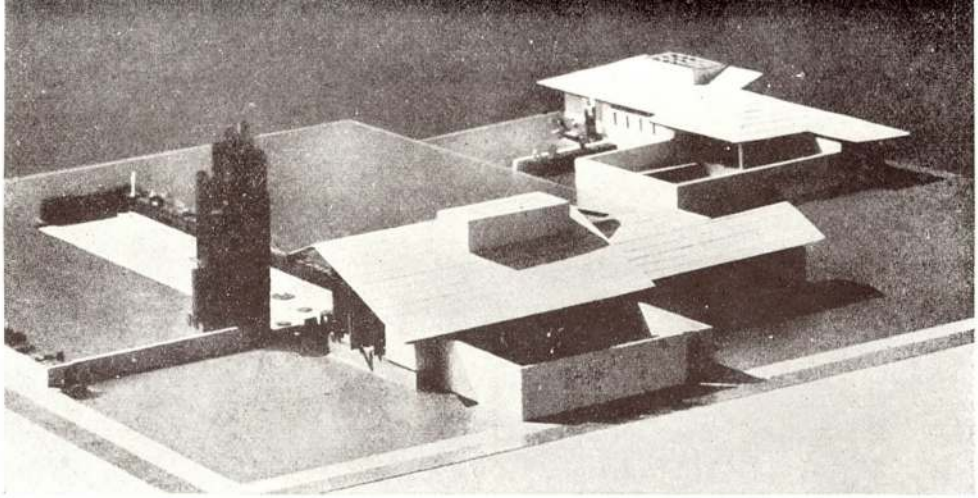


交通の大動脈を超える大架橋

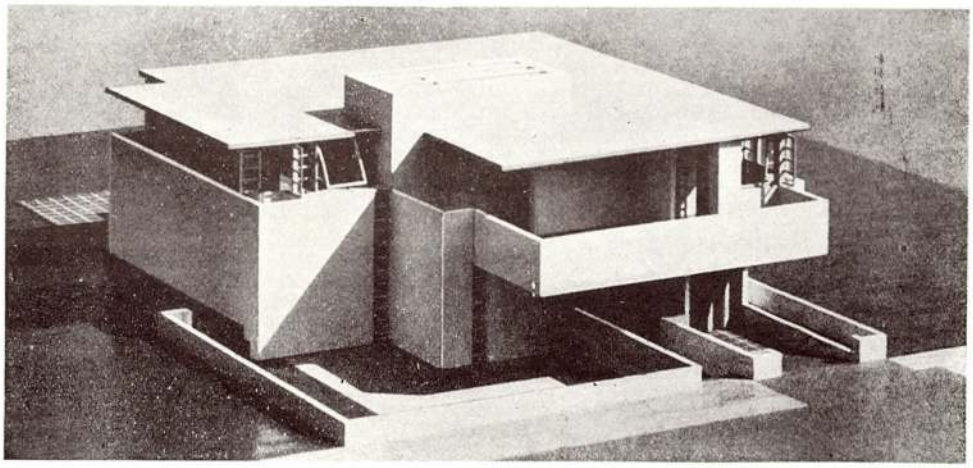
その交通の動脈は3層よりなり最上層は各種の高速交通機關、中央は單軌道高速度鐵道、下層はトラック用の交通路となつて居る。そうした3層の交通路の構造の下部は原料倉庫になり得る様計畫されて居る。



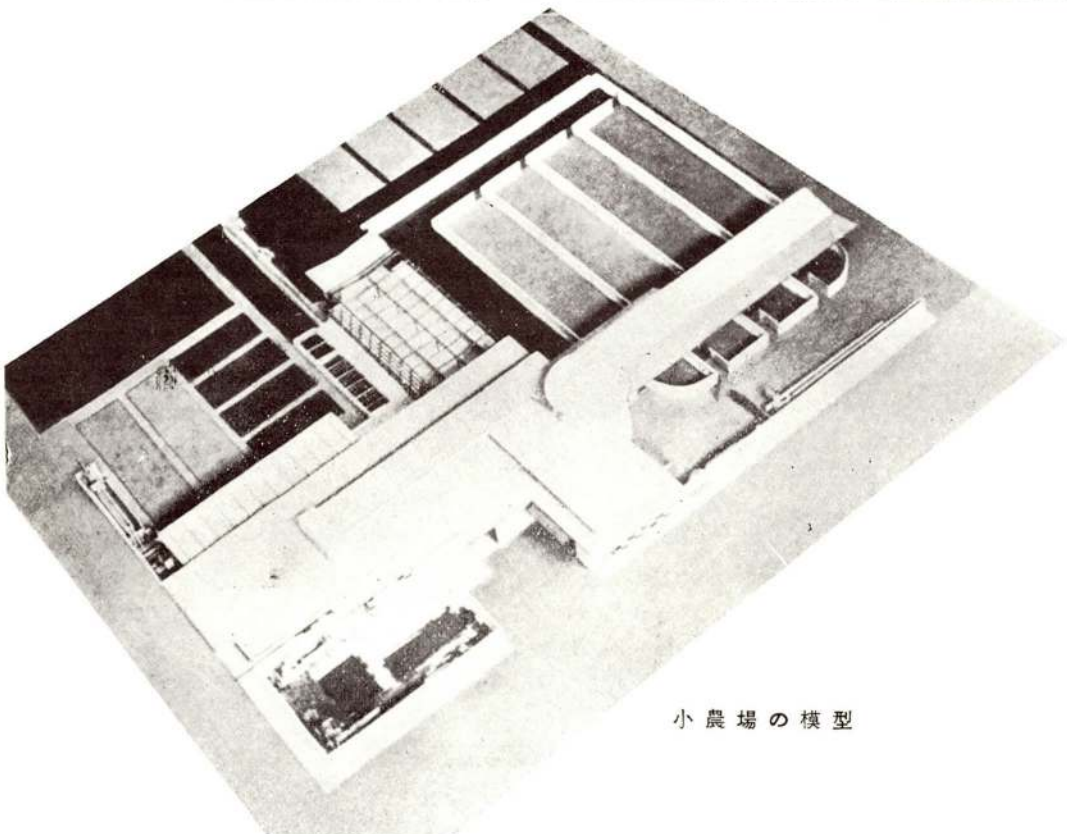
附屬詳細模型
2戸住宅　2戸の最小住宅及1戸の中住宅



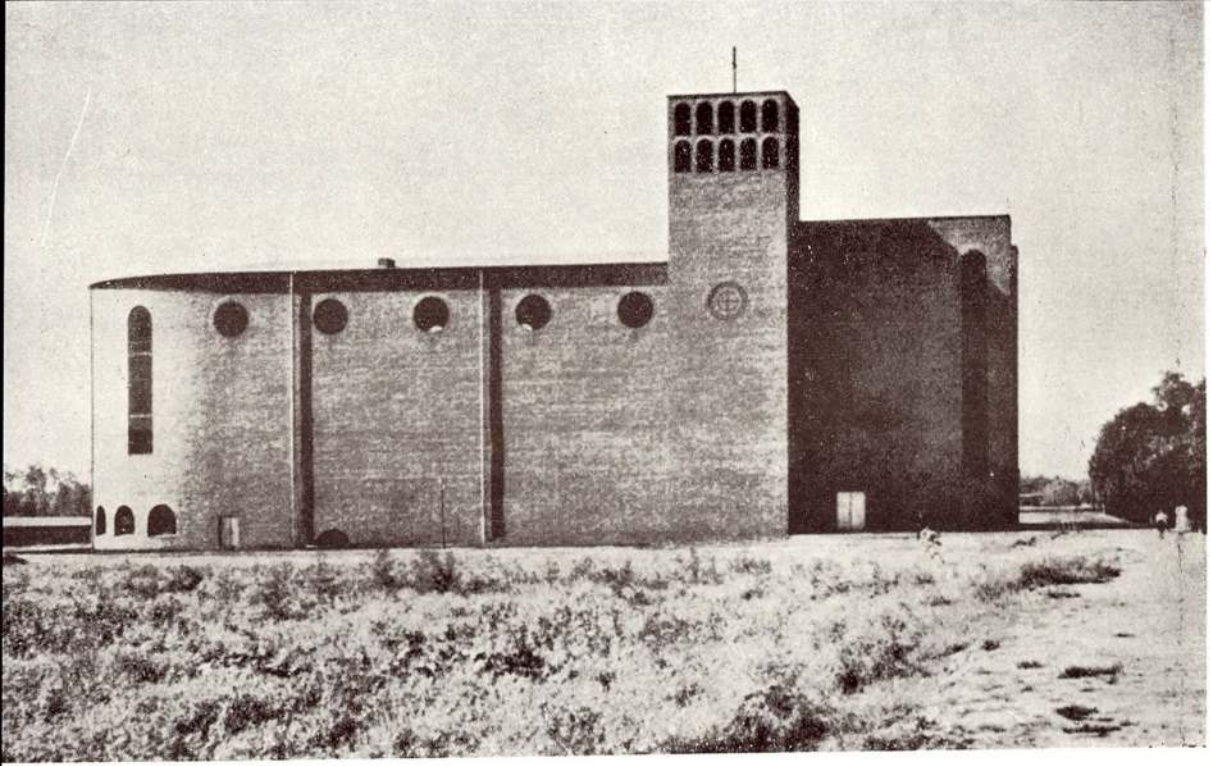
附屬模型　2戸の最小住宅



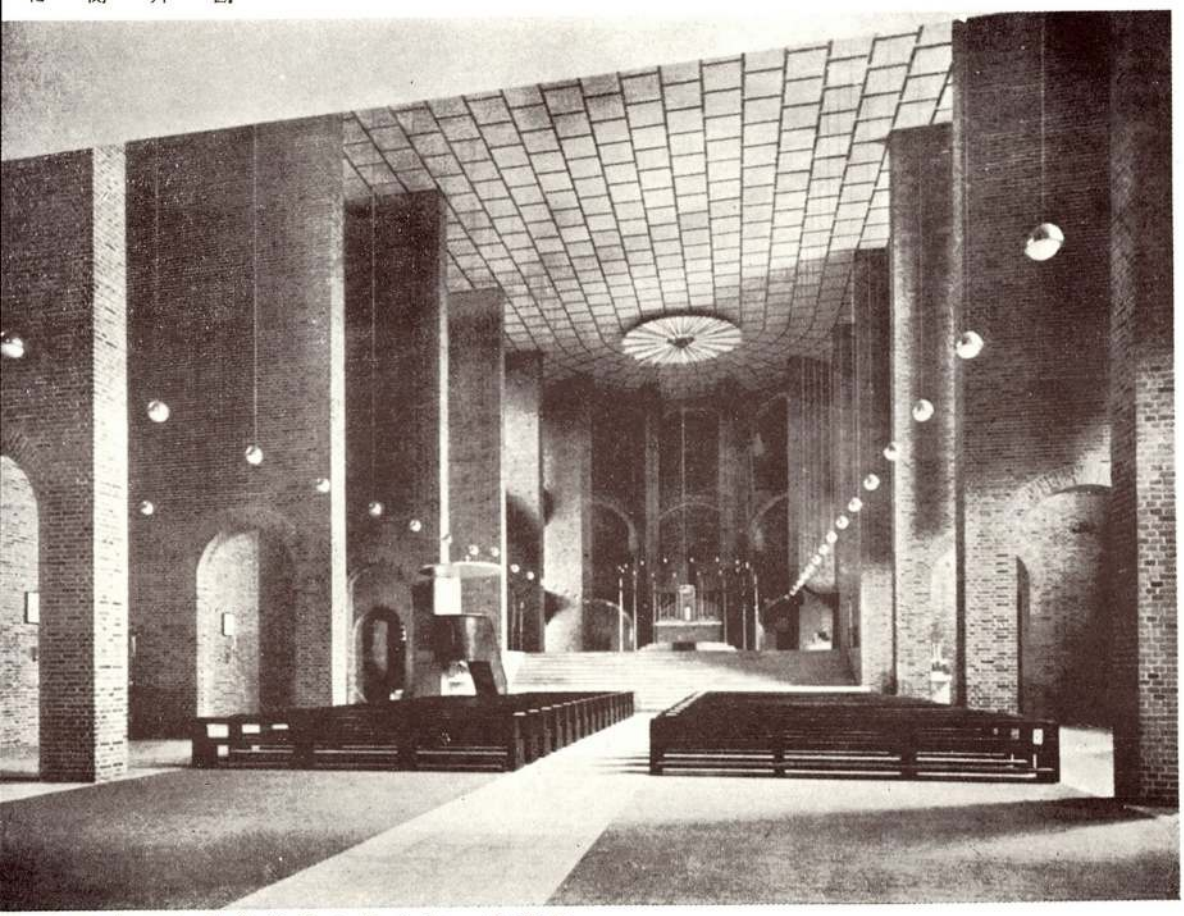
2戸住宅の模型



小農場の模型



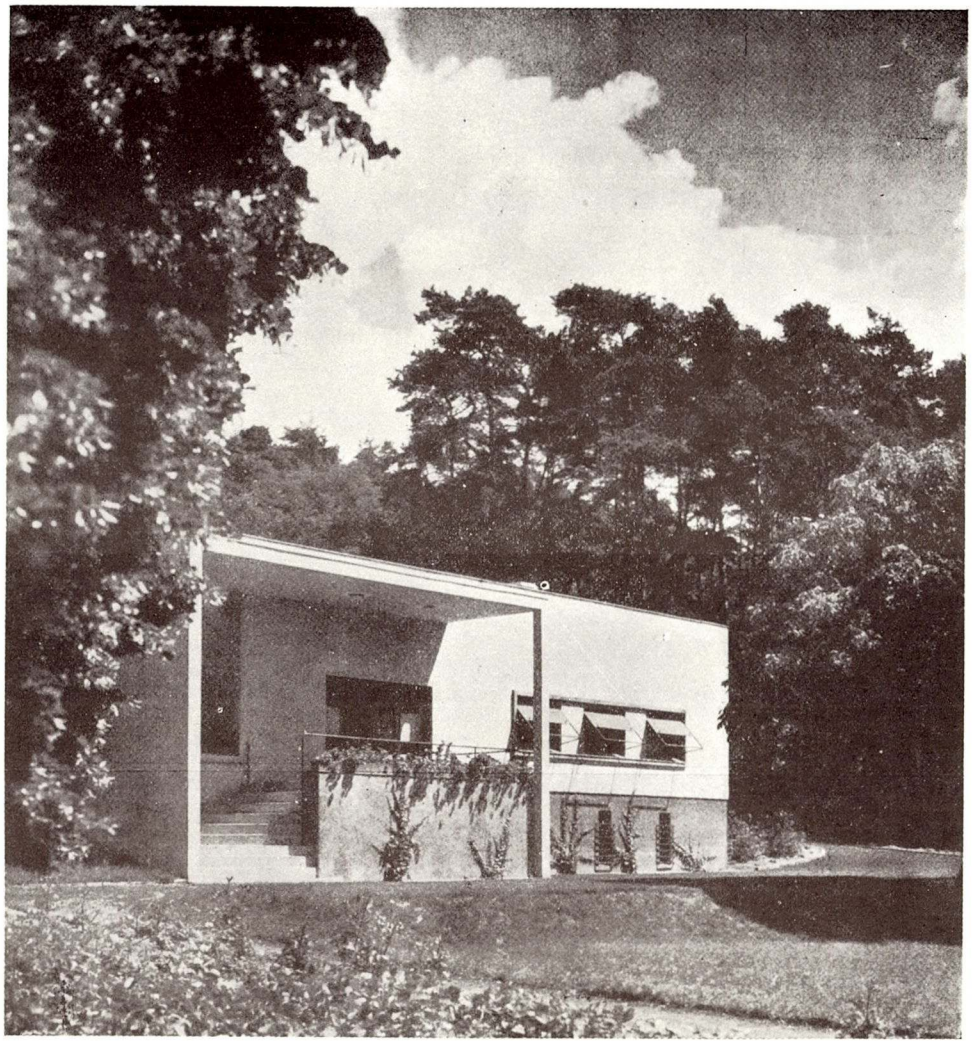
北　側　外　觀



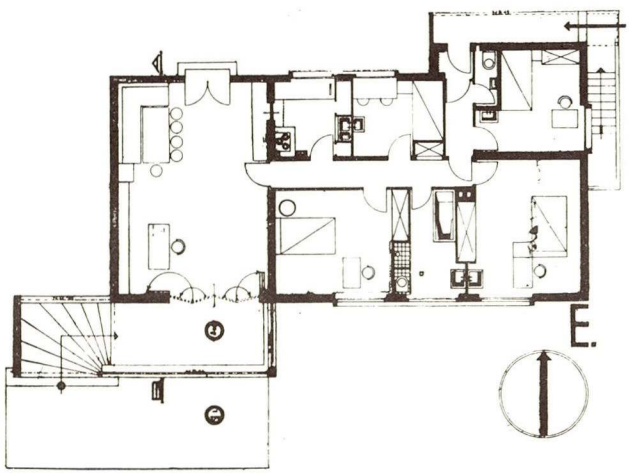
正面入口より祭壇及クワイヤーを望む

此のカトリック教會は將來住宅地となるべき土地の大通に面して建てられ、內外共壁は煉瓦仕上で窓細く、西側に大きなプレートグラスをはめた入口、その上に大丸型窓あり、鐘樓はウーブの部分より僅かに高いだけである。　（Moderne Bauformen 誌より　本多正道）

VI 78　（ドイツ）ヒンデンブルグの聖ヨゼフ教會　建築家 Dominikus Böhm 教授



外　　觀



1階平面圖

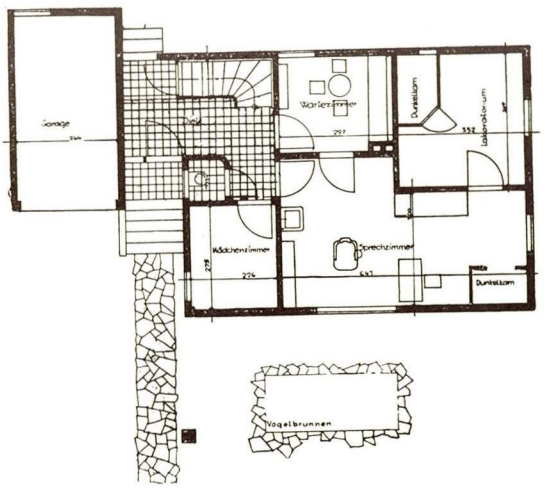
防暑保溫の目的を以て天井及壁には中空煉瓦、內側にはボードを用ひてある。建築費 17,000マーク中央煖房及溫水配給の設備あり、總地下室附1階建で1階には寢室2つ、浴室、客用寢室、女中室、運轉手室、臺所等あり、大なる居室は南側に折疊戶があつて庭園及湖を見晴す事が出來る。

（Moderne Bauformen 誌より　本多正道）

（ドイツ）水邊にある住宅（其1）



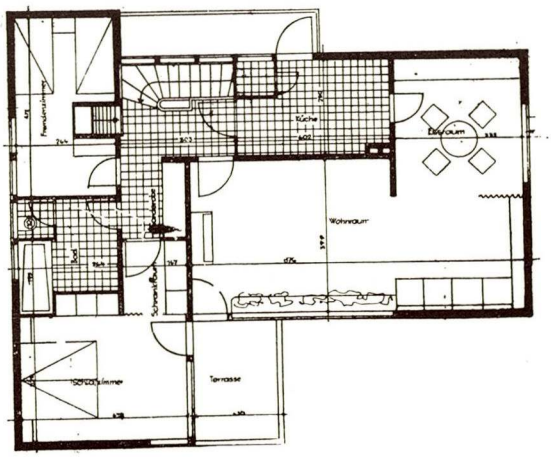
外　觀



1階平面圖

ライン河に面する醫師の家で、1階は待合室、診察室其他患者用の諸室、2階が住居用の諸室である。木造、屋根亜鉛鍍鐵板葺でお粗末な家である

（Moderne Bauformen 誌より　本多正道）



2階平面圖

VI 80　（ドイツ）水邊にある住宅

現代世界の住宅群計畫一覽

1931年ベリルンに於いて開催されたる「都市計畫及び住宅問題國際展覽會」を機として1935年發刊されたる "Städtebau und Wohngswesen der Welt" なる單行本より、世界主要國の住宅及び住宅群計畫に關する寫眞並に圖面を凡そ一棄宛轉載したものである我國に於けるものも揭載されてゐるが、こゝにはこれを省略した。

（吉田信武）



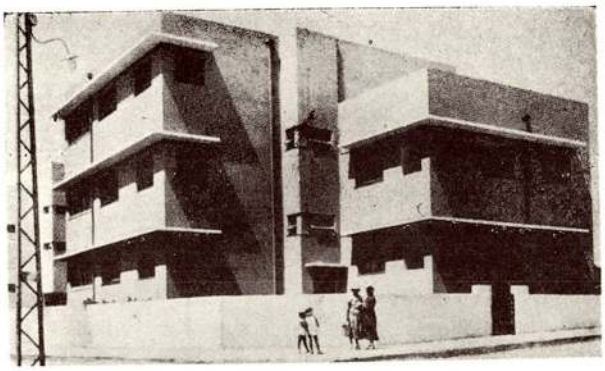
第1圖 **アメリカ合衆國** Radburn, New Jersey 住宅群の1929年の鳥瞰寫眞



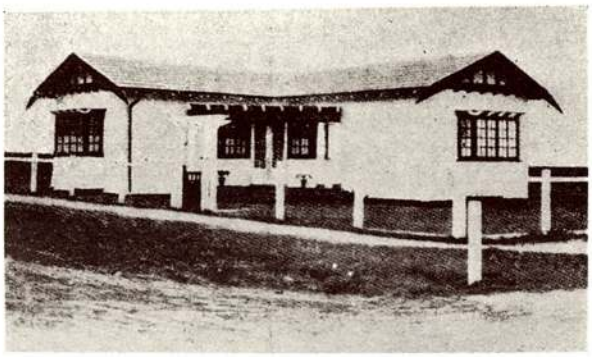
第2圖 **ポルトガル** Caisse du Travail des Chemins de fer 經營の廉價住宅鳥瞰寫眞



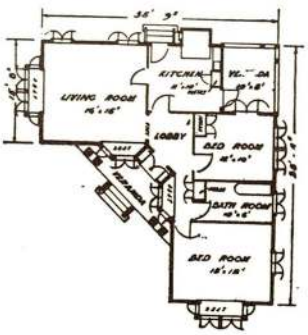
第3圖 **インド** Lahore 鳥瞰寫眞



第4圖　**パレスチナ**　Tel-Aviv の Pinner 家
日光直射防止の軒がある

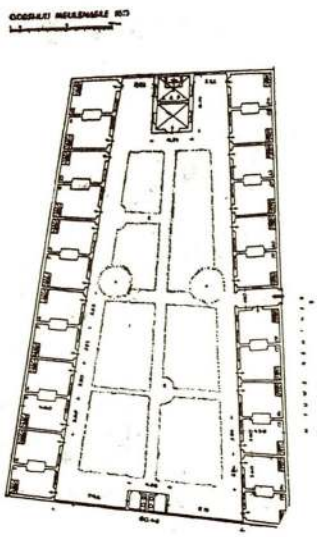


第5圖　**オーストラリア**　一勞働者住宅（下·平面圖）



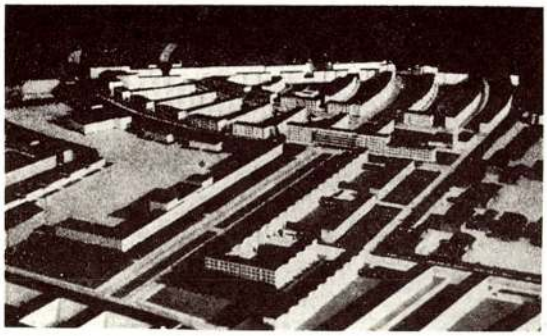


第6圖　**ベルジウム**　Godshuis 住宅群（下·平面圖）





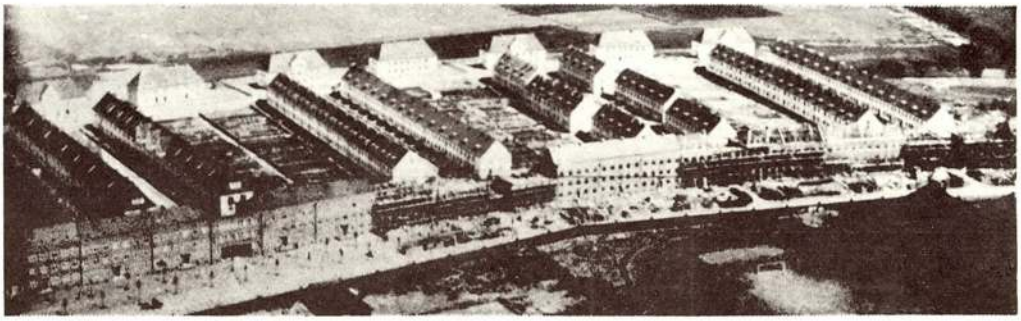
第7圖　**デンマーク**　Kopenhagen の一住宅群中庭よりの寫眞



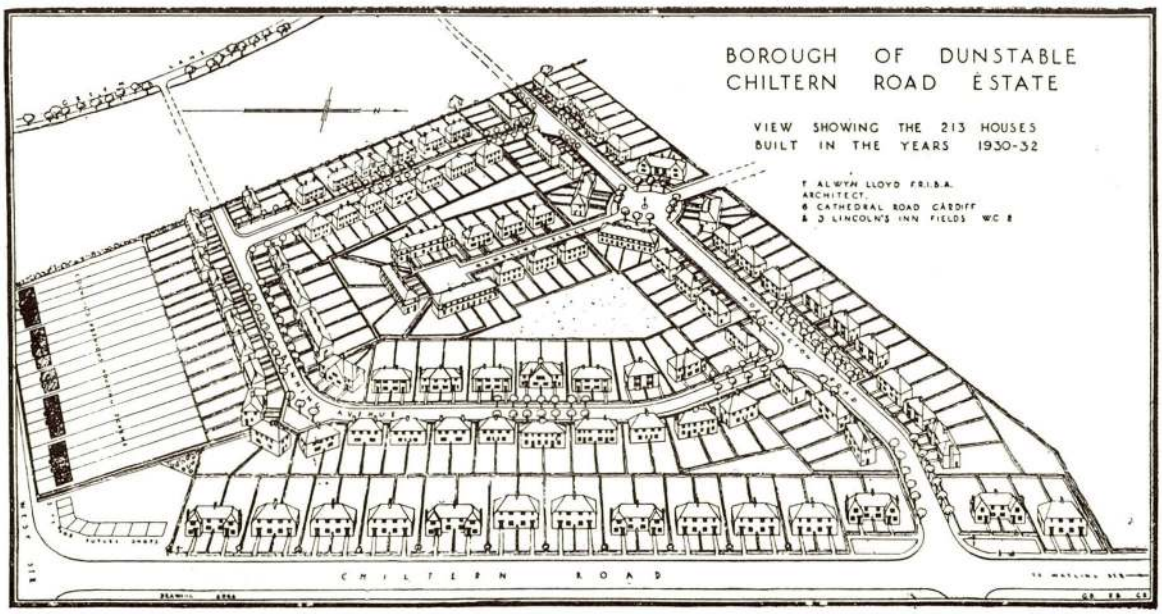
第8圖　**ドイツ**　低層家屋よりなるジートルンク模型



第9圖　**ギリシア**　Thira 鳥瞰眞



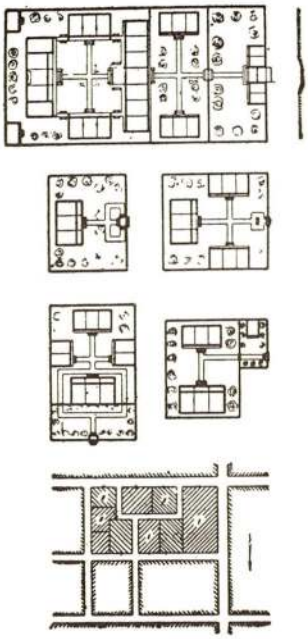
第10圖　**ダンチヒ**　Langfuhr ジードルンク鳥瞰寫眞



第11圖　**イギリス**　Dunstable の住宅群鳥瞰圖



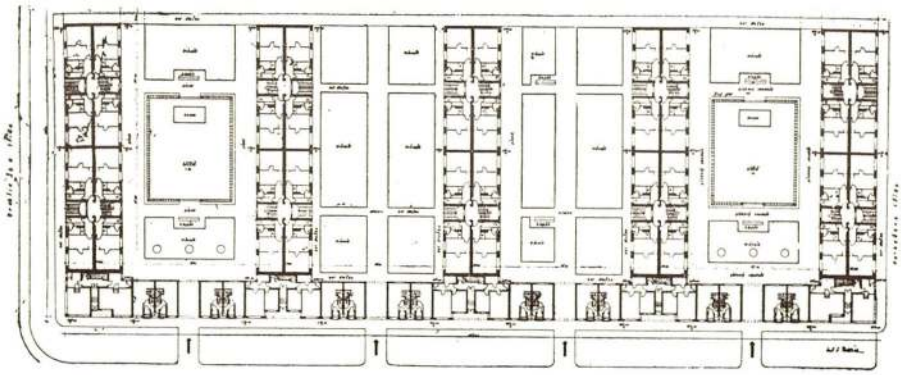
第12圖　エストニア　Oma Kolle 共同建築協會の住宅群寫生



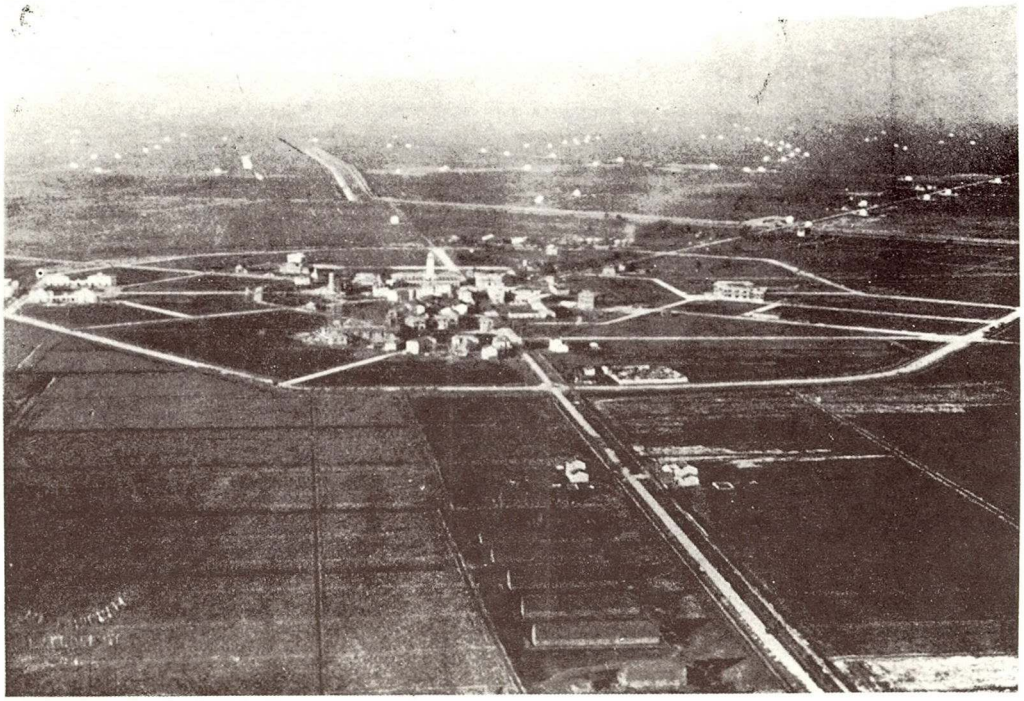
第13圖　支那　支那住宅の一般平面圖



第14圖　フランス　St. Gervais 鳥瞰寫眞



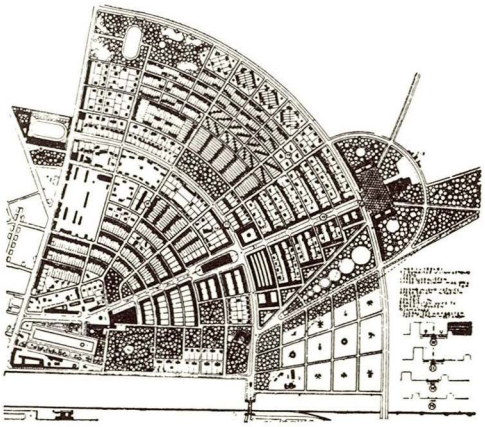
第15圖　チエツコスロバキア　Brno 小住宅群平面圖



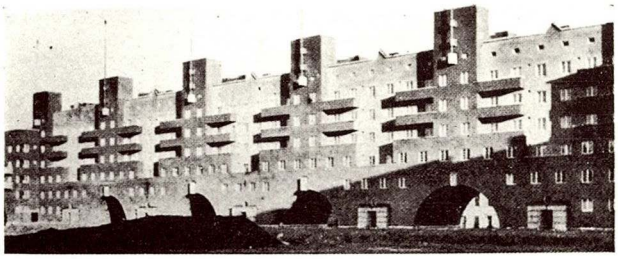
第16圖　**イタリア**　Littoria 新都市の鳥瞰寫眞



第17圖　**ラトビア**　Riga. Auseklu iela の 5 階建住宅中庭寫眞



第19圖　**ユーゴースラビア**　Ljubljana 一部平面圖

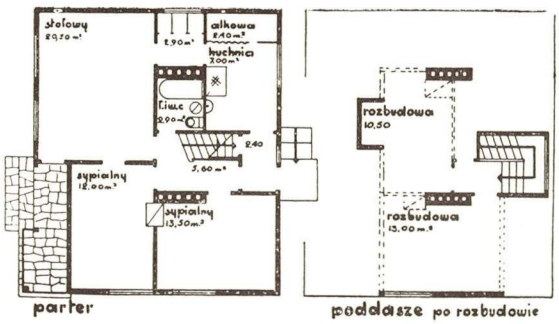


第18圖　**オーストリア**　Wien の廉價住宅寫眞

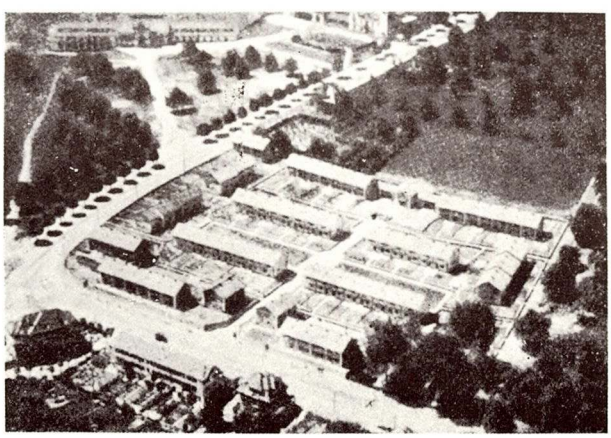


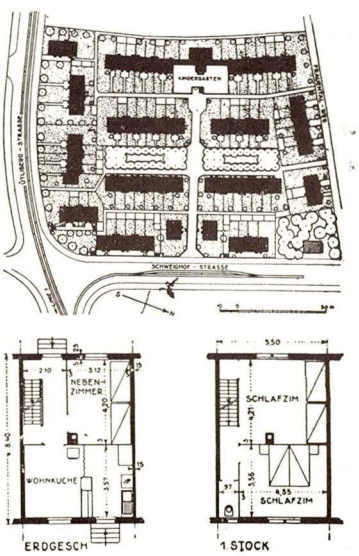
第20圖　**ロシア**　Baku の Aremenkind 勞働者住宅群寫眞（右頁につゞく）





第21圖　**ポーランド**　廉價住宅（右·平面圖）透視圖

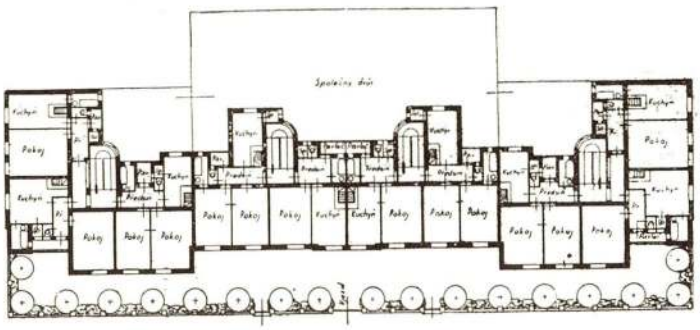




第22圖　**スヰス**　Zürich の Utohof 住宅群（右·平面圖）



第23圖　チエコスロバキヤ
洲立貸住宅一般平面圖





第24圖　スエーデン　Stockholm の Ensked 小住宅群鳥瞰寫眞



フイラデルフイア航空港への接近路に在る循環式平面交叉點

街路中最も甚しき混亂を呈し最も多く事故の發理する所は、街路交叉點である。街路交叉點はこれを形態上より大別すれば平面式と立體式とにわかれ、これを交通整理上より大別すれば斷續式を連續式とにわかれる。

循環式平面交叉點とは、適當なる大きさの中央島を設け、諸車がその周圍を同一方向に廻轉し、停止することく所要の方向に向つて進行し得る平面交叉點で、斷續式平面交叉點に比し有利であると考へられる。殊に不整形或は5街路以上の交叉せる所ではさうである。アメリカ合衆國その他諸外國に於ては既に早くよりこの方法を採用し、相當の效果を擧げてゐるが、我國に於ては最近東京市に數箇所試驗的に施設されたに過ぎない。併し、この試驗的建設の規模は稍々不備なる點あるにも拘らず成績良好なりと報告されてゐる。

中央島の形態は圓を以て理想的と見做されるが、附近の狀況により已むを得ず多少の變化を與ふるも、その效果は左程低下しない。中央島の直徑は最小20米、普通30米以上、交通頻繁なる幹線街路に對しては 100米內外を必要とする。

車輛交通常に停止せざるため、この交叉點に於ける橫斷步行には特に注意が必要である。循環圈外5乃至8米の距離に橫斷步道並に道路の中央或は適當に1箇或數箇の安全地帶を以て、步行者の保護に當るのが一般であるが、尙これを地下又は高架とした安全なものもある。

（L'Urfanisme, Avril 1935 より　吉田信武）

收　　穫

工學博士　天　沼　俊　一

前　　が　　き

本稿はある雜誌のために，期限の昭和九年九月二十日に先だつ二日，九月十八日に漸くのことで脫稿したが，先方が違約してとりに來ないので，其ままになつてゐたところ，三月中旬建築協會から原稿を要求されたから，此際新しく起稿はできかねる由申出たところ，舊稿差支なしとの事であったから，此前がきと必要な訂正，及び少しの增補をなし，今回差出したのである。舊稿が舊稿ですみ，遺稿にならなかった事は幸であった。

緒　　言

私は旅行がすきである。理由は金と時間とを費す代りに必何か收穫があるからである。行先は例により例の如くであるが，最惡の場合には，思つた程ではなく何もないので，その邊へは二度と行かなくていいといふ收穫がある。その代り案外よかった時には何度も出かける。だから人からみて何にもなかった樣でも私としては何かあったのである。そこで次に昭和九年夏期旅行中のと留守中のと，二つの收穫を記してみやうと思ふ。

1. 瑞　巖　寺

松嶋に瑞巖寺といふ寺があることは，一度あの邊へ行った人は，例へ鐵筋鐵骨の專門家でも，名所舊蹟として必ず見物して來たらうから，知つてゐる筈である。見物人は御成玄關の東方に，此に相對してゐる廻廊の小玄關から上る樣になつてゐる。上つたところは方二間の室で，そこに老爺が座つてゐて，拍子木を敲いて見物人のある事を知らせると，本堂橫にゐる案內の小僧が返事をする。見物人は其室から廻廊西側の珍らしい勾欄のついた椽を通つて北行し，左即ち西に折れて本堂前の廣椽にでる。ここから小僧が見物人をつれて廣椽を步かせながら，一部屋毎に說明をしていく。襖の繪が何だとか，欄間の天人がどうしたとか，さういった樣なことばかり述べたてるのである。幾組もの見物人が小間隔をとりながら步いてゐるときは，說明が紛糾して，ただガヤガヤと雜音がきこへるばかり。玄關のところへ行くと，そこの立札に筆太に不思議な文字が書いてあり，左甚五郎小刀一丁の作とか何とかいふ說明をして北に曲り，上段の間・床・棚・帳臺の構とをみて裏側から東側に出で，最後に寶物につき一つ二つ述べたてて追ひ返して了ふので，廻廊・庫裏等に就てはまるで一言もしない。

一般の見物人には勿論これで澤山であらうが，せめて本堂に入らうといふ曲り角のとこ

ろ位で，往でも復でもいいから『こちらは廻廊。この東の庫裏と共に本堂同様國寶建築，時代も同じであります。天井の組方やはりの彫刻がまことに珍らしく，近畿邊にもこの様な變ったのはありません』といふ様な意味のことでも言はしてはどうか。元よりまっ黒にくすぶってゐる——少しお負けがありそれ程でもない——から，上の方の最も面白いところは，曇った日やくれ方には殆んど見えまいし，また見えたところで，どこが珍らしいのか面白いのか，小僧では說明ができまいし，またできたところで聽く方で判るまいが，彼等の注意を惹くだけでも多少の効果はあると思ふ。

庫裏や廻廊はかく省られないが，之れに反し本堂の方は衆目のあつまるとこで洵に立派である。本堂といってゐるが實は方丈と同じもので，工匠は刑部左衛門國次，慶長十五年一月落成したさうである。其玄關と共に盛名を中外（？）に馳せて居り，今更ここに細かい說明をしないでも，いろいろの本にかいてあるから略すとして，餘り人の氣をつけないところを二つ三つかいておくことにした。

（一）。正面中央出入口脇羽目の彫刻（**第一圖**）

普通脇羽目のところは無地であるが，立派に見せるために彫刻が入れてある。第一圖は其一部分で，下が牡丹上が葡萄唐草である。牡丹は當代最も愛用され隨所に見出される。日光東照宮の諸建築の裝飾文様は，殆んど總て牡丹だといってもいい位である。その牡丹唐草がここに用ひられてあるのは當然で何の不思議もない。

併し葡萄になるとさうはゆかない。當代は比較的に見出さるだけで勿論稀な方である。葡萄唐草で最も古いのは藥師寺金堂須彌壇ので，これは周知の事實である。葡萄唐草はまた奈良時代初期の瓦當文様としても間間用ひられたので，これもまた古瓦研究家とか，文様の變遷等に心がけてゐる人は知ってゐるのである。それから暫くは有無を知らぬが，次は南北朝頃の彫刻にでてくる様である（大和宇陀・古市場・宇太水分神社本殿（元應二年））。此は手挾の側面に現はれてゐるので，割合厚みをもってゐるが，室町時代と推定し得る例では，一枚の板をきりぬいた様で極めて平面的のもので（信濃下伊那・上飯田・阿彌陀寺觀音堂欄間），稍や厚みをもってゐる如く見えるのでは，神社建築の脇障子上の透彫にあるくらいである（伊豫大三嶋・大山祇神社本殿）。桃山時代は栗鼠を伴ったのがあるので，有名なのは西本願寺の美しい欄間や同寺飛雲閣上層天井の貼付の繪。瑞巖寺では御成玄關が本堂の南側西端についてゐるところの虹梁下と飛貫の上の少しのすきま，欄間といへばいへる様な細長いところに一ぱい入れてある。葡萄に木鼠（キネヅミ）といって說明してゐるが，栗鼠とみてよからう。栗だって木だからといふ理屈である。日光東照宮では石の間の兩側面が本殿の正面にとりつき，後者の椽を完全に內外に分ってゐるが，その境のところに片開の板扉があり，內は黑漆地に金蒔繪，外は非常に込み入った輪廓內に菊を薄肉にほってあるところの，途方もない立派なものであるが，この扉の開閉するところの上の竹の節の間の欄間も亦，これと釣合はねばならぬから，金色の葡萄に栗鼠の膨れ上った彫刻を入れてあるが，保護のため鍍金をした金あみで覆ふてある。これで保護の

目的は達してゐるが，美術品として鑑賞するには，どうも邪魔になつていけない。尤もこの様な場所はめったに近づけないのだから，隨て前者の目的さへ達すればいいので，そのため後者は犠牲にしてあるのであらう。

葡萄ばかりの例は，大德寺唐門（一間一戸四脚門 日暮門る稱す）の正面，扉の上のところにあるが，大分修理が入つてゐる。寧ろ當初のものと思はれるところは少ない位だが，とにかくこの唐門のと，今ここにかいてゐる**第一圖**のと二つくらいほか實例をあげ得ぬ　この葡萄は上の方に雲をほり，牡丹の下の方には水と浪とをほつてある。蓮ならいいが池の中から牡丹が生へてゐるのは少しおかしい。併し牡丹は低いところにあり，葡萄は蔓で高いところまで上っていくところを表はしたのかも知れない。

（二）。正面の欄間　（**第二・第三圖**）

本堂正面廣椽と內部との境には欄間が十所入つてゐる。何れも彫刻としては堂堂たる大作であり，さすがに當代ならではと思はしむるもののみである。今向て右即ち東から西へ順に題目をあげてみると

（イ）　孔雀・牡丹・雲

（ロ）　尾長鳥・牡丹・雲

（ハ）　尾長鳥・牡丹・菊・雲

（ニ）　鹿・楓樹・雲

（ホ）　孔雀・牡丹・菊・雲

（ヘ）　鳳凰・桐・萬年青

（ト）　鳳凰・桐・萬年青・蒲英公・水

（チ）　尾長鳥・牡丹・雲

（リ）　鶴・松・躑躅（？）・竹・雲

（ヌ）　鷄・松・梅・竹・萬年青

である。（ヘ）・（ト）あたりの萬年青は葉ばかりだから，或は何か他のものを見誤ってゐるかも知れぬ。其他にも躑躅等もたしかかどうか判らない。まだ少し位見落しがあるかも知れぬが，大體，かうであるとして，さてかうしてみると，（イ）・（ホ）が一種，（ロ）・（ハ）・（チ）が一種，（ヘ）・（ト）が一種，他に（ニ）・（リ）・（ヌ）が各別だから，結局六種になつて了つたのである。これ等のうち最後の二つを圖示することにした。

（リ）　鶴の欄間　（**第二圖**）

此は親鶴が二羽と雛鶴が四五羽ほってあるので，つまり鶴の親子である。松に鶴の圖案はいくらでもあるが，此はその他左下に躑躅の様な花の咲いた灌木があり，左下と上（雲の下）とに竹か笹か何かその様なものが添えてある。併しながら其主要なる材料は松だから，つまり「松に鶴」で，それに蘆かばかり他の植物をそへた上，雲を少し入れて全體をまとめたのである。

鶴の親子はこの他に大德寺唐門西妻の妻虹梁下頭貫との間の彫刻のうち，東面（內側）南方にある。此は松樹の間に巢を構へ，親は二羽ゐて一は飛び一は歩いてゐるやうなところを彫刻してある。

西本願寺對面所の欄間には鸛をほってあるといふので「鸛の間」ともいふが，彩色は白くないから，丹頂鶴と間違ふ筈はない。故にほんとうのカフノトリでないかも知れぬが，とにかくこの鸛の間の南面西端のには，やはり親子の鳥がほってある。左下に巢があって，多分雌であらうが巢の內に坐り，胸の下から子が顔（ほんとうは上半身を）をだしてゐて，右手には親鳥がもう一羽，雄かも知れぬが飛んで居り，あとは松樹と雲とで巧みにすきまなく間隙をうめてゐる。

鶴は鶴科に屬する鳥で，カフノトリは鸛科の鳥である。あらゆる點に於いてよく似てゐるため，昔から丹頂鶴と誤認され易かったけれども，此二種は全く緣の遠い種類で，親類關係等はないのである。對面所の欄間にほってあるのが果して鸛か鶴か，どういふつもりでほったのか知らないが，昔の事であるから，いふ迄もなくどちらでも大した違ひはない位の考へであったらう。さうすると先づ鶴に似た鳥の親子はこれ共に三種類ほか例をあげ得ないので，少ない方であるのに，瑞巖寺のは五羽も雛がゐるのだから，さうして大きいせいもあらうが，一番あたりも賑だから，珍例となすに足る。

（ヌ） 松竹梅の欄間 （**第三圖**）

松と竹と梅と三つ揃へてめでたいものと考へだしたのは，いつ頃からのことか未だはっきり調べ上げた事はないが，さう古くはないと思ふ。尤も蓼股のうちに別別にこの三つが入ってゐて，それが三つ並べられた例は室町時代にあるが（山口市・古熊神社本殿正面），かういふ風ではなくて，一つ輪廓內に此三種の植物が一所におかれてゐるのをいふのである。これ迄私の知ってゐるのでは，この中の二つ，例へば梅と竹・竹と松・松と梅，といった樣なのなら桃山の例を擧げ得るが，三つ揃ったのでは，園城寺圓滿院鞘の間欄間に現はれてゐるのが古い方であった。これは江戶初期と考へてゐるのである。承應二年の建築たる日光大猷院廟拜殿向拜の彫刻中にも亦松竹梅がある。併しあたりが餘り彫刻が充塡してあるので，大して引立たない。

此は中央に皷臺にのれる太皷があり，その上に雄鷄がのってゐるが，これは小さいもので左程目立たない。皷臺の右には割合に大きな實のなってゐる萬年靑があり，その他は殆んど右半は松に雲，左上の隅に松が一つだけ飛び距れてほってある。左下は殆んど梅ばかりだが，よくみると梅の間に極く僅か竹がある。これはよく見ないと見落す位僅かで，中中見出しにくい。何のために此竹を添えたのか，これ位ならあってもなくても同じことであらうのに，ほってあるところをみると，やはり桃山式に松と梅とが主であり，ほんの景物として添えた位のところ，粗品進呈といった調子にくっつけたのであらうが，この樣なところから追追に三つを殆んど同等にほったり，また描いたりする樣になったのであらう

と思はれる。今のところ三つ揃った最古の實例かも知れないと考へてゐる(末尾註一)。

(三)。廻　廊

廻廊は桁行延長二十五間，梁間一間とある。梁間一間は判るが，二十五間はどういふ風に數へるのか，私はいくら數へ直してもさう多くはならず，寺できいてみても，そんな事はどうでもいい人達ばかり棲息してゐるのだから判る筈はなし，無駄な手數と時間とを費すことはやめにしたから，今以て判らない。

併しながら玄關(御成玄關に非ず廻廊附屬の玄關の事)を入り，階段を五つばかり上って，拍子木老爺の坐ってゐるところと，其右隣(即東隣)の室とは，化粧屋根裏の構架式が頗る面白い。此所から東へ進むと庫裏に續き，左に折れて北行する事九間で「三間三面の室」にでる。此九間の間は，總て西側に明障子をたて，また東西の方向に柱上に架渡せる虹梁下端に，適當な位置に鴨居を入れ，其上は粗き連子を臨時に設け(其有樣は**第四圖**に少しく見えてゐる)，幾つかの室に分ち，床には疊を敷いてあるから，どうも廻廊といふ感がでて來ない。此西側と，拍子木老爺の居る室とに折れ曲って濡椽があるが，その勾欄が非常に變ったものである。勾欄ばかりではなく，この椽下の持送りも亦珍らしいものの隨一で，殆んど見えないところ——庭へ下りてそばへ行かねば，遠方からでは極めて平凡——であるのに，いろいろ變った意匠を施してある。實はこれも一部を圖示したかったが，それでは餘りに圖が增すから遠慮したので，更に他日他の方法でどこかに揭げることにした。

廻廊柱間に架渡してある虹梁は，袖切のところに洵に嶄新な意匠がしてある(**第四・六・七圖**)。一口に廻廊といっても日光東照宮のの樣な善美を盡したのもあるから，さうはいへぬ場合も勿論あるが，ここの等はまあそんなにしないでもよかったと見え，材料はさう吟味してないやうである。少し位まるみがあっても，曲りくねってゐても，それは大した問題ではなく，それ等を巧に利用してうまくおさめてある。**第四圖**に一部分見えてゐるのはまともの木だが，**第六圖**下方(これは眞の虹梁ではないが)の等は上端に大分丸味がついてゐる。さうして新しいから鯖尻のところ等は大して感心のできぬ形であるが，袖切の繰形及びその邊の渦文の形が珍らしいから，木肌の完好ならざる點等は殆んど痛痒を感じないのである。

夫れからまた持送りが獨特である。**第五圖**はさきに記した九間の廻廊の北の終りのところから，「三間三面の室」へ入らうとするところの右角の柱上持送りの一で，**第四圖**に其全形が見えてゐる。此上端は其上の仕掛梁(虹梁とも見ゆるがこれはさうでない)の下端と正に適合してゐるあたり，他では見られぬ面白味がある。

外國建築には，洋の東西を問はず，隨分面白い持送りがあるが，どういふものか我國にはろくなのがない。それでも若葉で出來てゐるのなら，室町桃山あたりに相當なのがあるが，單にくり方を應用した輪廓をもち側面に渦文を刻んだのでは，京都相國寺本堂須彌壇の裏，北面せる普菴禪師位牌祭壇のや，薪一休寺の浴室の等で，先づ此種のものでは上等品である。**第五圖**のは恰好がいいといふよりも，意匠の點が面白いので，この樣な考へは

やはり時代の産物とみられるのである。

廻廊が本堂の東面廣椽の横手に取つくところは唐破風に終つてゐる。此部分は玄關を上つて庫裏の方へ行くところと同様に東西に長くなつてゐるから，つまり先きの北行九間の部分とは直角になつてゐる。その曲り角即ち東北隅のところが「三間三面の室」になつてゐるのである。廻廊は總て化粧屋根裏。

就中此東北隅の方三間の室の構架式は複雑中の複雑で，**第六圖**の解説にかいた通り到底かけないし，書いても判らないし，平面圖立面圖共に駄目，強いてやれば色分けにしてでもみたら，少しは見分けがつくかも知れぬ．けれども出かけて行って實地をみねばほんのうに了解はできない。さうしたところでぢきに忘れる處が多分にあるから，できるだけ餘計寫眞をとつておかねばいけない。だからここに掲げた位では何にもなるまいが，それでもないよりはよからう。**第六圖**即ち東北の入隅のところや，同圖にもでてゐるが其一つ西の間の上のところの工合等，圖をみておいて貰ふより仕方がない。其下方に近く寫つてゐる仕掛梁袖切の詳細が**第七圖**にあるが，桁受の柱上繪様肘木のくり形も亦，これによりて知るべきである。

此室の南より$\frac{2}{3}$，本堂へ取ついてゐる廻廊の化粧棟木の延長した東西に通つてゐる水平材の上に一個の板蟇股がおいてある(第八・九・十圖)。此室の化粧棟木が南北に上を通つてゐるから，いふ迄もなく此化粧棟木から左右にでてゐる化粧垂木と前記の水平材とで，頂角の鈍角をなせる等脚三角形を形つくつてゐるわけである(第八・九圖)。つまり入母屋造の妻のやうな形になり，そこに板蟇股がおいてあるので，若し外からみれば妻飾の一種なる「虹梁蟇股」の如く，立派に格好はとれてゐるのである(第八圖)。此蟇股は本堂・玄關・廻廊・庫裏を通じて，用ひられてゐる唯一のものである。

新しい時代の割に形の非常にいいもので，而も其兩脚端が上にはね上つてゐる。梯子をかけて上までいってみたのではないから，實際のところはどうなつてゐるか知らないが，少なくとも脚端だけは上つてゐるのだから，さうするとこれは和歌山市松生(ショウジョウホン)院本堂正面外陣の兩入隅，火打梁上にある板蟇股と頗るよく似てゐるのである。何もこれはあれの眞似をしたといふわけではないが，形の類似からあの系統といつても大した不都合ではないと思ふ。そのほか**第八・九・十**の三圖をみてゐれば，いろいろ周到の注意をもって構架してあるところや，繪様繰形の形や，面白いところや感心するところが澤山に見つかるであらう。讀者諸君が若しあの寺を見物されたら，この邊で數分を費すことをおすすめする。

*　　*　　*　　*　　*　　*

圖示はしなかったが，此寺の庫裏は大分變つてゐて，京都妙法院の夫れと共に，現存の桃山時代の二傑作だと思つてゐる。切妻妻入だが，全體の形は勿論，正面出入口の庇に用ひてある虹梁其他の繰形繪様，破風拝み下大瓶東兩脇の唐草化した笈形，內部の木鼻彫刻など，何れも注目せねばならぬもののみである。

2. 大崎八幡神社

仙臺驛前の廣場から八幡行のバスがでる。せいぜい五分おき位にでる。八幡町といふ札をだしてゐるから直に判る。道のりは隨分あるが，京都の市バス同様僅か十錢で一里餘りを走ってゐる八幡神社の鳥居のところ迄行くから便利此上もない。それから石段何十段か昇り，石敷の參道を隨分歩くと割拜殿があり，その後ろに更に權現造の國寶建築がある。此割拜殿は新しいもので美術上の價値は少ないが，仙臺市あたりにかういふ式の建物の存在が私にはおもしろいのである。此國寶建築の拜殿の昇勾欄親柱には，右左共金銅の擬寶珠が冠せてあるが，向て右方のには

大檀越藤原政宗公
仙臺惠澤山八幡宮御寶前右擬法珠
供艱軌範師法印大和尙位實清
木幡木工助
直山式部
莊屋山城國上京一條之住
津田法兵衛
慶長十四年己巳八月十五日

の銘あり，左方のも同樣であるが，ただ「右擬法珠」の代りに「左擬法珠」とあるだけの差である。この銘文は從來餘り知られてゐなかったやうだから，書いておいたのである。尙ほどこから始まるのか，圓いところへ同じやうな間隔にほりつけてあるのだか判らぬ。そこでここには「大檀越」からかいておいたのである。

右銘文中「擬法珠」とあるのは　さう見受けぬかき方である。實は私は初めてこの字に出あったのである。普通擬寶珠といふが，音の類似から

金帽子＝北野神社本殿・妙心寺勅使門前橋
銀帽子　【和州舊跡幽考】の法華寺本堂の記事中にあり
木帽子＝官幣中社嚴島神社本殿前舞樂臺

等とほったのがある。右のうち銀帽子といふのは，【舊跡幽考】に，法華本堂の記事中

…此堂の御建立は慶長六年九月御母公の爲に幕下豊臣公御再興あり奉行は片桐市正（銀帽子銘）とあるだけで，實物に刻んだのの有無は知らない。語呂からいふと「銀帽子」の方が似てゐるが，ものからでは「金帽子」の方が上等らしくきこえる。最後の「木帽子」といふのも木ではなくて金屬である。語呂からも値打からも，これが一番工合が悪い。ところが今度のは「擬法珠」とあるので，また一つ新しいかき方ができたわけである(末尾註二)。

拜殿は七間三面に五間の向拜附だが，此向拜や拜殿の內外枡栱間に彫刻入の蟇股が殆んど全部に亙って入ってゐる　全部を並べて何か書いてみるのも一つの方法であらうが，今はそのうちの四つだけにつき，次に少しばかり記しておく。

(一)。猫　（**第十一圖**）

拜殿中央の間の西端內側，即ち拜殿の最西端から東へ三つ目の間の內側に，「猫に牡丹に鳳蝶」の彫刻を入れた蟇股がある。牡丹に鳳蝶の相稱で平面的なものは，尾道市淨土寺多寶塔・紀伊長保寺多寶塔・近江栗太春日神社本殿・山城綴喜御靈神社本殿等を擧げ得るが，これ等は何れも一種の型があって，それに當嵌ってゐるところの，いはば公式通りの

ものであるが，それが一層進化して一方により，そのあいたところへ猫をおいたので，すっかり見違へる程繪畫的になったのである。さうしてこれを少しかへると有名な日光の「眠り猫」になる。即ちこの猫を蟇股の中央にもってきて同じく左を向いたまま眠らせ，開花した牡丹を右下へ，半開の左上へ，さうして固い蕾を右上と左下に配してあの眠り猫ができてゐるのである。而も猫の背が高いので蟇股の輪廓につかへるため，輪廓を少しいびつにして猫を蹲らしてある。

牡丹に鳳蝶といってもただのでは色の配合がよくないから，クロアゲハ位であらうが，あの大きな夏生の眞黒なのが紅でも白でも牡丹の花にきた所は確かに美しい。そこを猫が下から狙ってゐるところは，春日遲遲の頃には珍らしくない出來事である。だから時の彫刻家がそれを題として此をつくり上げたのであらう。さうしてこれは日光の眠り猫の原型と考へられるのである。その點に於いて大に興味があるのである。どうも此の様な種類のものの暗示によりてあれができたと考へてよからうと思ふ。起きてゐる猫を眠らし，クロアゲハを逃がして了ったところは獨創的であらうが，かういふ工合に慶長十二年に既に起きてゐるのがあるのだから，全部新案とはいへない。寛永七年から十二年にかけて建てたといふ妙心寺塔頭天球院の杉戸には，牡丹に鳳蝶にシロテフに眼を半開にし，半分眠りかけてゐる猫が描いてある。日光のが「眠り猫」ならこれは「眠らんとする猫」で，今問題にしてゐるのは「起き猫」である。四天王寺太師堂北門のはやはり眠ってゐる。

猫こそ桃山にでてきたらうが，蟇股内の獅子なら室町からあるのだから（近江葛川・地主神社幣殿，羽前西田川郡上郷村・八幡神社社殿），同じ虎屬の猫を以て獅子に置きかへればいいので，唐獅子なんて想像的の動物より，家畜としての猫の方がどの位親しみがあるか判らない。それだから虎屬の動物と牡丹と取合はせたものは，室町以降蟇股内に用ひられ，桃山で猫となり，慶長に起きてゐた猫が建物ができて直に描いたとすれば寛永十二年に眠りかけ，同十三年に眠って了ったに過ぎぬのである。尚ほ桃山（ことによつたら室町末かも知れぬ）に既に眠ったのもゐたのである。

（二）。迦陵頻伽 （**第十二圖**）

迦陵頻伽はまた迦羅頻迦ともいふ。迦羅とは美音，頻伽とは語言といふことださうで，雪山の中，一切の鳥聲皆悉く及ばす，又卵中に在て即ち能く聲を出すさうである。けれども螢は卵のうちから薄い光をだすのとは異り，どうも卵中で聲をだすのは少しばかり受取にくいやうであるが，そこは靈鳥だからその位のことはあるかも知れない。とにかく身體と脚とは鳥で羽があり，人間の手が生へてゐて女の首がついてゐるのだから珍鳥に違ひない。ところが大德寺三門上層には，天井繪に雙頭の迦陵頻伽（？）が描いてある。雙頭の魚類や虫類が人工で比較的容易にできる様に，此珍鳥もさうしたのかも知れぬ。さうしてこれこそ珍中の珍と思ふが，或はさうでも何でもないのを，私が知らなくて珍らしがるのかも知れぬ。

此迦陵頻伽を入れた蟇股は，拜殿中央の間の西側で南から第二の間にある。天人だのこ

れだのは，一般に桃山から手挟だの蟇股だのに用ひられだしたが，稀に太山寺本堂（伊豫温泉郡和氣村）の様な鎌倉時代の建物の蟇股にも使ってあるから，さういふ除外例もあるが，太山寺のは下からみたので，梯子をかけて上って調べたのではないから，或は後補であつたのかも知れない。

此蟇股内にゐるのは容姿端正で手に蓮蕾をもち，雲間を悠然と滑走(？)——羽翼を動かしてはいそがしさうでいけない，滑走に限る——してゐるところがほってある。天人だのこれだのは大概は端正であるが，江戸末のになると全く下品で見られない。けれどもまだ此時分のはいい　そこでどうして妙聲鳥といふ人頭鳥身の女性ができたかを考へてみる。これはいつも♀に限ってゐる様で，♂のゐたためしはない、かういふ種類の理想物だから，中性かも知らぬが，少なくとも顔をみたところでは♀である。

大分與太だといふので徒に冷笑を買ふに止るかも知れぬが，往昔埃及に於いては，人が死ぬと靈魂は人頭鳥身の動物の形で體内から逃げだしたのださうで，これを「バア」(Ba)といってゐた。即ちバアが逃げだしたことは人が死ぬといふことであるが，いつかまた歸ってくる時もあるといふ期待から，死屍を木乃伊として保存しおき，Soul-bird がいつ歸ってきてもいいやうにして，且つ其鳥が墓中に入り死屍に近づける様に，小さい縦孔をあけておいたのださうだ，併し不幸にして未だ歸ってきて死體に入り，死體が爲めに蘇生した話をきかない。これは誰もきいたものはなからう。閑話休題として，そのバアは♂の様で手はない（Max Müller, "Egyptian Mithology"）のが普通の様であるが，若し手がある時は「お守り」(ānkh) や呼吸のしるしの小さい帆 (nif) をもってゐるさうである（"A Concise Dictionary of Egyptian Archaeology"）。此バアが希臘に入りハアピイ(Harpy)となったらしい。此ハアピイは人頭鳥身で♀なること迦陵頻伽と同じであるが，到底後者の様なやさしい性質はもってゐない。身は鐵の如く如何なる刃物を以てしても傷けることさへできず，其上人肉を八裂にし得る位に鋭い爪をもってゐる大變なばけものであったが，遂に有翼の神神に追ひかけられ，逃げ場所を失ひ海中に墜落して溺死したといふ經歷をもってゐるのである（"The Argonauts"）。

斯く一方は希臘で惡性の鳥となり，一方は印度に入りて生れない先に卵の中で既に聲をだす様な妙聲鳥となり，この方は手ができたので飛びながらものを把握することができるので，ここでは蓮の蕾をもって雲間を滑走してゐる。私はこの脚が鳥の夫れである事に大に同情するが，斯様なのは他に緊那羅やサイレンもゐるし，また♂ではパンやファウン等もあの通り毛むくじゃらの獸脚だから，一一氣の毒がってゐてはきりがあるまい。さうして天人入のなら左程でもないが，迦陵頻伽だけに少しばかり氣に入ったのである。

(三)。蓮　（**第十三圖**）

改めて述べる迄もなく蓮は好んで佛教關係に用ひられるもので，その方の殆んど總てのものに現はれてゐる。これも亦埃及が本家であるらしく，希臘や羅馬に入りては建築の瓦

端飾にそのまま現はれたり，其全盛時代の建築裝飾として卵舌飾（Egg and Tongue）として隨所賞用せられたりした。此は蓮瓣の展開に他ならぬので，「卵」や「舌」ではまるで意味が判らないのである。一方印度に於ては，古くはブハールフト（Bharhut）塔婆玉垣の笠石に埃及の蓮そのままの形があり，阿育王の都なる華氏城（Pataliputra 今の Patna）址發堀の杜頭にも展開した蓮花裝飾がついてゐる。これも西洋人に言はせれば，やはり「卵」（「舌」はない）を並べたのだといふかも知れない。埃及式蓮はまたアッシリアの裝飾にも現はれてゐるが，これ等を總て偶然の暗合といって片附けて了ふことはできないであらう。

希臘羅馬に入った蓮はそくっり其まま今日まで用ひられてゐる。日本等へは歐洲から明治になって古典建築や復興建築と共に輸入され，やはり建築家の仲間には，此頃はどうか知らぬが，私の知れる範圍では「エッグ•アンド•タング」と呼ばれてゐた。羅馬にはまた蓮花の眞向きそのままを墓の立石等の面につけたのがある。これは丁度我國でいふなら謂はゆる陶棺のあるものの側面についてゐるものと同性質で，大和水泥（ミトロ）の傳に入鹿父子の墓の繩掛突起の側面に線刻してある六瓣蓮花文も亦同意味とみてよろしいのである。

印度に入った方は佛教の興隆と共に各地に大流行を來し，塔婆基部等へも亦賞用された。最初の蓮は恐らく佛教渡來と共に朝鮮より輸入されたのであらう。今日では飛鳥時代の佛像の臺座光背を初め，その他隨所に遺物がある。眞言宗等では堂內中央におく大壇の四隅及中央に五色の蓮蕾をおくやうであるが，あの様な蓮蕾は勾欄架木上の裝飾として支那では其まま用ひられたが，我國では變形して寶珠の形をとり，隨分昔既に神社建築の勾欄架木上，丁度支那建築と同じ位置に裝飾として用ひられ，今日に及んでゐるやうである。其他鎌倉（近江•官幣中社三上神社本殿手挾及椽東礎石）•室町（近江葛川•地主神社本殿蟇股）等の神社建築にいろいろの蓮模様を見出し得るのである。桃山以降多くの實例があることいふ迄もない。

此等から考へてみると，神社建築の蟇股のうちに蓮位出てきても，それは當然のことと考ふべく，問題にしないでもいいのである。殊に桃山江戸の例はいくらでもある。此場合も亦さうである。**第十三圖**は正面內側（外側は東から西へ順に鱗三個•中央鶴•虎三個で植物は一つもない）最西端のもので，最初に記した猫の一つおいて西隣である。このほか蓮は正面東端と其次とに二つ並んでゐるから，つまり合せて三個あるうちで，此が圖柄として最も面白いと思ったので，一例として揭げることにしたのである。

中央に開花した蓮をおいて中心飾とし，左上に半開の花，右上に未開の蕾を配し，あとは蓮葉や其他牡丹蓮桐等，何にでも共通の若葉等を以て空間を適宜に塡めてある。花や蕾は白であとは綠色に彩色してあるから，綠のうちに白が目立つ。つまり中央に最大の，左右上に之に亞ぐ大さの花又は蕾を配して文様の骨子をつくるといふ，例の鎌倉式左右相稱の型式の痕跡を充分に殘してゐるので，その變遷を知らないでただこれだけみたのでは，桃山で彫刻が發達したからこの様に複雜な文様ができたといふことが判るだけで，それ以外の妙味のあることを知らずにすませねばならないから，餘計なことの様だがここに少し

ばかり書きつけたのである。

（四）。牡丹 （**第十四圖**）

此も亦中央に大きな白牡丹の花をおき，左右の上方に白い蕾をおいて骨子になし，それに前說明に記した若葉を適當に配してつくった文様で，蓮より此方が一層其據て來たところを物語ってゐるのである。即ち鎌倉室町の牡丹に鳳蝶の左右相稱式の變化したといふことは，誰れでも氣がつくであらうと思はれる。此場合は綠色に塗った唐草は中心から右左が同じでないが，同じ様なやり方はいつもよく例に引く京都市六波羅密寺の厨子の扉についてゐる文様と全く同意匠である　さういふ點からみても，此文様は大に興味のあるものである。

然らば以降は大概この調子かといふに決して左様なことはない。もっと後の堂堂たる大建築に用ひられたる牡丹唐草に，反て型に嵌ったのがいくらもある。ただ鍍金をしたり赤や綠で美しく彩色してあるため，目がだまされて氣がつかないだけの事。氣を落つけてよく見れば文様はこれより遙に原始的で，例へば長方形の場所ならば中央に大花，上兩方の隅（若くは上下左右の四隅）に蕾を配した極めて平凡なものがいくらでも現はれてゐるのである。

*　　*　　*　　*　　*　　*

昭和八年に行ったときは丁度曇天のため，瑞巖寺では廻廊と庫裏の寫眞がとれなかったので，實は昨夏もう一度行ったのである。幸ひに前日の夕方になり約三週間此地方で續いた季節外れの霖雨が上り，三十日は好晴であったため，廻廊のだけは目的を達したが，庫裏の內部や其他諸門に及ばなかった。併し先きがつかへてゐるので，その翌日即ち三十一日は，これも亦前二度ばかり失敗した寫眞をとる目的で仙臺市の大崎八幡神社へ行くべく出かけたところ，朝からまっくらに曇って雨が降りだし，神社へ着した頃は可なり大雨で手のつけやうがなかった。圖に揭げた四枚の蟇股寫眞は，位置をとったりするのまで入れて約三時間を費した結果漸くとれたのである。殊に猫のは前に二度失敗してゐるから，三度目正直といふわけで三十五分かけやっとこれだけ。專門家からみたら如何にもだらしのない寫眞であらうが，素人にはこれがせい一杯のところ。朦朧なのは怪しいのを引伸した結果と大目にみて貰ひ度い。

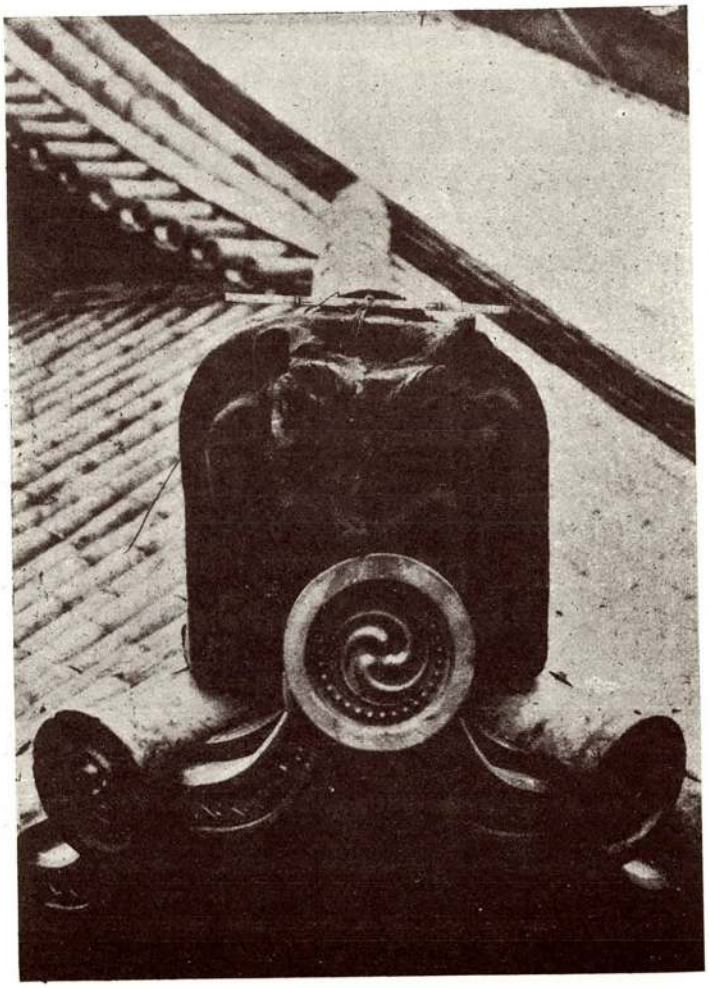
3. 鑁　阿　寺

此は「バンナジ」とよむ。足利市の名刹。寺は建久年間鑁阿上人の開基といふ。寺では本堂と鐘樓とが國寶になってゐる。

鐘樓，三間二面の袴腰附ので枓栱は唐様出組。何分ひどくなってゐたと見え，新材を以て補加したところ多く，先づ様式保存の仲間である。ただ上層の肘木が四隅のものに笹繰なく，間の柱上ののみ笹繰をつくってゐるのは，變った手法である。最も注意すべきと思ふのは枓と棰との關係がないことで，つまり鎌倉建築に多くみる「六枝掛」になってゐな

いことである。

平安時代にはまだその様な關係がなかったが，これにもないところをみると，建久では鎌倉へ入ったばかりなのだから，平安式である方が當然といへるので，かういふのが反て建久創建の際の建物だといふ一證となり得るのかも知れぬが，枝割の無關係な建物は，京都相樂の海住山寺五重塔や平泉の中尊寺金色堂覆屋等にもあるし，肘木の唐様なのも少し氣が早過る様にも思へるし，鎌倉初期としても，建久より少しは降るのではないかと考へられる。但しこれは何等文献をみたのではなく，建物をみて思ひついたのである。保存上の顧慮からかも知れぬが，袴腰の下方三尺位，生子板をはりつけてゐるのはひどい。尤も同じ様に彩色してあるから保護色を帶びてゐるにはゐるが，結局人の目を欺くことはできぬ。上は哺乳類より下は魚蟲に至るまで，古往今來敵の目をだまし自己を有利に展開さすべく，夫れ夫れ本能によりて動作をしてゐるが，結局は人のため探しだされるのである。



第十五圖　鑁阿寺本堂西北隅鬼瓦

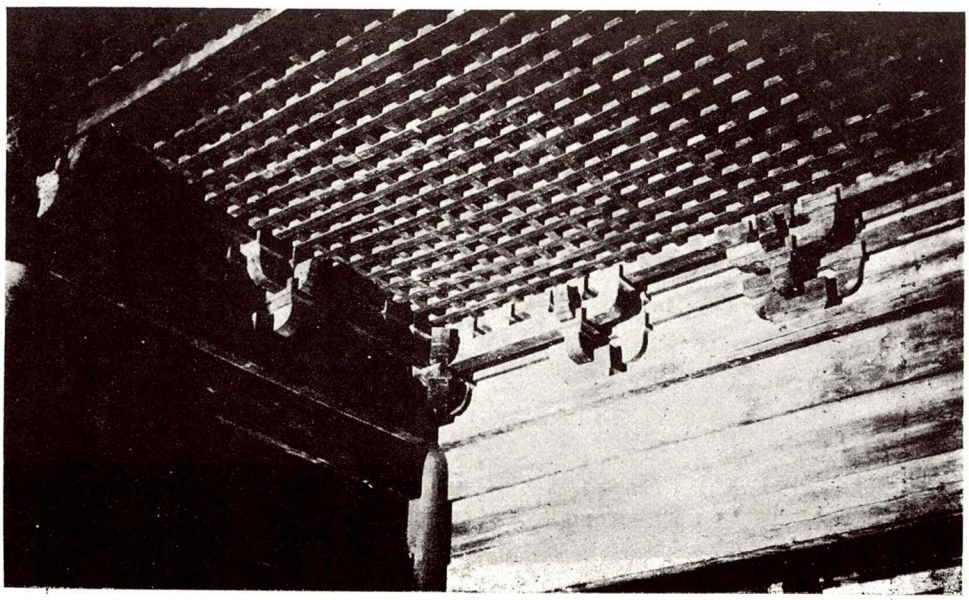
他の瓦は全部新調したもので、古いのはこの邊にはない。上に平たくあるは曲尺の約一尺(一呎)。をみるには都合がよろしい。口が耳までさけてゐて、上の牙と耳とが同じ高さにあるところが面白い。鬼によりて新に造ったのださうである。未だ鳥衾がのせてないので物足りないが、その方が反て鬼の顏現在屋上にある最古の鬼瓦。他にもこれと同型式のはあるが、夫れ等は何れも今回の修理に際し、此

（昭和九年八月二日）

況や鐘樓の袴腰に卷いた生子板等は，如何に巧に色つけしても駄目である。保存も大事だが，物は美術の模範として貴重な建築である以上，當該寺院並に監督官廳の一考を煩し度いのである。

本堂。大御堂といふが俗に大日堂といふ。方五間周圍椽附單層入母屋造の大建築。數字でかけば方 56.28 $\left(\frac{\text{單位}}{\text{尺}}\right)$であるが，側面の中の間が殊に廣い建築で，その上正面三間$\left(\frac{\text{深さ}}{15.00}\right)$背面一間$\left(\frac{\text{深さ}}{14.46}\right)$の向拜がついてゐる。正間中央に軒唐破風があるが，その金具に元文二年の銘があるさうである。此向拜は先づ唐様だが江戸式だから，元文二年につけたか造りかへたかしたのであらう。後方の向拜も亦室町位らしく，柱は替えてあるが面は元通りとの事であった，比約$\frac{1}{9.7}$。

前の二間が外陣で後三間が內陣。周圍深さ一間通り化粧屋根裏の入側が廻ってゐる。さうして中央の方三間には內外陣共組入天井をはってあるが，この入側と組入天井の境には蛇腹枝輪が用ひてある。此建物は正面外陣の天井廻りが洵に面白くできてゐるので，外陣二本の大虹梁の上に大瓶束をたて，その上に頭貫と臺輪が大虹梁と同方向に用ひてあるところや，周圍の內部柱上のところは，尾垂下端に持送りをつけたり，このあたり唐様の禪宗建築をうまく應用してある、柱上部に粽をつけ，肘木の角を圓くし，枓栱を詰組にしたりしてゐるところも亦唐様である。併しながら蛇腹枝輪・組入天井・吹寄菱格子・椽・床板等は唐様とはいへない。



第十六圖　鏡阿寺本堂內陣西南隅　（昭和九年八月二日）

柱間には大概一具の枓栱があるだけだが，側面中央の間は特に柱間が廣い ── 16.08（單位尺）── ので，二具おいてあること，此寫眞の右方に見る如くである。隅に長い共通の肘木を用ひてあるところと，組入天井と，柱上部の粽と臺輪とに注意せよ。

本堂が鎌倉時代の純然たる唐様建築の手法によってゐるといふことを，從來書物で讀んでゐたから，果してさうなら是非共見學せねばならぬ必要があったので，行ってみたら純唐様ではなくて，今述べた様な點で和様が入ってゐた。即ちこれは和唐折衷建築である。寺に天福年間の棟札の寫しがあるといふので，一見を乞ひておいたところ，いくら探しても見當らぬとの事で，見ることができなかったが，九月十三日になって，ある知人の手から謄寫版一枚刷の棟札寫しといふのを受取った。これは大變に長い文句で，上に「奉倣起方五間大日如來大殿一宇」，其下に「天福貳稔歲星甲午正月十六日乙卯甫斧」「同二月十九日戊子立柱同孟夏朔乙亥上棟」と二行に記し，それからまだ澤山に文字がある。本堂を様式上からみたのでは建久創建のままは問題でなく，天福もどうかと思ふが，これを否定するだけの材料もない。併しこれを様式の上から自由に判斷すれば，正應が最も適當ではないかと考へる。

*　　*　　*　　*　　*　　*

花園妙心寺の塔頭德雲院で，同院住柴山玄信師と深き關係ある足利市善德寺住職柴田慈孝師に嘗て面會したことがあったが，私が今夏足利市へ行くことが，どこからか知らぬが洩れて柴田師の知るところとなり，不思議な御緣で善德寺へ宿することになった。さうしたところから同師及び同寺の信徒總代で同市一流の機業家なる秋間爲八氏の好意で，滯在二日間非常な便宜を得たことに就き，此機會に感謝の意を表す。先方は御病氣のため，私は時間がなかったため，同市の有名な考古家にして栃木縣史蹟調査會委員の一人丸山源八氏に面會するを得なかったことを除いては，今樂しい記憶で充ち滿ちてゐる。

4. 布引山釋尊寺觀音堂厨子

緒言のところで斷った二つの收穫のうち，留守中の分を次に記す。これは物は小さい厨子であるが，建築的工藝品で正に特等品である。

私はある關係で信州に少しばかり友人がある。其中の一人なる山浦政氏から，七月三十日附で手紙と寫眞とがついてゐたのを，八月八日夕刻旅行から歸って早速あけてみたところ，寫眞が五枚に摺本二枚，棟札の寫し一枚とがでた。何れも釋尊寺觀音堂に關係あるもののみであった。

【日本案內記】中部編，布引觀音の條に

> 小諸驛の西約六粁，千曲川の沿岸大久保村布引山にあり，電車の便がある。觀音堂は朱塗で三間三面入母屋造，江戸末期の築造にかゝり，絕壁の洞窟前に作り出された舞臺造の建築である……昔この山麓に住んで居た無信心な老婆が，牛の角にかゝれる白布を追ふて遂に善光寺詣りしたと云ふ……傳說地である。

とあるが，江戸末期の築造にかかるといふのは，確かな證據があるのか，或は様式上の推定か，何れにしても古くない，從てさう大したものでないことだけは確かである。小諸驛の西約六粁ださうだが，四粁約一里ださうだから，一里半と心得てよろしい。

私は未だ此寺へ參詣したことはないが，其全景（第十七圖）の繪葉書を先年長野市で見た時，實地見學を望んだところ，大したものでない由をきき中止したきりで，其後機會は到來しないでゐる。だから勿論實物を知らない。實物は知らないがよく記憶に存してゐるから，「あれだな」と思って次次と寫眞をみていったところ，どうも大變なものがでてきたので，暫し茫然として了った位であった。手紙をあけてみたところ，そのうちに

……先頃明治十四年以來秘められて居た布引山釋尊寺へ參り……お厨子と岩屋を開いて漸く撮影いたしましたあまり盛股が氣に入つたので御送りいたします……墨書銘の「嘉」字の所缺けてゐますので少しは判然しませんですが先づ確かの樣に思はれました……

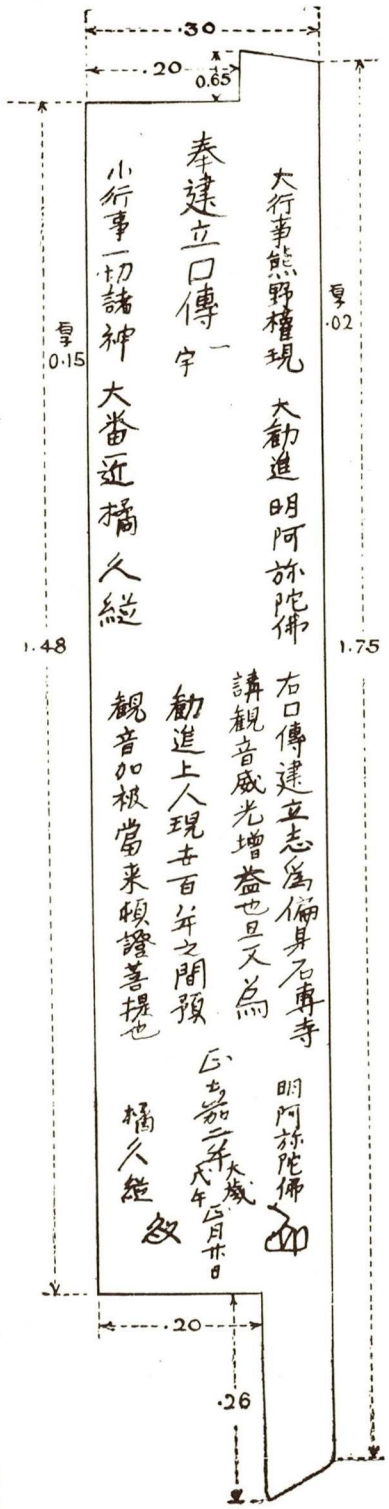
とあった。

斯る美事な寫眞を私だけで樂んでゐるのは勿體ない次第だが，さりとて同好者に一人づつ見せるのも甚だ手數な上に時間もかかる。だから雜誌へ一所に書いておいたなら，こんなものに用のない人は「復例のか」といって默殺するだらうが，すきな人は繪位はみるだらう。だから利益は相當廣い範圍に及ぶからと思って，「あなたの御發見として適當と思ふ雜誌上に紹介しても差支ありませんか」と照會したところ，「少しでも役にたてば何よりだから任せる」といふ意味のお返事を頂いたので，ここに一通りの解說を附して，同好の士と共に山浦氏の厚意を分たうと思ふのである。勿論實物を知らないで紹介を試みるのは不都合であり，且つ危險を伴ふ處が多分にあるが，棟札の寫しといひ厨子の寫眞といひ，鎌倉のものたることは殆んど疑ひのないもので，贈られた寫眞の裏にはいろいろの事が書いてあり，夫等を材料として一通の解說はかけるから，棟札の寫眞は字がはっきり寫ってゐないので省いた代りに，同封の寫しを凸版として入れ，他の四枚の寫眞は必要の部分を撰び，**第十七圖**から**第二十圖**までに揭げておいた上，同氏の手摺本により臺股の圖をつくり，**第二十一圖**に凸版としてだしたから，本文と併せ圖の解說を讀まれん事を希望する。ほんとうは**第十九圖**の厨子全形を先にだし，次に妻のをだし，臺股を最後にすればいいが，圖の取合はせの都合上少しく前後したのは蓋し止むを得ないのである。

厨子は長方形の平面を有し，四方に大面取の方柱をたつ，正面柱內法 3.52，側面同 2.05，柱の太さ及び面の割合等は記してないから判らないが，寫眞でみると鎌倉の割合であるとは確かと思はれる。それから大棟長 3.20 で反りあり，中央で 0.05（以上總て單位尺）の垂みがあるさうである。下の方は寫眞がきれてゐて判らないが，土臺が廻ってゐてそれから大面取の角柱がたち，長押は三個所あり，土臺と腰長押との間は三つに區劃して格狹間を刻し（この格狹間の摺本も送られたが普通の形故揭載を見合せた），正面中央に兩開の板扉を吊込み，其傍に間柱ありて樞軸をめぐらす。正面の幅がさう廣くないのに扉で然るべき幅をとって了ったものだから，其兩方の柱間は細長いものに自然なってきた。そこへ胴長押をやったのであるが，それでもまだ細長い地所ができてゐる，にも係らずこの胴長押と上長押との間に，おそろしく細長い盲連子を裝飾に入れてある。それから臺輪があり，それで柱は終り三枓に移るのであるが，思

ひ切って中心のところ即ち扉の眞上に短い束をたて，そこへも枓組がおいてあるから，少なくとも正面は臺輪と桁との間を左右の二部分に分ってゐるのであるが，この部分に鎌倉一流の蟇股が入れてある。**第十九圖**は必要なところだけだしたのでよく判らないが，原寫眞をみるにどうもこの厨子の外にもう一つ大きな厨子かなんかあるらしい。この內外厨子の間は多少の餘裕があり，身體を横にすれば入って妻の寫眞をとる事はできるらしいが，裏面まで見えるかどうか判らない。

故に兩側面や背面にこの様な蟇股が夫れ夫れ一つ又は二つ入ってゐるかどうか判らぬが，どうせ見えないところであるし，下方の格狭間同様これは正面だけと考へてよからう。その蟇股がまた頗る珍なもので，よくみると——よくみなくとも一見すれば——左右が相等しくなくて歪んでゐる。中央から右なり左なり半分かいて紙に寫し，折し返して上をなすり，薄く寫った奴をこくかいて勢のぬけたものを作り上げる様な眞似はしてない。自在畵を描く様にやったのであらう，だから歪んではゐるが線が生きてゐる。私の友人に「生きた蟇股」といふ結構な渾名をつけられてゐる人があるが，この蟇股の前に出したら正に顏色なしで

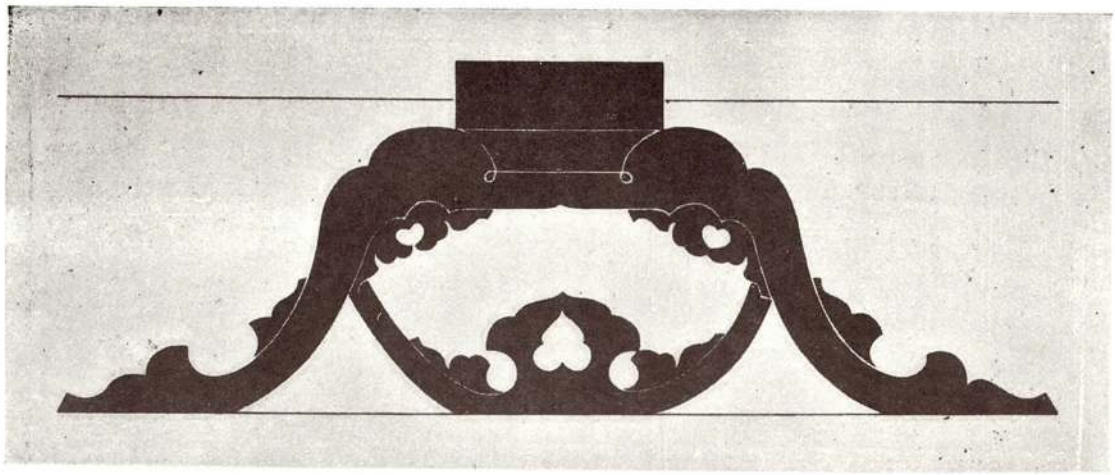


第二十一圖　布引山釋尊寺厨子內より出た棟札の寫し

（山浦氏の寫して送られたものの凸版）

ると當初のものとしてよささうである。

傳」とあるがまだ考へられない。「石專寺」は「シャクソンジ」のあて字らしく，其他文字の書體は，さすが山浦氏だけあってそのまま寫されたが，これによから墨を入れ，また寸法は鉛筆で何尺何寸といふ工合にかいてあったから，尺を單位として數字に直しておいた。何れも判り易くしたつもりである。文中「口山浦氏は有合せの方眼紙の裏に大體棟札を實測し，寸法を記入し，それに文字をそのまま書き入れて送られたが，文字はインクで書いてあったので，その上



第二十二圖　長野縣北佐久郡川邊村大久保　布引山釋尊寺本堂厨子蟇股
（山浦政氏毛摺本より製圖・九・八・二五）

斯様に圖にすると，寫眞に見えてゐる様な面白味はまるでなくなり，鎌倉時代の脚の先が少し大き過ぎる一蟇股ができて了ふのである。どうも筆者の腕が未熟でそのまゝ寫しだしかねるのである。ところが現物はどうかといふと，第十九圖のは二つとも少し形が異るし，第十八圖でみると，左右相稱には違ひないが，一方と他方と全く同一ではなく，脚も亦一の滑かな曲線ではなく，二所位で折れてゐるのがよく判る。つまり腕のたしかな人が，全く自由に右左をかいたのでかういふものができたのであらう。曲線の性質さへよく表はしてあれば，右と左との少し位の差は問題にならぬことがこれで判るであらう。

ある事程左様に活動をしてゐる。殊に兩脚の下方に近く，外側についてゐる小さい飾は洵に珍しく，恐らく中心飾を形成せる花形の兩方に，其花形を支へてゐる莖の上端に沿ひてつけてある小さい飾と相應せしめたのかとも思はれるが，脚の外側につけた飾は未だ嘗てみたことがなく，或はこれ以外に見出し能はぬのではないかと考へられる（第十八・第二十二圖）。

第十八圖は厨子細部の寫眞の蟇股のところだけを少しく擴大したもの，**第二十二圖**は山浦氏の手摺本から製圖したもので，できるだけ此珍種の紹介につとめたつもりであるが，原品の生氣潑溂たるところを寫すべくもなく，死んで硬直を起してしまったのは，製圖の腕の未熟の結果で洵に慚愧にたえない。尙ほ厨子の枡・長押・柱等の白く見えるところは紙が貼ってあったのを取ったあとの殘りで，連子窓の桟等は綠青塗，扉は漆箔ださうである。

第二十圖は厨子妻の詳細である。案ずるに屋根は木に栃葺か又は柿葺の如く段形た刻んだものなるべく，それが妻に移り行くところには叮寧に箕甲まで刻みだしてある。これはかうするのがほんとうで，眞の建築と余り差があっては不合理でいけない筈である。さうしてそれがうまく妻の軒口に消え去り，その下から破風板が見えてゐるところは，眞に迫まりまことによくできてゐる。但し大棟の末端の鬼板のところが朦朧としてゐて，はっきりせぬのは遺憾である。

光線を巧みに反射――一度でうまくいかなければ二重反射――をさせたら，或はもう少しはっきり妻のところがでるのではないかと思ふが，それでも破風の拜みのところに梅鉢

懸魚が下がってゐるのが見える。これは極く小さいから六葉も何もついてゐないが，それでも鎌倉時代の實例として非常に貴重なものといはねばならぬ。鎌倉の梅鉢懸魚はこれまでは昔の繪巻物でみるよりほかになかったものだ。私は唯一例でもいいから實物を見度く思ってゐたが，漸くここに多年の希望を達し得たのであった。破風及懸魚の下端に沿へる白いところは鼠が齧ったあとださうである。もう少しで懸魚の尖端をなくすところが助かったのは幸であった。

厨子は(妻飾も共に)總體丹塗と思はれる。

*　　*　　*　　*　　*　　*

山浦氏は偉大なる體格の所有者であるが，常に溫顔に微笑をたたへ，謙讓にして謹嚴，同時に非常に細心の注意を以て行動される。私の最も敬意を表してゐる友人の一人である。昨年十月には朝鮮の名刹通度寺で突然の面會に大に驚かされたが，それから滿一年たたぬうちに，釋尊寺の厨子で復驚かされた。三度目で次には何がでてくるかと大に期待をしてゐるが，この厨子等も多年の研究により，日本建築に深き造詣ある同氏に發見されたればこそ，一度で要所の寫眞が皆集り，私までが御馳走の裾分に預ったので，洵に歡喜にたえぬ次第である。

結　　尾

以上四項目は皆夫れ夫れ獨立してゐるので相互に連絡はない。要するに昨夏私のみたもののうちから，一部分を引ぬいて書きつけたので，書きっぱなしでいいと思ふ。蟲の卵と同じやうに，生みつけておけば卵は其まま越冬して翌春幼蟲が孵り各自食を求めて生長する筈である。だから全體を通じた結尾として書くことは何もない。此を以て結尾とする。

（昭和九年九月十八日稿了・昭和十年四月八日訂正）。

（註一）昭和十年四月二十一日，豫て希望であった近江甲賀郡雲井村の飯道神社を見學することを得た。大分山を登らねばならぬので，そのつもりで行かぬとくたびれが劇しい。社殿は方三間入母屋造千鳥破風附で，三間の向拜があり，正面中央に軒唐破風までついてゐる。さうして其上に尙ほ雨除けとして四方に廂が廻らしてあるから，大變に珍らしい型式に見える。此建物の正面中央の蟇股の内に，松竹梅が一所に見出されたが，私の誤認かも知れぬと思ひ，一行五名中の最も眼のたしかな人にみて貰ったところ，確かにさうだといったので，安心をしてここに紹介するのである。今迄さがしてゐたのが漸く見つかって大に滿足をした。幸に餘白があったので，ここに記したのである。飯道神社本殿は桃山時代の様式の建築であることを序に附加へておく（四月二十五日追記）。

（註二）註一に記した飯道神社本殿の勾欄は，椽の分は組勾欄だが，昇勾配の下のところには，大小の寶珠柱が二本たってゐる。擬寶珠は金屬製で，低い分は古く，高い分は後補だが，その後補の分に「金崎山」「飯道寺」「大權現」「御金寶珠」の文字があるのでみると，鍍金をしてあったものらしい。とにかくもう一つ「金寶珠」といふ書き方がみつかったので，實はこれが最もよろしいやうに考へる。鍍金した以上，金色の寶珠に違ひない（同日追記）。

大概栗鼠が伴ふが、大德寺唐門やこれには栗鼠はゐない。

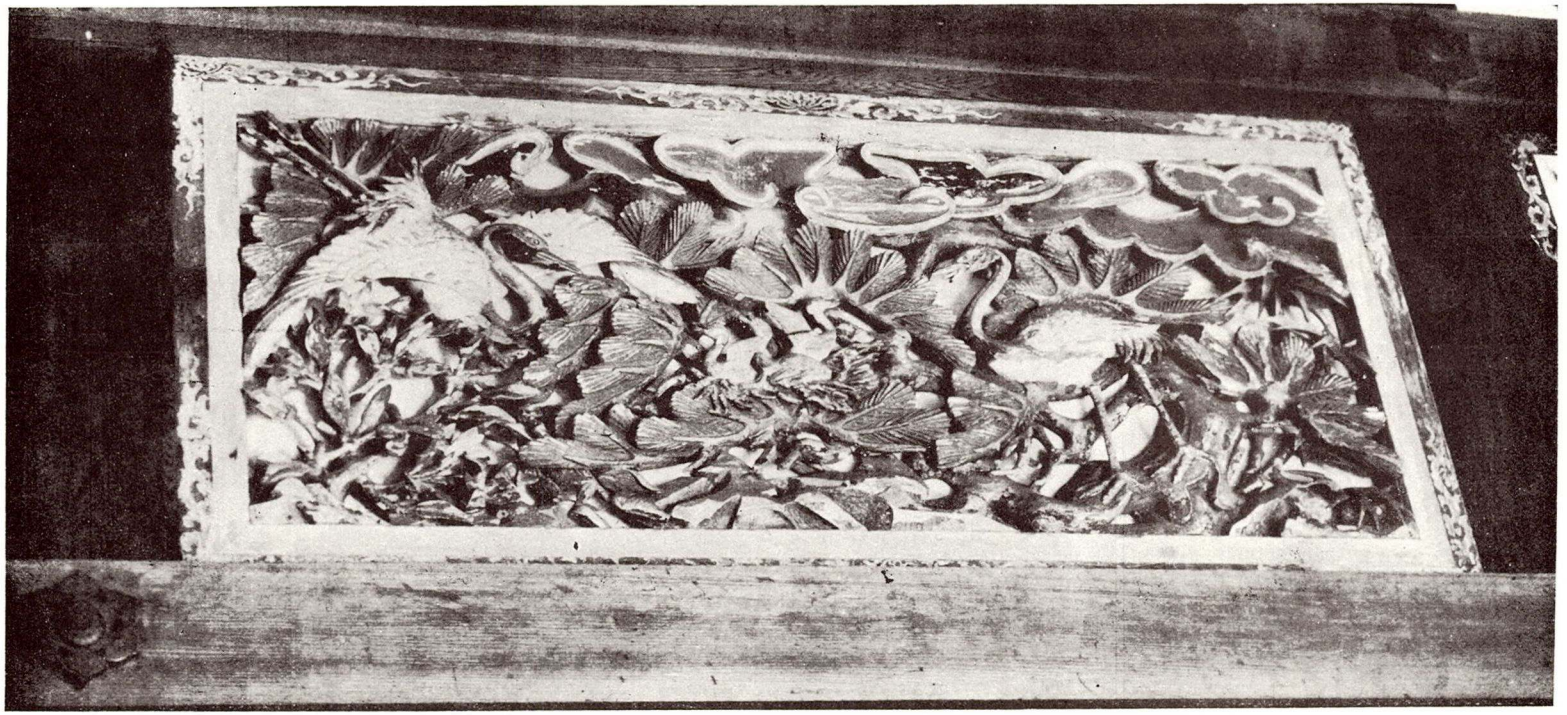
を入れてある。一番下は浪で、それから滿開の牡丹が下から半分あり、上半分は葡萄を入れ、一番上は雲がほってあるが、割合にうまく考へてゐる。桃山の葡萄には時としては神社建築の脇羽目に昇龍降龍等を彫刻して入れたのもあるが、先づ大概はその様な手のかかる厄介な事はしないで無地でおくが、此場合には牡丹に葡萄



第一圖　瑞巖寺本堂正面扉脇羽目彫刻一部

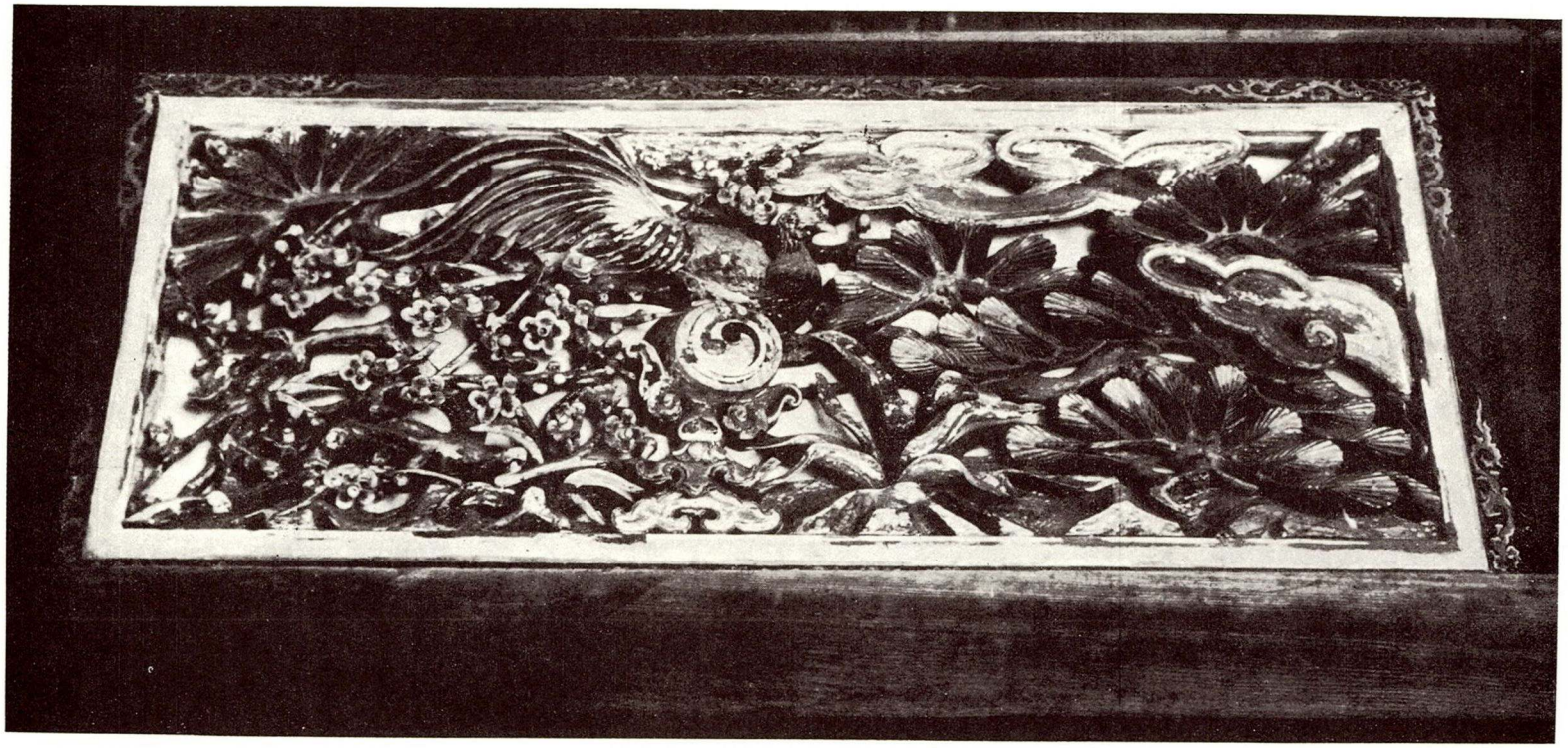
（昭和五年七月三十日）

第二圖　瑞巖寺本堂欄間　其一　（昭和五年七月三十日）



鶴をほったのは，正面中央出入口の左右にある十個の欄間のうちこれ一つである。鶴は桃山時代には可なり賞用せられたが，親子のはさう多くない。これは場所が廣いせいか甚だ樂にほってある。其圖樣をみるに，中央に巢があって雛が五羽，左右に親が二羽ゐるが，飛んでゐるのと歩いてゐるのとが，京都大德寺唐門妻虹梁下のと位置が反對になってゐる。あとは殆んど全部が松，右上に雲，右下にほんの僅か竹を添ふ。左下は躑躅の樣な灌木，左上の隅に松を丁度45°の三角定規の樣にほってあるのに注意せよ。

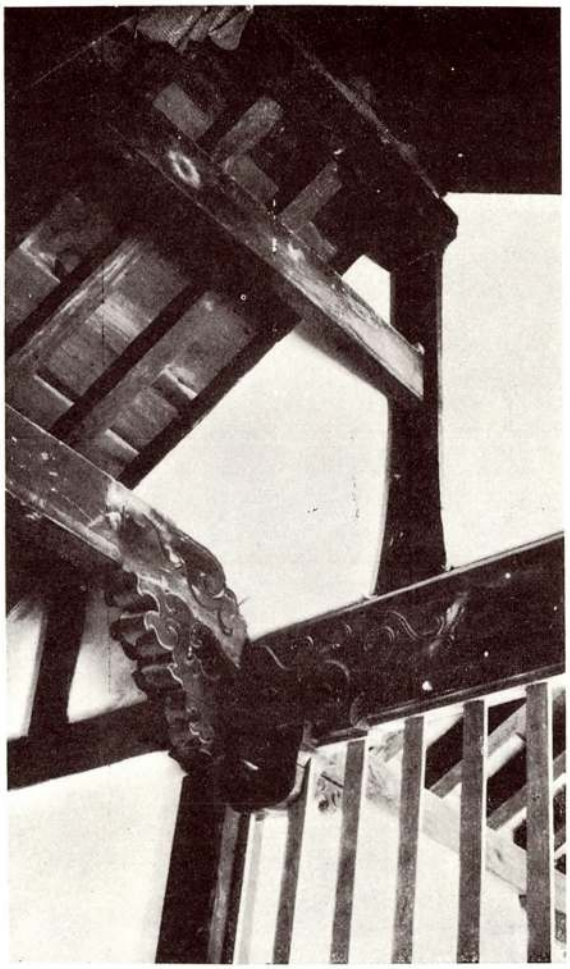
第三圖　同　其二（昭和八年七月二十九日）



前圖と此とは並んでゐる。これが最西端で，廣椽も落椽もここで西側に廻ってゐるのである。中央には鼓臺にのれる太鼓の上に鶏がのり，右下に大きな萬年青，あとは松と右上に雲，左上隅に松をほってゐるのと，左下梅の間に僅かに竹を添えてあるところ，前圖と全く同じ意匠であるから，少なくともこの二つは同一人が彫刻したのかも知れぬ。植物としては殆んど半分以上（前圖程ではないが）が松で，少し梅があり，其間の，ともすれば見失ひさうに小さい少ない竹と共に，慶長の建物に辛ふじて「松・竹・梅」を見出す。

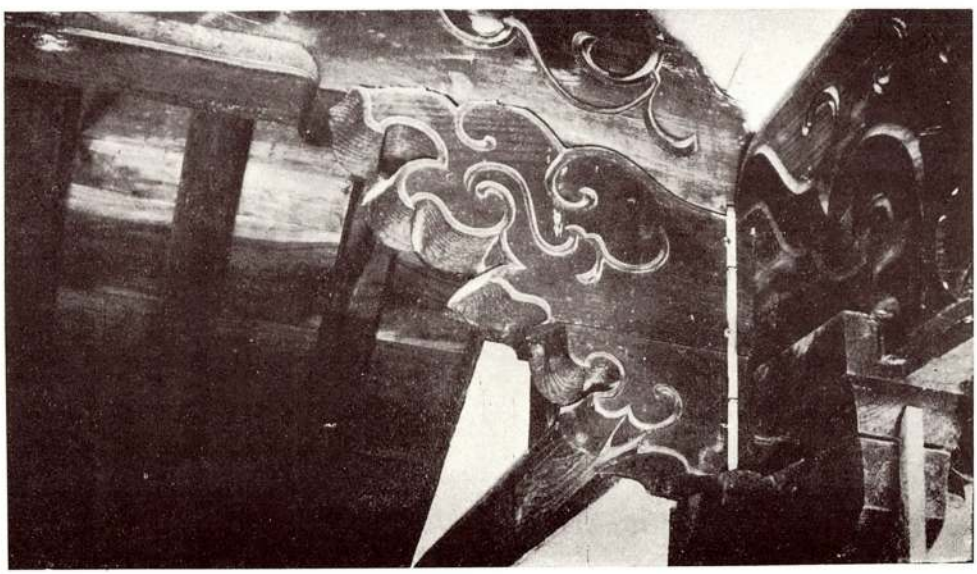
は曲尺の約一尺(一呎)。

圖は其角柱上の詳細で、持送を主とし、其他の繰形や文様を見せたもの。持送の右端、柱上に縦にあるせたのが上圖である。虹梁下の粗い縦の木は臨時のもので、ほんとうはあってはいけないのである。下にかく廻廊の狭いところから廣いところへ入るあたりの角の柱上の複雑さと、それから上の構架式をみる。當初は恐らく現在の様になってはゐなくて、各所の桃山建築にみる様であったらうと思はれる。と廻廊を北行して左に曲ると本堂の廣椽にでるが、その曲り角のところは、「三間三面の室」をなして



下。**第五圖**　同　　持送詳細　　(昭和九年七月三十日)

上。**第四圖**　瑞巌寺廻廊一部　其一　　(昭和九年七月三十日)



（一呎）。

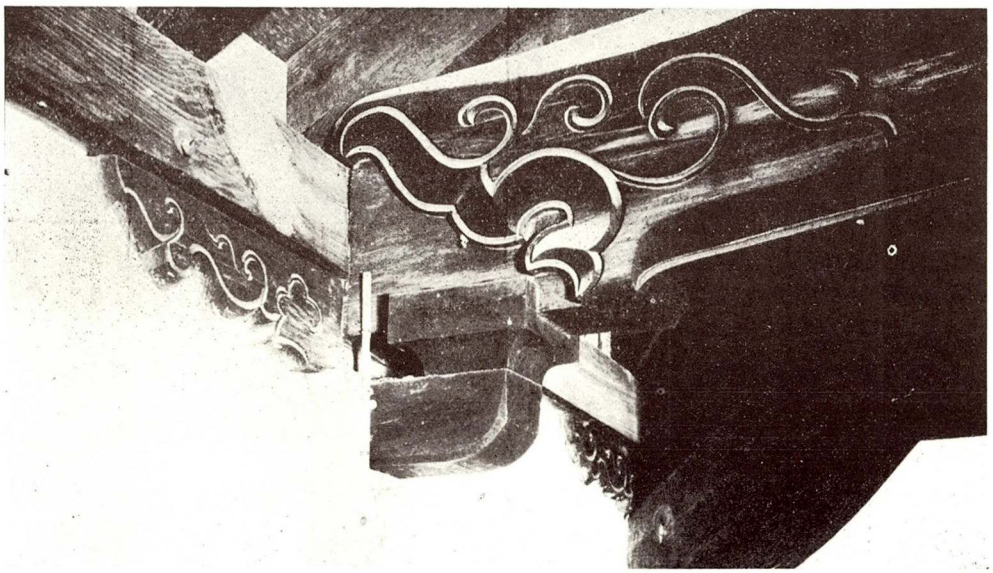
桁下の繪様肘木とを見せたもの。どこ迄も獨創的意匠をだしてゐる點に注意せよ（物指は曲尺の約一尺ができるのである。上圖は大體西から東を向いて寫したので、下圖は上圖左下に見えてゐる虹梁袖切と、た圖でも判らない、行つて見るに限る。奮發をして出かけて實地を見學し、初めて其眞相を捕へるこるところの廻廊の化粧棟木の一部と、それから東等を見せたもの。其複雜さは到底描筆では記せない。ま

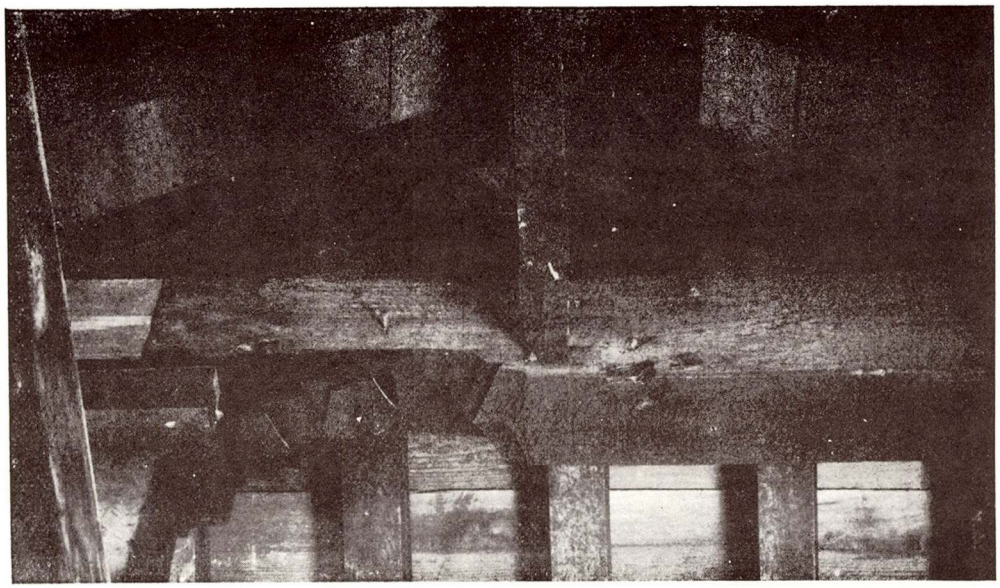
前圖の解說に記した「三間三面の室」の東北隅と、そこに最も近い虹梁の一部と、本堂へ入らうとす

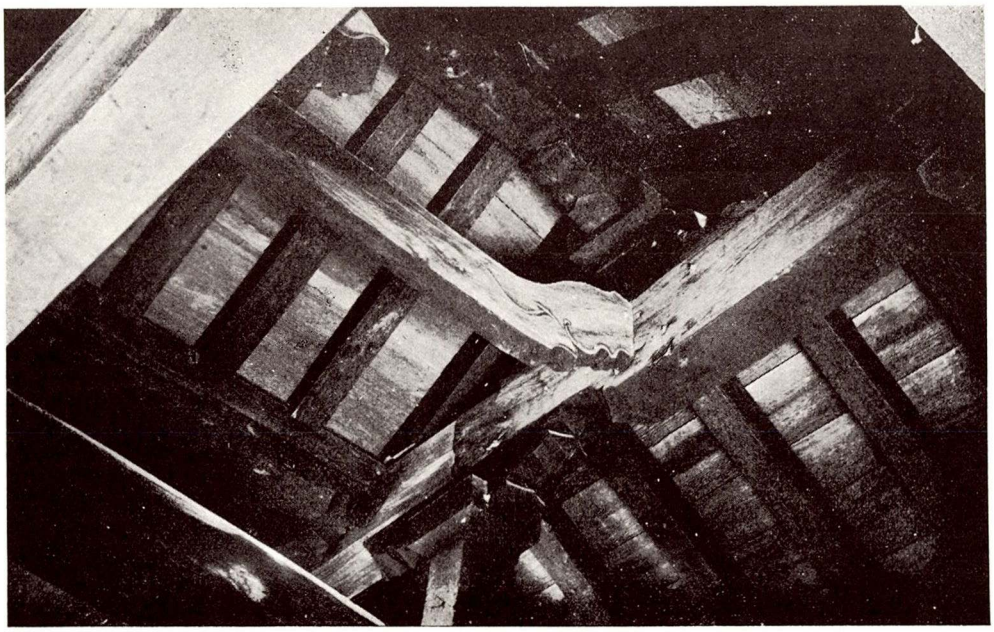


下。**第七圖**　同　　虹梁詳細　（昭和九年七月三十日）

上。**第六圖**　瑞巖寺廻廊一部　其二　（昭和九年七月三十日）







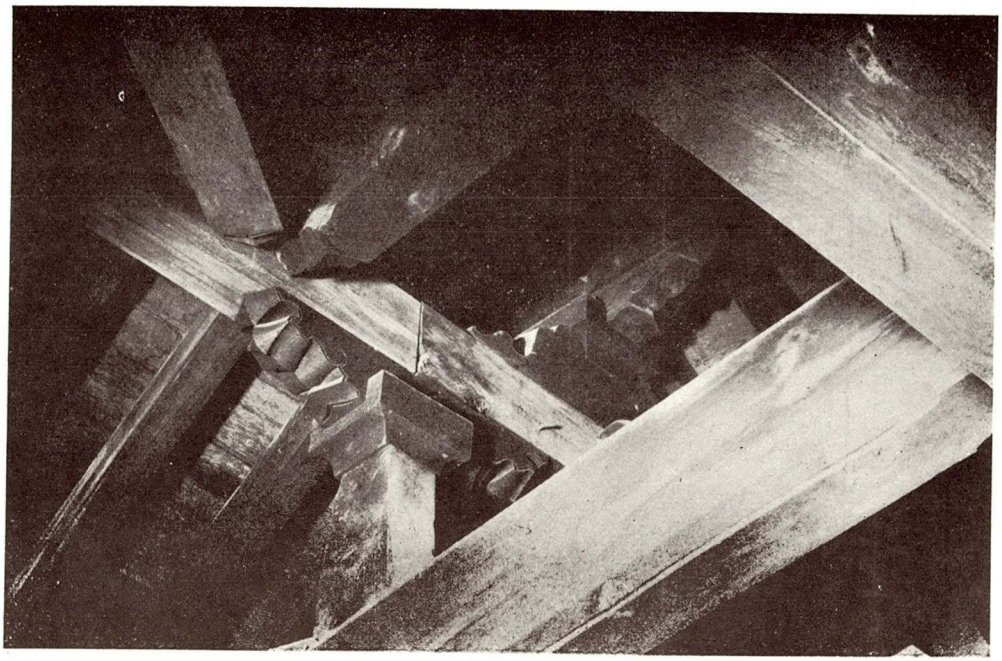
此頁上。 **第八圖** 瑞巖寺廻廊板蟇股詳細

此頁下。 **第九圖** 同　　附近の構架式　其一

次　頁。 **第十圖** 同　　其二

（以上三圖共昭和九年七月三十日）

廻廊が本堂の方へ直角に曲ってゐるところの「三間三面の室」の化粧棟木と，南から北へ$\frac{2}{3}$位のところで，東西の方向の廻廊の化粧棟木とが，平面を異にして直角になってゐる。第八圖に於いて前者は左右の水平の木で，後者は蟇股上の斗に含まれた少しばかり見えてゐる木である。尤も前者は此寫眞で(次頁へ)



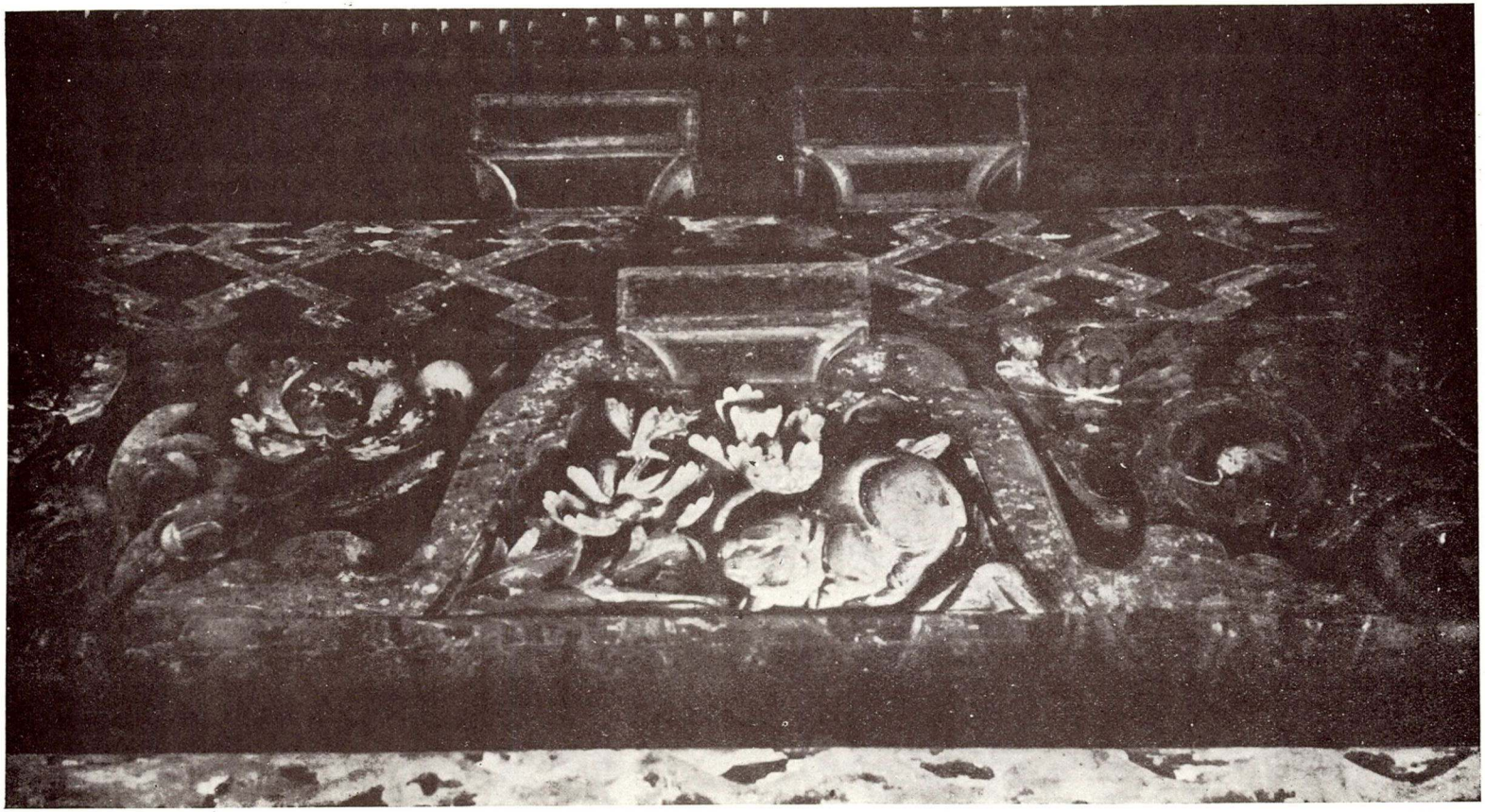
（前頁より）は最早化粧棟木ではなく，左方の束上でついである水平材で，北流の化粧棰が仕掛けてあるのみである。**第九圖**はそこを東南方より，**第十圖**は同所を四南方よりみたところ。この三圖には何れも蟇股が見えてゐるが，實はこれが目的で掲げたのである。

光線が不充分なところだから，實際餘程氣をつけないと其存在さへ判らずに了ふ。此所にはこの樣なものを用ひないでも，束をたててをけば充分である。例へ簡單な板蟇股にせよ，束よりは手がかかるし，またさう目につかぬし，從て見てくれる人もないのにかうしたのは，此ところに餘程興味をもって面白く樂しくおさめることを心がけたからではあるまいか。

此の「三間三面の室」の化粧屋根裏を見上げれば，殆んど總ての材料は，他の材料に出會ふため全く其必要のないものまで，叮嚀に木鼻が彫刻してある（例へば第十圖左上）のなどからみても，その樣に考へられるのである。さういふ次第であるから，束で差支ないところへでも，板蟇股を用ひたと思へるのであるが，これがまた中々形がよく，もっと古い建物につかってあっても，そのまま受取れる位がよろしい。

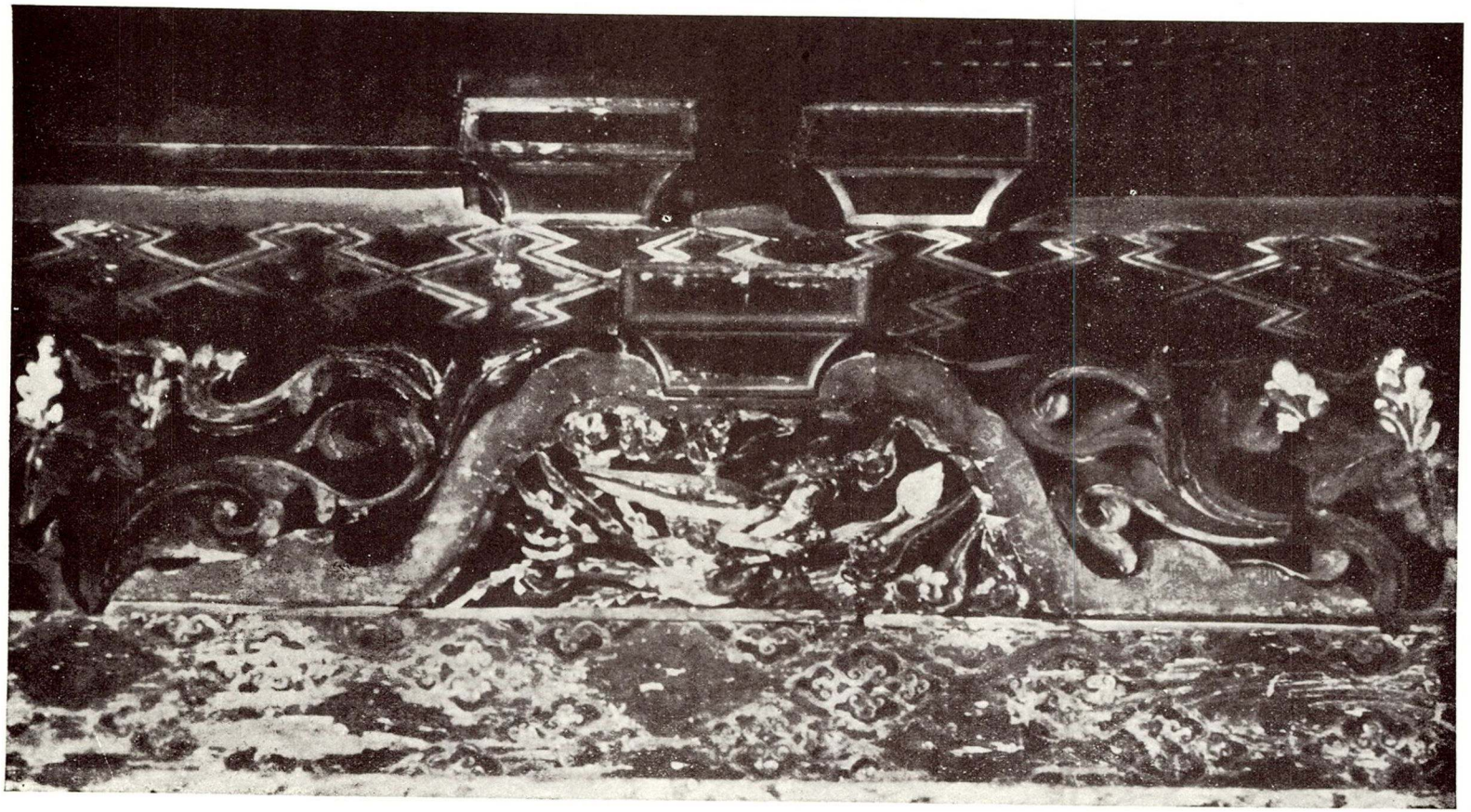
私は梯子をかけて近づいてよくみたのではないから，下からの觀察で誤ってみる虞があるけれども，その兩脚端がはね上ってゐる樣に彫刻をしてあるから，例へ和歌山市の松生院本堂にあるもの程のことはなくとも，あの系統——といふのが不都合なら，あんな風の意味としておくが——のもので，本堂にも玄關にも庫裡にもない，廻廊に唯一個ある，而も內部からだけほかみえない大事な蟇股といふことができる。

第十一圖　大崎八幡神社拜殿蟇股　其一　（昭和九年七月三十一日）

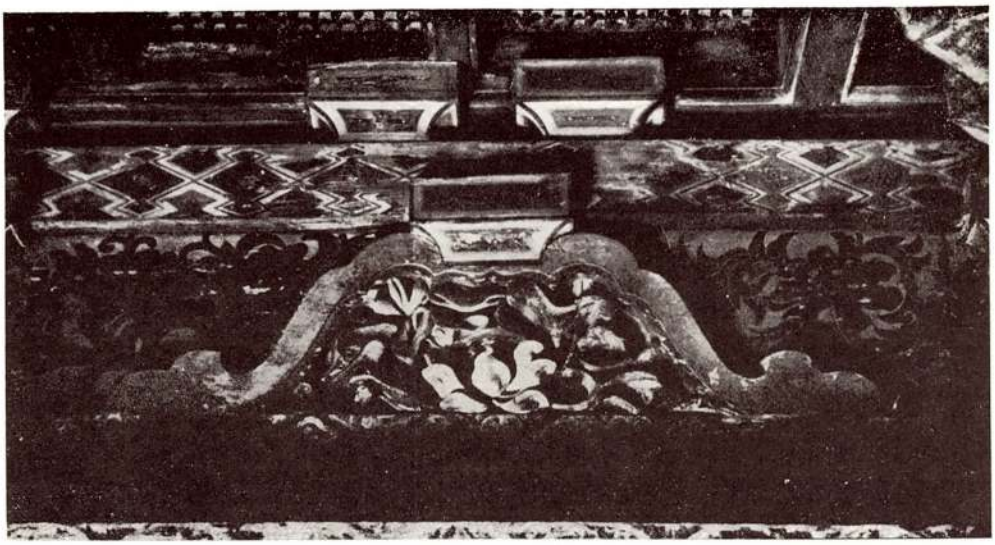


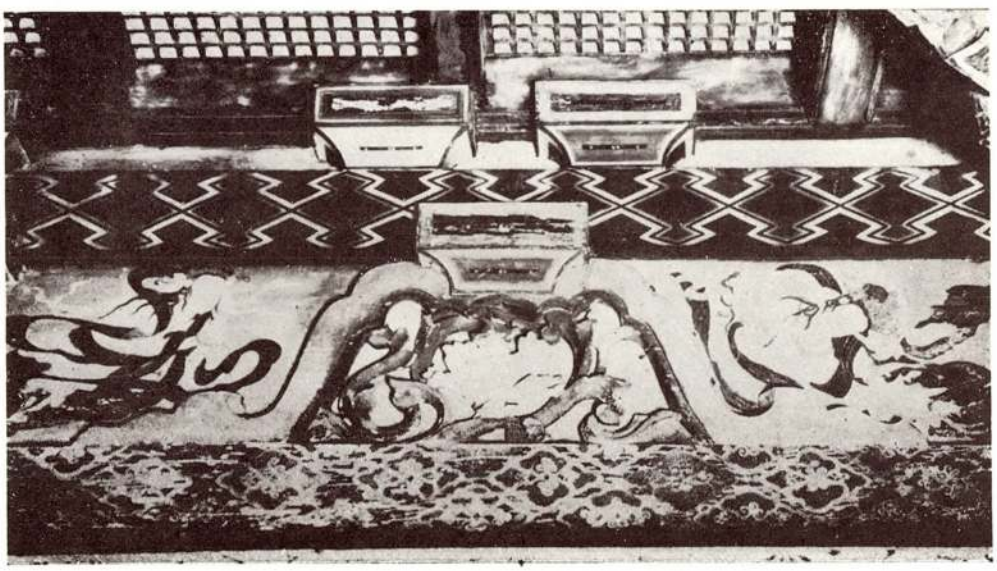
日光東照宮廻廊の有名な「眠り猫」の原型としても差支のないやうなもので，猫に牡丹に鳳蝶。起きてゐるか眠ってゐるかだけのことで猫は猫だから，あれに鳳蝶だけが餘計なだけである。猫が蝶を狙ってゐるから一層面白いのである。牡丹と鳳蝶との取合せは，鎌倉末より用ひられた圖案式のものが發達したと考へてもよろしい。

第十二圖　同　其二（昭和九年七月三十日）



迦陵頻伽が蓮蕾を手に持ち雲中を飛行してゐるところ。天人だのこれだのを手挟や蟇股の内に入れるのは，大概桃山時代からであるが，大和宇陀郡古市場，宇太水分神社には，脇障子の欄間の透彫に天人がある。これはたしかに古いが，伊豫太山寺本堂蟇股中の天人は斷言しかねる。蟇股中の迦陵頻伽は珍らしい方である。





上。**第十三圖**　大崎八幡神社拜殿蟇股　其三　（昭和九年七月三十一日）

下。**第十四圖**　同　　其四　（昭和九年七月三十一日）

蓮にしても牡丹にしても，大きな花を中心飾とし，半開又は蕾を兩方の上の方に配し，あとの空隙を葉又は其他の唐草で埋めるのは，鎌倉時代に發達した左右相稱の平面的圖案式彫刻を入れた裝飾蟇股からきたもので，あの系統であるといへる。此二圖共中心は大きな花だが，上圖に於いて兩上角のは，一は半開一は蕾で，あとは葉と唐草とで大分込み入ってゐて，馴れてゐない人はよく判らぬであらうが，そこへ行くと下の方は花と蕾とが規則通りの配置をとつてゐるから遙に判りいいと思ふ。

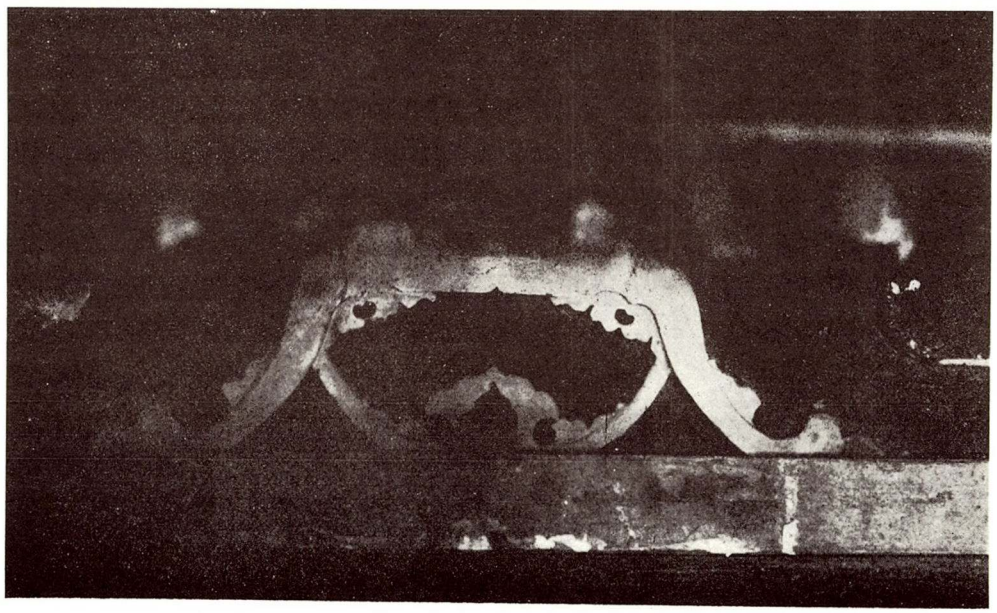
りほか仕方のないもの。次頁の圖をみると愈よ「驚異の眼を睜る」のみで、暫し言葉はでないであらう。扨てその觀音堂内陣の厨子は大變なもので、その蟇股の一を下圖に示したが、「これはこれは」といふよゐる。私は行ったことがないから建物に就いての記述はできぬが、大分前から綺葉書でお馴染である。法であるが、大和初瀬の觀音もかうしてあるし、同じ信州別所の北向觀音堂もかうであったと記憶してできない。横の後ろの方からすること他の此種の建物同様である。これを入母屋妻入にしたのは賢い方

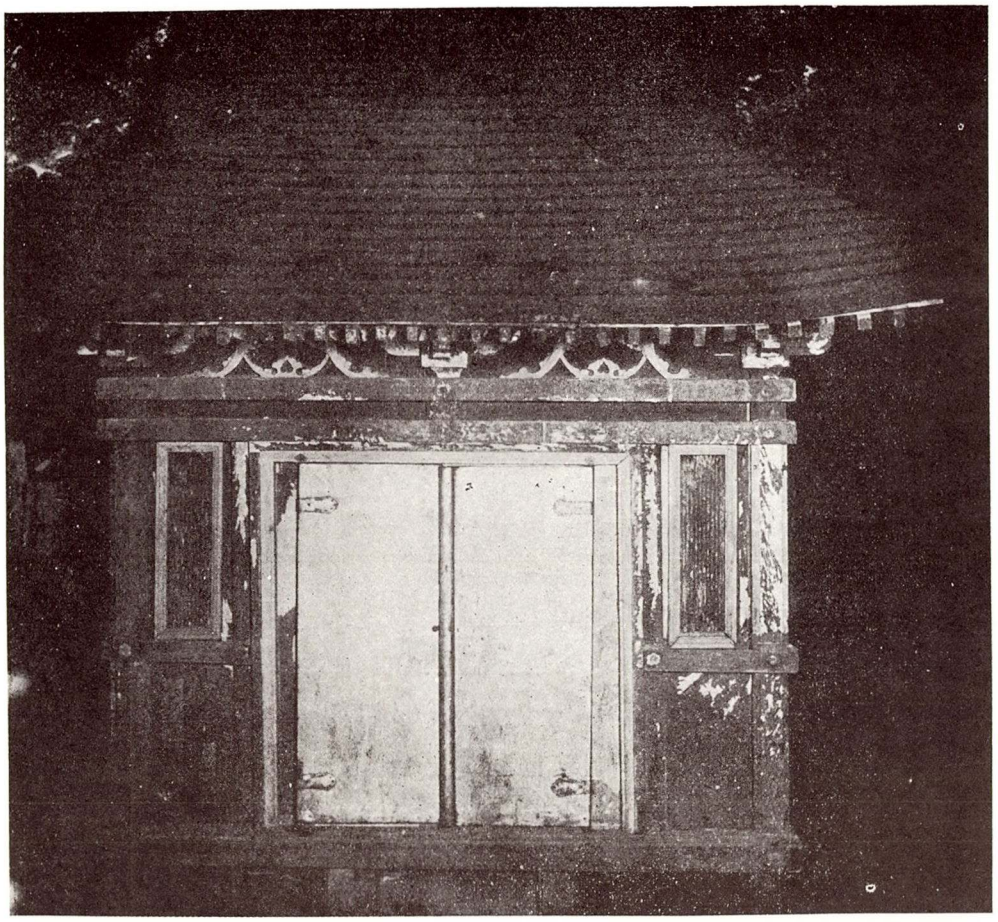
長野縣北佐久郡川邊村、布引山釋尊寺觀音堂は、半分絶壁の上にたってゐるので無論正面から出入は

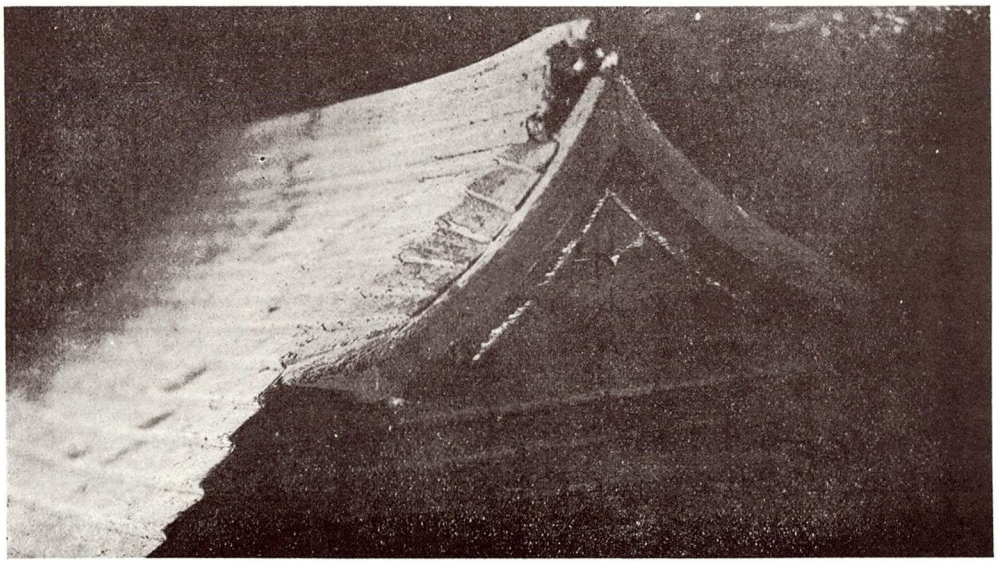


下。**第十八圖**　同　内陣厨子蟇股　（同上）

上。**第十七圖**　布引山釋尊寺觀音堂全景　（山浦政氏寄贈寫眞複寫）







上。**第十九圖**　釋尊寺觀音堂厨子正面。
下。**第二十圖**　同　　妻一部。
（兩圖共山浦政氏寄贈寫眞複寫。）

アスファルトに關する研究會梗概

建築倶樂部にて。昭和10年4月10日夕。材料委員會「アスファルトに關する研究會」席上に於ける市川良正氏の談話概要筆記

出席者　市川　良正　　宮地　末吉
出席委員　高橋　榮治　　松久保敬三
浦　英之助　　楠瀬　徹
高岡與三吉　　道田泰治郎
吉本政次郎

種類　ストレートアスファルトとブローンアスファルトの二種がある、ストレートアスファルトは普通は熔融點が低いが伸びが良く附着し易いブローンアスファルトはその製造中空氣を吹込む溫度又は原料油の性質に依つて其の性質を異にする。普通品は溫度を高くして時間を少なくブローンするので分子量小で彈力が少いが上等品は溫度を低くし隨つて長時間にブローンした最も良い條件の下に製造されたものは分子量も大きく比重も輕く彈力もある。今日ではブローンアスファルトは經濟上時間を少くするのでストレートアスファルトに近似したものが出來て一般に質が落ちてゐる樣である、成るべくアスファルト係原油より製造されたものが宜い。コンパウンドはブローンアスファルトに植物油を加へたものである。

耐久性　塊を4～5年間水中に置き調ぶれど性質には何等變化を認めず即ち水には强い。日光に對しても、罐から出して日光に晒し三年後調査したるも極く表面の薄皮のみ變化して內部は變質せず

良否判別法　衝撃試驗をすべきである、分子量を量れば良質のものに分子量大きく比重が輕い、又簡單に見別ける法は良いものは眞黑で光澤がある內地產のあるものは赤味を帶びた褐色のもので艶の惡いものがある。これは惡いものである、植物油を吸ふ量、良いもの程植物油を多く吸ふが或る程度でブロンアスファルトの性質を失ひ潰れる加熱した場合、惡いもの程加熱すれば100度又は200度とした時の性質の差が甚しく異ふのである上質のものは差が少く彈力があり輕く且炭化水素を含んでゐる。加熱して熔解したアスファルトを平面に落せば粒狀をなして面に載る、その面と球面とのなす角は良質のもの程大である、隨つて上等のもの程表面張力が大であるから伸びが少く、塗り難いと云ふ事になり施工が困難である、水壓試驗、フエルトにアスファルトを塗布して水壓試驗するにフエルトの厚みに關せずアスファルトの厚い程水壓には强く薄い程弱いものである、故にコンクリート面又は板面に塗りたる場合も同樣でないかと思われる。

一般防水のアスファルト使用上の注意　高溫にする程アスファルトの表面張力小となり伸びが良く施工容易である、多少高溫でもアスファルトは少しの時間位で容易に變質するものでない。某省では200度以上は不許可とされた、それはブロンアスファルトは引火點が低いので高熱になれば火が着き易い、又變質するだらうとの事で高熱を排せられた事と思ふ、アスファルトをスプレーで吹き着ける場合、下地が冷い故充分塗りたてる事が出來ず、宜くないと思ふ。例へば銅管に塗布する場合でも着いた樣に見えてすぐ剝げる事がある。二度塗ると同質のものなれば能く密着する。其の點からルーフキングに附けてある粉は無い方が宜いと思われる。

タンクの被覆及道路　タンクの酸化を防ぐ爲砂等を入れ塗りも完全には出來ない又一度では充分着けられず、ストレートアスファルトを使用しても或る程度がある 20～30 位アスファルトを使用したが宜い樣である、道路、木煉瓦の場合クレオソートを使用するから流れ易い又一般に撫、米松を多く用ひられるが南洋材はクレオソートを使用せぬが宜い樣である。

結論　要するに前述の如くブロンアスファルトもストレートアスファルトも各々特徵があるもので其の特性を利用してする樣にすべく且その効果を擧げしめる爲には一に施工如何に依るものである。

會　　報

木材市場品規格調査委員會（第1回）

時　　4月23日午後7時—8時10分
所　　建築倶樂部別室
出席者　池田宮　森野(大阪材木商同業組合)　北垣　楠瀬　黒澤　阪井　島田　白川　後川　高岡　谷(清水組大阪支店)　丹藤　松久保　道田　吉本
常務　中澤主記　池田主記　北垣主記　清水主計　新名編輯　島田編輯

1 午後7時開會池田主記より經過報告あり
1 委員長及幹事互選の結果下記の通決定す
委員長　高橋　榮治氏
幹　事　池田　宮彦氏
同　松久保敬三氏
1 尙毎月定例日を下記の通り決定す
第2及第4火曜日、但し5月に限り5月15日(水)及第4火曜日に開會
1 委員長缺席につき池田幹事座長となり各委員より意見の交換あり次回の參考資料として2月26日開催の意見交換會記錄及寸法規格案の印刷物を各委員に配送することに決議し8時10分閉會す

都市武裝各部長會議（第2回）

時　　4月25日午後7時20分—8時15分
所　　建築倶樂部別室
出席者　池田委員長　中澤總務部長　竹腰演習部長　清水會計部長

1 午後7時20分池田委員長座長となり開會
1 演習部に於て記錄整理に關する費用支出の件……支出承認
1 演習部用寫眞代追加支出の件……支出承認尙演習部寫眞不足の分は複寫完成の上協會に2組保存することに決定
1 記錄部印刷費追加要求の件……支出承認
1 研究部幹事を松井清之助氏に池田幹事を委員に尙演習部幹事を松井清之助氏に池田幹事を委員に依頼することに變更
1 宣傳部長を小笠原朗氏に依頼すること
1 建議書改訂の件は總務部に於て審議成案することに變更……總務部長承認

設備委員會（第6回）

時　　4月26日午後6時30分－8時30分
所　　建築材料陳列場
出席者　委員長　小笠原
幹　事　增井
委　員　竹内　田中　西村　塙　村田

1 午後6時30分小笠原委員長座長となり開會
1 前回に引續き衛生工事の設備に付研究を進む
1 協議の結果須賀商會の技師の方を臨時委員に依囑することに決定
1 末澤幹事より病氣に付幹事辭退の申出あり承認の上下記委員に幹事を依頼することに決定
委員　村田小一氏

災害强度委員會（第4回）

時　　4月26日午後6時30分—9時
所　　建築倶樂部別室
出席者　委員長　波江
幹　事　黒田
委　員　谷　中島　矢田　堀田　関部　山田

1 午後6時30分波江委員長座長となり開會
1 臺灣大地震に付臺灣建築會外7ケ所に見舞並寫眞其他の調査資料送付方依頼すること
1 谷口忠氏の建築學會大會に來阪を機として過去の臺灣地震の記錄に付講演を聞きたく同氏に其日時等照會すること
1 大朝大毎より臺灣地震の寫眞を購入すること
1 災害調査委員會を5月第1木曜日に開催すること
但し當日は各委員より資料の持寄りを願ふこと
(5月中に常務會へ移管の爲)

住宅委員會（第6回）

時　　5月2日午後6時50分—8時30分
所　　建築倶樂部別室
出席者　委員長　葛野
幹　事　小川安　小川陽
委　員6木村　長谷部　增山　三木　黒

澤　塚本　赤松

1 午後6時50分葛野委員長座長となり開會前回委員會に於ける研究要領速記錄を朗讀し協議後修正を加へ次て此研究要領速記を會誌に揭載するに付委員會開會都度之を揭載するや又は研究を終り總括して揭載するやを諮り結局小川安幹事に於て編輯と協議したる上其揭載方法を決定することとす

1 次て委員長より本野委員より戶田博士に未だ面談を得ざる旨の通知ありしに付報告

1 次て研究に入り

前回に引續き「壁」に付研究を始む

1 研究要領速記者使用に付費用の支出方を會長に要求すること

1 本野委員に關する件至急送付のこと

災害調査委員會　（第14回）

時　　5月2日午後7時—8時

所　　建築倶樂部

出席者　委員長　波江

幹　事　黑田

委　員　本多　山口　山田

1 午後7時黑田幹事座長となり開會

1 原稿大體蒐集に付之を整理する爲

(1) 銅版(寫眞版)に總ての寫眞類をとること但し手札型とす

(2) 青寫眞はトレースの上凸版にとること

(3) 臨時雇を傭ひ整理すること

內藤 委員に學校編の提出を催促すること

常　務　會　（第9回）

時　　5月6日午後5時40分—同7時30分

所　　建築倶樂部別室

出席者　理事　片岡會長

監事　澁谷監事

常務　伊藤主記　北垣主記

池田主記　伊東主計

清水主計　新名編輯

議事

1 5 月例會に關する件……次回常務會迄保留

2 都市武裝促進委員會委員補缺依囑の件……承認

3 設備委員會臨時委員依囑の件……承認

4 建築學研究頒布宣傳に關する件……修正可決

5 塗裝競技會審查員選定依囑の件……承認

6 住宅委員會より要領速記者使用に關する件可決

7 耐震耐火建築推奬に關する映畵作成に關する件……清水主計口頭都市武裝委員會附託

8 會員詮衡

報告

1 日本ポルトランドセメント同業會主催本協會後援講習會開催決定事項報告

1 設備委員會幹事交迭報告

1 春季大會終了報告

1 3月分會計報告

1 9年度決算後の處理報告

都市計畫委員會　（第5回）

時　　5月7日午後6時20分—8時

所　　建築倶樂部

出席者　委員長　鳥井

幹　事　吉田

委　員　喜多村　福知　福富

1 午後6時20分鳥井委員長座長となり開會

1 大阪都市計畫防火地區大擴張案に關する件

右建議を撤回することに決定

1 阿倍野橋附近改造に關する懸賞募集の件

財源の考慮を待つ

1 都市美座談會開催の件

次回迄に具體的內容を考慮すること

材　料　委　員　會　（第6回）

時　　5月8日午後6時50分—10時

所　　建築倶樂部別室

出席者　委員長　高橋

幹　事　浦　松久保

委　員　高岡　道田　吉本

隨意參加　黑田

臨席者　小倉石油株式會社技師大道彰氏

同　　小倉石油株式會社大阪出張所　刈田保藏氏

同　　同上　內山哲夫氏

同　　大阪小倉アスファルト株式會社長　黑田富士五郎氏

1 午後6時50分—同着席高橋委員長より本夕は小倉石油株式會社より臨席を求めたりとて大道技師其他3氏を紹介し

次て大道技師よりアスファルト製造に付

(1) 單獨蒸溜

(2) 連續蒸溜
(3) シユルツ式眞空蒸溜
(4) ケロツグ式連續眞空蒸溜
等より說き始め2時間餘の講話あり後質問應答ありて閉會したり
尙講話原稿は大道技師より本會へ送付ある筈圖表及寫眞等を一時借受けを依賴し承諾を得たり
尙詳細は雜誌にて發表の豫定

敎化委員會（第4回）

時　5月9日午後7時－8時30分
所　建築材料陳列場別室
出席者　幹事　篠原
委員　酒井　永澤　堀口

1 建築に關する展覽會計畫は中野委員欠席の爲報告なし
但し展覽會實施方法問合せに關し建築學會より同會の展覽會規程並實施實狀詳細回答あり
1 小學校工業科の敎科內容調査に關しては高木委員よりの回答なく篠原委員調査未了の爲報告なし
1 小學校建築相談所規程原案報告
右に關し實施に着手の爲常務會に建議すること

災害强度委員會（第5回）

時　5月9日午後6時50分－8時30分
所　建築倶樂部
出席者　委員長　波江
幹事　黑田
委員　矢田　渡部　青柳　堀田　園部　山田

1 當委員會の定例會合日毎月第2木曜日は委員中夜學等の關係上之を變更する提案あり協議の結果變更することに決し本夕欠席者三浦委員の都合を問ひ其日を變更することに申合せ確定次第各委員に通知することゝす
1 臺灣震災に付其複寫寫眞を大毎大朝兩新聞社より購入及臺灣全地圖を購入することになし之が經費の支出を會長に要求すること
1 サンデー毎日に揭載の「臺灣の地震」を謄寫の上5月13日開會の谷口博士講演會の際各委員に配布すること
1 谷口博士講演に速記者を使用するの件編輯と協議の上決定すること
1 阪口芳三郎氏に「コンクリートミキスチユアー」の飜譯の「パンフレツト」を20册寄贈を交涉すること

設備委員會（第7回）

時　5月10日午後7時－8時50分
所　建築倶樂部別室
出席者　幹事　村田
委員　神谷　志岐　竹內　塙
臨時委員　內田（須賀商會）

1 須賀商會衛生工事專門技術者內田氏に對し下記事項に付質問す
(1) 鉛管接續箇所に對する注意事項
(2) 衛生工事設備に付特に注意すべき點
(3) 同上改良なりし點
1 次回には須賀商會としての希望を述べられたく即
(1) 設計への希望
(2) 施工者への希望
等を研究せられたきことを要求す

災害强度委員會（第6回）

時　5月13日午前10時－11時
所　建築倶樂部別室
出席員　委員長　波江
幹事　黑田
委員　谷　中島　矢田　青柳　園部
常務　池田主記
講演者　谷口博士

1 波江委員長より谷口博士を紹介し同博士より臺灣過去の地震記錄に付て講演あり（速記の上會誌により發表の豫定）
1 委員長より謝辭を述べ懇談の後散會したり

法制委員會（第5回）

時　5月15日午後6時30分－8時30分
所　建築材料陳列場別室
出席者　委員　石川　山口　矢崎

1 午後6時30分石川委員座長となり開會
1 前回石川委員に御願したる判決例は各方面と折角打合せしも纏りたるものを蒐集すること困難なるを以てこの取扱ひ方につき討議す
1 目下新聞紙上に於ける左官爭議に對し建築と社會の一般的觀察より何等かの方法により勞資を

融和協調せしめ一日も早く常態に復すべき機運助成方につき其の取扱方法協議す

1 北海道廳に於ける建築取締規則取寄せ方打合す

常　務　會（第10回）

時　　5月20日午後6時一同8時

所　　建築倶樂部別室

出席者　理事　武田副會長

常務　伊藤主記　北垣主記

伊東主計　清水主計

新名編輯　島田編輯

議事

1 5月例會に關する件……5月は例會を行はざることに決議

1 災害强度委員會要求に係る臺灣震災寫眞及地圖購入費支出に關する件……可決

1 同上谷口博士所有圖表寫眞撮影費支出に關する件……可決

1 木材市場品規格調査委員會要求に係る書籍購入費支出に關する件……可決

1 始政40周年記念臺灣博覽會に出品並支援に關する件……臺灣建築會に問合はしたる後對策を講ずることに決定

1 會員詮衡

報告

1 耐震耐火建築宣傳用映畫作成に關する件報告

1 4月分會計報告

1 春季大會清算報告

1 建築學會大會終了に關し謝狀報告

會員動靜

入　會　者

會　員

池田　幸太君　兵庫縣武庫郡瓦木村下新田前濱266ノ1（村木工務店自營）

神田　省三君　神戸市林田區長田町1ノ47（兵庫縣總務部營繕課）

住谷　慧秋君　旭區赤川町957（設計監督事務所）

地方會員

坂本　穣君　廣島市觀音本町913ノ1（坂本建築工務所）

永田庄右衛門君　滿洲國間島省圖們市滿鐵社宅52ノ2（滿鐵鐵路總局）

特別賛助員

吉田　清春君　東淀川區豊崎西通4ノ23（日本電波工業研究所）

普通賛助員

板垣　新平君　神戸市兵庫區北逆瀬川町98ノ2（兵庫縣總務部營繕課）

富田　勇君　尼崎市築地本町4ノ77（合資會社平塚組）

岡本　文之君　米子市道笑町2ノ111（米子保線事務所建築掛）

伏見　紀一君　島根縣簸川郡今市町御茶屋町（米子保線事務所建築掛）

洞井　勝市君　松江市驛通天神町80（米子保線事務所建築掛）

喜多川庸次君　東京市淀橋區上落合1ノ481（大藏省營繕管財局）

近藤　一利君　東京市小石川區大塚町25（鈴木工務店）

宮本　利雄君　東京市目黒區駒場町754（大藏省營繕管財局）

八木　精一君　京都市右京區桂木ノ下町1（八木合名會社代表社員）

兒玉　貞三君　此花區吉野町2ノ2（坂本商會大阪支店長）

退　會　者

會　員

丸川　英介君　奥村　安吉君　鍵田　禎章君

中村　謙治君

地方會員

石井　一夫君　黒田　竹二君

特別賛助員

田中　作次君

普通賛助員

枝吉　德藏君　久保田正信君　森下　哲行君

轉居轉勤

會　員

大村　春方君　天王寺區眞法院町91春秋莊内

篠原　太郎君　東淀川區三國町703

堤　多計士君　兵庫縣武庫郡本山村野寄畑ヶ田486

北垣熊之介君　府下豊能郡熊野田村202 紅葉ヶ丘

濱　一郎君　名古屋市中區新柳町名古屋寶塚劇場作業場竹中工務店出張所
長谷川俊弘君　西淀川區海老江中3ノ35
南京仙太郎君　兵庫縣川邊郡小田村抗瀬木ノ元33
正岡　晋君　北區善源寺町5ノ35 鈴木方

地方會員

織本道三郎君　(新事務所)東京市日本橋區鞘殼町3ノ2 巴ビル3階
加藤喜三郎君　三重縣度會郡御薗村高向930ノ1
日高　重雄君　八幡市前田松ケ枝町1384 山口高吉方
高橋叔太郎君　東京市荒川區日暮里町9ノ1109
谷一　東君　東京市澁谷區青葉町7 昭英建築事務所

終身賛助員

山崎　英詰君　東京市京橋區京橋2ノ4

普通賛助員

山邊　政吉君　新京關東軍經理部工務科第1分室
片山　一郎君　京都市下京區大宮通リ七條上ル平安中學校建築場竹中工務店出張所
岡本豊次郎君　福岡市社家町21ノ1 清水組博多支店
佐藤　佐七君　廣島縣佐伯郡小方村立戸中野三男方
早川　健次君　京都市左京區淨土寺馬場町8
中塚　誠君　下關市後田町442 堤方
小林已之造君　横濱市神奈川區平川町76
平川　眞實君　府下豊能郡豐中町字南轟木107ノ1
龜尾萬太郎君　東京市神田區臺所町1 中西忠雄方
大野　鬼作君　臺北市上埠頭東二條149
今村清之助君　廣島市三川町18
大庭　政雄君　大連市醫摩町南山寮
佐伯　一夫君　米子市加茂町岡山屋内
駒澤　實君　岡山縣玉島町乙島太陽レーヨン株式會社玉島工場安井建築事務所
後藤　幸男君　港區八幡屋町2ノ312 堤次郎方

死　亡

普通賛助員　松井光彦君(昭昭10年4月15日逝去)
謹んで哀悼の意を表す

本號執筆者紹介

(五十音順)

天沼俊一　工學博士、東大建築學科卒、京都帝國大學教授
青柳貞世　工學士、早大建築學科卒、竹中工務店技師
石川純一郎　工學士、東大建築學科卒、竹中工務店技師
作間日出生　兵庫縣立工業學校卒、長谷部竹腰建築事務所勤務、大阪株式取引所現場主任
芹生幹二　大阪市立都島工業學校卒、竹中工務店勤務、京都朝日會館現場主任
竹腰健造　工學士、東大建築學科卒、株式會社長谷部竹腰建築事務所常務取締役
高橋榮治　工學士、東大建築學科卒、長谷部竹腰建築事務所技師

編輯後記

●本號は殆んど時を同じうして竣工したる大阪株式取引所と京都朝日會館との特輯號とした。

●この二つの建築の寫眞と、それに就いての座談會の記事とが中心である。

●一方は天井高52尺の廣い立會場を中心とする株式取引所であり、一方は大集會場を中心とする會館であるが、共に其機械的諸設備に於て近代科學の到達し得る最尖端を行くものであり、その點からしても充分紹介の價値あるものと信ずる。

●意匠計畫の點に於ても兩者共非常に特色のあるものであるが夫々の座談會はそれに對して比較的詳しい說明を加へて居る

●本號には久しぶりに天沼博士の記事を頂戴した。

●7月號は鄉土建築號であるが、特輯題目以外の記事も本協會の使命に關するものその他適當なものは揭載の用意があるから御投稿を乞ふ。

●6月號を發行して本年も早夏である。執筆を御依頼する方々には御迷惑な夏であるが、編輯を代表して今からよろしくお願ひしておく次第である。(新名)

建築と社會

第18輯第6號

毎月1回1日發行　定價　1冊 .50圓(郵稅2錢)　12冊 6.00圓(同 24 錢)

昭和10年5月25日印刷　昭和10年6月1日發行

發行・編輯印刷人　鷹取陽

西宮市今津町津門字賓津605番地

印刷所　大阪活版所

大阪市東區內淡路町1丁目7番地

發行所　財團法人 日本建築協會

大阪市北區中之島3ノ3朝日ビル

電話長本局(23)4500番(6)

振替口座大阪 39975番

特約販賣店　柳々堂書店

大阪市西區京町堀羽子板橋西

電話土佐堀 2440番

振替口座大阪 2084番

禁轉載

本號に揭載せるものは、一切これを無斷にて轉載し又は單行本に上梓その他の複製行爲をなすことを禁ず。

廣告揭載料金

普通	1頁	1回	15.00
普通	1/2頁	1回	8.00
普通 (前附第1頁)	1頁	1回	45.00
普通 (前附第2頁)	1頁	1回	40.00
普通 (後附第1及最終頁)	1頁	1回	25.00
アート (中插)	1/2頁	1回	20.00
表紙2	1頁	1回	60.00
表紙3	1頁	1回	45.00
表紙4	1頁	1回	80.00
建築事務所錄	1欄	1回	1.50
(建築關係業者案內)	1欄	1回	5.00

御注文

御注文はすべて前金で本會直接又は特約店へ振替貯金又は爲替で御拂込を願ひます。郵券代用は一割增、代金引換はお斷り致します。

第五版

表紙クロース
本綴
上質紙印刷
菊判截版

市街地建築物法令

日本建築協會版

本書は現行の**市街地建築物法を始め本年改正實施された**
"市街地建築物法施行令"・"同法施行規則"・"同法施行細則"
（大阪府、兵庫縣、京都府、警視廳〔東京府〕、神奈川縣、愛知縣）等々**その他"同法關係法令"**を全部網羅編纂したるものである。本書はその性質上校閲に最も力を費し關係官廳諸技師の援助を受けて出來得る限りの正確を期した。表紙は堅牢なるクロースを用ひ本綴となし又上質紙を使つて印刷の鮮明を計りその裝幀の美麗と携帶の至便とは多大の絶賛を博することゝ確信す。
建築家、建築業者、建築學生其他苟しくも建築に關係ある者の必要欠くべからざる定本として敢て本書を薦む。

●定價50錢　送料6錢●

日本建築協會發行
大阪北區朝日ビル4階
振替口座大阪39975
賣捌 丸善本支店
柳々堂書店

建築材料陳列場出品者

棚番號	材料種別	出品者
1・6	鋼製建具建築材料	三機工業株式會社
2～4	ギルソイドルーフキング	田島應用化學工業所
2～4	エターナイト	木下謹三商店
5	合板寄木フローリング	富士建築工藝株式會社
7	リノリユーム其他附屬品	東洋リノリユーム株式會社
8～9	六甲スレート日本石綿盤六甲タイル	野澤幸三郎商店
10	トラバーチン	金王石工所
11	ロールプラッグストップリーグ	ユニオントレーヂングコンパニー
12～14	アサヒライトSSSプラスターソリヂットスタイン	工材社
12～14	屋根瓦各種	高松菊治郎商店
15	特許能美式自働火災警報裝置及消火裝置其他	合資會社能美商會
16	衛生器具	大阪城口研究所
17	衛生器具	株式會社須賀商會
18	衛生器具	西原衛生工業所
19	テックス、コルク板、ルーフイング、スレート	佐藤合名會社
20～21	衛生陶器附屬品	東洋陶器株式會社大阪出張所
22	銅鐵製窓枠	榮進社大阪出張所
23	內裝用藥掛タイル	淡陶株式會社大阪支店
24	カールプラグ及カールエキスパンションボールト	合名會社小野遥三商店
25	タイル	山本窯業商店
26	各種タイルテラカツター	大阪窯業株式會社
27～28	テラカツター衛生陶器	大阪陶業株式會社
29	タイル	有田製陶所
30	洋家具裝飾	船木由松商店
31	テラカツタータイル等	伊奈製陶株式會社
32	金庫寫眞カタログ	大谷金庫店
33	硝子製品、旭ラツカー	旭硝子株式會社
34	ドアーチエック、フロアーヒンヂ、スプリングヒンヂ	日本ドアーチエック製作所
35	町野式水道消防器具	ヂヨイント商會大阪支店
36	ドアーハンガー	平松鈎戸車製造所
37	建具金物	近江セールズ株式會社
38	大理石及人造石	矢橋大理石商店
39	大理石	大理石工業株式會社
40	建築參考塗料見本	關西ペイント株式會社

棚番號	材料種別	出品者
41	木工品	日本樂器製造株式會社大阪支店
42～43	建築用金屬材料ホワイトブロンズ水道銅管	住友伸銅鋼管株式會社
44	銅眞鍮アルミニウム	古河電氣工業株式會社
45～46	ラス類一式	奥村重兵衛商店
47	スチールサッシュ、シヤッター見本	合名會社汎建製作所
48	板硝子	日本板硝子株式會社
49	石材並ニ彫刻物	一營商會
50	建建金物	大塚定治郎商店
51	ベニヤ板及加工品	ベニヤ商會
52	金屬天井板	佐渡島西店建材部
53	各種マーブリック	守谷建材株式會社大阪支店
54	一般石材	關西石材株式會社
55	石綿スレート	淺野スレート株式會社
56		
57	オリエンタルメタル浪板	オリエンタルメタル製造所
58	ベニヤ板見本ドアーセクション	內外木材工藝株式會社
59	專賣特許特殊ゴム床敷物	ライトラバー工業合資會社
60	田中式カストストーン	合名會社田中タイリング商會
61	アスファルト	榎商店
62	日之出アスファルト加工品	日本建築紙工大阪支店
63	ルーフキング	佐久間パブコ工業株式會社
64～65	キングブロックアスファルト鐵鋼類	マルエス工業株式會社
66	纖維製絕緣板、エールテックス	株式會社大同洋紙店
67	建築諸材料	合資會社建材社
68	セメント防水劑モリノイト保溫盤ウオータイト	日本セメント防水劑製造所
69	防水劑ロータス	關城化學工業株式會社大阪營業所
70	スカイライト、エービーメタル	內外土木建築材料合資會社
71	水性塗料	岩城塗料製造株式會社
72	硝子製品	株式會社島田硝子製造所
73	洋瓦各種	宇野洋瓦株式會社
A	裝飾織物	高島屋裝飾部
B. 1	コルク板	梁瀨商店
B. 2	美素	美素工業所
B. 3	ヤハズラス	富永鋼業株式會社
B. 4	人造大理石	旭マーブル研究所
C	KU式自働復式火難求助器	一柳商店機械部

建築と社會第18輯第6號　廣告索引

ア　有田製陶所……10
　　旭硝子株式會社……49
　　朝日建材株式會社……1
　　淺野スレート株式會社……51
　　淺海商會……42
イ　岩元商店建材部……42
　　岩城硝子製造所出張所……5
　　井上村岡商店……17
　　乾電機商會……18
エ　榮進社……27
　　荏原製作所……65
　　英進商會建材部……44
オ　大阪窯業セメント株式會社……中挿
　　大阪伊丹商店……26
　　大阪組立コンクリート製作所……32
　　大野製作所……3
　　奥村重兵衛商店……39
　　大阪アスファルト商會……63
　　大阪電氣暖房商會……7
　　大林組……2
　　岡谷合資會社大阪鐵部……16
カ　勝田風呂製作所……表紙 4
　　關西ペイント株式會社……24
　　關城化學工業株式會社大阪營業所……13
　　龜井組大阪支店……14
　　金岡養樹園……中挿
キ　木下謹三商店……54
　　桐田商會……43
　　北中製作所……8
　　協和製作所營業部……32
ク　黒川化學工業所……34
　　久保商店……30
　　窪島プレス工業所……23
コ　後藤商店……44
　　小利製材所……20
サ　佐渡島西店……47
　　三機工業株式會社大阪支店……表紙 2
　　佐久間パブコ工業株式會社……55
シ　霜寅材木店……48
　　島貿易株式會社建材部……58
ス　須賀商會……11
セ　政正合資會社……46
　　清光社……30
タ　高村電機製作所……15
　　武智事務所……53
　　大洋組建材部……40
　　ダンロップ護謨株式會社……中挿
　　タカラ商會……50
ト　東洋陶器株式會社大阪出張所……12
　　東京電氣株式會社……61
　　東洋リノリユーウム株式會社……35
ナ　內外土木建築材料合資會社……45
　　南滿鑛業株式會社……40
　　名古屋製陶所……9
　　中井商店大阪支店……59
ニ　日本建築紙工株式會社……46
　　日本板硝子株式會社……5
　　日本ドアーチエック製作所……21
　　日本洋瓦株式會社……56
　　日本パイプ製造株式會社……19
　　日本セメント防水劑製造所……60
　　日本エレベーター株式會社……22
　　日本曲木工業合資會社……18
　　西原衛生工業所……29
　　西孫南店建築金物部……50
ノ　野澤幸三郎商店……25
ハ　汎建製作所……36
ヒ　日立製作所……52
フ　福島合名會社……28
　　藤田庄藏商店……64
　　福原商店大阪支店……57
　　福井製作所……20
　　富士電機製造株式會社……66
ヘ　ベニス工房……36
マ　マスタ杢板……62
　　マルエス工業株式會社……33
　　松井商店……34
ミ　三井物產株式會社……37
　　三木一二……26
ヤ　矢橋大理石商店……38
　　大和護謨製作所……31
　　山本窯業商店……57
ヨ　横河橋梁製作所……41
　　米本榮商店……38
ラ　ライトラバー工業合資會社……表紙 3
レ　玲光社(木內眞太郎)……28